

チャールズ・ディケンズ著

『世の中 (ハード・タイムズ)』

柳田 泉 譯

チャールズ・ディケンズ著、柳田泉譯『世の中 (ハード・タイムズ)』——新潮社世界文學全集〈18〉、昭和3(1928)年10月20日發行——の電子化(約31.5萬字)においては、その過程で柳田泉譯の明かな誤字脱字を修正し、舊字舊假名を徹底させた。ウェブ上での公開は平成17(西曆2005)年1月11日。ファイル形式はPDFで、閲覽およびプリントアウトはできるが、改變およびコピー&ペーストはできない。

名古屋大學大学院國際言語文化研究科 松岡光治

052-789-4864

mitsu@lang.nagoya-u.ac.jp

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/>

【目次】

第一編 種播き

- 一、必要な唯一のもの
- 二、幼児の虐殺
- 三、隙見
- 四、バウ نداアビイ
- 五、基調
- 六、スリアリの曲馬哲學
- 七、スパージット夫人
- 八、不思議は禁物
- 九、シッシイの進歩
- 十、ステイヴン・ブラックプール
- 十一、下へ、下へ
- 十二、轉落
- 十三、レイチエル
- 十四、時——偉大な製作者
- 十五、父と娘
- 十六、夫と妻

第三編 收穫

- 一、必要な今一つのもの
- 二、飛んだ笑ひ草
- 三、斷然たる決心
- 四、失踪
- 五、發覺
- 六、星光
- 七、不良兒狩り
- 八、談理的一幕
- 九、結

第二編 刈入れ

- 一、銀行小景
- 二、ジエームズ・ハートハウス
- 三、不良兒
- 四、仲間同志
- 五、雇人と雇主
- 六、零落
- 七、火藥
- 八、爆發
- 九、最後の言葉
- 十、スパージット夫人の階段
- 十一、下へ、下へ
- 十二、轉落

第一編 種播き

一、必要な唯一のもの

「ところで、わしの望むものは事實ぢや。この少年少女達には事實のほか何物も教へんで欲しひのです。事實だけが人生で必要なぢや。その他のものは何も植多つけんやうに、他の一切は引き抜くやうに願ひする。假りにもあんたが理性的動物の精神を育て上げようとするならば、事實を以てする外ないのです、それには他の何ものも役立たぬにちがひない。これこそわしが自分の子女を教育する原理ぢや、これこそ、またわしがこゝにゐる子供達を教育する原理でもあるのです。事實を固く守つてゐたゞきたい、え、あゝですか！」

この場面は或る教室の、粗末な、何の飾りもない單調な圓天井の下で行はれた。語り手の角ばった人差指は一句ごとに、校長の袖に傍線を引いて、自分の意見を強調してゐた。語り手の角ばった壁みたいな額が又これを助けて、いやが上にもその説を強調してゐた、二つの眉はこの壁の土臺代りになつてゐたが、一方その壁に蔽はれた暗い二つの洞窟の中では、彼の兩眼が手頃な穴藏に納まつたやうな恰好をしてゐた。また、廣くて、薄くて、固く結ばれてゐる口が、更にその意見を勢づけてゐた。語り手の一徹な、潤ひのない、否應ゐはせぬ命令的な聲がこれを勢づけてゐた。髪の毛も、これを勢づけてゐた。それは、その禿げた頂きの裾を取り捲いて、によきによきと突つ立つて、てかてか光る表面に風よけとして植ゑられた樅の樹立とそっくりだつたが、そのてかてか光る表面が干杏子のパイの上皮のやうに、一面に瘤だらけになつてゐるところは、丁度この頭にはその中にたまつてゐるごつごつした硬い事實をいれる倉庫の設備が殆どないせゐらしく思はれた。語り手の頑固らしい態度、角ばつた上衣、角ばつた兩肩——ゐな、彼の咽喉頭を、ゐはゞ彼の好きな頑固な事實みたいに、融通のきかぬ締め方で締め上げるやうに訓練された襟飾そのものさへも——すべてがその説を勢づけて

——二七六——

ゐた。

「この人生ではぢや、我々は事實以外には何も要らんです——事實以外には何も！」

語り手と、校長と、臨席した第三の人物とは、少し後退りして、今にも莊嚴極まりなき幾ガロンかの事實を滿々と注ぎこまれんばかりにそこに竝べられた澤山の小さな容器（少年少女）の勾配になつた平面を、づらりと見渡した。

二、幼児の虐殺

君、わしはトマス・グラッドグラインドぢや。現實家ぢや。事實と打算の人間ぢや。二の二倍は四で、それ以上の何ものでもないといふ原則を一步も踏みはずさず、たとひ人の話に引っこまれても、それ以上に少しも斟酌することなどの決してない人間ぢや、トマス・グラッドグラインドぢや。君——斷然とトマスでなくてはいくわん（磔刑に處せられたイエスの復活を弟子達は見、且つ信じた時、その場に居合はせなかつた弟子の一人トマスは事實を目撃しない理由を見てそれを信じなかつた。作者は本篇のこの事實偏重家の名に同じ意味を見出した）——トマス・グラッドグラインドぢや。平生物差しと一對の秤皿と九々の算表をポケットに入れてゐて、いつでも人間性の斷片の重さや長さをはかつて、それがいくらるかといふことを精確に君等に語るつもりである。それををはかるのは純然たる數

字の問題ぢや、純然たる算術の一例なのぢや。君等は、ジョージ・グラッドグラインド、オーガスタス・グラッドグラインド、ジョン・グラッドグラインド、またはジョゼフ・グラッドグラインド（何れも皆假想上の、實在してゐない人物だが）の頭脳になら、何か他の不條理な所信を抱かせることを望んでもゝかも知れん、ぢやがトマス・グラッドグラインドの頭脳に對しては斷じて出來ん——斷じてぢや、なあ、君！

かふいふ言葉で、グラッドグラインドは、私交上の知人にもまた一般の公衆にも、何時も心の中でかふ自分を紹介するのが常であつた。疑ひもなくかふいふ口調で、今やトマス・グラッドグラインドは、『諸君』といふ言葉に『少年少女』といふ言葉を置きかへたゞけで、彼の面前に控へた、今に口の縁までなみなみと事實を注ぎこまれる筈のこの小さな水注達（少年少女）に、トマス・グラッドグラインド自身を披露してゐた。

實際、彼が前に述べた眼玉の穴藏から熱心に彼等をめがけて火花を散らしてみせたところは、丁度口先きまで事實の彈丸を一杯填め込まれた大砲みたいで、今にもこの子供等をその無邪氣な幼年時代といふ陣地からたゞの一發で物の見事に撃ち拂つてしまふやうに思はれた。彼はまた、子供等の憐れな若々しい『空想』をやがて一掃して終つて、その後詰め代る可き不氣味な機械的な物で充電された蓄電池のやうに思はれた。

「二七七」

「少女組の二十番」とグラッドグラインドは角ばつた人差指で角ばつて指差しながらかふあつた。「わしはあの娘を知らんが、誰ぢやね？」

「シッシイ（セシリヤといふ名の略稱）・ジュープと申します。」とその二十番は顔を赧らめ、立ち上つて、膝を屈めて禮をしながらかふ答へた。

「シッシイなんてのは名ぢやない。」グラッドグラインドはあつた。「シッシイと名乗つてはいかん。ちやんとセシリヤと言はんけりやいかん。」

「お父さんはわたしのことをシッシイといつてゐます。」とその少女は聲を顫はせながら、もう一度膝を屈めて禮をしてかふ答へた。

「それは、お前のお父さんなどのかれこれ言ふべきことではない。」とグラッドグラインドは言つた。

「そんなことをしてはいくわんとお父さんに言ひなさい。セシリヤ・ジュープ、では訊ねるが、お前の、お父さんは何ぢや？」

「はい、あの馬乗りの藝當が商賣でございませう。」

グラッドグラインドは顔を赧めて、そのいかゞはしひ物の言ひ方を押しつけるやうに手を振つた。

「わし達はこゝではそんなことは聞きたくない。お前はこゝではそんなことをわし達にあつてはいかん。お前のお父さんは馬を馴らすといふんぢやな？」

「はい、あの人は馴らすなくちやならない馬が來ますと、曲馬場で馴らすのでございませう。はい。」

「お前はこゝではわし達に曲馬場のことなどいつてはならん。では、それでよろしい。お前のお父さんのことは調馬師といふのぢや。お父さんは病氣の馬を診察するのぢやらうな？」

「はい、致します。」

「よろしい。お前のお父さんは家畜醫者で、馬醫者で、調馬師ぢや、ゐるか。では一つ馬の定義を聞かして貰はふ。」

（シッシイ・ジュープは、この註文にすつかり驚いてしまつた。）

「少女組の二十番は馬の定義が出來んのぢや！」とグラッドグラインドは例の小さな水注達一同の

見せしめに、かふあつた。「少女組の二十番は動物のうちで一番ありふれたものゝ一つについて、何の事實も知りをらんと見える！誰か少年組に馬の定義を聞かして貰はふ。ビツア、お前がらゝ。」

角ばつた指はこゝかしこと動いてゐたが、不意にビツアの上にとまつた、といふのも、彼が偶然にも恐ろしく眞白に塗られたこの教室の飾りのない窓の一つから差しこんで、シッシイを煌々と照らしてゐたのと同じ日の光のうちに坐つてゐたからであつた。何故なら、少年少女達は中央に狭い間を置いて、勾配になつた平面の上に二組の

―三七八―

密集部隊をなして坐つてゐた、シッシイは日向の側の或る列の隅にゐたので、差しこむ日光を最初に受けてゐたが、ビツアは他の側の二三列前の或る列の端にゐたので、その日光の末の方を浴びてゐたのであつた。だがこの少女は眼も黒く髪も黒かつたので、彼女は陽に照らされると、それだけ、ますます濃い、ますます光澤のある色を帯びるやうに思はれたが、少年の方は眼の色も髪の色も白ちやけてゐたので、その同じ日光は彼の持つてゐる僅かばかりの色まですっかり取り去つてしまひはせぬかと思はれた。彼の冷やかな眼は、殆ど眼ともゐない位みだつたが、たゞ僅かに短い睫毛があつて、それが自分自身よりも白い何物かと直接映り合はされると睫毛の形を見せるので、やつとそれと分るのであつた。彼の短く刈つた髪の毛はその額や顔一體にある砂色の雀斑の引きつゞゐたものにそっくりだとゐへるかも知れなかつた。彼の皮膚はひどく不健康に見えるほど自然の色澤を缺いてゐて、若し切られたら白い血が出はしないかとまで思はれた。

「ビツア。」とトマス・グラッドグラインドは言つた。「馬の定義を言つて御覽。」

「四足獸、草喰獸、四十本の齒、即ち二十四本は白齒、四本が犬齒、十二本が前齒、春に毛が脱げます。沼澤地方の國では蹄も脱げます。蹄は堅くありますが、でも蹄鐵を打たれる必要があります。年齢は口の中の斑痕で分ります。」

かふ（そしてこれ以上も）ビツアは言つた。

「さあ少女組の二十番。」とグラッドグラインドはあつた。「馬とはどんなものだから分つたらう。」
彼女は膝を屈めて禮をした。そして若しこの始終の間、もつと顔を赦らめることが出来たなら、彼女は屹度さうしたことであつたらう。ビツアはトマス・グラッドグラインドの顔を見て、兩眼を一度に素早く、ばちばちさせたが、その震へる睫毛の先きに強く日差しを受けたので、それが忙しい昆虫の觸角みたいに見えた、――そして敬禮のしるしに、その雀斑だらけの額に手の甲を一寸押し當て、腰を下ろした。

この時第三の紳士が乗り出した。彼は萬事を無味乾燥なものにしてのける點でなかなか偉い人間だつた。政府のお役人で彼一流の（他の多くの人々の流儀といつてもあゝ、何れにしても同じだから）有名な拳闘家（喧嘩すきな議論家のこと）である、いつも練習を怠らず、いつも一つの主義といふものをもつてゐて、まるで大丸薬か何ぞのやうに萬人の咽喉にそれを呑み下させようとかゝり、いつも彼の小さなお役所の仕切り席で怒鳴り立て、いつでも全英國を相手に戦はふと身構へてゐるのであつた。なほ拳闘上の言葉で續けていへば、彼は、場所が何處であらうとも問題が何であらうとも、一

―三七九―

切お構ひなしに必ず試合を買つて出て、どうにも始末のつかん對手だといふことを示す天才をもつてゐた。彼は試合場に出るや否や、何んでも手當り次第のものを右手でやつつけ、左手でそれに續け打

ちを喰はし、受け洗し、打ち合ひ、打ち返し、對手（彼はいつも全英國を對手どつて闘つた）を悩ましぬいて試合線のどんづまりまで追ひつめて、そこで小氣味よく對手に飛びかゝるのがいつもの遣り口であつた。彼は『常識』といふ對手の息の根を叩きとめて、その不仕合せな對手にタイム！といふ呼聲が聞えないやうにさせることは受け合ひだつた。それで彼は政府任命の委員達が地上を支配するやうになるお役所萬能の偉大な黄金時代を實現すべき役目を、最高官憲から仰せつけられてゐた。

「うむ、よろしい。」とこの紳士は元氣のゝ微笑を見せて、腕を組みながら言つた。「それが馬といふものぢや。そこでわしが一つ皆さんにお訊ねするが、皆さんは馬の摸様のある紙で室内を張りたいますか？」

一寸間を置いて、子供等の牛分は聲を合せてかふ叫んだ、「はい、張りたうございます！」これに對して他の半分は、その紳士の顔から『はい』といふのは間違ひだとして取つたので、かふいふ試問の場合の習慣として、聲を合せて「ゐゝえ、張りたくはありません」と叫び出した。

「無論張つてはならん。では何故張つてはならないですか」

沈黙が暫く續く、すると息づかひのせむせむする一人の肥つた薄のろらしい少年が、冒險的にかふ答へた、自分は決して室内に紙などを張りたくはない、といふのは紙の代りに繪を描いて貰つた方がゐゝからだ、と。

「いや、お前はとにかく紙で張らなくてはいくわんのぢや。」とその紳士はやゝ急ぎ込んだやうに言つた。

「お前は張らなけりやいかん。」とトマス・グラッドグラインドは言つた。「お前がさうしたくともしたくなくとも、張らなけりやいくわんのぢや。張りたくないなどゝわし達にゐつてはいかん、お前はどつういふつもりなのぢや？」

「では、わしが。」と紳士はもう一度、不氣味に靜まり返つた後であつた。「何故皆さんが馬の摸様のある紙を室内に張つてはいけないのか説明して上げよう。皆さんは實際上——いや、事實上馬が室の壁を往つたり來つたりしてゐるのを見たことがありますか？見たことがありますか？」

「はい、あります！」と一方の半分が叫んだ。「ゐゝえ、ありません！」と他方の半分が叫んだ。

「無論、見たことはありません。」と紳士は間違つた方の半分に腹立たしげな顔を見せて言つた。「だから皆さんは事實上見たこともないやうなものを何處でゝも見るやうなことになるてはいけないのです。事實上持つたこともないものを、何處でゝも持つことになつてはいけないのです。

—三八〇—

謂ゆる趣味といふものも、たゞ事實といふものを別の名で呼んだに過ぎないのです。」

トマス・グラッドグラインドはその通りだと首肯した。

「これこそ新しい原理です。發見です、偉大な發見です。」と紳士は言つた。「ではもう一度お訊ねしてみよう。皆さんが室内に絨毯を敷くとしませう。ところで皆さんは花の摸様のついた絨毯を使ひたひですか？」

この時分にはもう、『ゐゝえ』といふのがこの紳士にとつて何時も正しい返事になるのだと皆信じてしまつたので、『ゐゝえ』といふ合唱は非常に強くひびゐた。たゞほんの二三人の落伍者だけが『はい』と言つた。シッシイ・ジュープもその一人であつた。

「少女組の二十番。」とその紳士はいかにも智識を誇り顔に悠然と微笑してかふるつた。

シッシイは顔を赦らめて立つた。

「ではお前さんは自分の部屋に——それとも今に大人になつて御亭主を持つたら、その御亭主の部

屋にちや——花摸様の絨毯を敷きたいといふのぢやね。」と紳士は言つた。「何故敷きたいです?」

「はい、あのわたし花が大好きでございますから。」と少女は答へた。

「するとお前さんはさういふ理由で、その花の上に卓子や椅子をのせたり、その上を重い鞆を穿いた人々に歩かせたりしようとするのぢやね?」

「はい、でもそれは別に花を傷めはいたしません。はい、花は潰されも萎みも致しません。それは大變綺麗で氣持のゝ花の繪だかも知れませんが、さうするとわたし、あの空想で——」

「さうだ、さうだ、さうだ——ちやがお前は空想などではいかん」と紳士は、彼女の言葉が巧み具合に自分の思ふ壺にはまつて來たので、有頂天になつてかふ叫んだ。「さうぢや。お前は決して空想などしちやいくわん!」

「セシリヤ・ジュープ、お前は、」とトマス・グラッドグラインドは嚴かに同じことを言つた。「さういふことは決してしちやいくわん。」

「事實、事實、事實ぢや!」と紳士は言つた。すると、「事實、事實、事實ぢや!」とトマス・グラッドグラインドラインドが繰り返した。

「お前さんは何事に於いても、」と紳士は言つた。「事實で指導され支配されなければいかん、わたし達は遠からぬ將來に於いて、人民に事實を尊敬させ、たゞ事實だけを尊敬させようと骨折る、事實派の委員達から出來た事實の評議會をもちたいと望んでゐるのぢや。お前さんは空想といふ言葉を全く抛棄してしまはなければいかん。お前さんは空想な

—三八一—

どに用がありません。お前さんは毎日使ふ品物でも飾りにする品物でも事實の上で矛盾するやうなものをもつてはいかん。お前さんは事實上、花の上を歩きません。ちやから皆さんは絨毯の花摸様の上を歩くことも許されないのぢや、お前さんは外國の小鳥や蝶がやつて來てお前さんの瀬戸物に止つたのを見たことがあります、ちやからお前さんがお前さんの瀬戸物に外國の小鳥や蝶を描くことなど許されはしないのぢや。お前さんは四足動物が壁を昇り降りするのに出會つたことは決してない、ちやからお前さんは壁に四足動物の摸樣などを張りつけてはならないのぢや。お前さんは、」と紳士は言つた。「かふいふすべての目的のために、お前さんが證明したり説明したりすることが容易に出来る數學上の圖形の組み合せや、變形させたものを(それも原色で)使はなければならん。これこそ新發見ぢや。これこそ事實ぢや。これこそ趣味といふものぢや。」

少女は膝を屈めて禮をすると腰を下した。彼女はまたひどく若かつた、そして世間が示してゐる事實一點張りの前途の様子に、ひどくおどおどしてゐるやうに見えた。

「そこで、グラッドグラインドさん、」と紳士はあつた。「マックチョーカムチャイルドさんが、唯今最初の課業をお授けなさることが出來ましたら、わしはあなたの御希望通りあの方の授業振りを一つ拜見させて貰ひたいと思ひますな。」

グラッドグラインドは感謝した。「マックチョーカムチャイルドさん、ではお願ひ致します。」そこで、マックチョーカムチャイルドはその最上の授業振りでやり出した。彼ともう百四十人ばかりの教師達とは、同じ數だけのピアノの脚のやうに、同時に、同じ製作場で、同じ原則の上で造られて、ほんの近頃世間に出されたのであつた。彼はそこで恐ろしく種々雑多な歩調で引廻されたり、本で何冊といふ程の、頭の割れちまひさうな質問に答へたりした。正字法、語源論、文章論、韻律學、傳記、天文學、地理學、一般宇宙論、複合比例、代數、土地測量と水準測量などの諸學、聲樂、寫生畫などは彼の冷たい十本の指先きでどうにでもなる程、精通してゐた。彼はその石だらけの困難な道

を凌いで女皇陛下最高樞密院發表の第二號人名録に秀才の名を留めることが出来た、それからまた數學や物理學、佛蘭西語、獨逸語、拉丁語、希臘語などの最高學藝の技からも精華を摘み集めたのであつた。彼は全世界の水源地の全部（それがどんなものであらふと）あらゆる國民の歴史の全部、あらゆる山川の名稱の全部、あらゆる國々のあらゆる産物、風俗、習慣、そのあらゆる國のあらゆる疆界や羅針盤の三十二方位に相當する全部の方角まで、何一つとして知らないものがなかつた。あゝ、マツクチョーカムチャイルド、彼は少々知り過ぎた。若し彼が今

二三八二下

少し學問が少なかつたなら、もつともつと多くのことをどれほど立派に教へることが出来たであらふ！

彼が今その見本の授業をやり出した様子は、あの『四十人の盜賊』の物語の中のモージアナ（忠義な女中の名）に似てゐなくもなかつた、彼は自分の眼の前にづらりと列んでゐる容器（少年少女）を一つごと覗き込んで、その中に何が入つてゐるかといふことを調べまはつてみた。あゝ、善人マツクチョーカムチャイルド、君はその煮え立つ智識の油鍋から順々に一つ一つの壺の口もとまで一杯に注ぎ込むときに、果してその壺の中にひそむ『空想』といふ盜賊を何時も即時に殺すことが出来るかと考へてゐるのか―それとも時々たゞ不具にし片輪にしてやる事が出来るだけだと考へてゐるのか！（盜賊の頭が油商人といふふれこみで四十人の手下を革の油壺の中に入れてつれて來たがモージアナに看破され、壺の中の手下は大煮油をそゞがれて死んでしまつた）

三、隙見

グラッドグラインドはかなり満足な氣持で、學校から家路へと辿つてゐた。それは彼の學校であり、彼はそれを模範學校にするつもりであつた。彼はこの學校の子供達を皆模範的兒童にするつもりであつた―丁度、彼自身の子供達が皆模範的であつたやうに。

グラッドグラインド家には子供が五人ゐたが、五人が五人とも模範的な子供であつた。彼等は極く幼い頃からづゝと説教をされて來た、まるで小さな鬼のやうに追つかかれ通しに追つかかれて來た。彼等がやつと一人で走れるやうになると、もう課業室に走つて行かなければならなかつた。彼等が一番最初に近づきになつたもの、或は一番最初の記憶は、氣味の惡い大きな黒板と、その上に白い數字を白墨で書いてゐる乾からびた喰人鬼の姿であつた。

といつたゝて、彼等が何も、これが喰人鬼といふものだとは知つてゐたといふ譯ではない。そんなことが事實あつては堪らない！わたしはたゞこの課業室に立籠つた怪物を現はすためにこの言葉を使ふだけである、この課業室にゐる輕物は、たつた一つに纏められた數知れぬ頭を持つてゐて（いろいろな事實を知つてゐる事）好んで幼年時代の子供を捕へては、その髪の毛をつかんで蔭氣な系統的事實の洞穴に引きずりこんでしまふのであつた。

グラッドグラインド家の子供の誰も、お月様のお顔などを見たことがなかつた。卻つて子供はまだ口もうくにきけないうちに、『月』といふものについての事實をよく知つてゐた。グラッドグラインド家の子供の誰も、『光れ、光れ、小さな星よ、ほんとにお前は何かしら！』といふ無邪氣な歌を覺えたことがなかつた。グラッドグラインド家の子供の誰も、星のことを不可思議だと思つたことが決してなかつた、彼

は誰でも五つになるとオーウェン教授のやうに大熊を解剖したり、また機關手のやうにチャールズの車（北斗星）を驅つたりしてゐた。グラッドグラインド家の子供の誰も、野原にある牛を見て、『麴麥を喰つた鼠を殺した猫をぬぐめた犬を突き上げた曲つた角をもつてゐるあの名高い牛』（「マザーグース」の童謡の文句）を思ひ出したり、また一守法師を呑んだ更に名高い牛（英國のお伽話）を思ひ出してすことも決してなかつた、子供等はかふした名高い牛のことは、話に聞いたこともなかつた、たゞ牛といふものは草を喰し反芻をする、幾つかの胃をもつた四足動物であると教へられてゐたのであつた。

グラッドグラインドはストーン・ロッヂと呼ばれてゐた彼の事實一點張りの殺風景な家へと足を向けてゐた。彼はストーン・ロッヂを建てる前に、もう金物卸賣商を事實上隠退してゐた、そして今は議會で計算上手といふ名を擧げることの出来る適當な機會を待つてゐるのであつた。ストーン・ロッヂは或る大きな町——現在の最も信頼出来る案内書では、コークタウンと呼ばれてゐる町——から一二哩までは離れてゐない沼地に建てられてゐた。

ストーン・ロッヂはこの地方にあくまで規則正しい姿を見せてゐた。あたりの風物には、この頑固な事實を和らげ、薄めるやうなものは見られなかつた。大きな四角な家で、どつしりした玄關が正面の窓を暗くしてゐるところは、丁度主人の大きな額が、兩の眼にかぶさつてゐるのと、よく似てゐた。何處を見ても目論まれ、計算され、差引きされ、保證をつけられた家だといふことが分つた。入口の此方に窓が六つ、彼方にも六つあり、こちらの側面に皆で十二、別の側面にも皆で十二、別に後部の二つの側面にまはされたのが二十四あつた。芝生の庭や、まだ若い植込みは、すべて植物で造つた會計簿とゐつたやうに眞直に區劃されてゐた。瓦斯や換氣や排水や用水は、すべてこの上もなく立派に出来てゐた。鐵の銕や桁は上から下まで耐火式になつて居り、刷毛や箒木をもつて上り下りする召使達のためには昇降機までがあつて、あらゆるものが申分なく揃つてゐた。

あらゆるもの？さうだ、わたしは先づさうだと思ふ。その上グラッドグラインド家の子供達には科學のいろいろな部門の標本陳列棚があつた。彼等には貝類學の小陳列棚があり、冶金學の小陳列棚をもち、礦物學の小陳列棚があつた。そして何の標本もすべてきちんと整理され、分類されてゐた、石や礦物の破片は、それと同種類の恐ろしく堅い道具によつて、その親石から碎き取られたかのやうに見える。そしてあの詰らないピーター・パイアの傳説——それは決してこゝの子供等の部屋に入り込んだことはなかつたが、——を言ひ換へて見れば、若しこの欲張りの小さな

グラッドグラインド達がよいよこれより外のものをつかんだなら、一體全體、この欲張りの小さなグラッドグラインド達がかつかんだものは何だつたらう？

彼等の父親は、希望に満ちた上機嫌で歩いて來た。彼はまた彼だけに愛情深い父であつた、だが、彼自身は、多分（若シツシイ・ジュープのやうに定義を質問されたなら）自分のことを『すぐれて實際的な』父親だと言つたであらう。彼はこの『すぐれて實際的な』といふ文句に特別な誇りをもつてゐた、そしてこの文句は彼には特にあて嵌つたものだと考へられてゐた。コークタウンでどんな會合が催されやうとも、またそんな會合の問題が何であらうとも、コークタウン市民の誰かゞ、きつと、自分のすぐれて實際的な友人グラッドグラインドが云々と口にする機會をつかむのであつた。これがまた、いつも、このすぐれて實際的な友人を喜ばせた。彼はそんなことは自分としては當り前だとい

ふことを知つてゐた、だがさう知つてゐても満更惡の氣持がしなかつた。

彼は町端れまで来た。そこは町でもなければ田舎でもない、惡づれのした處であつた。彼がそこに來た時に、彼の耳には遠慮もなく音樂の響が入つて來た。その木造の假小舎の中に樂屋を置いてゐる曲馬團の樂隊がじやんじやん、ぶうぶうの眞昼中であつた。お寺の頂きから流れてゐる旗によつて、人々に參詣をお願いしてゐたのは、お寺ではなくて、『スリアリ曲馬團』なのだといふことが誰にでも分つた。そのスリアリ自身が錢箱を傍に置きながら、肥つた現代風の立像とでもいふ恰好で、初期ゴチック式建築のいかにも教會くさい壁龕の中で見料を受け取つてゐた。娘のジョセフィン・スリアリは、何だかひどく細長い紙片に印刷したびらに廣告されてあるやうに、丁度その時、馬上で風流な『チロール一流花の舞』といふのを舞つて興行の幕開きをやつてゐた。その他にも面白くつて、いかにも教訓的な、見なければ本當と信じられないやうな不思議な藝當が澤山あつたが、中でもシニヤア・ジューブ（セシリヤの父）は、その日の午後彼の『仕込みの立派な演藝犬メリレッグスの面白い藝當を説明する』ことになつてゐた。彼はまた『手の甲で、七五ハンドレッドウェイト（ハンドレッドウェイトは百十二封度）の重さのある鐵丸をひつきりなしに頭越しに投げ上げて、中空に堅い鐵丸の漣を造つてお目にかけるといふ吃驚するやうな藝當』を演ずることになつてゐた、この藝當は『この國に於いては愚か、他のどんな國に於いても、かつて演じられたことがないものだが、折角、見物の狂喜の大喝采を呼んだのだから、必ず番組から差控へないことにする』といふのであつた。また同じシニヤア・ジューブが幕間ごとに例の、シエクスピア流の諷刺や、しつぱ返しをお聞きに入れて種

一二八五

種な藝當を陽氣にする』ことになつてゐた、最後に彼は『仕立屋さんのブレントフォード巡り』といふ極く新奇な面白い一幕物の馬芝居の中で、彼の得意の出役トウリイ街のウキリアム・バットンに扮して現はれて、出役の總勘定をすることになつてゐた。

トマス・グラッドグラインドは、勿論かふいふつまらぬものには注意をしなかつた。彼は思想から騒々しい盡けらどもを拂ひのけたり、または心の中で彼等を懲治監の中に割りあてゝみたりしながら、いかにも實際的な人が通つて行くやうに、通りつゞけた。だが路を曲つて、假小舎の背後の方に出ると、そこには大勢の子供達が集つて、いろいろと人目をぬすむやうな様子をして、中にかくされた華やかな光景をのぞき込まうとしてゐるのが眼についた。

それを見て彼は立ち止つた。「ふむ、この浮浪藝人どもが摸範學校から小さな彌次馬聯を引き寄せてゐるわひ。」彼はかふ言つた。

彼とこの小さい彌次馬聯との間には、ぬぢけ切つた草と乾いた塵芥のある場所があつたので、彼は胴衣から眼鏡を取り出して、誰か彼の名前を知つてゐる子がゐたら、早速立ち去れと叱りつけてやうと探してみた。それは明瞭に見られることは見られた、だが何といふ信じかねる光景だつたらう。何故ならその時、彼の眼にうつつたのは、自分の娘の少女冶金學者ルイザが一生懸命松板の節穴から内部をのぞき込んでゐると、倅の少年數學者トマスが風流な馬上の『チロール一流花の舞』をやつてゐる馬の、せめて蹄の一つでも見たい様子で、地面に腹はつてゐる姿に外ならなかつた。

グラッドグラインドは仰天してもいふ得なかつたが、彼の一家の名譽がこんなに踏み躪られてゐるその場へといきなり横切つて行つて、二人の心得違ひの子供達の肩に手をかけて、かふ言つた――

「こらルイザ、トマス！」

二人ははつと立ち上つたが、顔を眞赧にしてどぎまぎしてゐた。だがルイザはトマスよりもつと大膽に父親の顔を見た。實際トマスは父の顔を見はしなかつた。そしてまるで機械のやうに家に聯れ

歸られるまゝになつてゐた。

「實に奇怪とも、怠惰とも、愚行とも何とも言へんことぢや！」と一方の手に一人づゝ引いて聯れ去りながらグラッドグラインドは言つた。「此處で何をしてゐたのぢや？」

「どんなものか見ようと思つたのですわ。」ルイザが言葉短く答へた。

「どんなものかぢやと？」

「さうですわ、お父さん。」

二人の子供、特に娘の方に、がっかりしたやうな不機嫌

―三八六―

の様子が見えた。それでも彼女の顔の不満足な表情を押しわけ、搔きわけて、照すべき何もものも持たない光が現はれて來た、燃え上るべき何物をも持たない火が現はれて來た、どうにかして、自身の生命を保つてゐる飢多きつた想像、それが彼女の顔の表情をやゝ明るくしてゐた。そこには快闊な青春に自然な明るさがなくて、不安で、熱心で、疑惑的な、手操りで路をたどる盲人の顔の變化によく似た何かいたましいものゝこもつてゐるやうな閃光があつた。

彼女はまた十五六の子供であつた。しかし、遠からず急に一人前の女となるやうに見えた。彼女の父も、彼女を見ながら、さう考へた。彼女は美しかった。きつと養育の仕方が悪かつたなら、氣儘になつたことであらふ（と彼女の父は例のすぐれた實際的な考へ方がかふ考へた）。

「これトマス、わしは限の前であの事實を見ながらも、お前ほどの教育と智識のある子供が、姉さんをこんな場所へ聯れて來たといふことは信じ難いのぢや。」

「わたしがトマスを聯れて來たのですわ、お父さん、」とすぐルイザが言つた。「わたしがトマスと一緒にほひでとひつたのです。」

「さう聞くとわしは残念ぢや。本當にさう聞くと大變残念ぢや。お前がさう言つたからとてトマスが少しも立派になりはせん、反對にそのためにお前はますます惡ふことになるんぢや。ルイザ。」

彼女はまたも父の顔を見た。だが、彼女の顔には涙は流れてゐなかつた。

「お前が！科學の全大系がいつでも研究の出来るトマスとお前、事實を十分に教へこまれたといつていゝトマスとお前、數學的精確さを守るやうに仕込まれて來たトマスとお前、そのトマスとお前が、こゝにゐる！」とグラッドグラインドは叫んだ。「この下品な場所にぢや！わしは呆れて物も言へん。」

「わたしは倦きてゐたのですわ、お父さん。永い前からづゝと倦きてゐたのでしたわ。」とルイザがひつた。

「倦きた？何にぢや？」と驚いた父親がかふ訊ねた。

「何にだか分りません――きつと何にでもだらうと思ひますの。」

「もう何も言はんで宜しい、」とグラッドグラインドが答へた。「お前はまた子供ぢや、お前の言ふことはもう聞かん。」

彼はそれきり再び口をきかず、ものゝ半哩も黙つて歩いて行つたが、その時急に、眞面目な顔でかふ言ひ出した。「お前の一番立派なお友達方は何といふぢやらう、なあ、ルイザ？お前は、お友達方の評判や意見を價值があるとは思はんかね？例へばバウンダアビイさんは何と言ふぢやらう？」

「この名が父の口から出た瞬間に、娘はその眼に烈しい探

―三八七―

るやうな色を著るしくみせて、父親の顔を一寸見た。彼はそれを少しも見なかつた、何故なら彼が彼女を見る前に、彼女はまたも眼を落してゐたからである。

「バウンダアビイさんは何と言ふちやらう！」彼は直ぐ繰り返してかふ言つた。ストーン・ロッヂへの途中真面目くさつて、立腹しながら二人の過失者を家に聯れて歸る道々、彼は折々『バウンダアビイさんは何と言ふちやらう』と、まるでバウンダアビイその人がグランディ夫人（或る戯曲中の人物、世間の口といふこと）でもあるかのやうに繰り返した。

四、バウンダアビイ

グランディ夫人ではないそのバウンダアビイとは、どういふ人物であつたか。

左様、バウンダアビイは、グラッドグラインドの親友に近い人物であつた、それも一寸難しい言ひ方だが、全然、感情の缺けた一人の人間が、同じく全然感情の缺けた今一人の人間への精神關係に近づくことが出来る限りの意味で親友に近い人物であつた。バウンダアビイはそれ程近かつた——もつとも、若し讀者諸君がさうゐつた方がよいと思ふなら、それ程ひどく遠かつたとひつてもゐる。

彼は金持であつた、銀行家、商人、製造業者その他等々であつた。背の大きな、聲の高い、人の顔を見つめる癖のある、金物を鳴らしたやうな笑ひ方をする男であつた。お粗末な材料で出来上つた男で、その材料といふのも、この男の大部分をでつち上げる爲めに無理に引き延ばされたやうに思はれた。大きな膨れ上つやうな頭と額があり、顚顚の血管は浮き出て居り、顔の皮膚は引張つたやうに張つてゐるので、それが何時も眼を見開かせ、眉を釣り上げさせてゐるやうに見える男であつた。風船のやうに張りきつて、今にも飛び揚りさうな様子が何處から何處まで見える男であつた。自分が腕一本で仕上げた人間だといふことをどれほど自慢にしても、自慢し足りないといふ男であつた。例の物言ふ眞鍮の喇叭のやうな聲で、その昔の無教育と貧乏を何時も吹聴する男であつた。兎に角卑下を自慢にする男であつた。

本當は彼のすぐれてじつ實際的な友人よりも一つ二つ若かつたが、バウンダアビイの方が老けて見えた、四十七八である彼を、七八つ上だとゐつても、誰も驚く人はなかつたらう。彼の頭髮は澤山はなかつた。人々は、彼が話をする時の猛烈な勢ひでそれが吹き飛ばされてしまつたのだと想像したかも知れない、またのこる残つてゐる髪が、皆こちやこちやに立ち上つてゐるが、やつぱり彼の身の上自慢の鼻息で絶えず吹きまくられてゐる有さま様だといふことも想像が出来たであらう。

一三八八—

ストーン・ロッヂの形式ばつた應接間の爐敷の上に立つて、火にあたゝまりながら、バウンダアビイはグラッドグラインド夫人に向つて、今日が彼の誕生日だといふことからつゞゐて、いろいろと自説を述べ立てゝゐた。彼が爐の前に立つてゐたのは、一つにはこの日は太陽が輝いてはゐたけれども、薄寒い春の午後だつたゝめ、一つにはストーン・ロッヂの蔭つたところにはいつもしめる濕つた漆喰の氣が幽霊のやうに漂つてゐたゝめであつた。だがまた一つには、グラッドグラインド夫人を壓服するため、かふした支配的位置を占めたためでもあつた。

「わしは鞆も穿いてゐませんか。鞆足袋はどうかといふと、そんなものは名を聞いたこともありませんかつた。わしはその日は溝の中で過し、その夜は豚小舎で明かしました。わしはさうして十歳の誕生日を過しました。溝はわしには珍らしいものではありませんかつた。わしは溝の中で生れたもんだやから。」

グラッドグラインド夫人は、小さな痩せた、色の蒼白い、眼のしよばしよばした、まるで肩掛の包みのやうな精神的にもひどく弱い女で、——いつも薬を呑んでゐるが別に利いたやうな様子もなく、またやつとあたり前になりさうな徴候を見せる時は、いつも何か重い事實の一片が、彼女の上に轉がり落ちて来て氣を遠くさせられるので浸あつた——彼女はバウンダアビーの話の溝が、乾いた溝であつてくれたらゝにとひつた。

「乾いてはゐませんでしたとも！肉汁に浸つたパンのやうに浸つてゐましたよ。水が一フィートもありましたから。」とバウンダアビーはゐつた。

「叔ちやんに感冒を引かせるには澤山でせう。」とグラッドグラインド夫人はかふ考へた。

「感冒ですつて？わしは肺に炎症を起したまゝ生れたんですよ、そればかりぢやない、炎症を起しさうなところには皆炎症を起したまゝ生れたのだと思ひます。」とバウンダアビーが答へた。「可成り長い間はです、奥さん、わしはこの上もない惨めな子供の一人だつたんです。わしはひどく病身だつたんで、いつもなり通しにうなつてゐたものでした。それに衣服はぼろぼろで、汚かつたんですから、火鉢の尖端でなりときはる觸つてくれさうな人がありませんぐらゐでした。」

グラッドグラインド夫人は弱々しさうに火鉢を見やつた、彼女のやうな弱い體では、火鉢で觸るぐらゐが自分に出来る精一杯のやうに思はれた。

「どうしてわしが、その中を奮闘して來たかといふことは、わしにさへ分かりません。」と、バウンダアビーがひつた。「大方わしは決心したものでやらうと思ひます。わしは後年

一三八九

斷乎たる決心をもつた性格で押し通して來ましたが、大方、その時からさうだつたのぢやらうと思ひます。とも角、グラッドグラインド夫人、わしは今日まで漕ぎつけて來ました、わしがこゝまで漕ぎつけたことについては、わしは自分以外に誰のお蔭も蒙つてゐません。」

グラッドグラインド夫人はおづおづと、弱々しくかふひかけた。——多分彼の母親のお蔭では……「母ですつて？母はわしに置き去りを喰はしたんです、奥さん！」とバウンダアビーがひつた。

グラッドグラインド夫人はいつものやうにはつと氣が遠くなつたので、すつかり萎縮けて、それをいひ出すのを思ひ切つた。

「母はわしを祖母の手に残して行つたんです。」とバウンダアビーがひつた。「そして、わしはつきり記憶してゐるところによると、この祖母といふのが又、世間に類のない意地悪な性のよくない老婆でしてな。若しわしがどうかして小さな鞆の一足でも手に入れると、祖母は直ぐにそれを取り上げて、飲料に賣つたものでした。えゝ、そりやまう、わしの祖母と來たら牀の中に入つてゐながら、朝喰前に酒を十四杯も飲んだのをわしが知つてゐるんですから！」

グラッドグラインド夫人は弱々しく微笑したゞけで、その外には何も生氣のある徴候を示さなかつたから（いつもさうだが）、まるで、あまりはつきりと寫らない（背後に十分な光線がないので）影繪の肖像のやうに見えた。

「祖母は雜貨屋をやつてゐました。」とバウンダアビーは續けた。「そして卵の空箱の中にわしを入れたとゐたものでした。古い卵箱、それがわしの幼年時代の吊牀だつたんです。もちろん、わしが逃げ出すことが出来る位になるや否や、早速逃げ出しました。それからわしは若い浮浪者になつたのです、そして一人の老婆になぐり飛ばされたり飢ゑさせられたりするかはりに、今度は年寄りや若い聯中の區別なしに皆がわしをなぐり飛ばしたり飢ゑさせたりしてくれました。皆がさうしたのも尤もなんで、彼奴等は他に何にもする仕事になかつたのでしたからな。わしは邪魔もので厄介もので疫病

神だつたんです。わしはそれをよく承知してゐます。」

これでも自分の生涯には、邪魔もので厄介もので疫病神だと扱はれるほどの社會的高名を博した時があるといふ彼の誇りは、例の剛喇叭のやうな聲でこの自慢を三度繰り返すことによつてわづかに満足させられた。

「大方、わしはそれを泳ぎ抜けなければならぬやうに出来てゐたものでせうて、グラッドグラインド夫人。さうしなければならなかつたにしろ、しなくても濟んだにしろ、奥さんわしは見事泳ぎぬけたのです。誰も綱を投げてくれる

―三九〇―

者はありませんでしたが、わしはとにかくそれを泳ぎぬけたのです。浮浪者、走り使ひ、また浮浪者、労働者、運搬人、番頭、支配人頭、小資本の組合員、それからコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイ。これがわしの前身でもあり、到達點でもある譯ですぢや。コークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイは商店の看板から文字を學んだのです、グラッドグラインド夫人。それから前者で、手に負へない浮浪者の、飲んだくれの跛者に教はつて、倫敦の聖ジャイルズ教會の尖塔の時計を手本にして初めて時計の指針面の時間を見分けることが出来ました。コークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイに、教區學校や模範學校や、師範學校やその他、こたこたと澤山な學校のことを話して御覽なさい、さうすればコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイははつきりと、そりやぬゝそりや結構ぢやとを答へします―わしはかふいふ便利には出會はなかつたものですぢや―が必要なのは感傷拔きの實際的な腕のたしかな人間なん―わしを造り上げた教育は誰でもが眞似の出来るものではありません、わしはそれはよく知つてゐますぢや―とにかくわしの教育はかふいふものだつたです。世間の人はわしに無理に煮えくり返る油を飲ませることは出来るかも知れません。ぢやが彼等はわしに強ひて、わしの生涯の事實を取り・・・消させることは出来ません。」

この頂點に達すると熱くなつて來たので、コークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイは言葉をとめた。丁度その時、彼のすぐれて實際的な友人が、尙ほ二人の過失者の手を掴んだまゝ、その部屋に入つて來た。彼のすぐれて實際的な友人は、彼の姿を見ると同じやうに立ち止つて、さも叱るやうな眼付でルイザを見たが、その眼付は明らかに『そら、お前のバウンダアビイを御覽』といふやうであつた。

「やあ―」とバウンダアビイは例の喇叭のやうな聲であつた。『どうしたんぢや、トマス君は塵捨場を何をしてゐたんぢやね。』

彼は、口ではトマス少年のことをあつたが眼ではルイザを見てゐた。

「わたし達は曲馬を覗いてゐたのですわ、」やはり眼を伏せたまゝルイザがつんとしてかふ呟いた。

「そこをお父さんに捉る捉つたのです。」

「ぢやからお前、」と彼が傲然と妻にゐつた。「わしは子供等が詩の本を讀んでゐるのを見つけてもちつとも驚くには當らんと思ふよ。」

「おやまあ、」とグラッドグラインド夫人が泣聲でかふあつた。「どうしてお前達はまあ、ルイザ、トマス！呆れたものですね。お前達はまったくお母さんに子供をもつたことを悔ませるやうなことをしたのですよ。本當に、わたしは

―三九一―

豫供なぞなかつたらひゝと言ひたいいくらゐです。そんなことをしてお前達はとうするつもりだつたかお母さんに話して御覽なさい。」

グラッドグラインドはかふ力を込めていはれた言葉から、あまりゐゝ印象を受けたやうには見えなかつた。彼はあつたゝしさうに不機嫌な顔をした。

「まるでお前達は、お母さんのやうに頭がづきんづきんいたんで、お前方に備へてやつてある貝や鑽石やそのほかの物も行つて見ることが出来なかつたので、曲馬を覗きに行つたとしてもいふやうぢやありませんか。」とグラッドグラインド夫人がひつた。「お前方は、何處の子供だつて曲馬の先生を雇つて置くこともしなければ、陳列棚で曲馬をさせることもしなければ、曲馬の學課なんぞに出ることもしないといふことを、お母さんと同じやうに知つてゐませう。では全體、お前達は曲馬のどんなことを知りたいといふのです。ほかにお前達の知らなくてはならないものが澤山あるでせう。だのにそんなものを知りたいがるとは何です。お母さんの頭がこんなだから、お前方が知らなければならぬいろいろな事實の半分も名前が思ひ出せないけれど。」

「わたし達だつて、それだからなんですわ！」とルイザがふくれてあつた。

「お母さんにそれだからだなんて言つてはいけません、そりや少しもそんな理由にはなりませんから。」グラッドグラインド夫人がひつた。「行つて直ぐに何か勉強をなさい。」グラッドグラインド夫人は、學者的な緻密な性質ではなかつた、でいつも子供等のすべきことを勝手に選ばせるやうな、こんな一般的なぼんやりした命令で、彼等の書齋に追ひやつたのであつた。

實際グラッドグラインド夫人の一般的事實についての持ち合せはひどく乏しいものであつた。だがグラッドグラインドが、彼女を引き上げて、一家の主婦といふ高い地位につけたのは、二つの理由に動かされたからであつた。第一に、彼女は懐ろ勘定の點からいつても最も満足なものであつた、そして第二に、彼女には『馬鹿らしい處』が少しもなかつた。その馬鹿らしいといふのは、彼にあつては『空想』のことを意味してゐた。そして實際、彼女が完全な白癡の情態になつてゐないあらゆる人間の中で、一番さういふ性質を持ち合せてゐなかつた、といふことは本當であつたらう。

たゞ彼女の夫とバウンダアビーと彼女とだけ残されたといふ簡単な事情だけで、彼女自身と他のどんな事實との衝突がなくても、この偉い奥方に再び氣を遠くさせるに十分であつた。で彼女は又もや卒倒した、だが誰も彼女に氣がついた者がなかつた。

「バウンダアビー」と爐邊に椅子を引き寄せながらグラッ

二三九一

ドグラインドがひつた。「君は何時もおわしの子供達のことなら——殊にルイザのことなら何でも喜んで聞いてくれるから、君にはつゝまんでいふが、わしは今日のやうなことを見つけたんで、實に残念で堪らん。わしは（君も御承知のやうに）わしの家族の理性の教育には、組織的に身をさゝげてゐるものぢや。理性は（君も御承知のやうに）教育の對象とされなければならぬ唯一の機能なのぢや。それにも拘らずぢや、バウンダアビー、今日の思ひがけない出来事に依つて見ると、事そのものは瑣細なことぢやが、トマスとルイザの心にある——いや寧ろ別の——かふいふよりうまく言ひ現はすことが出来んが——わしが發達させようと思つたこともない、又少しも理性の含まれてゐない或るものが、入り込んで来たのではないかといふやうに思はれるのぢや。」

「さうぢや、一塊りの浮浪人を面白がつて眺めるといふことには慥かに理性的な分子がないな。」とバウンダアビーが答へた。「わし自身が浮浪者だつた時には、誰も面白がつてわしを見る者はなかつた。わしはそれだけは知つとるね。」

「それで問題になるのは、」とこのすぐれて實際的な父親は、爐をみつめながらかふあつた。「何處にこの下等な好奇心の源があるかといふことぢや。」

「わしがその源を教へよう。詰らぬ想像から起るのぢや。」

「さうでなければあゝが、」とこの優れて實際的な父親がひつた。「ちやが、實をいふとわしが家に歸るとき、わしの心には一種の不安が起つたんぢや。」

「なに、つまらぬ想像からぢや、グラッドグラインド。」とバウンダアビイが繰り返した。「誰にとつても大變悪いものぢや、ちやがルイザのやうな少女にとつては、そりや極く悪いものぢや。わしはこんなひどい言葉を使ふことは、一つ奥さんのお許しを乞はなくちやならん、ちやが奥さんはわしがお上品な性格で無いといふことだけはよく御存知ぢや。誰でもわしにお上品なところを求めると失望するぢやらう。わしはお上品に育つて來なかつたのぢやから。」

「誰か、」とポケットに手を入れて、その凹んだ眼を爐にちつと向けたま、考へ込んだやうにグラッドグラインドがひつた。「誰か教師か召使ひか、何かを暗示するやうなことはなかつたか知らんて？ルイザかトマスか、何か讀んでゐたといふやうなことはなかつたかな？あれだけ用心がしてあるんぢやけれど、何か役にもたゝんお伽本などが家に入りこむやうなことはなかつたかな？といふのは生れ落ちるときから、法則規則で實際的に養育された者の心には、これがひどく不可思議な、ひどく不可解なものに見えるからぢや。」

「一寸待ちたまへ！」今まで前のやうに爐邊の敷物の上に立つてゐたバウンダアビイは無遠慮に爆發する卑下した態

「二九三」

度で部屋の家具を壊さんばかりにかふ怒鳴つた。「君の學校にはあの旅藝人の子供の一人があるんぢやないかな。」

「セシリア・ジュープといふ名ぢや、」とグラッドグラインドは、いくらかはつとしたやうに友人の顔を見ながら、あつた。

「まあ一寸待ちたまへ！」バウンダアビイはまたも叫んだ。「あの娘はどうしてあすこへ來たのぢやね。」

「なあに、實はかふぢや、わし自身もつい先程あの娘に會つたんぢや。あの娘は家に來て特に入學を許して貰ふやうに依頼したんぢや、正式にこの町の人間になつて居らんもんぢやからね。それで――さつぢや、君の言を通りぢや、バウンダアビイ、君の言を通りぢや。」

「まあ一寸待ち給へ！」とバウンダアビイがもう一度叫んだ。「あの娘がやつて來た時にルイザは會つたんぢやね。」

「ルイザは慥かに會つたんぢや、といふのはあれがその申込みのことをわしに取りついでのぢやかな、ぢやがあれはきつと、家内の前であの娘に會つたんぢや。」

「失禮ぢやが、グラッドグラインド夫人、どんな風でしたかな？」

「まあ、氣分が悪めものですから！」とグラッドグラインド夫人が答へた。「あの娘は學校へ來たひと申しましたし、ルイザもトマスもその娘が學校に來たがつてあるといひましたし、それにグラッドグラインドは女の子達も學校へ來させたがつてゐましたのでございませうもの、そんな事實がある場合はどうして皆に反對が出來ませう！」

「ぢやあゝことを教へよう、グラッドグラインド！」とバウンダアビイがひつた。「その娘を追つぱらつてしまひたまへ、さうすりや、それでおしまひぢや。」

「わしも君と同意見ぢや。」

「思ひ立つたら直ちに實行する、といふのが」とバウンダアビーがひつた。「わしの子供の時から主義ぢや。わしは、卵箱や祖母の手から逃げ出さうと思ふと、直ぐにやつたんぢや。君も同じやうにやりたまへ。わしのいふことをすぐにやりたまへ！」

「出掛けるかね？」と彼の友人がかつ訊ねた。「わしは娘の父親の宿所を知つとる。君は町までわしにお伴をさせて下さるぢやらうな。」

「遠慮はひらんよ」とバウンダアビーが答へた。「君がそれを直ぐにやる限りはぢや！」

そこでバウンダアビーは帽子を投げやるやうにして被つた——彼はいつも投げやるやうにして帽子を被つたが、それは出世をするのにあまり忙しくて帽子の被り方なぞ覺える暇がなかつた人間だといふことを現はしてゐた。——そして手をポケットに突つ込んだまゝ廣間の方へとぶらぶら

—二九四—

歩いて出た。「わしは決して手袋をはめたことがない。」と彼はいつもかふゐつた。「わしは手袋をつけて、出世の階段を昇りはせんかつた。若し手袋をつけてゐたら、こんなに高くは登つてゐなかつたらうて。」

グラッドグラインドが娘の父の宿所をしらべに二階に上つてゐる間の二三分間を、彼はたゞ一人廣間に残つて、ぶらぶらと歩いてゐたが、やがて子供達の晝齋の戸を開けて、その落ちついた油布を敷いた部屋を覗きこんだ。その部屋は本箱や、陳列棚や、その他澤山の研究的學術的な設備があつたに拘らず、全體の様子が、髮牀のやうな感じがした。ルイザは何を見るといふこともなしに、物憂さうに窓によりかゝりながら外を眺めてゐた。トマス少年の方はまだ諦めかねて鼻息荒く、爐の方を向いて立つてゐた。アダム・スマス及びマルサスといふ二人の弟は監督つきで學課に出席してゐた。小さいジェーンは石筆と涙とで彼女の顔にさんざん煙管粘土を製造したあとで、常分數の問題を考へながら眠つてしまつてゐた。

「もう心配することはないよ、ルイザ。心配することはないよ、トマス。」とバウンダアビーがひつた。「もうあんなことは二度としないね。お父さんの方はわしが引受けてちやんと納まるやうにして上げるから。ところでルイザ、それだけ骨折つてあげるんぢやから、一度ぐらゐ接吻してもゐゝぢやらう、えゝ？」

「一度だけならよござんすわ、バウンダアビーさん。」彼女は暫く素氣もなく黙つてゐたが、やがてそろそろと部屋を横切つて行つて、顔は外に向けたまゝ無作法にも彼女の顔を彼の方に向けて、かふゐつた。

「いつもわしの可愛い子ぢや、さうぢやらう、ルイザ？」とバウンダアビーがひつた。「左様なら、ルイザ。」

彼は行つてしまつた、だが彼女は同じ場所に立ち止つたまゝ彼が接吻した方の頬を眞赧になるほど手巾でこすつてゐた。五分ほどたつても彼女はまださうしてゐた。

「何をしてゐるの、ルウ姉ぢやん？」弟が不機嫌さうにかふ咎めた。「そんなにこすつたら顔に穴があひちまふぢやないか。」

「なんなら、あなたの小刃でこゝんとこゝところを切りとつてくれてもゐゝわ、トム。わたし泣きはしないわよ——」

五、基調

バウンダアビイ、グラッドグラインドの兩人が今目ざして行くコークタウンは『事實』の勝利の好標本であつた。それはグラッドグラインド夫人と同様、殆ど『想像』といふ汚點をもつてゐなかつた。わたし達はこの物語の一曲を奏する前に、その基調をなすコークタウンの音を合はせて見よう。

―二九五―

それは赭の煉瓦の町であつた、精確にいへば煤煙と灰とが手出しをしなかつたなら、本來の赭色でゐられたらうと思はれる煉瓦の町であつた。だが事實は煤煙と灰とがそのまゝで置いてくれなかつたので、繪具を塗つた野蠻人の顔のやうに、不自然な赭と黒との斑の町であつた。それは機械と高い煙突の町であつた、それらの煙突からは絶間なく煙の大蛇がいつまでもいつまでも這ひ上つてゐて、決してそのとぐろを解いたことがなかつた。町には黒い水の澱んだ堀割と、惡臭の臭ひのする染料のために紫色に流れる川とがある、又、矢鱈に窓を開けた大建物が幾つもかたまつてゐて、終日がたびし噪音を立て、憂鬱の蟲にとつゝかれた象の鼻のやうな蒸汽機關のピストンが、詰らなさうに上つたり下つたりしてゐる。町には七八筋の大通りがあつて、どの通りも皆よく似てゐた、また澤山の小さな通りがあつて、そのどれもがなほ一層よく似てゐた、さうした通りに住んでゐる人達も同様にめいめいがよく似てゐた。この人達は皆同じ時刻に、同じ通りの同じ敷石の上を、同じやうな音をたて、出入りして、同じ仕事をしてゐた。この人達にとつては、毎日々々がその前日その翌日と同じことであり、毎年毎年がその前年やその翌年と一寸も變らないものであつた。

かふいふコークタウンの特色は、主として町を支持して行く仕事の性質から離すことの出来ないものであつた、全世界にその販路を見出して行くいろいろな生活の慰安物、この町の名が口にされるのを聞くことさへ我慢しかねるやうなお上品な婦人方を數知れず作り出す所のいろいろな生活を優美にする品物——コークタウンの特色は、かふいつたこの町の産物と妙な對照をなしてゐた。町のその他の特徴は人爲的であつた、それらは次に述べるやうなものであつた。

諸君は、コークタウンでは、はげしい労働の面影をよびさますやうなものゝ外には何物をも見ることは出来ない。若し或る宗教の信者がそこに禮拜堂を建ててゐるなら——丁度十八の宗派の信者が實際こゝでしたやうに——彼等はそれを敬虔な根煉瓦の倉庫風に造つた、そして時として（だがこれはひどく裝飾を凝らした時の例だが）その頂上に鳥籠に入れた鐘をつるした。たゞ一つの例外はニューチヤーチであつた、これは入口の上に四角な塔のある漆喰塗りの建物で、その塔の頂上は、華美な木製の脚のやうな四つの丈の低い尖塔になつてゐた。町の公衆揭示は皆一様に白と黒の殺風景な字體で書いてあつた。刑務所は、使はふと思へば施療院にもなり、施療院はまた、使はふと思へば刑務所にもなつた、公會堂はその何れかに、またその兩方になり、外のどんなものにもなつた、すべてこれらの建築物の構造のおかげで、全然反對してゐるやうに見えるどんなものゝ

―二九六―

代りにでもなつた。事實、事實、事實、この町の物質的方面がすべて事實であつた。事實、事實、事實、この町の精神的方面はすべて事實であつた。マックチョーカムチャイルド學校もすべて事實であつた。圖案學校もすべて事實であつた。主人と使用人との間もすべて事實であつた。産科病院から墓地に至るまでの間のあらゆるものが事實であつた。諸君が數學で述べることの出来ないもの、または最も安價な市場で買ふことが出来、最も高價な市場で賣ることが出来るといふことを示されないもの

は、永久に存在しなかつたし、また決して存在することが出来なかつたであらふ、アーメン。

かくも事實といふものに捧げられ、事實の勢力の優れてゐる町は、勿論繁昌したことであらふところか違ふ、さう繁昌したといふわけではない。なに違ふ！おやほや！

然り違ふ。コークタウンはあらゆる點で火の試煉に堪へた黄金のやうに、その火爐から出て來たのではなくた。

まづ第一にこの土地のわけの分らない不思議は、誰がその十八の宗派に屬してゐるのかといふことであつた。何故なら、誰がそれに屬してゐるにしても、労働者達は屬してゐなかつたからである。日曜日の朝、通りを歩いて、まるで病人や神經質な者を、氣違ひにするやうに、無茶にぢやらんぢやらんと鳴る鐘が、かふいふ労働者達を、その宿所から、彼等自身の窮屈な部量から、彼等自身の通りの隅々から、呼び寄せることが如何に少ないか。反對に彼等がさうした通りを物憂ささうにぶらぶらしながら、まるで自分とは何の縁もないものでも眺めるやうに教會堂や禮拜堂に行く人々を眺めてゐることが如何に多いかといふことを認めると、實に不思議な氣がした。これは單にこの町に初めての人か認めたのみではなかつた。何故なら、外ならぬコークタウンに、町民の一團體組織があつて、その會員の請願は、議會開會ことに下院で開かれたが、それはかふいふ労働者を是が非でも、宗教的にしなければならぬといふ議會の法令を請願（慨嘆しつゝ）したものであつた。次には禁酒會があつて、かふいふ労働者が泥酔しなければ止まないといふ苦情をのべて、彼等が泥酔した事實を統計表によつて示したの、また茶話會の席で、人間の力でも、又神の力でも（禁酒會のメダルを除いては）、どんなことをしても、彼等に泥酔する習慣をやめさせることが出来ないといふことを證明したりした。次には藥劑師、藥種商があつて、これはまた別な統計表を作つて、かふいふ労働者達が泥酔しない時は阿片を喫するのだといふことを示した。次には經驗に富んだ刑務所の教誨師がある。これはまた、今迄の表を遙かに凌ぐ詳しい統計表を作つて、この同じ労働者達がどうしても、公けの眼の届かぬ下等な盛り場に聚合したがる

二三九七

こと、そこで下等な歌を聞き、下等な舞踊を見、多分それに加はること、それから近頃十八ヶ月間獨房監禁に處せられたA・Bと云ふ者は、次の誕生日で満二十四歳になる男だが、彼自ら、自分の破滅はかふいふ場所が始まつたと語つたこと（尤もこの言葉を信するに足りるやうな振舞ひを、彼はいまゞでにした事はなかつたけれども）、若しさうでなかつたら、自分は飛びきりの道德的模範となつてゐたであらうといふことをあくまで確信すること等を示した。次には今コークタウンを通つてゐる、共にすぐれて實際的なグラッドグラインド、バウンダアビイの兩人がある、この二人も時折は、彼等自らの經驗から割り出し、また彼等が見聞した事件から實例をとつた統計表を供給することが出来たが、それによれば次の事柄が明瞭らしく受けとれた——言ひかへれば、次の點が、この場合には唯一の明瞭な點であつた——ゐはるかふいふ労働者達は、全然見込みのない者どもである。諸君、たとひ諸君が彼等のためにどんなことをしてやらうとも、彼等は決してそれを感謝することはない、諸君、彼等は何時もちたつて落ちつかない。諸君、彼等は彼等の求めてゐるものを決して知らない、彼等は最上の御馳走を喰ふ、鹽無しの新バタを買ふ、モーカ珈琲でなければ承知せず、一番旨い部分以外の肉はすべて棄ててしまふ、それでゐて彼等はいつちも満足するといふことがない、とても手に負へない者どもである云々。一口に言へば、それは次のやうな古いお伽噺にある教訓通りだといふのであつた——

昔々一人のお婆さんがあつたと云。ところどころ何と云。

お婆さんちやとて喰はず飲まづにや生きられぬ、
お婆さんほ喰べた、お婆さんほ飲んだ、毎日ちや
それでもお婆さんは少しも足りたどひはなかつたとき。

恐らくコークタウンの労働者の場合と、グラッドグラインド家の子供達の場合との間には何か類似点があるのではないだらうか。慥かに今日は我等のうちで、常識もあり、數學の智識もある人々が、コークタウンの労働者の生活に最も必要な要素の一つが、この何十年來故意に度外視されて來たといふことを語られてもあゝ時機ではなからうか。彼等のもつ幾分かの空想が病的に癡變してもがいてゐる代りに、健全に發せられることを要求してゐると語られてもあゝ時機ではなからうか。丁度彼等が永い間、單調に働くのに比例して、何か肉體的慰安―彼等を上機嫌にし、元氣にして、彼等に思ふさま氣散じをさせるやうな何かの休息―若し彼等の心を躍らせるやうな、樂隊に調子を合せて踊るやうな立派なダンスが出来ないなら、何か公認された祭日―マックチョーカムチャイルドなぞちつとも關係のない何か輕るパイ（輕る面白い娛樂）の時々の御馳走―に對する渴望

―三九八―

が彼等の心の中に生長して來たといふこと、さういふ渴望は充されずには置かず、また充されるであらうが、若し充さないときはきつとそこに何か狂ひが出来て來て、やがては世界の萬物を支配する法則が廢止されるやうなことになるのだといふことが、語られてもあゝ時機ではなからうか。

「この人間はポッツ・エンドに住んでゐるんぢやが、わしはポッツ・エンドをはつきり知らん。」とグラッドグラインドがかゝふゐつた。「どちぢやらうね、バウンダアビー？」

バウンダアビーはそれが何處か下町の方だといふことは知つてゐた、だがそれ以上の詳しいことは知らなかつた。そこで兩人は一寸立ち止つてあたりを見廻した。

彼等がさうするかしないうちに、怯え切つたやうな顔をした少女が、その通りの曲角を全速力で曲つて來るのに出會つた、グラッドグラインドは直ぐにその少女の誰かといふことを認めた、「やあ―」と彼はゐつた。「これお待ち、何處へ行くんぢや？お待ち！」少女組の二十番はどぎまぎして立ち止つて、膝をかゞめて彼にお辭儀をした。

「何故お前はこんな無作法に往來を夢中に走り廻つてゐるんぢや。」とグラッドグラインドがひつた。

「わたしは―わたしは、あの追つかけられてゐたものですから。」と少女は喘いだ。「それであの、逃げようと思ひまして。」

「追つかけられた？」とグラッドグラインドは繰り返した。

「誰が追つかけようとするんぢやね、お前を？」

この質問は思ひがけなく突然に、彼女の代りに、あの色の白ちやけた少年のビツアによつて答へられた。少年は鋪石の上で立ち止まらされやうなどゝは少しも考へず、盲ら減法な速力で角を曲つて來たので、グラッドグラインドの胸衣にぱつたり突き當つて、往來の眞中に跳ねかへされた。

「こりやどうしたことぢや、これ。」とグラッドグラインドがひつた。「何をしてゐたんぢや？よくもお前はこんな風に―誰にも彼にも―突き當るんぢやね？」

ビツアはこの大衝突のために飛んだ帽子を拾ひ上げた。そして後に退つて、額に手を當てゝ敬禮しながら、それはほんの出會頭だつたと言ひ譯した。

「お前を追つかけたのはこの子か、ジューブ。」とグラッドグラインドが訊ねた。

「どうでございしました。」と、少女はおつおつ答へた。

「ゐゝえ、わたしではありませんでした！」とビツアが叫んだ。「あの人がわたしの處から逃げ出すまでは追つかけはしなかつたんです。だが曲馬師なんて口から出まかせをあつて平氣なんですから、あの人は皆それで有名なんです。」そしてシッシイに向つて、「曲馬師が口から出まかせを

—三九九—

いつて平氣だ位ゐのことはお前だつて知つてゐるだらう。」とひつた。「そんなことは町の誰だつて知つてゐるんです、曲馬師が『九々表』を知らないのと同じやうに慥かに・・・」

ビツアはかふいつてバウンダアビイに水を向けた。

「あの人はいろいろな恐い顔をして、わたしをひどく吃驚させました。」と少女はあつた。

「驚いた！」とビツアが叫んだ。「驚いた！お前もさすがに彼奴等の仲間なんだねえ！さすがに曲馬師だねえ！あの、わたしは決して、あの人に恐い顔をして見せはしなかつたのです。わたしはたゞあの人に、明日どうして馬の定義をいつたらひゝか知りたいかかつて訊ねたんです、それからあの人もう一度話してやらうと言つたんです、すると逃げ出したものですから、わたしはあの人が質問された時にどう答へたらひゝか、それを知らせてやらうと思つて追つかけたんです、おい、お前が曲馬師でゝもなかつたなら、そんな意地悪の嘘をゐはふなぞとは思ひつかなかつたらうよ！」

「この娘の職業は彼等の間ではかなりよく知れてゐるやうぢやね。」とバウンダアビイがひつた。「今一週間もたつたら、學校中の生徒が一列に並んで覗き見る所ぢやつた。」

「わしもさう思ふ。」と彼の友人が答へた。「ビツア、お前は廻れ右をして家へお歸り。ジュープ、お前は一寸待ちなさい。今後こんな風にお前が走つてゐることがわしの耳に入つたら、學校の先生にわしの考へを言つてやるぞ。わしのいふことは分るな。よし、お出で。」

少年はせはしく眼をしばたゝゐてゐたのをやめて、もう一度彼の額に手の甲をあてた、そしてちらつとシッシイの方を見て、廻れ右をして退却した。

「そこでジュープ、」とグラッドグラインドがひつた。「この方とわしとをお前のお父さんの家に案内しなさい。わし共はお父さんのところへ行く途中なんぢや。お前の持つてゐる轡には何が入つてゐるんぢやね。」

「チン酒ぢやらう。」とバウンダアビイがひつた。

「まあ、違ひます！九色油でございします。」

「何ぢやと？」バウンダアビイが叫んだ。

「九色油でございします。これでお父さんを擦るのでございします。」

するとバウンダアビイが大きな聲で短く笑つてあつた。

「一體何のためにお前は九色油でお父さんを擦るんぢや？」

「曲馬場で怪我をしますと曲馬の人達が皆使ひます。」と、彼女は自分の追蹟者が行つてしまつたことを確かめるために、肩越しに振り返つてみながら、かふ答へた。「曲馬の人達は時々随分ひどい怪我をすることがございますから。」

「怠惰者にはゝ罰ぢや。」とバウンダアビイがひつた。少

—四〇〇—

女は驚いたやうな、怖れたやうな表情を浮べて、ちらと彼の顔を見あげた。

「本當ぢや！」とバウンダアビイがひつた。「わしがお前より四つか五つ年下だつた頃には、九色どころか、十色油、二十色油、四十色油をもつて擦つても直すことの出来ないやうな怪我をしたことがある。その傷は輕業をやつたからぢやない、ひつぱたかれて出来たんぢやつた。わしは別に綱渡りなぞはしなかつたが、地面の上で踊つて、繩でなぐられたもんぢやからな。」

グラッドグラインドは随分苛酷な人ではあつたが、決してバウンダアビイのやうな粗野な人間ではなかつた。彼の性格はいろゑあるな點を考へ合せてみると、さう不深切ではなかつた。若し彼がづゝと以前に、その性格の中心をなしてゐる算術で、何か思ひ切つた間違ひをしさへしたなら、實際、彼の性格は大變深切なものとなつてゐたかも知れない。彼等が或る狭い通りを曲つた時に、安心させるつもりらしい口調で彼はかふるつた、「こゝがポツツ・エンドぢやね、ジュープ。」

「やうでございませう——あの、これがお父さんの家でございませう。」

明りのつく頃彼女は、店の内にはもう朧ろげな根の燈火のついてゐる下等な小さな居酒屋の入口に立ちどまつた。それはひどく荒れてみすばらしい家で、丁度、お客がないので、一人で自棄酒を始めた揚句、あらゆる呑んだくれの身のなり行きと同じ目に會つて、もう殆ど最後に近づいてゐるとでもいふやうな印象を興へた。

「お差支へございませんでしたら、帳場をお通りになつて二階にお上り下さい、蠟燭をもつて参りますから少々あすこでお待ち下さい。萬一犬の聲をお聞きになりましたら、メリレッグスで、たゞ吠えるばかりでございませうから。」

「メリレッグスに九色油か、えー」金屬的な笑聲をたて、最後に家に入りながら、バウンダアビイがひつた。「こりやなかなか結構ぢや。腕一本で仕上げた人間にとつちやなかなか結構ぢや！」

六、スリアリの曲馬哲學

その居酒屋の名前は『ピーガサスの腕』（ピーガサスは古代の名馬）とひつた。『ピーガサスの足』とひつた方がもつとふさはしひものであつたかも知れないが、看板に描かれた翼の生えた馬の下には、羅馬字で『ピーガサスの腕』と記してあり、更にこの屋號の下に、同じペンキ屋の筆になつた巻物を長々と繰り擴げた圖があつて、次の數行が認められてあつた。

よい麥芽はよい麥酒になる、

皆さんお入り、一杯あがれ、

—四〇—

良い葡萄酒は良いブランデーになる、

一度お寄りなされ、お手輕至極。

黒ずんだ小さな帳場の後の壁には、硝子をはめた枠の中に今一つのピーガサスが——芝居氣たつぷりのものであるが——あつて、翼には本物の紗がつけてあり、金色の星が體全體にはめこまれ、靈妙な馬具は絹の絹で造つてあつた。

看板を見るには、外部があまり暗くなつてゐたし、壁の繪を見るには、内が十分明るくなつてゐなかつたので、グラッドグラインドとバウンダアビイは、かふいふ空想的なもので氣を悪くさせられずにすんだ。彼等は誰の眼にもかゝらずに、少女の後から、片隅の嶮しむ梯子段を登つて行つて、彼女

が蠟燭を取りに行つた間暗黒の中に立つてゐた。彼等は今にもメリグスが吠え出すのを聞くであらうと思つたが、問もなく少女と蠟燭とが現はれたときにも、その立派に仕込まれた演藝犬は吠え出さなかつた。

「あの、お父さんは部屋に居りませんけれど」とひどく吃驚したやうな顔つきで彼女がひつた。「失禮ですが、お入りなすつてお待ち下さいますなら、すぐお父さんを見つけて参ります。」

彼等は内に入った。シッシイは彼等に二つの椅子を据ゑると、また早い軽み足どりで、走つて行つた。部屋は下等な、見すばらしい家具の備へつけられたもので、中に寝臺が置いてあつた。二本の孔雀の羽根と眞直に立つた豚の尻尾とで飾られた白い寝帽子が釘にかゝつてゐた、これはその日の午後、シニヤア・ジュープがシエクスピア流のお上品な氣のきいた諷刺や竹箆返しで、いろいろな藝管に景氣をつけた時に被つたものであつた、だがその他の彼の衣裳や、彼自身の、又は彼の職業を語るやうなものは何處にも一つも見當らなかつた。メリレッグスはどうかといふと、この立派に仕込まれた藝犬の尊敬すべき先祖は、太古ノアの方舟に乗り込んだ筈と思ふが、ひよつとしたら、方舟から閉め出しを喰はされてゐたものかも知れない。何故なら『ビーガサスの腕』には、眼に觸れたり耳にきこえたりする犬の證蹟は一つもなかつたから。

彼等は、上の部屋々々の戸が、シッシイが父をたづねて部屋から部屋に行くときに、開いたり閉つたりするのを聞いた。それから間もなく、驚いて叫んだらしい聲を聞いた。彼女は又も大急ぎで飛び降りて来て、傷だらけの汚い、古い交互布張りの鞆を開けてみたが、それが空であることが分ると、しつかり手を握り合せ、恐怖に満ちた顔をして、あたりを見廻した。

「お父さんは小舎の方に行つてゐるに違ひありません。何の用で彼處へ行きましたか、わたしには分りませんが、お父さんは彼處にゐるに相違ありません。ぢきに聯れて参り

一四〇二―

ますから！」彼女は帽子も被らずに直ぐに出て行つた、彼女の長い黒い黒い子供らしい髪が後ろになびいてゐた。

「どつといふつもりぢやらうかね？」とグラッドグラインドはいうた。「ぢきに歸つて来るとひつたが！小舎へは一哩以上もあるんぢや。」

バウンダアビーがそれに返辭をする間もなく、一人の若者が入口のところへ現はれた、そして「御免下さい、皆様！」と聲をかけて、両手をポケットに突つ込んだまゝ入つて来た。綺麗に剃られた、瘦せて黄ばんだ彼の顔は、刷毛で頭のまはりに撫でつけられ、眞中で分けられた澤山な黒い髪の毛で覆はれてゐた。彼の足はひどく違しかつたが、釣合ひのよい足といふには少し短かすぎた。彼の胸や背中、足が短か過ぎるのと同じ割合に少し廣すぎた。彼はニューマアケット型の上衣に、きつちりとしたズボンをはいて、頸には襟巻をしてゐた。洋燈の油や、麥稈や、蜜柑の皮や、馬の秣や、鋸屑やの臭ひをさせてゐて、まるで厩と演藝場とからでつち上げられた立派な一種のセントウア（神話に出る半人半馬の怪物）のやうに見えた。何處から何處までが獣なのかは、何人も精確には言ひ切ることが出来なかつたであらう。この紳士はこの日のビラにはイー・ダブリュー・ビー・チルダアズとして名前を掲げられて、北部亞米利加大草原の『蠻地の獵人』としての大膽な跳躍的な演技のために、あくまで正當な賞讃を博した由が廣告されてゐた。この人氣のある演技では、大人ぢみた顔をした背の低い少年が――今も彼の後にくつゝゐて来てゐるが――彼の幼い息子として助演した、片脚で逆様に彼の肩に背負はれたり、父親の掌に頭を擱ませたまゝ足を上に向けて運ばれたり、すべて蠻地の獵人達が彼等の幼兒をあやしてゐる時にはかふもあらうかと思はれる亂暴な父親らしい仕方にならつて、

様々な藝が演じられるのであつた。捲髪と花冠と翼と白粉と臍脂とでつくり上げられると、この頼もしひ少年は、ひどく可愛らしいキューピッドとなつて飛び出すので、見物の中の母親達の間では第一の人氣者になつてゐた。だが演藝に出ないで、年に増せたモーニングと恐ろしく無愛想な聲だけが彼の特色になつてゐるかふいふ場合には、彼はいかにも競馬師らしい競馬師になつた。

「御免下さい、皆様」とイー・ダブリュー・ビー・チルダアズが部屋を見廻しながらゐつた、「ジュープにお會ひになりたいといふのはあなた方でございましたか。」

「さうです。」とグラッドグラインドがひつた。「あの娘が父親を聯れて來るといつて出掛けて行きましたが、わしは待つては居られんです。ぢやから失禮ながら、君に、あの娘の父親への傳言を頼んで行きたいと思ふんぢやが。」

「ねえ君、」とバウンダアビーが口をいれた。「われはれは

一四〇三―

時間の價值を知つとる方の人間ぢやが、君方は時間の價值を知つとらん方の人間ぢやからね。」

「わたしは、またあなたがどういふ方だかよく存じませんが、」チルダアズは彼の頭の頂邊から足の先きまで見てゐつた、「しかし若しあなたが、わたしが自分の時間からお金を儲けるよりも、あなた方があなた方の時間からもつと澤山のお金を儲けるといふ意味で仰しやつたのなら、あなた方の御様子から判断して、あなたの仰しやつたことにまづ間違ひがないと申し上げて置きませう。」

「そして、いよいよ儲けたときには、それを蓄へることも大丈夫お出來になると思ひますね。」とキューピッドがひつた。

「おい、キッダアミンスター、口を出すのは止せ！」とチルダアズがひつた（キッダアミンスターといふのがこのキューピッドの下界に於ける名前であつた）。

「ぢや、あの人は何だつておれたちに生意氣をゐひに來たんだい？」とキッダアミンスターはひどく癩癩もちらしい氣性を見せて、かふ叫んだ。「若し、お前さんは、おれたちに生意氣がゐひたいんなら、入口で木戸錢を拂つてからたんといふがひゞぜ。」

「おい、キッダアミンスター、止せつたら！」とチルダアズが聲を高めてゐつた。それからグラッドグラインドに向つて、「わたしはあなたにお話がありましたんで、あなたは御存じかも知れませんが、また御存じないかも知れませんが（多分、あなたはさう度々見物にゐらつしやつたことはないやうですから）、この頃ジュープは度々纏頭をとり外し（失敗する）てゐたんでした。」

「とり外した―何をとり外したのです？」と、助勢を求めるやうに威勢のゐゝバウンダアビーの方をちらと見て、グラッドグラインドがかふ訊ねた。

「纏頭をとり外した、とひつたのです。」

「昨晚も繩飛びを四度びも注文されて、一度もやれなかつたんです、」とキッダアミンスターがひつた。「旗流しを注文された時もやりそくなつたし、そして即席臺詞だつて間の抜けたものだったんです。」

「あの人の持役になつてゐたことが一つも出來なかつたんです。飛び方は足らんし、轉がりかたはまづかつたといふ譯でした。」とチルダアズが説明した。

「あゝ！」とグラッドグラインドがひつた。「それがその纏頭とかいふものなんぢやね？」

「まあ大抵こんなことが、纏頭をとり外すつてことなんです。」とイー・ダブリュー・ビー・チルダアズがかふ答へた。

「九色油、メリレグス、纏頭のとり外し、繩飛び、旗流し、即席臺詞か、えゝ！」とバウンダア

ビイは叫んで金物のやうな笑ひ聲を腹から出した。「腕一本で立身した人間にと

一四〇四

つては、成程不思議な聯中ぢや。」

「では立身しなけりやアゝでせう、」とキユーピッドがやり返した。「若し、あなたがそれほど高いところまで立身したんなら、一寸ばかり下つたらいいでせう。」

「どうもぶしつけな若者ぢやね！」と彼の方に向いて、顔を顰めながら、グラッドグラインドがひつた。

「若し、わたしどもが、あんた方のおいでになるつてのを知つてゐたら、若紳士振りをお目にかけて上げたんですがね。」とキッダアミンスタアは、少しも臆せずやり返した。「あんたがそんなやかまし屋で、慈善興行の約束もして下さらないのは残念です。あんたはタイト・ジェッフに乗れますか。」

「この無作法な少年のいふのは何です。タイト・ジェッフといふのは何です？」こいつは弱つたとひつた風で少年をみつめながらグラッドグラインドが訊ねた。

「おい！出て行け、出て行け！」と、大草原風なやり方で、彼の相棒を部屋から突き出しながらチルダアズはゐつた。「タイト・ジェッフだつてスラック・ジェッフだつて大した意味はありません。たゞかたく張つた綱とか弛く張つた綱とかいふ意味だけなんです。ところで、あなたはわたしにジュープへの言傳をといふお話しでしたが？」

「さう、さう、さうぢやつた。」

「それで、」とチルダアズは急いで言葉を續けた。「わたしの考へではその言傳があの人には入るまいといふことです。あなたはあの人をよく御存じですか？」

「まだ會つたこともないですぢや。」

「今のところ、あなたがあの人に會へるかどうか疑問だと思ひますな。あの人か逃げたんだつてことは、わたしには可なりはつきり分つてゐるんですから。」

「娘を棄てゝ行つたんぢやと言はれるのぢやね？」

「さうです！さう申すのです。」チルダアズはうなづきながらゐつた。「とにがく逃げてしまつたのです。あの方は昨晩も見物から、叱つ叱つとやつゝけられましたし、一昨晩も、今日も大變な叱つ叱つなんです。どうしたものかあの方は近頃いつも叱つ叱つでやつゝけられるやうになりました。あの人にはそれが耐へられないのです。」

「なぜ又あの男はそんなにひどく、その叱つ叱つとかでやつゝけられるんぢやね？」とグラッドグラインドは訊ねたが、彼はこの叱つ叱つといふ言葉を、ひどく鹿爪らしくまた澁々らしく、無理に咽喉から押し出したやうであつた。

「あの人の骨節がだんだん硬くなつて來たのですな。それであの方はだんだん役に立たなくなつたのです。」とチルダアズがひつた。「あの人はまだ輕口二輪加としてなら種々の取柄をもつてゐるんですが、まさかそれで喰つて行くことが出來ないのです。」

一四〇五

「輕口二輪加ぢやと！」バウンダアビイがチルダアズの言葉をくりかへした。「また出て來たぞ！」

「輕口でお氣に召さないなら、辯師ではいかゞです。」とイー・ダブリュー・ビイ・チルダアズはいやにとり澄まして肩越しに振り向いてかゝ説明した、それと同時に彼の長い髪を一搖り揺つた――髪

はみな一度にゆらゆらと揺れた。「さて、こゝに肝心な事實はしつしつでやつゝけられるのを我慢して行くことよりも、娘にこのしつしつが知れたといふところに氣がついたことの方が、あの男には餘計につらかつたといふ點なのです。」

「面白い！」とバウンダアビーが口を入れた。「これは面白い、グラッドグラインド！娘をそんなに可愛がつてゐる人間が、娘を棄てゝ夜逃げをするんぢやー！こりや馬鹿に面白い！はつは！はつは！で、ゐゝことを教へて上げよう、お若いの、わしぢやとて何時も現在の地位を占めてゐたわけではなかつたんぢや、かふいふ出来ごとの味はよく知つとるんぢや。君が聞いたら驚くかも知れんが、實はわしの母親がわしを棄てゝ逃げたんぢや。」

イー・ダブリュー・ビー・チルダアズは、それを聞いても少しも驚かないといふことに力を入れて答へた。

「成る程」とバウンダアビーがひつた。「わしは溝の中で生れたんぢや、わしの母親はわしを捨てゝゐなくなつたんぢやね。わしは母親がそんな眞似をしたのを許してゐるぢやらうか？あゝや許さん。母親がそんな眞似をしたことを一度たりとも許したことがあるぢやらうか？あゝやない。そんなことをした母親をわしは何と呼ぶぢやらうか？わしは多分あの女を、わしの飲んだくれの祖母を除くと、世界中で一番惡い女だといふんぢや。わしは家族の誇りといふものを持ち合はさん。わしの體には想像上、感情上のいかさま物がついては居らんぢや。わしは鋤を鋤ぢやといふ。わしはコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビーの母親を、たとへあの女がウオピングのディック・ジョーンズの母親ぢやつたにしても、何の怖れることも、何の鼻負もなく、あの女を呼ぶべきやうに呼ぶのぢや。この男の場合だつてさうぢや。この男は逃亡した惡黨で、浮浪漢なんぢや。ゐゝか、身性正しい我々は、彼のやうな人間をさう呼ぶんぢや。」

「あの人がさうであらうとなからうと、またあなた方かどう呼ばうとわたしにとつては同じことなんです、」とイー・ダブリュー・ビー・チルダアズは、彼の方に向き直つてかゝ言ひ返した。「わたしはあなたのお友達に事實を話してゐるんです。若し、あなたがそれをお聞きになるのがお厭でしたら、御隨意に戸外にお出でになつてようございますよ。あなたはもう存分お喋りをなすつたんですね、さうでせう。」

—四〇六一—

だがせめて、お喋りだけは、御自分の家でなすつて下さい。」とイー・ダブリュー・ビー・チルダアズが手厳しめ嘲弄でたしなめた。「あなたに何かあつてくれと頼むまでは、この建物のうちで、お喋りはして貰ひたくありません。今ぢや、あなたも、何か御自分の建物ぐらゐ持つておいでせうからね。」

「いや、さうかも知れん。」とバウンダアビーは答へた。そして錢をがちやがちやと鳴らしながらはつはと笑つた。

「それぢや一つあなたのお家でしやべつて下さい。お頼みます。」とチルダアズはあつた。「この建物はさう強くないんです。あまり大きな聲に當てられたら、崩れるかも知れませんか。」

又もバウンダアビーの頭から爪先まで見た後で、彼は、まをすつぱり片付けた人間からでも顔をそむけるやうにバウンダアビーからグラッドグラインドの方に向いた。

「ジュープは、まだ一時間にもなりません、あの娘を使ひに出してから、自分自身が帽子を目標に、手巾でしばつた包を小脇にかゝへてこつそり出て行くところを見たものがあるのです。娘はあの人がそんなことをしたなんて決して信じますまい。ですがあの人が娘を置いて逃げたことは事實なのです。」

「一寸お聞きするが、」とグラッドグラインドはゐつた。「娘は、父親がそんなことをしたのをどうして信じないぢやらうかね。」

「あの父娘は一つだつたからです。二人は決して離れたことがなかつたからです。今日といふ今日になるまで、あの人は、娘が可愛くてならないやうに見えたからです。」とチルダアズは一足二足歩いて、空になつた鞆をのぞきこんでかふゐつた。チルダアズもキッダアミンスターアも妙な歩き方をして歩いた。竝の人間よりもずつと足を擴げて歩いたばかりか、膝の關節のところはどうしても硬張つてゐるにちがひないやうに見えた。この歩き方は、スリアリ一團の男達全部に共通なもので、彼等が何時も馬に乗つてゐるといふことを示してゐた。

「可哀想なのはシッシイだ！親方の弟子に出されでもした方がよかつたんです。」と空つぽの鞆を覗きこんでゐた顔をあげ、髪をもう噂一度ゆすつて、チルダアズはゐつた。「かふなると残つた娘は頼みになるものが何もないのです。」

「二度も弟子奉公にやられたことのない君が、さういふ意見を述べるのは殊勝なことぢや。」とグラッドグラインドは感心したやうにゐつた。

「わたしが弟子に出されたことがないんですつて？わたしはたつた七つでもう弟子に出されたんです。」

「ほう、さうかな！」とグラッドグラインドは、うっかり欺

—四〇七—

されて自分の好意ある意見を捲き上げられでもしたやうにみさゝか無念らしくゐつた。「いやわしは氣がつかなかつたです。子供達をその、弟子奉公に出すのが習慣ぢやつたとは……その何に……」

「うむ、怠惰にぢや、」とバウンダアビイが引きとつて大きな聲で笑ひながらいつた。「さうぢやとも。わしだつて氣がつかなかつた。」

「父親は、あの娘に十から十まで教育を受けさせたいと、いつも考へてゐたんです。」バウンダアビイの存在などにはちつとも氣がつかないといつたやうな風をして、チルダアズは言葉を續けた。「どうしてそんなことを考へたのか、わたしには分りません、たゞその考へがどうしても脱けなかつたことだけはお話が出来ます。あの人はこの七年ばかりの間に、こゝでは讀方を一寸ばかり娘に習はせる、あすこではまた書方を一寸ばかり習はせる、また別の何處かでは、算術を一寸ばかり習はせる、といふやうにして來たんです——」

イー・ダブリュー・ビー・チルダアズは、片方の手をポケットから出して、顔から顔を撫で、それから、可なりの疑惑と少しばかりの希望を浮べながら、グラッドグラインドの顔を見た。最初から彼は棄てゝ行かれた娘のために、この紳士と和解しようとして求めてゐたのであつた。

「シッシイがこゝで學校に入つたときには、」と、彼は言葉をつゞけた。「あの人はとても大喜びに喜んだものでした。尤もわたしなどにはどういふわけだか、さつぱり分りませんでした。わたし共はいつもこゝに住つてゐる人間ぢやなくつて、方々渡り歩く人間ですからね、けれどももうその時から、今度の仕事のことにはちやんと頭にあつたらしく——あの人はいつも半分氣違ひぢみてゐましたから——これで娘の始末はついたのだと考へてゐたものと思ひます。若し、あなたが今晚、何かあの娘の力になつてやるといふことを、あの人にお話し下さる思召しで、お立ち寄りでしたら、」と、チルダアズは又もその顔をなで、以前の顔つきを繰り返しながらゐつた、「大へん仕合せなことでもあり、また、都合のよいことでもあるわけぢやございません。實際、仕合せなことでもあり、都合のよいわけでもあるのでしつ。」

「いや、その反対ぢや、」とグラッドグラインドが答へた。「わしはあの娘の縁者関係のためあの娘を學校に置いては悪むといふことゝ、あの娘はもう學校へ来てはいけないといふことをお傳へしに來たわけなんぢや。それにしても、若し本當に父親が娘を棄てゝ行つたので、娘がそれをちつとも知つてゐたんでないと思へばぢや——いや、バウンダアビー、君に一寸話したいことがあるんぢやが。」

—四〇八—

それを聞いてチルダアズは愛想よく例の馬乗り風の歩き方で、入口の外側になつてゐる上り口のところまで退却して、そこで顔を撫でまはしたり、低く口笛を吹いたりして立つてゐた、彼はこんなことをしてゐる間に、バウンダアビーの聲でかふいふのを洩れ聞いた。「駄目ぢや、わしは駄目ぢやと思ふよ。まづ止したまへ、どうしてもいくわんと思ふがね。」一方、またグラッドグラインドが例のづゝと低い調子でかふいふのを聞いた。

「ぢやが」下等な興味の對象になつたかふいふ職業の終りがどんなことになるかを、ルイザに示す實例としてならどうぢや。バウンダアビー、一つそんな見地から考へ直してみたまへ。」

さうかうするうちに、スリアリ一團のいろいろな人間が、その本陣にしてゐる上の方の部屋から追々集つて來た。そして初めはそこゝに立つて、低い聲でお互ひ同志や、チルダアズに話しかけたりしてゐたが、だんだんとうまくチルダアズをも自分達をも部屋の中に入りこませた。その中には、二三の若い綺麗な女が居り、それ伴つて彼女達の夫が二三人居り、彼女達の母親が二三人居り、更に彼女達の小さな子供が八九人ゐた、子供達は必要な場合には可愛らしい小妖精の役をつとめたのだつた。これらの家族の一つの父親は、他の一つの家族の父親を、大きな棒の頂きに差し上げるのが役目であつた、第三の家族の父親は度々自分が土臺になり、キツダアミンスターを頂點にして、他の二人の父親達でピラミッドを造つてみせた。これらの父親達は皆、轉がる樽の上で踊ることが出來、徳利の上立つことが出來、小刃や毬を受けることが出來、小鉢をぐるぐる廻すことが出來、どんなものにも乗ることが出來、あらゆるものを飛び越えることが出來、またどんなことでも躊躇なくやることが出來た。母親達はまた弛く張つた線の上でも、強く張つた繩の上でも、踊ることが出來、裸馬の背で、いろいろなすばやい藝を演ずることが出來た。彼女達のうちには、誰もその脚を見せるのを少しも苦にするものはなかつた。彼女達のうちの或る女はたつた一人希臘風の花馬車に乗り、六つの手綱を掻い繰つて、彼女達の行く何處の町へでも駛つて行つた。彼等はいかにも道樂者らしいきゑた風な様子をしてゐたが、彼等の旅宿にゐる時の服装はあんまり綺麗なものではなかつたし、彼等の家内の整頓には少しも秩序といふものがなかつた。そして團體全部の學問を合しても、何かの用事でまづい手紙一通書けるぐらゐが關の山であつた。それでもかふいふ人々には、何處かに殊に目立つ優しさと子供らしさがあり、何か過酷な種類のことを特になし得ないところがあり、また、いつでもお互に助け合ひ憐み合ふとゐつたところがあつたが、それ

—四〇九—

はしばしば世界のあらゆる階級の人々の日常の美德と同様に尊敬に價するものであり、またいつもこれと同様な寛大な根柢をもつてゐるものであつた。

最後にスリアリが現はれた。前にも述べたやうに肥つた男で、一方の眼は何時でも見据ゑ、一方の眼は絶えず動かしてゐる。聲といへば(若しそれが聲だとゐひ得るなら)、壞れた古い轡からやつと出るやうな聲であつた。體の皮膚はたるんだぶだぶして居り、素面でもなければ泥酔してゐるといふ

のでもない、ぼんやりした頭の持主であつた。

「旦那！」とスリアリはゐつた。彼は喘息に悩んでゐたので、息があまり厚く重く出て来て、發音は明瞭でなかつた。

「これはようこそ！どうも困つたことになりました。わしの處の道化役者と藝犬が逐電したらしいといふことをお聞きになつたでございませうね。」

彼はかふグラッドグラインドに話しかけると、「さうだ。」と答へた。

「それで旦那、」帽子を脱いで、手巾で裡を撫でながら（これはそれに使ふために帽子の中に入れてゐるものであつた）、かふゐつた、「あの氣の毒な娘に何か力になつて下さらうといふお積りでせうか、旦那。」

「娘が歸つて來たら相談してみたいことがあるのぢやが。」とグラッドグラインドがひつた。

「それを伺ふと安心でございませうよ、旦那。わしとしてはちつともあの娘を、厄介拂ひしたいと思つてはゐませんし、ましてあの娘の出世の邪魔をしやうなどは夢にも思つてゐません。あの年頃ではちと遅すぎはしませうがね、わしはあの娘にその氣があれば、喜んであの娘と年期契約をしてお目にかけます。わしの聲は少し喋れてゐますから、わしを知らないお方たちには、なかなか聞きとりにくいのでございますよ。ですが旦那だつて、わしみたいに子供のとき曲馬場で冷たかつたり熱かつたり、熱かつたり冷たかつたり、冷たかつたり熱かつたりするやうな目に會はされて御覽なさい、旦那の聲も大抵わしと同じやうに、長續きはしなかつたでございませう。」

「そりや多分續かなかつたぢやらう。」とグラッドグラインドがひつた。

「お待ちになつてゐる間に、旦那、何か差上げませうかね。シエリイがよござんせうか？お好みを仰しやつて下さい、旦那。」とスリアリが打ちつけた歡待ぶりでゐつた。

「有難いが、わしのためなら何もいらんです。」とグラッドグラインドがひつた。

「何もあらんなど、仰しやつてはいけません、旦那。お友達の方は何がお宜しいでせうか。まだ御飯前でゐらつしやつたら、苦麥酒を一杯いかゞですな。」

—四一〇—

その時、彼の娘のジョセフィンが——彼女は綺麗な金色の髪をした十八歳の娘で、二歳のときから馬の背中に縛りつけられ、十二歳の時から遺言状をつくつて身につけてゐたといふが、その遺言状には、自分が死んだら黑白斑の仔馬二頭によつて墓場に運ばれたいといふ切なる願ひが書いてあつた——かふ叫んだ。「しつ！シッシイが歸つて來ましたよ！」やがてシッシイ・ジュープは出て行つたときと同じやうに、大急ぎで走つて來た。そして、彼女は曲馬團の人達が皆集つてゐるのを見て、そこに父がゐないのを見ると、急に見る眼も痛ましくわつと泣き出して、中でも張り綱を渡るのが一番上手な女（彼女自らも身重であつた）の胸に身を寄せた、女は牀の上に膝をついて、彼女をなだめながら、自分でも彼女の上にごらんて泣いた。

「全く口ではゐへない恥知らずなことだぞ。」とスリアリがひつた。

「お、お父さん、やさしい深切なお父さん。何處へあなたはいらしたのです？きつと何かわたしの爲めになるやうにする積りで行つておしまひになつたでせう。わたしは分つてゐます。あなたはきつと、わたしの爲めに行つておしまひになつたのです。わたしが居なくてあなたはまあ、どんなに不仕合せで頼りなくおなりでせう。歸つてゐらつしやるまでは、本當にお察シッシイますわ。可哀想な可哀想なお父さん！」彼女が顔を空の方に向け、父親の去り行く影をとめてそれを抱擁しようとするかのやうに、自分の腕を差し伸べてかふいふ言葉を幾度もいふのを聞くことは、實際に悲しい

ものであつたので、誰も言葉一つ出すものがなかつた。やがてこの場の始末を引き受けたのはバウンダアビーであつた（我慢がしきれなくなつたので）

「ところで諸君」と彼はゐつた。「これはひどい時間の濫費ぢや。娘に事實を知らせるがひです。なんならわしが話してもよい。わし自身も乗てゝ行かれたことがあるんぢやから。なあこら、何とかいふ娘！お前の父親は逐電したんぢや——お前を乗てゝ行つてしまつたんぢや——ぢやからお前は、生きてゐる間に再び父親の顔が見られるなどと思つてはならんぢや。」

曲馬團の人達は飾りのない事實などいふものを餘り重んじて居らぬばかりか、またこの點では可なりひどい退歩の情態にゐたので、バウンダアビーの言葉の露骨な常識によつて感動するどころか、それを聞くとひどく機嫌を悪くした。男達は『恥知らずめ！』とつぶやく、女達は『畜生』とつぶやく、スリアリは少しあわてゝバウンダアビーの傍へ行つて、こんな謎のやうな暗示を傳へた。

「一寸教へてあげませう、旦那。あけすけに申し上げると、あなたは手短かに打ちきつて、何ら仰しやらん方がよろし

—四二—

いやうに思ひますよ。皆大へん皆大へん人のゐゝ聯中です、わしの處の聯中は。ですが、手出しが早いのが傷でしてね。ですから、若しあなたがわしの申し上げたやうになさらないなら、あの聯中はきつとあなた方を窓から突き出してしまひませう。」

バウンダアビーは、この眞綿で首の暗示でつゝかり牽制されたので、グラッドグラインドはこの問題についての自分のすぐれて實際的な見解をのべる機會を見つけた。

「この人間がいつか歸る見込みがあるかどうか、またはその反対であるかどうか、といふことは肝心なことではない。この男は行つてしまつたんぢやから、現在のところ彼が歸るものとは期待されん。この黙だけは皆さんの團致してゐるところぢやらうと思ふが。」

「そりや、皆さう思つて居りますよ、旦那。それを間違はないやうに願ひ申します！」とスリアリが述べた。

「そこでぢや、わしはこの哀れな娘ジュープの父親に、彼のやうな職業についてゐる人々の子弟をわしの學校に入れて置くといふことにはいろいろ實際的の故障があるんで——わしはそれを精しく述べる必要を認めんが——最早やこの娘を學校に置くことは出来んといふことを傳へるためにこゝに来たものです。ぢやが、かふ事情も一變したことぢやから、一つ御相談をしたいと思ふ。ジュープ、わしは喜んでお前をあづからう、お前を教育もし、養育もしてやることにしよう、わしが定める唯一の條件は（お前が行儀よくするといふことの外にぢや）、お前はわしと一緒に行くか又はこゝに留まるかといふことを今すぐに定めなければならんといふことぢや。それから、若しお前が今わしと一緒に行くなら、只今こゝにゐられるお前のお友達のだなたとも、最早や往來しないといふことを承知して貰はなければならんといふことぢや。この條件は問題の全部を包括してゐるんぢや。」

「同時に、」とスリアリがひつた、「旦那、旗の兩側が等分に見えるやうにするには、」わしも一言申さなくちやなりません。セイスイリヤ（シッシイ）、若しお前がわしと年期契約がしたいと思ふなら、お前は仕事の性質を知つて居り、お前の仲間も知つて居るわけだ。今お前を膝にのつけてゐるエンマ・ゴードンをお前のお母さんにして、ジョセフィンをお前の姉妹にしてあげるよ。わしは自分が天使のやうな人間だといふふりはしない。だからお前がやり損つたときには、わしが憤つたり、荒い言葉の二つ三つお前に浴せたりするのを見せも聞かせもしなひなぞとはひはんよ。しかし、わしの申すのは旦那、わしは機嫌のゐゝときにも、惡ゝときにも、馬を虐めたこととはまだなく、一寸叱るべらゐるが精々

だといふこと。だからこの年齢になつて今までの仕来りをすつか

―四二一―

り變へて曲馬師につらくあたるやうな癖を始めようとは思はれないといふことです。いやわしはこんなにお喋りをしたことはありませんでした。旦那、これでわしの言ひただけは言ひましたから。」

この言葉の最後の部分はグラッドグラインドに對していはれたので、彼は重々しく頭を傾げて聞いてゐたが、やがて口を開いた――

「ジュープ、お前の決心を早めさせるやうに、わしが只一つ注意したい點は、健全な實際的教育を受けるといふことは大きに望ましいことでもあるし、お前のお父さんさへも（わしが聞いたところから察すると）、お前のためにそれだけの必要なことを知つてゐたらしく、それが必要なことをひどく感じてゐたらしいといふことぢや。」

この最後の言葉は、明らかに彼女に大きな影響を與へた。彼女は泣き叫ぶのをやめて、エムマ・ゴードンから少し體を離れた、そして彼女の顔をこの新しい保護者の方へ眞直ぐに向けた。居合せた人達はこの變化の力を見てとつて、一緒に吐息をついたが、それは明らかに『彼女は行くだらう！』といふ意味であつた。

「自分の心をよく確かめてみなくてはいかんよ、ジュープ。」とグラッドグラインドが彼女に注意した。「わしはこれ以上はゐはん、ゐゝか、自分の心をよく確かめるんぢや！」

「お父さんが歸つて來たとき、」暫く黙つてゐた後でまたもわつと泣き出して、少女はかゝつた。「若しわたしが行つてしまつたら、お父さんはどうしてわたしを見付けるでせう！」

「それは心配せんでゐゝ、」とグラッドグラインドが落ちついてゐた――彼はこの事件の全體をまるで算術の問題かなんぞのやうに、解いた――「その點はちつとも心配せんでもゝんぢや、ジュープ。そんな場合にはお前のお父さんは、きつとこゝにお出での何さんをたづね出すに違ひない、えゝと――」

「スリアリで。それがわしの名前でございますよ、旦那。御心配には及びません。英國中に知られてゐる名前で、それにいつも拂ふべきものはちやんと拂つて世渡りしてゐる人間でございますから。」

「うむ、スリアリさんを訊ね出すに違ひない。すればスリアリさんが、お前が何處へ行つたかお父さんにお知らせなさるぢやらう。お父さんの意見に反對してまで、お前を家に止めて置く權利はわたしにはない。それにお父さんは、何時でもヨークタウンのトマス・グラッドグラインドを訊ね出すのに、さう困難はしないぢやらう。わしは可なりよく知られてゐるんぢやから。」

「全くよく知られてゐらつしやる。」とスリアリがその動く

―四二二―

方の眼をきよろきよろさせながら、うなづいた。「あなたはたしか、わしの小舎に金をごんどん落させまいとする方のお一人ですね。だがそれは、今はどうでもゝことでございますよ。」

いま一度沈黙がつゞゐた。それから彼女は手を顔にあてゝ、すゞり泣きながら叫んだ。「おゝわたしの衣服をとつて下さい。わたしの衣服をとつて下さい。そして胸がはり裂けないうちに早くわたしを行かせて下さい！」

女達は悲しいながらも手早く立ち働いた、彼女の衣服をまとめて、――それは間もなくまとめられた、彼女の衣服はさう澤山ではなかつたから――彼女達と一緒に度々旅をして來た馴染のバスケット

にそれを荷造りしてくれた。シッシイはその間中、やつぱり眼に手をあて、すゝり泣きながら牀の上に坐つてゐた。グラドグラインドと彼の友人のバウンダアビイは、戸口に近いところに立つて何時でも彼女達を聯れて行かうと待ち構へてゐた。スリアリは丁度娘のジョセフィンの演技の間、曲馬場の眞ん中に立つてゐる時と時じやうな態度で、一座の男達を身のまはりにつれて、この部屋の眞ん中に立つてゐた。たゞ足りないものは一本の鞭だけであつた。

バスケットは沈黙の中に荷造りされた。彼女はシッシイの帽子をもつて来て、彼女の亂れた髪を撫でつけ、それを被せてくれた。また彼女達は、シッシイの周りにくつゝやうに集つて、極く自然な態度で彼女にこゝみかゝつて接吻したり、抱擁したりした。それから彼女とのお別れをさせるために、子供達を聯れて来た。彼女達は全く優しい心をもつた單純な愚直な女達であつた。

「ではジュープ」とグラッドグラインドがひつた。「十分、決心がついたならおいで！」

だが彼女はまた一座の男聯中とお別れをしなければならなかつた。男達は皆大手を擴げて（といふのは彼等は皆、スリアリの近くにゐるときにはいかにもお商賣の芝居ぢみた態度をしたから）、彼女に別れの接吻をしなければならなかつた。——たゞ一人キツダアミンスタアだけは、例外となつた。彼の若い性質の中には、持つて生れた一種の人間嫌ひなところがあるとか、なかに結婚しようといふ心意があるんだとかひはれてゐたが、彼だけはむつゝりして身を退けた。スリアリは最後まで待たされた。彼は腕を大きく擴げて彼女の両手をとつて、素早い冒険演技をすませて馬から降りた時の、若い娘達を祝する乗馬師らしい態度で、彼女を跳びあがらせた降り降したりしたかつたのであつたが、然シッシイにはもうそんな飛んだり跳ねたりが出来なかつた。たゞ彼の前に立つて泣くだけであつた。

「左様なら、ゐゝ子！」とスリアリがひつた。「お前はきつ

—四一四—

と運が開けて行くだらうよ。わしの可哀想な仲間の誰にも、決してお前の邪魔はさせない、それはわしが引受ける。わしはお前のお父さんが犬を聯れて行つてくれなきやよかつたと思ふけれどね、あの犬の名前をビラから除けるのは都合の悪くことだからな。だが思ひ返してみりや、犬だつて主人がゐなくては、藝も出来まひ、だからどつちからいつても同じことなだらう。」

さういつて、彼はその動かない方の眼で熱心に彼女を見守り、動く方の眼で一座を見渡して、彼女に接吻をし、頭を振つて、それから馬に乗せるときのやうに彼女をグラッドグラインドに手渡した。

「さあ、お渡シッシイますよ、旦那。」と彼女がうまくその鞍に落ちつきでもしたかのやうにいかにも職業的な一瞥で彼女を見渡して、「この娘はきつとお世話のなかり甲斐があるやうになります。左様なら、セイスイリヤ！」

「左様なら、セシリヤ！」「左様ならシッシイ！」「神様のお恵みがありますやうに！」部屋の中のすべての人々からかふいふいろいろな聲が出た。

だがこの曲馬師の眼は、彼女の懷ろに九色油の蠟が入つてゐるのを見つけて、かふいつて口を入れてた。「その蠟は置いて行つたがゐゝよ、持ち歩くには大きすぎるから、もうお前には用のないものだ、わしにおくれ！」

「いけませんわ、いけませんわ！」と彼女は又も泣き出した。「いけませんわ、いけませんわ、お父さんが歸るまで、お父さんのためにこれをとつて置かせて下さい。歸つて来たらお父さんはきつとこれが必要でせう。お父さんはわたしにこれを買はせにやつたときには、行つてしまふなんてきつと思つてゐなかつたんです。濟みませんけれど、わたしはお父さんの爲めにこれを取つて置かなければな

りません！」

「では、さうしたがひ、どうです、一寸御覽なさい、旦那。左様なら、セイスイリヤ！最後にもう一度いふが、お前の契約の条件をよく守るやうにするんだよ。旦那のいはれることをよく聞いて、わし等のことは忘れるんだ。だが、若しお前が大きくなつて、立派な暮らしをするやうになつて、何處かで曲馬團に巡り合ふやうなことがあつたら、それを悪くいはず、氣を悪くせずに、出来ることなら、そして功德になると思つたなら、慈善興行の一度もさせてやつておくれ。人間といふものはどうにかして娛樂を求めずには居られませんからねえ、旦那。」と、随分長く話をしたので、餘計に息を切らして、スリアリがかぶ續けた。「人間は不斷に働いてゐることも出来ず、また不斷に勉強してゐることも出来ません。ですからわしどもをさう輕蔑してひどい目に會はせて下さらずに、少しはゐゝ目も見せて下

一四二五

さい。勿論わしはこれまでづゝと曲馬で飯を喰つて参りました。ですが旦那、わしがあなたに向つて、わしどもをひどい目にばかり會はせずにはゐゝ目も見せて下さいと申し上げるのは、この商賣の哲學とやらを説明して上げてゐる譯なんですよ。」

スリアリの哲學が説き出されたときには彼等はもう階下に降りて行くところであつた、そしてこの哲學者の動かない方の眼は——勿論その動いてゐる方の眼も——間もなく、三人の姿を往來の暗闇の中に見失つてしまつた。

七、スパージット夫人

バウンダアビイは獨身なので、一人の初老の婦人が、いくらかの年給で家事の世話をしてゐた。スパージット夫人といふのがその名であつた、彼女はこの卑下することの自慢な人物を乗せて揚々と走つて行くバウンダアビイ家といふ馬車に付き添ふ男女の間では、拔群な位置を占めてゐた。

何故なら、スパージット夫人は様々な境遇を経て來てゐるばかりでなく、また身分の高い親類をもつてゐたからであつた。レデイ・スカッチャアズと呼ばれる彼女の大叔母はこのころまだ生きてゐた。夫のスパージットは早く亡くなつて彼女は寡婦の身なのだが、このスパージットの母方の系統はスパージット夫人が今でも威張つて話すやうに、『バウラア家』の出であつた。見聞が狭くて理解の鈍い人達の中には、バウラアとは一向何だか知らないのがある、それは何か商賣のことか、政黨のことか、或る宗教の名なのかよく分らないやうに見えることがあつた。だがもつと高尚な有識階級の人達なら、バウラア家の古い家柄であること位はわざわざ教へる必要はなかつた。この家族はづゝと大昔までさかのぼつて行くことが出来るので、時々、何が何だか途中で家系が見失はれるやうなことがあつても、さして驚くには足らなかつた——そしてこの家系が見失はれるといふ結果は、立派な競馬馬や、ブラインド・フリーキイ（一種の骨牌遊び）や、ユダヤ人の高利貸や、破産法廷などのお蔭でも度々出來たのである。

母方がバウラア家出の故スパージットは、父方がスカッチャアズ家出であるこの婦人と結婚した。結婚をまとめたのは、レデイ・スカッチャアズで（恐ろしく肥つた老夫人で、獸肉に對する法外な食欲と、十四年來どうしても寢臺から下りることを承知しない不思議な脚とを持つてゐた）、丁度、スパージットが丁年に達したばかりの時で、その頃のスパージットは、長い細そりした二本の足で弱々しく支へられ、名ばかりの頭を戴いてゐるすらりとした體のために主として人目を惹いてゐたものであ

つた。彼は叔父からかなりの財産

―四二五―

を譲られたが、まだそれを相續しないうちに、それだけ全部を借用してゐた。そして間もなくその二倍分を綺麗に使つてしまつた。かふして、二十四歳で彼が死んだときには病んだ場所はカレエで、病氣の原因はブランデイであつた。彼はその寡婦を――彼は彼女とは蜜月旅行の後間もなくから別居してゐたのであつたが、――あまり豊かな境遇に残しては行かなかつた。彼より十五も年上で、後に残されたこの婦人は、間もなく唯一の縁者であるレデイ・スカッチャアズと恐ろしく仲違ひをしたので、半ばこの婦人に對して意地を張るため、半ば喰つて行かなければならぬために、外に出て給料を取つた。さうして、めぐりめぐつて、今の初老に入つた彼女は、昔スパージットを虜にしたコリオレーナス型の鼻と、濃く黒い眉をそのままに、こゝで朝食をとつてゐるバウンダアビイのお茶をこさへてゐるのであつた。

若しバウンダアビイが昔の凱旋將軍であり、スパージット夫人が凱旋行列の華として引き廻される捕虜の王女であつたとしても、彼は自分がふだんやつてゐるよりも大袈裟に彼女を見せびらかすことが出来なかつたであらふ。自分の素姓を卑下することが、自慢の一つであると同様に、彼はスパージット夫人をもち上げることもまた、その一つとしてゐた。自分の少年時代にはたゞ一つの幸福な境遇も伴ふことを許さないが、それと反比例して、彼はスパージット夫人の若い時代をありとあらゆる幸福で、華かなものにし、夫人が經て來た前半生の遂に、幾車といふ程の薔薇をふりまいてみせた。「それだのに君、」と彼は口癖のやうに言つた、「どうして結局はかふなるんぢやらう？なにしろ、今あれは年百ポンドの金で（わしはあれに百ポンド出してゐるが、あれはそれで結構だと喜んでゐる）、コクタウンのジョサイヤ・バウンダアビイの家事の世話をしてゐるのぢやからね！」

そればかりでなく、彼はこの引立役を普く知れ渡るやうにしたので、關係の無い他人もこれがかつぎ上げて、或る場合などにはかなり巧みにそれを扱ひさへした。バウンダアビイの一番腹立たしい癖の一つは、自ら自身自身を讚美して歌ふばかりでなく、他人をも刺戟してそれを歌はせるといふことであつた。彼は喝采を得るために場當りをするといふ道徳的傳染病患者で、よくその病氣を傳染させた。他處ではひどく行儀のゝお客様方が、コクタウンに來て御馳走になると、その終りには皆總立ちになつて、全く口の籠を脱してバウンダアビイのことを自慢した。彼等はバウンダアビイこそ王家の紋章、英國の國旗、英國の大憲章、ジョン・ブル（代表的英國人）、ヘーピアス・コーパス（人身保護律）、民權布告令、『英國人の家は彼の城廓である』、教會と國家、英

―四二七―

國々歌、等々を打つて一丸としたものであるなど、吹き捲くつた。そしてその種の雄辯家が――

王公貴人は榮枯する日あらん、

げに彼等をつくるはたゞ吐く息一つにて足るなれば。

といふ詩句をその結論に引用することに（それは實際度々であるが）。はゝあ、この雄辯家もスパージット夫人のことを聞いてゐるなといふことが、慥かに、一座の人々の間には多少とも諒解されたのであつた。

「バウンダアビイさん」とスパージット夫人がひつた。「今朝はいつになく朝御飯が遅うございませぬ。」

「なあと夫人、」と彼が答へた。「わしはトム・グラッドグラインドの氣まぐれのことを考へてゐたところぢやつた。」

トム・グラッドグラインド、率直な大膽ないひ方がかふあつたが、それは丁度、誰かゞトマスといつて貰ひたいので彼に巨額の金を贈賄しようとしてゐるが、彼がどうしても承知しないのだとでもいふ風に見えた。「いや、あの輕業師の娘を養育しようといふトム・グラッドグラインドの氣まぐれのことぢやがね、夫人。」

「あの娘は今待つて居りますよ、」スパージット夫人がひつた、「眞直ぐ學校へ行くのですか、それともストーン・ロッヂの方へ行くのですか伺ひたいとあつて。」

「あれはわしが決心するまで待たなければいけません、夫人。」とバウンダアビイが答へた。「トム・グラッドグラインドがそのうちやつて来るぢやらうと思ふ。若しトムが、もう二三日あれをこゝに止めて置きたいと思ふなら、勿論、此處に置いてやらなければいかんぢやらうと思ふが、夫人。」

「えゝ、勿論置いてあげて宜しいぢやございませんか、バウンダアビイさん、若しあなたがさうしたひとを思ひでしたら。」

「わしは、昨晚、トムにあの娘とルイザを近づきにさせてゐゝかどうか決める前に一晩考へてくれといふことから、今夜はあの娘をこゝに泊めてやらうと話したです。」

「おや、さうでしたか、バウンダアビイさん。随分お考へ深くてゐらつしやぬませぬ！」

スパージット夫人のコリオレイナス型の鼻は少し鼻孔をひろげた、それからお茶を一啜りすゝつた時に、その黒い眉が寄り合つた。

「わしにはもう可なりはつきりしとるんぢやが、」とバウンダアビイがひつた。「あの可愛い小娘がこんな仲間と付き合つて、あまり利益を得る筈がないといふことはぢや。」

「グラッドグラインドのお嬢さんのことを仰しやるんですか、バウンダアビイさん。」

「さうぢや、夫人、わしはルイザのことをあつとるです。」

「あなたは『可愛い小娘』とだけ仰しやるし、」とスパ―

―四二一―

ジット夫人がひつた。「話には二人の娘さんが出てゐますし、どちらをさう仰しやるのか分りませんでしたから。」

「ルイザぢや、」とバウンダアビイが繰り返した「ルイザ、ルイザです。」

「あなたは全くルイザのもう一人のお父さんのやうでございますのね。」スパージット夫人はまたもう少しお茶を啜つた。そして、彼女がその再び結ばれた眉を湯氣の立つ茶碗の上にごどめたときは、彼女の古典的な顔が、まるで地獄の神々を呼び寄せてゝもあるかのやうに見えた。

「いや、あなたが、わしがトムの――息子の方のトムですぢや、わしの友人のトム・グラッドグラインドでないです――トムの今一人の父親ぢやと仰しやつたなら、まづまづ當つてゐるかも知れん。わしはトム少年をわしの事務所に入れようと思つとるのです。わしの監督の下に置かうと思つとるのな、夫人。」

「おや、さうでございますか？それにはあなた、ちつと若くはございませんかしら。」スパージット夫人がバウンダアビイに話しかけるときの『あなた』といふ言葉は、禮儀の言葉で、彼を尊敬するといふよりはむしろ、それを使ふ彼女の方を尊敬させる役目をつとめるものであつた。

「いや、今すぐに入れようとしとるんぢやないです、その前に教育の詰め込みを終らなければならん譯ぢやから。」とバウンダアビイがひつた。「きつとあれは十分詰め込まれとるぢやらう、一から十までな！あの少年もあの年頃のわしの胃の中にはどんなに學問が空っぽぢやつたかといふことを知つたら、眼を開くぢやらうて。」もうこの頃はトム少年も多分覺えてゐたであらう、何しろ、度々、それを聞いてゐたからである。

「こんな話を何方かと對等に話さうといふときにわしがどんなに面倒な思ひをするか、それは大變なものですぢや。例へばぢや、今朝輕業師のことをあなたに話しとつたでせう。それ、それぢや、輕業師とひつたところで、あなたなぞには一向お分りではないんぢやからな。往來の泥にまみれて輕業をやるのが、わしにとつて天の賜物でもあり、福引の景品でもあつたところに、あなたは伊太利オペラに行つていらしたんぢや。夫人、あなたが白繻子の衣裳に寶石をつけて、いかにもきらびやかに、伊太利オペラから出てゐらつしやつたとき、わしはあなたを照らす炬火を買ふ一ペンスの錢を持つてゐなかつたのですぢや。」

「それはもう、あなた。」と得意らしくも悲しいやうな威嚴をみせてスパージット夫人が答へた、「まだ極く若かつた頃から、わたしはよく伊太利オペラに參つたものでした。」

「そりや、夫人、わしもさうぢやつたです。」とバウンダア

一四一九

ビイがひつた——「が、わしのはあなたのととは反對の方でな。あの伊太利オペラの前の鋪石は随分つらい寢床だつたものですぢや。あなたのやうに夫人、ちひさる時から羽根蒲團に寝ることに慣れた人達は實際にやつてみんうちは、鋪石といふものがどんなに固いものぢやかといふことが分らん。いやいや、あなた輕業師のことを話しても何の役にも立ちません。わしは外國の舞者や、倫敦のウエストエンド（大商店街）や、メーフェイア（上流住宅地）や、貴族貴婦人や、高位高宮の人達のことをお話しすべきぢやつたでせう。」

「何も、あなた。」と謙遜なあきらめを見せて、スパージット夫人がかふ口を入れた、「さのやうな事をなさる必要はございません。わたしだつて境遇の變化にはどんなにして應じるかといふことぐらゐは覺えたつもりでございますから。あなたの教訓の多い御経験を伺ふのはわたし大好きでございます、本當にどんなに澤山伺つても、もうこれで澤山といふ氣がちつともいたしません、でもそれだからつて、わたしは別に偉さうな顔をする譯でもございせんわ、世間一體がさう思つてゐるのでございませぬもの。」

「そこぢや、夫人。」と彼女の保護者がかふゐつた。「人によつてはコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイが、自分の経験して來たことを、彼一流のお上品でないやり方で話すのを聞くのが本當に好きだと喜んでいふものがあるかも知れん。しかしあなたはぢや、あなただけは、贅澤につままれて生まれたことを白状なさらんわけには行きませんぞ。ね夫人、あなたも、あなたが贅澤につままれて生まれたことは御存知ぢやらう。」

「あなた。」とスパージット夫人が答へた、「わたしはそれを知らないとは申しません。」

やがてバウンダアビイは喰卓を離れて、背中を火にあぶりながら彼女を見下して立つた。彼女はかうしてあくまでも、彼の位置の引立役になつた。

「それからあなたは、立派な交際社會にゐらつしやつたんぢや。恐ろしく立派な交際社會にな。」と兩脚を温めながら、彼がかふゐつた。

「え、仰しやる通りでございます。」とスパージット夫人が答へた。彼女も似而非謙遜をみせはし

たが、それは彼とは正反對のもので、別に彼のそれと衝突するやうな恐れは少しもなかった。「あなたは、最上流の、又その他あらゆる社會にゐらつしやつたんぢや。」とバウンダアビーがひつた。

「さうでございますよ、あなた。」とスパージット夫人が答へた。それには、社交的な未亡人氣質といつたやうなものが見えなくもなかつた。「ほんたうに、さうでございますとも。」

—四二〇—

バウンダアビーは膝のところま身を屈めて、ひどく満足の様子で、文字通り足を抱いて、はつほど大きく笑つた。丁度、その時、グラッドグラインドと、ミス・グラッドグラインドとが、案内されて來たので、彼は父親には握手で、娘には接吻で挨拶をした。

「ジュープをこゝへ呼んでもらはふか、バウンダアビー。」とグラッドグラインドがひつた。

「あゝとも、」そこでジュープは呼びにやられた。入つて來ると彼女はバウンダアビーにお辭儀した。それから彼の友人のトム・グラッドグラインドにお辭儀をした。また娘のルイザにお辭儀をした、だが狼狽してゐたので、スパージット夫人には忘れた。それを見ると口やかましいバウンダアビーは、こゝぞとこんな長文句を滔々と述べた——「おい、お前にいつて聞かせてやらう、あの水注のところにあらつしやる奥さんは、スパージット夫人と仰しやるんぢや。夫人は、當家の主婦の役をさてゐる。それに、立派な身分の方の縁者なんぢや。ぢやから、今後お前がこの家のどんな部屋に入るにしても、若しお前があのお奥さんに最も尊敬深い態度でお辭儀しなければ、すぐ出て行かんければならん。あゝか、わしに對してはお前が何をしようとして少しも頓着はせん。わしは立派な縁者はさて置き、縁者などゝいふものが一人もないんぢや。わしは土の屑から出たものぢや。ぢやがあのお奥さんに對してだけは、お前のすることにはやかましくいはねばならん。お前は精一杯謙遜に、溫和しくしなければならん。さもなければお前はこゝに來てはならんぢや。」

「これは、バウンダアビー、ほんの見落しに過ぎないんぢやらうと思ふが。」とグラッドグラインドが取り做すやうな調子であつた。

「わしの友人のトム・グラッドグラインドが、」とバウンダアビーがひつた。「たゞ見落しに過ぎないだらうといつてゐますぢや、スパージット夫人、成る程、ありさうなことぢやが、夫人、あなたも御存じの通り、あなたに對してはほんの見落しでさへもわしは容赦せんのです。」

「どうも、御深切ありがとうございました。」妙に切口上で、さも謙遜したやうにスパージット夫人が答へた。「いえ何も口にする程のことではございません。」

シッシイはこの間中、眼に涙をためて、小さな聲で言譯をしてゐたが、やがてこの家の主人の手で合圖をされたので、グラッドグラインドの方へ進んだ。彼女は熱心に彼を見つめて立つてゐた。ルイザは眼を牀に注みだまゝ冷然と、父の傍に立つてゐた。その時、グラッドグラインドはかふ言葉をすゝめた——

「ジュープ、わしはお前をわしの家に聯れて行くことに決心

—四二一—

した。そして、學校に出てゐない時にはお前をわしの家内の側で使ふことにした、家内はどちらかといへば病氣勝ちなものぢやからね。わしは娘のルイザに——これが娘のルイザぢやが、——お前のこの頃の経験の、ちと悲惨ぢやが然し當然な成り行きのことを説明した。ぢやからお前は特に、あの出來

事の全體はすべて過ぎ去つたことだと合點して、もうあれを話の引合ひになど出さんやうにしなくてはいいかん。只今から改めて、お前の生涯は始まるんぢや。お前は今のところ何につけても智識が足りんといふことはわしがよく承知しとる。」

「さうでございます、本當に何も存じません。」と彼女はお辭儀をしながら答へた。

「わしはお前を嚴重に教育してやるといふ満足を得たいものぢやと思つとる。お前も一つ、お前と近づきになるすべての人間に對して、お前がこれから受ける筈の訓練の利益の生きた證據となつてもらはなければならん。お前は矯正され、養成され直さなくてはならん。お前はこれまでお父さんや、お前と一緒にゐた人達に何か本を讀んでやる習慣ちやつたといふが、どうぢやね？」

グラッドグラインドは彼女をぶくと近く手招きして、聲を落してかふるつた。

「え、それはお父さんとメリレッグスだけにでございます。つまりお父さんにだけででございます。メリレッグスはいつもそこにゐましたけれど。」

「メリレッグスの事などはどうでもよいんぢや。ジュープ。」と、一寸むづかしの顔をして、グラッドグラインドがひつた。

「わしは犬のことを訊ねません。わしはお前がお父さんに本を讀んでやる習慣ちやつたかと聞いてるんぢやが？」

「さうでございます。何千度といふほど讀んであげました。そんな時こそ一番幸福な——お、お父さんと一緒にゐた幸福な時の中での一番幸福な時でございます！」

ルイザが彼女の顔を見たのは、彼女の悲しみが破裂したこの時だけであつた。

「一體、何をお父さんに讀んで上げたんぢやね、ジュープ。」と、なほ一層聲を下げて、グラッドグラインドがひつた。

「妖精のことや、小人のことや、僂僂のことや、小鬼のことや、それから——」と彼女は聲を出してすゝり泣いた。

「お黙り！」とグラッドグラインドがひつた。「もう十分ぢや。これからそんな、この上もなく馬鹿らしいことを、一言も口に出すのではないぞ。どうもバウンダアビイ、これは嚴重な訓練の必要な一例ぢや。わしは興味をもつてこれを觀察しようと思ふよ。」

「成るほど。」とバウンダアビイが答へた。「わしの意見はもう君に述べて置いた、わしなら君のやうにはしないんぢ

—四二二—

やがね。ぢやが、宜しい、宜しい。君があくまでさうしやうと執心してゐるんなら、宜しいとも！」そこでグラッドグラインドと彼の娘とは、セシリヤを伴つてストーン・ロッヂへと歸つて行つたが、その途すがら、ルイザは、善くても悪くても、一言も口に出さなかつた。バウンダアビイは毎日の仕事にとりかゝつた。そしてスパージット夫人は、彼女の眉の間から眼を光らせながら、この晩中、小暗い自分の席に引込んだまゝ黙つて考へてゐた。

八、不思議は禁物

物語を續ける前に、いま一度基調に觸れる事にしよう。

ルイザが今より六つばかりも若かつた頃、或る日彼女が、「トム、わたしは不思議に思つてよ。」とゐふきつかけで弟と話を始めてゐるのが洩れ聞こえた——そこで、それを洩れ聞いたグラッドグライ

ンドが突然現はれ出て、かふみつた、「ルイザ、決して不思議に思ふなどゝあふんではないぞ！こゝに機械的技術の泉があり、また感情や愛情の培養といふやうな徒骨を折らずに、理性を教育することの秘訣があつた。何事にせよ、決して不思議に思ふな、加減乗除の手段で、あらゆることを、どうにかして落着かせるがひゞ。決して不思議に思つてはならない。マックチョーカムチャイルドはかふいふ、「あしこにゐる、歩き出したばかりの幼児をわしの處へ聯れて来てみ給へ。わしはきつとその子が何事にも決して不思議がらないやうにして上げよう。」と。

さて、コークタウンの町には、歩き出したばかりのかなり澤山の幼児の外に、二十年、三十年、四十年、五十年、それ以上も、大急ぎで無限の世界へと歩いてゐる可成り澤山の幼児達がゐた。これらの奇怪な幼児達は、人間世界のどんな社會をも、大威張り歩きまはる驚くべき聯中だったので、あの十八宗派の人達は、彼等の改善のために取るべき手段を一致して定めたといふ名目の下に、絶えず顔を引つ掻き合つたり、髪をむしり合つたりした。だが彼等には肝心の一致が出来なかつた。かふいふ目的に對してかふいふ手段が如何に見事に適應してゐるかを考へると驚くべき出来事ではないか。それでもなほ、彼等は、考へつける限りの、また到底考へもつけない（特にこの考へもつけない方の）他のあらゆる點では意見が相違してゐたにかゝはらず、これ等の不幸な幼児達には決して何かを不思議がらせるやうなことがあつてはならぬといふ點だけでは、かなりうまく一致してゐた。第一の團體は、この幼児達はあらゆるものを語られた通り信じなければならぬといつた。第二の團體は、彼等はあらゆるものを經濟學に基づいて判断しなければならぬといつた。第三の團體は彼等のために鉛のやうに重苦しい冊子を書いて、この善良な

一四三三

る成長した幼児が如何に絶えず貯蓄銀行に行くか、この成長した悪童が如何に絶えず懲役殖民地に追放されるかといふことを示した。第四の團體は、面白いぞくといふ（實際は何だかひどく陰氣くさいものであつた）、一向に面白くない觸込みで智識普及を企てるといふ見えた方便を盛んに用ひた——この方便の中に彼等幼児達は秘かに誘致される可きものなり、といふのが、その有難過ぎる御託であつた。だがどの團體も、この幼児達が決して何事にも不思議がるなどゝいふことがあつてはならないといふ事だけは一致した。

コークタウンには誰でも自由に出入りの出来る圖書館があつた。グラッドグラインドはこの圖書館で、市民が何を讀むかといふ點について心を悩ましてゐた、それで、このことについて、例の統計表の小川が定期的に溢れ出して、物凄く怒號する統計表の大海に入ることになつたが、この海では、どんな潜水夫も、その底まで入つたものがなく、又入つて正氣で出て来るものもなかつた。ところがかふいふ圖書館の讀者でさへも、依然不思議がることを止めなかつたのは、全く落膽すべき情態であり、悲惨な事實であつた。彼等は、人性について、人間の感情について、人間の希望や恐怖について、苦闘、勝利、敗北などについて、心配、喜び、悲しみなどについて、近隣の男女の死について、さまざま不思議を感じた！彼等は時としては十五時間の勞働のあとで、何處やら彼等自身に似てゐる男や女、または彼等自身の子供に似てゐる子供達に關する取りとめのない物語を讀んで坐り通した。彼等はユークリッド（幾何學）の代はりにデウ・フォー（ロビンソン・クルソー）を懐ろに入れた、概してコッカア（算術書の著者）によつてよりはむしろ、ゴールドスマス（小説の著者）によつて慰められた。グラッドグラインドは書物によつて、または書物以外のものによつて、絶えず、この風變りな問題を懸命に研究してゐたが、如何にして、それがこんな理解の出来ない結果を造り出すのか、發見することが出来なかつた。

「ルウ姉さん、僕はもう生きてるのが厭になつて来たよ。まをすつかり厭になつた。僕ほ姉さんよりの人は皆嫌ひだ。」或る日の夕方あの少年らしくなひ少年のトマス・グラッ

ドグラインドが例の理髮牀に似た部屋で、かふあつた。

「あなたはシツシイが嫌ひではないでせう、トム。」

「僕はあの娘をジュープと呼ぶなくちやならないのが大嫌ひなんだ。そしてあの娘の方も僕が大嫌ひなんだ。」とトムが不機嫌さうにさう答へた。

「おゝえ、慥かにあの娘は嫌つてゐないとわたし思ふわ。」

「嫌つてゐるに違ひないよ。」とトムがひつた。「あの娘は家の者全體を嫌つて嫌ひぬいてゐるに違ひないよ。それも

一四四一

尤もなとき。家の人達はあの娘を追ひ出す前に、ゐぢめ殺すだらうと僕は思ふね、今だつて、あの娘は蠟のやうに青白くつて——まるで僕と同じやうに氣分が重いんだ。」

少年トマスは、爐の前の椅子に後ろ向に馬乗り腰を掛けて、椅子の背に腕をもたせ、その上に自分の不機嫌な顔をのせてゐた。彼の姉は爐邊の小暗い隅に坐つて、トムの方を見たり、爐牀に落ちる明るい火花を見たりしてゐた。

「で、僕のことなんだが、」とトムは不興げな手付で髪をくしやくしやくに掻き亂しながら、かふあつた。「僕はつまり驢馬なんだ、僕はどうしたつて、さうなんだ。僕は驢馬のやうに頑固で、驢馬よりもつと馬鹿だし、僕の得られる楽しみだつて、驢馬と同じぐらゐるものなんだ。だから、いつそ僕は驢馬のやうに蹴飛ばしてやらうかと思ふよ。」

「わたしを蹴飛ばすんぢやないでせうね、トム。」

「大丈夫だよ、ルウ姉さん、僕は姉さんだけはどんなことがあつたつて傷つけはしないよ。初めから姉さん。は例外にしといたんぢやないか。姉さんがゐなけりや、この——ひどく古くさい——ひがみくねつた牢屋なんぞ——トムは両親の家にとつて十分有効に賞讃することの出来る名前を發見するために暫く言葉をとどめたが、この調子のととのつたふまい譬喩が出来たので、一寸の間は安心したやうに見えた——「どんなことになるだらうか。」

「それは本當なの、トム。あなたは本當に心からさういつてゐるの？」

「さうだよ、勿論ぢやないか、だがそんなことを話したつて何の役にも立ちやしなひ！」

丁度自分の肉體を苦しめて、精神と調和させてやれとでもいふやうに、彼の顔を上衣の袖にあてゝ擦りながら、トムがかふ答へた。

「だつて、トム、」と暫くの間黙つて火花を見てゐたあとで、姉がひつた。「わたしは年をとるにつれて、だんだん大人になつてくるにつれて、よくこゝに坐つて不思議に思ひながら考へるのよ、わたし、今よりもつとよく、あなたをこゝの家と折りは合はせることが出来ないのが、自分にとつてどんなに不都合なことだらうとね。わたしは他の娘達が知つてゐることをちつとも知つてゐないでせう。わたしはあなたに音楽を聞かせて上げることも出来ないし、歌をうたつて上げることも出来ないでせう。あなたの心を明るくするやうにお話をして上げることも出来ないわね。何故なら、あなたが疲れた時にお話シツシイで上げて、あなたを楽しませたり、慰めたりするやうな面白い景色を見たこともなければ、面白い本を読んだこともないんだから。」

「それは僕だつて同じことだよ。その點では僕だつて姉さんと同じ惡む目に會つてゐるんだ。おまけに、僕は強情張

—四二五—

りと來てるんだから。姉さんはさうぢやないけれども。若しお父さんが僕を理窟屋か、強情張りにしようと決心したんだとして、そして僕が理窟屋にならなかつたら、結局僕が強情張りだといふことは理論に合つてゐるぢやないか。實際また僕はさうなんだ。」と、トムが自棄にかゝつた。

「本當に残念なことだわね。」暫らく黙つてゐた後でレイザは、その小暗い隅から、考へ深さうにゐつた——「本當に残念なことだわね、トム。わたし達一人にとつてひどく不都合なことよ。」

「さうだ！姉さんは」と、トムがひつた。「姉さんは女なんだよ、ルウ。女は男よりもうまくこんな境遇から逃ることが出来るんだ。さうだ、僕は姉さんにはちつとも失望するところが無いよ。姉さんは僕のたつた一つの喜びなんだ。——姉さんはこんな場所だつても明るくすることが出来るんだ。」

「そして、いつでも姉さんの好きなやうに僕を導くことが出来るんだ。」

「あなたは本當に可愛い子よ、トム。あなたがわたしにそんないろいろなことが出来るかと考へてゐてくれる間は、わたし、自分でもつと何か知りたひなんて事をさう心配しなかつてよ。本當のことをいふと、わたしいろいろの事を知つたので、卻つてそれを残念に思つてゐるんだけれど。」彼女は立つて來て彼に接吻し、またもとの隅に戻つた。

「僕は、僕たちがこんなに澤山に聞かされてゐる事實のありつたけど、數字のありつたけど、それを發見した人間のありつたけを、一所に集めることが出来たらひと思つてゐるんだ。」とトムが、さも悔しさに齒を喰ひしぼつてかゝつた。「そして、そんなものやそんな人間の下に火藥の樽を千も埋めて、皆一緒に爆發させてやれたらゝんだけれどなあ！だが僕が今にバウンダアビイの親爺のところに行くことになつたら、きつと僕だけの敵討ちはしてやるんだ。」

「あなたの敵討つて？トム。」

「なあに、姉さん、僕のいふのは、少しばかり面白い思ひをしたり、出歩いて何かを見たり聞いたりにしてやらうといふ意味なんだ。僕はこれまで自分が育てられて來たあの躰け方の理合せをしてやるんだ。」

「でも、今かち失望しない用心をして置きなさいよ、トム。バウンダアビイさんと來たら、お父さんが考へてゐると同じやうに考へてゐるし、それにお父さんよりも亂暴で、お父さんの半分も深切ぢやないんだから。」

「さう！」笑ひながらトムがかゝつた、「そんなことはどうだつてゝさ、僕だつて何とかしてバウンダアビイの親爺の機嫌をよくしたり、親爺を自由に引き廻したりする方法ぐらゐはよく覺えられるやうにならふよ！」

—四二六—

二人の影は壁の上にはつきりと映つてゐたが、部屋の高い戸棚だの、本箱の影は壁の上や天井で入りまじつて、恰も姉弟の上には暗い洞窟が口を開いてゐるやうに見えた。勝手なことを考へるのが好きな想像なら、——若し想像などゝいふ叛逆者がこの事實の聖殿に入りこむことが出来たとするならば——それを、二人の話に出てゐる人物と、二人の未來に對する彼の目蓋惡な關係との影と解したかも知れなかつた。

「その機嫌をとつたり、引き廻したりするといふ偉い方法は何なの、トム、祕密なの？」

「うむ！」とトムがひつた。「祕密だとしても廻り遠いもんぢやないさ。その祕密つてのは姉さんな

んだ。姉さんは奴のお氣に入りだらう、姉さんは奴にひどく可愛がられてゐるんだ。姉さんのことなら奴は何でもするだらう。奴が僕の氣に喰はないことをいつたら、僕は奴にかふいつてやるさ、『ルウ姉さんが、きつと氣を悪くして、失望するでせうよ、バウンダアビイさん。姉さんはいつも、あなたはきつと僕にもつとやさしくして下さるだらうつていつてゐたんですから、』とね。この手でやれば奴の心だつて變へられるさ、これで出来なければ、他に出来るものはなからうよ。」

何か答への言葉を待つたが、得ることが出来なかつたので、トムはまたも退屈さうに現實世界にもどつた。そして、欠伸びながら、椅子の手摺に體を擦りつけたり、絡みつかせたりして、ますますその頭をくしやくしやくに掻きむしつてゐたが、急に顔を上げてかふ訊ねた――

「眠つちやつたの？ルウ。」

「あゝえ、トム。わたし火を見てゐるのよ。」

「ルウ姉さんは、火の中に僕よりもつと澤山なものを見る事が出来るんだね、きつと。」とトムがひつた。「それも女の子のもつ利益の一つだらうね。」

「トム、」と、彼の姉がそろそろと、少し妙な調子でかふたづねたが、それは恰も、彼女がその訊ねることを火の中に讀んでもゐるかやうに、しかもそれがそこあまり明瞭には書かれてゐないかのやうに見えた。「あなたはバウンダアビイさんの家に行くのを樂しみにして待つてゐるの？」

「だつて、それにはたつた一つゐることがあるんぢやないか。」と、自分の手から椅子を押しやつて立ち上りながら、トムが答へた。「奴のところに行くといふことは、この家を出られることなんだもの。」「たつた一つゐることがあるといふの、」とルイザは今し方の妙な調子でかふ繰り返した。「それはこの家を出られることなんだといふの。さうねえ。」

「ルウ、僕だつて姉さんと別れて、姉さんを此處に一人残して行くのがつらくないといふんぢやないんだよ。でも、

—四二七—

否でも應でも、僕は行かなきゃならないんだ、ね。それに僕は姉さんの勢力の利益をてんで使ふことが出来ないところに行くよりも、その使へるところに行けた方がゐると思つてゐるんだ。さうだから――」

「さうねえ、トム。」

この返辭には曖昧なところはちつともなかつたが、出て来るには大分長くかゝつた、それでトムは立つて行つて、彼女の椅子の背後にもたれかゝつて、これほど彼女を夢中にさせる火を、彼女と同じ立場から眺めて、何か珍らしいものでも發見が出来るかと眼を見張つた。

「たゞそれが火だといふことを除くと、」やがてトムがかふゐつた、「僕には他のものと同じやうにつまらない意味のないものゝやうに見えるんだけど、姉さんには何が見えるの？曲馬ぢやないかひ。」

「特別にこれといつて見えるものはないよ、トム。けれど、かうしてつと火を見ながら、あなたやわたしが大きくなつた時はどうかしらと不思議に思つてゐたの。」

「それ、また不思議が出た！」

「わたしは本當にどうすることも出来ない物思ひがあるので、それが不思議に思はないではゐられないのよ、きつと。」と姉が答へた。

「ではお願ひだから、ルイザ。」突然グラッドグラインド夫人がかふゐつた。彼女は音をたてないやうに戸を開けて入つて來たのであつた。「どうぞ、そんな言葉を使はないで頂戴、本當に考へのない子

だよ、でないよ、わたしお父さんからお叱言をいはれ通しでゐなけりやならないぢやありませんか。それからトマス、わたしのこの可哀想な頭が、絶えず考へごとでわたしを疲れさせてゐるのに、あんなにして育てられたお前のやうな子供が、あれだけの費用をかけて教育されたお前のやうな子供が、決してさうしてはならないつてお父さんが姉さんにあんなに嚴重にいつてゐるのを承知しながら、姉さんに加勢して不思議がらせるなんて、本當に恥かしいとは思ひませんか。」

ルイザはトムにその罪はないとひつたが、しかし母親はきつぱりした答で彼女の口をとめた。

「ルイザ、お母さんがこんなに體が悪なのに、お母さんに向つて口答へをしてはなりません。加勢でもされないでお前にそんなことがあへるといふのは、理窟からいつても、實際からいつても、出来ない話ぢやありませんか。」

「わたし、何かに加勢されたんぢやありませんの、お母さん、たゞ火から赧ゐ火花が落ちて、白くなつて消えて行くのを見て、さう思つただけですわ。それを見てゐたら、わたしの生涯がどんなに短いものか、又、その生涯の中に何か出來さうな見込みがどんなに少ないかとひとりにて考へられて來たんですわ。」

―四二八―

「馬鹿なことを！」と、いくらか躍起となつて、グラッドグラインド夫人がひつた。「馬鹿なことを！そこに立つて、臆面もなくそんな世迷言をお母さんにいふなんて、何です。若しお父さんのお耳にも入れば、わたしが叱言を聞き通しに聞かなければならないといふことはよく知つてゐるぢやありませんか。ほんたうにお前の爲めには随分面倒をみてゐるのに！あれだけの學課にも出させたり、あれだけの實驗を見せたりしてゐるのに！お前が『燃焼』や『煨焼』や『熱の發生』や、そのほか可哀さうな病人を氣狂ひにしてしまふ程なありとあらゆるその『何々シヨ』のことで先生とをさらひをしてゐるのを、わたしがこの右半身がすっかり感じがなくなつてゐたのも我慢して聞いて上げたこともあるのに、そんな馬鹿らしい言ひ方で、火や、灰のことをお前が話すのを聞くなつて！本當に、もう、とグラッドグラインド夫人は泣聲であつた。そして椅子に腰を下して、かゝいふ事實の影法師にすぎぬものに壓倒されないうちに、彼女の得意を急いであつてのけた。「わたしは本當にもう、子供など持たなかつたらと思ひますよ、わたしがゐなかつたらお前達はどうおなりだかといふこと位はお前達にも分るでせうに！」

九、シッシイの進歩

シッシイ・ジュープは、マックチョーカムチャイルドとグラッドグラインド夫人との間にあつて、なかなか樂な月日は送れず、彼女の見習期の初めの月ごろには、逃げ出さうかといふ強い衝動がないでもなかつた。一日中事實といふ霰が激しく打つた、そして人生といふ書物は、彼女には細かい野のある會計簿として開かれたので、たつた一つ次の抑制がなかつたなら、彼女はたしかに逃げ出してゐたであらう。

それは考へるだけでも嘆かすシッシイかしこの抑制は決して算術的過程から生じた結果ではなかつた、あらゆる算法を無視して、われとわが身に課したものであつた、つまりどんな統計技師が前提から導き出すどんな公算表とも矛盾するものであつた。この娘は父がどこまでも彼女を棄てゝ行つたのではないと信じてゐた。彼女は、彼が歸つて來るだらうといふ希望のうちに、そして萬一歸つて來ても自分が現在のところに止つてゐる方が一層彼を幸福にすることが出来るだらうといふ信念のうちに、

暮してゐたのである。

かふしてジュープが、健實な算術的基礎にもとづいて、彼女の父が人情知らずの浮浪人だつたといふことを悟る優れた慰めを退けて、上のやうな慰めにだけしがみついてゐる

—四二九—

といふその哀れな無智は、グラッドグラインドをひどく悲しませた。だが、他にどうすることが出来るよう？ マックチョーカムチャイルドは次のやうなことを報告した——彼女が數字にはひどく愚鈍な頭を持つてゐること、一度地球について大體の概念をもつと、もうその精確な測定には少しも興味をもたないといふこと、何か悲惨な出来事が、偶然關聯してゐる日でない限り、年月日を覚え込むことがいつも鈍くて困るといふこと、一つ十五斤半のモスリンの帽子を二百五十七個買へば幾許になるか答へるやうに（暗算で）要求されるとよく泣き出すといふこと、彼女は學校でも一番低い成績だといふこと、また經濟學原理を八週間も教はつた後、ほんの昨日、『この學問の第一の原理は何であるか』との問いに對して、『他人から自分に仕向けて貰ひたひと思ふやうに、他人に對してもせよ』といふ馬鹿な答へをして、背が三フィートぐらゐのお喋り小僧にその誤譯を訂正されたといふこと、等、等。グラッドグラインドは頭を振りながら、實に困つたことだといふこと、それは法式、目錄、統計書、報告、及び▽より▽に到る記表といつたやうな、智識の石臼に入れて無限に挽くことの必要を示すものだといふこと、またジュープは『事實の智識に専心させられなければならない』といふことを認め、そこでジュープはそれに専心させられたが、元氣がなくなつたばかりで、少しも賢くはならなかつた。

「あなたのやうになれたら、さぞあゝ事でござゐませうね、ルイザさん！」或る晩、ルイザが翌日の問題を少し明瞭にさせてやらうと努めてゐた時に、シツシイがかふあつた。

「どう思ふの？」

「わたしあなたのやうにとつさり知りたいものでございますわ、ルイザさん。そしたら今、わたしには難かしくて困るやうなものもみんなきつと樂になるでせう。」

「お前、ものを知つたからつてそれだけあゝ人になりはしないかも知れないのよ、シツシイ。」

シツシイは一寸躊躇したあとでかふあつた。「でも、それだけ惡い女になりはしませんでせうね、ルイザさん。」

それに對してルイザは、「それは分らないわ。」と答へた。

これまでこの二人の間には殆ど交渉がなかつた——それはストーン・ロッヂ生活が、人間の干渉を拒む一つの機械のやうに單調に進行するのと、シツシイの過去の素姓に關して語ることが禁物になつてゐた爲めとであつた。——それで二人はまだ殆ど初對面の人間と變りはなかつた。シツシイはその黒い眼を不思議さうにルイザの顔に向けてゐたが、もう少し話してもよいのか、それとも、黙つてゐた方がよいのか分らなかつた。

「お前はわたしよりもずつとお母さんの役に立つし、わた

—四三〇—

しよりももつとお母さんにとつて氣持があゝのだけわ。」とルイザは話をつづけた。「お前の方がまだまだわたしよりも増しなのよ。」

「でも、あの・・・ルイザさん、」とシツシイが辯解した。「わたしは——わたしは本當に馬鹿です

わ！」

ルイザは何時になく明るく笑つて、お前も追々賢くなるだらうとひつた。

「あなたは御存知ないのでございます、」とシツシイは半分泣きながらかふあつた。「わたしがどんなに馬鹿な娘だかつてことを御存知がないのでございます。學校の時間には、いつだつてわたしは間違ひばかりしてゐるんですもの。マックチョーカムチャイルド先生や奥様が、幾度も幾度もお呼び出しになりますけれど、わたしはきまつて間違ひばかりするんですもの。濟まないと思つてもどうにも出来ないでございます。わたしは自然に間違ひばかりするやうに生れてゐるんでございますよ。」

「マックチョーカムチャイルド先生や奥様は、きつとどんな間違ひもなさないだらうね、シツシイ。」

「そんなさいませんとも！」と彼女は熱心に答へた。「お二人は何でも知つてゐらつしやいますわ。」

「お前の間違つたことを二三つ話して御覽。」

「本當にお恥かしくて、もう、」とシツシイががつかりしたやうにあつた。「でも申しませう。たとへば今日、マックチョーカムチャイルド先生が *Natural Prosperity* (自然の繁榮) といふことについてわたしたちに説明をなさいました。」

「それはきつと *National* だと思つたわ。」とルイザがひつた。

「まあきつとございましてわ——でも同じではないんでございますかしら？」と彼女はおづおづかう訊ねた。

「*National* とひつた方がゐるよ、先生がさう仰しやつたのだから。」とルイザが素氣なく言葉少なに答へた。

「では *National Prosperity* (國家の繁榮) にいたしませう。で先生が仰しやりました。「さてこの教室が國家であるとする。この國家には五千萬の金がある。これは繁榮した國家ではないでせうか。少女組の二十番、これは繁榮した國家ではないかね、あなたは隆盛な國家に住んでゐるのではないかね。」

「お前は何とひつたの？」とルイザが訊ねた。

「ルイザさん、わたしは知らないと申しました。わたしは誰がそのお金を得たのか、またそのうちの幾許かゝわたしのものであるのかどうか分らないうちは、それが本當に繁榮な國家かどうか、わたしが本當に盛んな國に住んでゐるかどうかを、眞實に知ることは出来ないと思ひました。ですがそれはさつきの問題に何の關係もありませんでした。全く數字になつてゐなかつたのですもの。」眼を拭きながら

—四三二—

シツシイがひつた。

「それは大變な間違ひをしたのね。」とルイザがひつた。

「さうでしたわ、ルイザさん、わたし今はそれがはつきり分ります。それからマックチョーカムチャイルド先生がわたしに今一度聞いてみると仰しやりました。先生が、『この教室が大變大きな町であるとする。そしてこの町には百萬の人口があつて、一ヶ年間に街路上で飢ゑ死したものは僅かに二十五人であるとする。その割合がどれだけだとあなたは答へますか?』といはれました。それでわたしはかふ答へました——もつとよい答を考へ出すことが出来ませんでしたから——他の人達が百萬あようと百萬の百萬あようと、飢ゑ死した人達はやつぱり辛かつたに違ひないと思ひますつて。するとそ

れも間違つてゐたといはれました。」

「もちろん間違つてゐるわ。」

「それでマックチョーカムチャイルド先生はもう一度わたしに訊いてみよう、『こゝに海上に於ける惨事の Stutterings (吃り言葉) がある——』と仰しやりました。」

「Statistics (統計表) や。」とルイザがひつた。

「(やうで)ぎいましたわ、ルイザさん——この言葉がわたしに何時も Stutterings を想ひ出させていけませんの、それもわたしの間違ひの一つなんですけれど、——それで (とマックチョーカムチャイルド先生が仰しやりました、『或る時に十萬の人間が長期航海に出て行つたが、その内の溺死、或は焼死したのは五百人だけだつたといふ事が分る、そこでこの割合はどうです?』でわたしはかふ申しました、お嬢さん。——こゝまで来るとシッシイは間違ひをひどく後悔して告白しながら啜り泣いた——「何もありませんつて。」

「何もないつて? シッシイ。」

「ありませんつて、お嬢さん、死んだ人達の身内や友達にとつては割合なぞはありませんから。——わたしどうしても勉強が出来ない性分なんです(ぎ)いませう。」とシッシイがひつた。「一番困ることは、可哀さうにお父さんはわたしにあんなに勉強させたいと思つてゐたんですし、わたしだつてそれだけ一生懸命勉強したいと思つてゐますけれど、どうもわたしは勉強が嫌ひなのだらうと思はれるので(ぎ)ゐますの。」

ルイザは、恥かしさうに自分の前に垂れてゐるこの可憐な謙遜な頭を眺めながら立つてゐたが、やがて、その頭はまた起されて彼女の顔をちらつと見た。そこでルイザはかふ訊ねた——

「お前のお父さんは自分でも學問があつたから、お前にも十分仕込みたいと思つたの? シッシイ。」
シッシイは返辭をする前に躊躇した、そして二人は入つてはいけなところだんだん入りかけてゐるのだといふ様

—四三二—

子を明瞭に示したので、ルイザはかふ言ひ添へた、「誰もわたし達の話を聞いてゐる者はないのよ。若し誰か聞いたにしても、こんな罪のない話に何の悪ることもある筈がないわ。」

「あゝえ、ルイザさん、」と、かふ力をつけられたので、シッシイは頭を振りながら答へた。「お父さんは、ほんの少シッシイか知つてゐませんでした。お父さんは書くことだけがやつとでした。それに普通の人々はお父さんの書いた字はなかなか讀めませんでした。わたしにはよく分りましたが。」

「お前のお母さんは?」

「お母さんはなかなか學問があつたとお父さんがいつてゐました。お母さんはわたしが生れた時に亡くなりました。お母さんは、——シッシイはびくびくしながらこの怖ろしき事實を話した——「お母さんは踊り子でした。」

「お父さんはお母さんを愛してゐたの?」とルイザは彼女に獨特な、強い向う見ずの、止め度のない興味をもつて、かふいふ質問をした。それは恰も追放された生きものが何處かの寂しい隅に隠れてゐるといつたやうな、行き場に迷つてゐる興味であつた。

「えゝ、それはもう、わたしと同じやうに大事に愛してゐましたの。お父さんは最初はお母さんのためにわたしを愛したのです。わたしがまた根ん坊の時には、よくお父さんに聯れられて出ました。その時からづゝとわたし達は、一度も離れたことはなかつたのです。」

「でも今はお前を置き去りにして行つたぢやないの、シッシイ。」

「たゞわたしの爲めを思つてはすわ。何方にだつてお父さんのことはわたしほど分りません。わたしほどお父さんを理解してゐるものではありません。わたしの爲めに、お父さんがわたしを置き去りにして行つたときには——お父さんは自分の利益の爲めにそれをするやうなことは決してございませぬ——この辛い責苦のために胸も裂けるやうだつたらうと思ひますの。きつとお父さんはたゞの一分間だつて幸福ではございませぬわ、また戻つて来るまでは。」

「お父さんのことをもう少し話して頂戴な。」とルイザはゐつた。「もう二度とは聞かないことよ。お前さん達はどこに住つてゐたの。」

「わたし達は旅から旅へと歩き廻つてゐて、これといふ定つたお家がありませんでした。お父さんは——シッシイは聲をひそめてこの怖ろしひ言葉をさゝやいた——「道化役者でした。」

「皆を笑はせる爲めのでせう？」とルイザはよく分つたといふやうに頷いた。

「やうでございます。ところが時々、どうしても皆さんが

—四三三—

笑ひませんの。そんな時にはお父さんは大聲に泣きました。近ごろはまた一層皆さんか笑はなくなりました。お父さんはよくがつかりしてお家に歸りました。お父さんは他の大勢の人達とは違つて居りました。わたしほどお父さんを理解し、愛してゐない人達は、お父さんが少し氣が違つたのだと思つたかも知れません。時々さういふ人達はお父さんを愚弄しました。ですがそのことがどんなにお父さんの心に深く應へたか、そしてわたしと二人きりになつた時には、お父さんがどんなにゐちけて縮み上つてゐたかといふことは、その人達は知りません。お父さんはその人達の想像も及ばないほど、臆病なのでした！」

「するとお前はいろいろなことでお父さんの慰めだつたのね。」

彼女は首肯いた。涙は顔に流れ落ちた。「さうなりたいと思ひましたの。お父さんはさうだと申してをりました。お父さんはひどくおどおどして、慄へるやうになりましたので、又自分が貧乏で力がなくて、物知らずで、頼りのない人間だ（お父さんは本當にこの通りの文句でゐひました）と感じましたので、わたしにはいろいろなことを覚えさせ、自分とは違つたものにしようと思つたのでした。わたしはお父さんに元氣をつけて上げる爲めに、いつも本を讀んで聞かせました、お父さんもそれが大好きでした。その本はゝ本ではありませんでした。——その本の名はどうしても申し上げられませんが——けれども、わたし達はその本が害のあるものだとは思ひませんでした。」

「お父さんはその本が好きだつたのね。」とルイザはこの間中、シッシイを探るやうに見詰めながらゐつた。

「え、それはそれはね！その本の爲めに本當の害を受けずに濟んだことが度々でございました。夜になつてこの本を讀ませては、王様はお后に話のつゞきをさせるだらうか、それとも話が終らないうちに頭を切つてしまふだらうかといふやうな疑問に、書間の苦勞をすっかり忘れるのが毎度のことです。」

「で、お前のお父さんはいつも深切だつたのね。最後までも？」とルイザは、例の大事な主義に背いて、ひどく不思議に思ひながらかふ訊ねた。

「えゝいつも、いつもでございますわ。」とシッシイは手を握りしめて答へた。「言葉ではゐへないほど深切でございました。或る晩たつた一度怒つたことがありますが、それはわたしに怒つたのではなく、メリレッグスに怒つたのでございました。メリレッグスは、——と彼女は聲を低めて、この怖ろしひ事實をさゝやいた。「藝犬の名でございますのよ。」

「どうして犬に怒つたの？」とルイザは訊ねた。

—四三四—

「曲馬場で藝をすまして歸る早々、お父さんはメリレグスに、二脚の椅子の背に飛び上つて、跨いで立つてみるとゐひつきました、——これは、この犬の藝の一つだったのでございます。犬は、父の方を見ましたが、直には致しませんでした。その晩、父のやることは何もかも出来ないことばかりで、お客様を喜ばせることが少しも出来なかつたのでした、お父さんは、犬までが、おれが駄目になつたことを知つて、少しも同情しないのかつて怒鳴りました。そして犬を打つたので、わたしは吃驚してしまつて、『お父さん、お父さん！後生ですからあなたを愛してゐるこの犬を打たないで下さる！おゝ神様、お許し下さい。お父さん、止めて下さい！』といひました。お父さんは打つのを止めましたが、犬は血まみれになつてゐました。お父さんは犬を抱いたまゝ、牀の上に横になつて泣きました、犬はお父さんの顔を舐めまはしました。」

ルイザは彼女の睨り泣いてゐるのを見た。で彼女の傍に行つて接吻し、彼女の手をとつて並んで坐つた。

「お父さんがお前を置き去りにした譯を話したら、お話をおしまひにしませうね。シッシイ、わたしもう随分いろいろな事をお前に訊いたわね、だがお終ひまで話して頂戴。叱られたら——若し叱られるやうなことがあつたら、——わたしが悪めなので、お前が悪めのぢやないから。」

「あ、お嬢さん。」とシッシイは眼に手をあてゝまた睨り泣きをしながらかふゐつた。「わたしがあの日の午後、學校から歸つてまゐりますと、お父さんも丁度小舎から歸つて来たところだったのでございました。お父さんは體が痛みでもするものゝやうに、火の傍で體を揺りながら坐つてゐました、わたしは『お父さん、お怪我をなすつたのですか。』と訊ねました(曲馬場の皆がするやうに、お父さんも時々怪我をしましたから)。するとお父さんは、『何アに少したよ、お前。』と申しました、わたしは傍に行つてごゝんでお父さんの顔を見上げますと、泣いてゐるのでございました。わたしが話しかければかけるほど、お父さんは顔を隠しました。最初のうちは體中ふるへて、たゞ『可愛いお前』『大好きなお前』といふばかりでございました。」

丁度こゝまで話してゐるうちに、トムがふらふらと部屋の中に入つて来た。そして自分のこと以外には別に興味を持つらしくもない冷淡さで——今のところはさうした興味がなかつたので、二人をぢつと見つめた。

「わたしは今シッシイにいろいろ質問してゐるのよ、トム。」と姉は説明した。「お前はあつちに行つてしまはなくてもゐゝけれど、ゐゝ子だから暫く邪魔しないで頂戴ね。」

「あゝゝとも！」とトムは返辭した。「たゞお父さんがね、バウンダアビイの親爺を家に聯れて来たんだよ、だか

—四三五—

ら姉さんは應接間まで出て貰ひたひんだ。その譯はね、若し姉さんが出てくれると、バウンダアビイが僕を御馳走に呼んでくれさうな好い機會があるんだよ。姉さんが出てくれなきやおしまひなんだ。」

「直ぐ行くわ。」

「待つてゐるよ。」とトムはゐつた。「きつとね。」

シッシイは低い聲で話を續けた。「たうたう可哀さうなお父さんはかふ申しました。おれはまた見物

人を満足させることが出来なかつた、これではもうどんな満足も與へることが出来まひ。おれは面汚しで、面目もない、お前はおれがゐない方がよっぽど都合がゐるのだと申しました。わたしは心に浮んだありつたけの優しい言葉をお父さんにかけました。お父さんは直ぐに落ちつきましたので、わたしもお父さんの傍に坐つて、學校のこととか、學校で聞いたことやしたことなどを話して聞かせました。話すことがなくなると、お父さんはわたしの頸に手をかけて、幾度も幾度も接吻をしました。それからお父さんは一寸した怪我につけるから、いつも使ふ薬を買つて来てくれといひました。一番ゐる店を買つて来てくれとゐひ添へました。店は、そこからは町の反對のはづれにあるのでございしました。お父さんはもう一度わたしに接吻して、それからわたしに行つておいでといひました。わたしは二階を降りてから、もう少しお父さんと一緒にをればよかつたにと想ひ返し、戸から覗いてかういひました。『お父さん、メリレッグスを聯れて行きませうか。』お父さんは頭を振つて申しました。『いや、シツシイ、いけないよ。わしのものだと分つてゐるものは、何でも取つて行つちやいけないよ。』わたしは、お父さんを火の側に置いたまゝ出掛けました。それから、わたしの爲めに何かを試みるつもりで、逃亡しようといふ考へが、お父さんの心に浮んだものに違ひありません。可哀さうな、可哀さうなお父さん！わたしが戻つて來ましたとき、お父さんはもうゐませんでした。」

「ねえ、バウンダアビイの親爺のことを忘れちやいけないよ、ルウ！」とトムは答めるやうにゐつた。

「もうお話しする事はございせんわ。ルイザさん。わたしはちやんとお父さんの爲めに九色油を用意してをります、お父さんが戻つて來るといふことを知つてあますから。わたしは旦那様が手紙を手にしてゐらつしやるのを見る度に、息がつまつて、眼が眩みさうになります。若しやそれがお父さんから來たのではないか、それともスリアリさんから父のことを知らせて來たのではないかと思ふものですから。スリアリさんはお父さんのことを聞いたら、すぐに知らせるやうに約束して下さいました。あの方はきつと約束を守つて下さいませうよ。」

一四三六一

「バウンダアビイの親爺のことを忘れてはいやだつてば、ルウ姉さん！」トムは焦つたさうに口笛を吹いてかふるつた。「姉さんが早く出てくれないと、奴は歸つてしまふよ！」

このことがあつてから何時でもシツシイが、家族のゐるところでグラッドグライインドに膝をござめてお辭儀をして、口こもりながら「相すみません、お邪魔はかり致しまして——あの——わたしに用のある手紙はまだ参りませんでせうか。」と訊く度に、ルイザはその時してゐた仕事が何であらふと、その手をやめて、シツシイと同じやうに熱心に父の返辭を待つた。グラッドグライインドが決つたやうに、「いや、ジュープ、さうしたものは何も來ないよ。」と答へるとき、シツシイの聲のふるへはまたルイザの顔にも繰り返された。そしてルイザの眼はさも同情に堪へないやうに、戸口のところまでシツシイを見送るのであつた。グラッドグライインドは、彼女が行つてしまつてから、いつも彼女がもし、幼年時代から適當な教育を受けてゐたのであつたら、かふした空想的な希望が何の根據もないものだとして健全な主義によつて、自分に説明することが出來たらうと、いふことをついでに説教して聞かせた。しかもそれは卻つて（彼に對しては）はない、——何故なら彼はちつともそれを認めなかつたから、空想的な希望は事實と同じやうに、人の心を掴むことが出来るものだといふやうに思はせた。

この觀察は全くルイザにのみ限られてゐたに違ひない。トムはといへば、何時も第一に自分自身に對して働く、あの實例がないでもない打算的性質の捕虜となつてゐる方がづゝとよく似合つてゐた。グラッドグライインド夫人はといへば、この問題については何かいふことがあると、雌の山鼠のやうに、

襟卷の中から少しばかり顔を出して、かふいふのであつた——

「本當にまあ、わたしの弱い頭は、あのジュープの娘がしつこく、繰り返し繰り返し、面倒臭い手紙のことを考へるので、もうくさくさしてしまふ。きつとわたしは、いつまで聞かされてもこれであらう。いろいろなものに取り圍まれて生きて行くやうな運命になつてをり、さう定められてゐるんだらう。いろいろなことをいつまで聞かされても、これでお終ひだといふことのないやうに見える、ほんとにこんな不思議なことがあるかしら！」

大抵こゝらまで来ると、グラッドグラインドの眼は何時も彼女に向けられた、そしてこの冷やかな一片の事實の影響を受けると、彼女はまた呆然としてしまふのであつた。

十、ステイヴン・ブラックプール

英國民は、何處の國民にも劣らずなかなか稼ぎ者である——別に確たる證據があるといふ譯ではないが、わたしは

—四三七—

かふ考へてゐる、そこでわたしは、何故この町の稼ぎ手の労働者に就いて、尙ほ暫く敘述の筆を進めるか、といふ理由として、この見解（大したものではないが）に負ふところがある。

ヨークタウンの一番激しく労働する部分、あの醜悪な城の眞中の保壘の（そこでは厚い煉瓦塙が、人殺しの空氣や瓦斯を内部にびつたり閉め込んでゐる一方、大自然の清新さをしつかりと閉め出してゐる）狭い巷路と巷路とが纏れ、窮窟な通りと通りとが絡み合つた迷宮の奥深く（かふいふ巷路や通りはその初め一つ一つ出来たのだが、それがみな或る一人の人の役に立ちさへすれば他の事はどうでも構はないといつたやうな無考への大急ぎでつくられたもので、互ひに肩で押し合ひし合ひ、踏みにじり合つて、恰も一軒の寄合世帯とひつた觀がある）——損み切つた容器（ヨークタウン）の辛くも餘形を止めてゐる窮窟な片隅——（そこでは、煙突といふ煙突が、通風の極く悪む爲めに、その恰好が何れも萎けて、振けて——恰も、此處でこれからどんな人間が生れるか、その恰好の看板を家々で申し合せたやうに掲げてゐる、といつたやうである）——のあたりに、總括的に『手』と呼ばれてゐるヨークタウンの群集（それは、若し神が彼等を手だけに創るか、又は手と消化器のみもつ海岸の下等動物のやうに創る方が適當だと考へ給うたなら、或る種の人々には氣に入りさうな人間たちであつた）の間に伍して、ステイヴン・ブラックプールといふ四十男が住んでゐた。

ステイヴンは年齢よりも老けて見えた、だがそれは彼が辛い生涯を送つて來た男だからであつた。諺に、こんな人の生涯にも薔薇と刺があるといふ。けれどもステイヴンの場合には何かこの諺に間違ひがあつたやうに見えた。薔薇の方は誰か他の人にとられてしまつた代り、刺の方は自分の刺に、更にその人の分までも背負ひこむことになつた。彼は彼の言葉でいふと、柵で何杯といふ厄介を経験してゐた。かふいふ事實に對する單純な尊敬から、彼は老ステイヴンと何時も呼ばれてゐた。八の字になつた肩、考へ込んでゐる顔付、鐵灰色の長く薄い髪、いかにも堅さうに見える可成り大きな頭をもつた、やゝ猫背の男、これが老ステイヴンである。彼は彼の身分としては特別に聰明な人間として通ることが出来たかも知れない。だが實際はさうでなかつた。彼は多年の間その切れ切れの暇をつなぎ合せていろいろ困難な學問を究めたり、柄にもない事柄に關する智識を獲得したあの見上げた『手』の間には、まるきり入つてはゐなかつた。彼は演説をしたりめ討論をしたりすることの出来る『手』の間には、何の地位も持つことが出来なかつた。幾千といふ彼の同輩は、どんな時でも彼より上手に

話すことが出来た。彼は動力織機の上手な織手であり、申分のない

―四三八―

誠實な人間であつた。彼がこれ以上の何であるか、また彼の性質にはこの外にどんなものがあるか(若し何かあるとすれば)、それは彼自身に示させることにしよう。

大工場の燈火はみな消された―明々と點燈されてゐるとまるで神仙の宮殿のやうに見える、少くとも急行列車の旅行者がさうあつた―夜の終業を知らせる鐘は鳴つてゐたが、やがてそれも鳴りやんだ。男や女、子供や娘などの『手』はぞろぞろと家路に向つてゐた。老ステイヴンは、機械が靜止する時に何時も覺える感じ―今まで、自分自身の頭の中で機械が働いてゐて、それが靜止したのだといふやうな感じ―がして通りに佇んでゐた。

「だが、まだレイチェルが見えねえ!」と彼はあつた。

それは雨の降る夜であつた、帽子を被らない頭に雨を避けようと、肩掛を引掛けて颯のところでしたかり結びつけた、若い女の群が澤山彼の傍を通りすぎた。彼はレイチェルをよく知つてゐた、一目でこれらのどの群にも彼女がゐないのを見分けるに十分であつた。やがて女工達の群はもう來なくなつた。彼は失望したやうな調子で、「やつぱりあれを見落したんだな!」とあひながらそこを去つた。だが、通りにして、その三つも過ぎないうちに、彼は前方を行く肩掛を被つた女工の姿をまた一つ認めた。彼はその姿をちつと穴のあくほど見つめてゐたが、多分、濡れた鋪石の上に漠然と落ちてゐるその影だけでも―街燈から街燈へと現はれたり消えたりして、動いて行く姿そのものではなくとも、たゞ影法師さへ見ることが出来たなら―そこにゐるのは誰かといふことを彼に知らせるに十分であつたらう。早速彼は自分の足どりをもつと速め、もつと軽くして、この姿のよほど近くに來るまで走つた、それからもとの足どりに戻つて、かふ聲をかけた。「をひレイチェル!」

丁度街燈で明るい處に來てゐた時であつたので、彼女は振り向いた。そしてその頭巾を少し上げて、落ちついた卵形の色の淺黒い幾分弱さうな顔を見せたが、それはあくまで優しい二つの眼のおかげで明るくされ、その上きちんと結ばれた艶々した黒い髪によつて引き立てられてゐた。がそれは美し盛りの顔ではなかつた、彼女は既に三十五であつた。「まあ!お前さんだつたの?」その愛想のよい眼の外には彼女の顔の何處も見えなかつたけれども、たしかに現はれたに違ひない微笑を浮べて、かふ返辭した。そしてまたも頭巾を直して、二人は一緒に歩き出した。

「おいらはお前がまだ後だと思つてゐたがね、レイチェル。」

「さうぢやなかつたわ。」

「今夜は早かつたのかね?」

「時によつちや少し早いこともあるよ、ステイヴン、時によつちや少し遅いこともあるしね。わたしの家に歸る時間な

―四三九―

んで當てにならないのよ。」

「違つた道を通らないつてことも當てにはならないんだらう、なあレイチェル、おいらにやさう思はれるや。」

「さうよ、ステイヴン。」

ステイヴンは顔に幾分失望の色を停べて、彼女の方を見やつた。それでも彼の顔には彼女が何をし

ようと、皆、正しいことに違ひないのだといふ敬虔な忍耐強い確信が消えてはゐなかつた。彼女は
その表情を見つけずにはゐなかつた。で、それを彼に感謝するかのやうに、一寸の間、自分の手を軽
く男の腕にもたせた。

「ね、わたし達はどこ迄も本當の友達よ、どこ迄も古い友達よ、そしてお互ひにだんだん年をとつ
て行くのね。」

「なあに、レイチェル、お前は昔のやうに若いよ。」

「わたし達が二人とも生きてゐて、どちらかど一年をとらずにゐたら、ねえステイヴン、どつちか一
人は、どうして年を取つたらいいか迷つてしまふでせうよ。」と彼女は笑ひながら答へた。「けれども
ともかくわたし達はこんな古い友達なんだから、お互同志で眞實のことを隠してゐはないのは、罪
だらうよ、寢覺めが悪ぬぢやないの。わたし時々あまり一緒に歩きすぎない方がよからうと思ふよ。
さうよ。まるきり一緒に歩かないことにすれば、そりや成る程辛いこととせうから。」と、彼女は快闊
にかふゐつた、彼女はこの快闊さを彼に分けてやりたいと思つたのである。

「どうも辛いよ、レイチェル！」

「さう思はないやうにして御覽なさいな。そしたらいくらかよく思はれて来るでせう。」

「おいらも長いことさうしやうとしたんだ。だがうまくいかなかつた。お前のいふなア本當だ、お
前のことまで人が噂するやうになるかも知れねえ、なあレイチェル、お前はあの長い間づゝとおいら
のあれだつたんだ。お前はおいらの爲めになることをいろいろしてくれたいし、またお前の元氣のあゝ
遣り口でおいらに元氣をつけてくれたんだから、お前の一言はおいらにとつちやお上の掟も同じなん
だ。さうだとも、レイチェル、それも明るい立派な掟なんだ！本物のやつよりもあゝものなんだ。」

「掟なんかに氣を悪くするもんぢやないわ、ステイヴン。」と彼女はすぐ答へて、彼の顔を心配さう
にちらと見た。「掟なんてものはそのまゝにして置きなさいよ。」

「さうしようよ。」と一つ二つ澁々うなづきながら彼はかふゐつた。「そのまゝにして置かう。何も
かもそのまゝにして置かうよ。どれもこれも抛つて置かうよ。もうみんな滅茶々々だ。どこもこゝも
さうだ。」

「何時もさう滅茶々々なの？」彼がほどけてゐる頸卷の長い端を噛みながら何か考へに耽つてゐる
のを呼びさまさう

—四四〇—

とするかのやうに、レイチェルは今一度彼の腕にやさしく手をかけてかふゐつた、その手はすぐに效
果をみせた。彼は咬へてゐた頸卷の端を落して、笑顔を彼女の方に向けて、機嫌よくはゝゝと笑ひな
がらいつた。

「さう、レイチェル、いつも滅茶々々さ、おいらはそこから浮べねえんだ。幾度も幾度もおいらは
それに出會して、一度だつて逃れられたことがねえんだ。」

二人は幾らかの距離を歩いて行くと、もう自分達の家の近くになつた。女の家が手前であつた。そ
の家は数多い裡露路の一つにあつた。かふした露路のために、このごろ大流行の葬儀屋が（彼は近所
に貧弱な葬式の行列が一つある毎にかなりの金を儲けてゐた）、一つの黒い梯子を用意してゐて、毎
日々々狭い階段を手探りで上つたり降りたりするこの露路の住者達が、自分の部屋の窓を通つてこの
生きてゐる世界からあの世へ迂り出して行くときの便利をはかつてゐた。彼女は曲り角で立ち止つて、
自分の手を彼に握らせて左様ならをゐつた。

「左様なら、レイチェル、左様なら！」

彼女は清楚な姿と、實直らしい女らしい足どりをして、暗い通りを歩いて行つた。彼は彼女がそこに澤山並んでゐる小さな家の一つに入るまで、立つて見送つてゐた。恐らく彼女の粗末な肩掛けの揺ぎさへ、この男にはそれだけの興味を起させずには置かなかつたであらふし、又彼女の聲の響の一つさへ、彼の心の奥底にそれだけの反響を起させずには置かなかつたであらふ。

彼女が彼の眼から消え去ると、彼は雲足が凄じかりの素早い空を時々見上げながら、家路へと急いだ。だが雲は今はいきれぎれになつた、雨はもうやんで、月さへ出てゐた——月光はコークタウンの高い煙突を降つて、その下の深い熔鑪爐の上に射し、休んでゐる蒸汽機關の巨大な影法師を、その裾られてゐる場所の壁の上に投げたりしてゐた。ステイヴンの面持は、歩いて行くにつれて、この夜と共に晴れて来たやうに見えた。

彼の住居は、もつと町幅が狭いといふ點を除くとレイチエルのとそつくりな通りの小さな店の二階にあつた。誰がどうして、この店の窓の中で、安新聞や豚肉と（明晩の福引賣出しの景品として脚が一本あつたが、ちやませにしてある粗末な小玩具を賣つたり、買つたりする價值があるものと思ふやうになつたかといふ問題は、こゝに關係のないことである。彼は棚から蠟燭の片らをも一つとつて、勘定臺の上にある今一つの片らでそれを點して、小部屋で眠つてゐる店の女主人を起さないやうに、二階の借間へ上つた。それは、彼の前のいろいろな間借人のときにもあの葬儀屋の黒い梯子と度々馴染になつたらしむ部屋であつたが、た

—四四一—

だ、今ではこんな部屋としてはこれ以上に出来ないほど小綺麗に片づいてゐた。室の一隅にある古筆筒の上には何冊かの書物が載せてあり、家具はきちんと整つてをり、四邊の空氣は汚れたものであつたが、部屋の中は清潔であつた。煖爐のところにある三脚の丸卓子の上に蠟燭を載せようと、爐の方に歩いて行くと、彼は何かにつまづいた。飛び退いてちつと見下すと、それはひとりでにむくむくと動いて、やがて一人の女の蹲つた姿となつた。

「おや、あいつだ！」と彼は叫んで、その姿から更に後退りした、「お前、また歸つて来たんだな！」だが何といふ女であらふ！廢物と同様な、酔拂ひで、牀の上に汚れた片手を突いて坐つた姿勢をやつと保つてをり、片手では顔にかゝるもつれ毛を拂ひ退けようと無暗に撫でまはしてゐたが、それは手についてゐる泥で、ますます彼女を盲目にするばかりであつた。襪樓と汚點と、泥沫の爲めに實に醜い女である。しかも道德的の行ひでは、これよりも更に醜い女であつたので、彼女を見るのも恥かしいくらいであつた。

焦つたさうに一言二言罵つて、體を支へてゐない方の手で、無暗に全身を引つ搔いてから、彼女は彼の姿を認めることが出来る程度に髪の毛を眼から拂ひのけた。體をあちこちと搔り、酒のために思ふやうにならない腕で手まねをしながら坐つてゐた。その手まねは笑ひの發作の伴奏として動かされてゐるやうに見えた（顔だけはほんやりして眠さうではあつたが。）

「え、お前さんか？何だい、そこにゐるの？」こんな意味をいふ積りの唖れ聲が、やがて彼女から、さも馬鹿にしたやうな調子で出て来た。そして彼女の頭は前にのめつてその胸の上に落ちた。

「歸つて来たか？」と暫くしてから彼女はいやな金切聲でかふ叫んだ。恰も彼がたつた今さういつたでもいふやうに。「さうさ、お歸りなすつたんだよ。始終お歸んなすつてゐるんだよ。歸つたか？さうさ、歸つて来たよ、何故いけないの？」

彼女は自分で張り上げた意味のない怒號の勢ひに驅られて、這ひ上り、壁に兩肩をもたせて體を支へながら立つた。片手では見苦しい帽子のぼろぼろになつたのを、紐をもつてぶらぶらと搔りな

がら、いかにも輕蔑したやうに彼の顔を見ようとした。

「わたしやお前さんのものをまた賣つちまふよりお前さんのものをまた賣つちまふよ、わたしや幾度だつてお前さんのものを賣るよ！」と、怒つて嚇かしてゐるとも、對手を馬鹿にして踊つてゐるともつかない眞似をしながら、かふ叫んだ。「寢臺のところをお退き、お退き！」彼は顔を手で

—四四二—

蔽ふて寢臺の一端に腰かけてゐた。「そこをお退き、退いとくれ、それはわたしんだよ、わたしはこれを勝手にしてもゝんだよ！」

彼女がひよろひよろしながら寢臺のところへ行くと、彼は身ふるひして彼女を避け——顔はまだ隠したま——部屋の反對の端へ行つた。彼女はどかりと寢臺の上に身を投げると、すぐにはげしい軋をかき出した。彼は椅子に身を埋めたま、一晚中たゞの一度より動かなかつた。それは、彼女に蒲團を投げてやる爲めであつた、ゐはゞ暗闇の中にあつてさへ、體をかくした両手だけでは彼女の姿を眼からかくすに足りなかつたともいふやうに——

十四、出口はなし

青白い朝の光が、まだコークタウンの空一杯に尾を紆らず巨大な煙の蛇身を見せないうちに、もうあの神仙の宮殿は明るくなつた。鋪石の上には騒々しい木靴の音がする。鐘ははげしく鳴る。例の『憂鬱の蟲にとつゝかれた象』は一日の單調な仕事の爲めに、磨きたてられ、油をさゝれて、またも重苦しく運轉し出した。

ステイヴンは靜かに、油斷なく、しつかりと織機の上に身を屈めてゐた。ステイヴンが働いてゐるこの織機の林の中では誰も彼もさうであるが、彼は自分に骨を折らせてゐる、このすさまじい音をたて、壓しつづし、引裂いて行く機械に對して、著しい對照をなしてゐた。苦勞性な善人達よ、人力が天然を忘卻させてしまひはせぬかなどと決して心配したまふな。どこでもゝから神の仕事と人間の仕事を並べて見たまへ、神の仕事は、たゞそれが取るに足らぬ多くの職工の群であるとしても、比較して見たらきつと尊さを増すだらう。この工場の中には幾百といふ職工が居り、數百馬力の蒸氣の力があつた。機械のすることは、たつた一ポンドの重さの力までも知られてゐる。けれども落ちついた顔をして、一齊に規則正しく立ち働いてゐるこれらの靜かな機械の奉仕者達のどの一人かの心の中で、或る與へられた一瞬間に動いてゐる善か悪かに向ふ力、愛か憎しみかに向ふ力、愛國心か不平かに向ふ力、徳が分解して惡徳に墮ちてゆく作用かその反對の作用かに向ふ力がどれほどのものかといふことは、國債とか公債の勘定ばかりしてゐる聯中が一緒になつても語ることが出来ない。機械の方には何の神祕もない、職工の方にはその最も話らない一人のうちにも永久に測り知ることの出来ない神祕がある。——假に我等の算術を物質的なものを計るにのみ要るものとしてのけて置いて、これらの人達の恐ろしい測り知られぬ力を支配するには他の方法によることにしたらどうであらふ！

夜は次第に明けて、内部に輝く燈火を消すほどに戸外も

—四四三—

明るくなつた。燈火は消されて、仕事は續いた。雨は降つてゐたので、あらゆる蛇類の受けてゐる呪ひ通り、煙の蛇身は地上に低く尾をひいてゐた。外の廢物置場では、排氣管が出る蒸氣や、樽や、古

鐵の廢物や、光つてゐる石炭の山や、到るところに溜つてゐる灰は皆、霧と雨のヴェールに包まれてゐた。

仕事はどんどん續いた、やがて正午の鐘が鳴つた。鋪石の上には朝よりも烈しい木靴の音が響いた。織機も、車輪も、職工も、みな一時間のあひだ運轉を休んだ。

ステイヴンは蒸し暑い工場の中から、濕つぽい風が吹き、冷たい雨の降つてゐる通りに出て來た。彼は褻れてがっかりしてゐるらしく見えた。彼は仲間を離れ、自分の織機のある處から出て、パン片を嚙つて歩きながら、その雇主が住んでゐる丘の家の方に向つた。それは板煉瓦の家で、外側に黒い鎧戸があり、二段の白い石段を登つて、黒い玄關の戸口に達するので、眞鍮の標札に『バウンダアビイ』（それは主人公によく似た字體であつたが）とあり、その下には丁度、眞鍮製の句讀點のやうに扉の把手がついてゐた。

バウンダアビイは晝喰中であつた。ステイヴンはきつとさうだと思つて來たのである。工場の職工の一人が御主人様に申し上げたいことがあると召使に頼むと、その職工の名前をといふ主人からの返辭。ステイヴン・ブラックプールといふと、ステイヴン・ブラックプールなら別に面倒なことはない、通つてもよいといはれた。ステイヴン・ブラックプールは應接間に通つた。バウンダアビイが（彼は主人とは一面識があつたに過ぎない）、チョップとシエリ酒で晝喰をとつてゐた。スパージット夫人は鞍上に片燈をかけたといふやうな態で、即ちその燈である綿布の足掛けに片足突込んで、爐邊で編物をしてゐた。晝喰をとらないといふことは、スパージット夫人の威嚴の一端であり、奉仕の一部分であつた。彼女は職務上から喰事の世話をしてゐたが、彼女自身のやうな身分のある人の場合には、晝喰は一つの弱點だと思ふといふことを、それといはずに示してゐた。

「さあ、ステイヴン。」とバウンダアビイがひつた。「君は何か用かね？」

ステイヴンはお辭儀をした。卑屈なお辭儀ではない——かふした職工達は決してそんなことはしない——どうしてどうして、たゞへ彼等が二十年諸君と一緒にゐても、そんな卑屈なお辭儀をするのを見つけるやうなことはあるまい！ たゞスパージット夫人に對する禮儀として、彼は頸卷の端を胴衣の中に押しこんであた。

「さあ」とバウンダアビイはシエリ酒を少し飲んでゐた。「わたしたちは、君について別に苦情をいはれたのを聞いて」

—四四四—

たことはないし、君もあの分らずや聯中の一人ぢやなかつた。君はあの聯中が考へてゐるやうに六頭立ての馬車に乗つたり、金の匙で海龜のスープや、鹿肉を喰はふなどと思つちやならん！——バウンダアビイはこれが十分満足してゐない職工聯の、唯一つの早急で直接な希望であるかのやうに、いつもかふいふのであつた。「で、君が不平をいふ爲めに來たのでないことはわしもよさう承知してゐる、な、さうぢやらう。前もつてわしはちやんとさう思つてゐる。」

「さうでござえます、たしかにわしはそんなことで上つたんぢやござえません。」

バウンダアビイは前もつて、しつかりと確信してゐながらも、意外な氣がしたが、惡氣はしなかつた。「さうぢやらう。」と彼は答へた。「君は實直な職工ぢや、わしの眼は間違つてゐなかつた。ところで何の用事か聞かう。そんな苦情話でないとする、一體どんなことぢやね。何の話ぢやね、いつて見たまへ。」

ステイヴンはふとスパージット夫人の方を一瞥した。「バウンダアビイさん、何ならわたしはあちらへ參つても宜しうございますよ。」自分を犠牲にしたがるこの夫人はかふいつて、足掛けから足を抜か

うとするやうな様子をした。

バウンダアビイは、口一杯に頬ばったチョップを飲みこむのを止めて左手を差し出して彼女をとめた。それから手を引つこめ、肉片をのみこんでステイヴンにかふあつた。「君、この方は生れながらの貴婦人なんぢや、身分のある婦人ぢや、この方がわしの爲めに家事向きのことをして下さるからといふんで、身分の高い方だからうとか——さうぢや、大層もなく身分の高い方だからうなど、思つてはいかな。さあ、君がこの生れながらの貴婦人の前でゐへないことがあるなら、この方は部屋を出て行かうと仰しやる。ぢやが君の話が、生れながらの貴婦人の前でも差支へのないことなら、この方はこのまゝ部屋においてになつてゐたゞかふ。」

「わつしの申し上げることに生れながらの貴婦人が聞かれて悪むやうなことは何もありません、わつしだつて生れながらの人間ですから。」と一寸顔を赧らめてかふ答へた。

「成る程な。」とバウンダアビイは皿を押しやつて、後によりかゝりながらゐつた。「さ、遠慮せんでゐつてしまふがよい！」

「わつしは、」とステイヴンは一寸考へたあとで、牀を見てゐた眼をあげてかふ話し出した。「お前さまの御意見を伺ひに参りました。それがどうしても伺ひてえと思ひましたから。わつしが復活祭の月曜日に結婚しましたなア長い退屈な十九年も前でござえました。若い娘で繚緻も相當でした。評判もよかつたんでござえます。ところでそいつが問もな

一四四五

く悪くなつちめえました。わしのせみぢやござえませんが、わしがあれにとつて不深切な亭主ぢやなかつたつてことは、神様も御存じでござえます。」

「うむ、そのことなら以前すつかり聞いたことがあるんぢや。」とバウンダアビイがひつた。「妻君が酒を飲み始めて、仕事はしなくなる、家具を賣りとばす、衣物は質に入れる、で大騒ぎさせたといふんぢやね。」

「わつしはそれでも我慢しりました。」

(「それだけ貴様が馬鹿なんぢや、」とバウンダアビイは酒のコップに向つてかふ内証言をゐつた。)
「わつしはどこまでも我慢しりました。何度も何度もあれの悪むところをよくしようとして見ました。あゝもし、かふもし、やつてみねえこたアござえませんでした。わつしが家に歸つてみると、虎の子のやうにして持つてゐたものが、一切合財見えなくなつて、何も敷いてない牀の上に正體もなくあれがぶつ倒れてゐることが幾度あつたか知れませんが。それも一度や二度ぢやござえませんが。數へ切れない位でござえます。」

さういつてゐるうちに、彼の顔の皺といふ皺は深まり、忍びに忍んで來た苦難の色が哀れつぽく現はれて來た。

「悪む、悪むがもつと悪くなる、それがまたもつと悪くなるといふわけだござえまして、たうたうあれは家出をしました。そして苦しいとも、悪いとも、もう方々でひどい恥さらしをしては、何度も何度も歸つて來るのでござえます。どうしたらあの女を寄せつけねえやうにすることが出來ませう。毎晩々々、わつしは家に歸る前に、長いこと、それを考へて町を歩き廻りました。それから思ひ切つて橋のところへ行き、いつそ身を投げてこんな厄介な目に會ふめえとも思つてみやした。わつしは我慢に我慢をして参りましたので、まだ若いのに年をとつてしまひました。」

スパージット夫人はゆるゆると鐙を動かしつつ、調子よく編針を運んでゐたが、そのコリオーレーナス型の眉をあげて、『貴人も賤者と同じやうに苦勞がある。そのお前の微賤な眼をこの方に向けて御覽』

とゐはんばかりに頭を振った。

「わつしはたうとうあの女を寄せつけねえやうにする爲めに金を拂ふことに致しやした。この五年といふものあの女に金を拂つて参りました。でわつしはまた一寸した家具のやうなものを少しばかり買ひました。わつしはその間辛い悲しい生活をしやしたが、それでも一寸だつて恥かしいと思つたり、恐ろしいと思つたことがござえませんでした。ところが昨日の晩わつしが家に歸つてみると、あの女が爐牀の上に寝てゐるんでござえます。あの女がやつて来てたんでござえます。」

彼の不幸の強さと苦惱の力に引きずられて、彼はその瞬

—四四六—

間、赧み顔をして思はず昂然と頭をそらした。だがそれも一寸のことで、彼は間もなく今まで通りに背中を屈めて、立つてゐた。彼の考へこんだ顔はバウンダアビーの方に物ゐひたげに向つてゐたが、半ば鋭い、半ば當惑した、恰も彼の心が何かひどく難かしの問題を解かうとしてゝもあるやうな、妙な表情を浮べてゐた。左手は帽子をしっかりと握つて腰にあて、右手をぎこちないが適當に力強く振りながら、熱心に自分の言葉を強調してゐた。彼が話をとぎらすと、手はその度に動くのをやめて、少し曲げられたまゝ黙つてゐたが、矢張り引つこめられるやうなことはなく、そんな時にも彼の態度に力を添へてゐることに變りはなかつた。

「わしはそのことを皆聞いて知つとるんぢや。」とバウンダアビーはゐつた。「一番終ひの話の外は、づゝと以前から聞いとるぢや。君はもとのまゝ、獨身者で満足して、結婚なんぞしなひである方がよかつたんぢや、もつとも今更そんなことをゐつたつて追つゝかんわけぢやが。」

「それは年齢の點で不釣合な結婚ぢやありませんでしたか？」とスパージット夫人が訊ねた。

「君、この方が聞かれる點はどうだね。年齢の點で不釣合な結婚ぢやなかつたかね、君の不幸な結婚は？」とバウンダアビーがひつた。

「そんなことはありません。わつしが二十一であの女は二十でしたから。」

「おやさうでしたの？」と夫人はひどく落ちつき拂つて主人にゐつた。「あまり不幸な結婚ですから、きつと年齢の點で不似合ひだと思つたのでございます。」

バウンダアビーは妙に目蓋しひ色を帯びた横眼で、その善良な夫人の方をぢつと睨んだ。彼はもう少シツシイエリ酒を飲んで力をつけた。

「それから？どうして話をつづけないか、」と彼は一寸苛立たしさうにステイヴンの方に向いてゐつた。

「わつしはあの女をどうしたら厄介拂ひが出来るか、一つお前様に御意見を伺ひに来たのでござえます。」とステイヴンは彼の注意深い顔の混み入つた表情に、一段と深み眞剣な色を加へていった。スパージット夫人は内心に何か感動でもしたことがあるかのやうに品のよい叫びを上げた。

「君はどんなつもりぢやね？」とバウンダアビーは立ち上つて、爐棚に背をもたせかけてゐつた。

「君は何を話してるんぢや？『善きにつけ悪きにつけ』（結婚の宣誓の際に用ゆる語）と誓つてその女を選んだのぢやらうが。」

「わつしはあの女を追つ拂はずにはをれません。もう我慢が出来ません。わつしはこんなに長く苦しんで來やした、それも皆、わつしが天にも地にも又とねえ良い或る女の

—四四七—

情と、慰めの言葉を受けて来たからでござえます。その女がゐなかつたら、わつしは大方氣狂ひになつたこととござえませう。」

「あの人は自由の體になつて、今話してゐる女の人と結婚したいのだらうよ。」とスパージット夫人が低い聲であつたが、それには人間の不徳義にひどく失望した調子があつた。

「さうでござえます。奥さんのお言葉の通りでござえます。わつしは、今少しでさうする積りでござえました。わつしは新聞で見やしたが、御身分柄のお方たち（こりや本當のことなんで！わつしはその方達に悪意などはござえません！）あの方達の不仕合せな結婚でものから自由になつて、再び結婚出来ねえほど堅くは誓言をお立てなさらねえやうで。お互ひの氣質が合はねえとか何とかで、お互ひの仲がしつくりと行かねえ時にや、あの方達ア家の中に部屋が幾つもありやすから、別々にゐることが出来やす。わつし達下々のものは部屋が一つだもんで、それが出来ません。それでいけねえ時にや、あの方達は金貨とか銀貨とか澤山のお金をもつてゐて、『こりやお前の、あれはわしのだ』といつて、めいめい思ひ思ひにやりやす。わつし達には出来やせん。それにも拘らず、あの方達ア、わつし等の場合よりもつと詰らねえことで自由な體になれるんでござえます。ですから、わつしはこの女とどうしても縁切りをしなくちやなりやせん。わつしはその方法が知りてえのでござえます。」

「うむ、方法が知りたいのぢやね。」とバウンダアビイが答へた。

「若しもわつしが少しでもあの女に惡くすれや、わつしに罰を煙管法律があるんでござえませう。」

「勿論ある。」

「若しもわつしがあの女のところから逃げ出せば、やつぱしわつしに罰を煙管法律があるんでござえませう。」

「勿論ある。」

「わつしが外の好きな女と結婚すると、やつぱしわつしに罰を煙管法律があるんでござえませう。」

「勿論ある。」

「若しわつしが結婚をしねえでも、外の女と一緒に暮してゐて、——そんな事ア、わつしにもする積りはござえませんし、女も心掛けのゝもんで、するこたア出来ませんけれど、若しそれが出来るとして、何も知らねえわつしの子供が一人生れる度にわつしに罰を煙管法律がござえませうか？」

「勿論ある。」

「後生でござえますから、」とステイヴン・ブラックプールはあつた。「わつしを助ける法律を教へて下せませう。」

—四四八—

「えへん！人生のこの關係には神聖なものがあるんぢや。」とバウンダアビイがひつた。「それで——それでぢや——これだけは是非維持して行かんけりやならんのぢや。」

「いや、いや、そんなことを仰しやらんで。あんな風に續けていかれちやなりません。あんな風では駄目でござえます。あんな風に續けて行くこたアやめて貰はなけりやなりません。わつしは織機職工で、子供の時から工場に居りやすが、見る眼や聞く耳ぐれえは持つて居りやす。わつしは巡回裁判の度に、公判の度に新聞で見やした——お前様もお讀みになつたでござえませう。——わつしはちやんと知つとりやす——恐ろしいことだが——それはどんなに金を出しても、どんな條件を出しても、お互ひに自由な體になれさうに思はれねえので、血を流すやうな破目になる、夫婦の仲に喧嘩が持ち上る、斬るの突くのとてふことあるんでござえます。わつし達にこの權利をよく合點させて下せませう。」

し、わつしの立場はやりきれたものぢやござえませぬ。わつしは——御深切にお纏りして——わつしを助ける法律が知りてえのでござえませぬ。」

「では教へてあげよう！」とバウンダアビイはポケットに手をつ突つ込んであつた。「そんな法律があることとはあるんぢや！」ステイヴンは落ちついた態度に戻つたが、注意を散らさないでがくりと一つうなづいた。「ぢやが、それは全然君には不向ぢや。何しろ金がかゝるのぢやから、うんと金がかゝるのぢやから。」

「どれ位でござえませうか？」とステイヴンは落ちついて訊ねた。

「だつて君、先づ、ドクターズ・コモンズ（一の法律團體で、離婚事件等を扱ふ）に告訴し、民事裁判所に告訴して、それから上院に持ち出し議會の法令を受けてからでない、君が再び結婚出来るやうにならんぢや。それがすらすら行つたとしても、千ポンドから千五百ポンドはかゝるぢやらう。」とバウンダアビイはあつた。「多分倍もかゝるかな。」

「外に法律はござえませぬか。」

「無論ない。」

「だつてそれぢやお前様」とステイヴンは眞蒼になつて、恰も何もかも四方に吹き飛ばすやうに、例の右手を振りながらかふあつた。「そりや無茶だ！全く無茶苦茶だ。早く死んだ方がそれだけあつてことになりませぬ。」

（スパージット夫人は再び下々の者の不信心に失望した。）

「馬鹿な！君、詰らんことをいふもんぢやない。」とバウンダアビイはあつた。「自分に分らんからといつて馬鹿をいふもんぢやない。國の制度が無茶苦茶だなどといつてはいくわんぞ、君。でない、君はそのうちに本當に無茶苦茶な目に會ふぢやらう。君の國の制度は君の仲間仕事ではな

—四四九—

あんなぢや。君がしなくちやならんことは、自分の仲間仕事に氣をつけることだけぢや。君は遊戯半分に妻を貰つたのではなからう。『善かれ悪かれ』一生變らんといふので貰つたのぢや。若しその女が、悪くなつたとしても、——さうぢや、わし達にはせいぜいかういへるだけぢや、同じやうにその女はよくなつたかも知れんとな。」

「まるで無茶苦茶だ、」と彼は首を振り振り、戸口の方へ出ながらあつた。「無茶苦茶だ！」「實をいふとぢや、君」とバウンダアビイは別れの言葉としてあつた。「君の意見は神聖を瀆すものなんぢや、君の意見を聞いてこの方は全くびつくりなされた。この方はわしが前にあつたやうに、生れながらの貴婦人ぢやし、それにまだ君にはひはんかつたが、やつぱり不幸な結婚をされたんで、數萬ポンドの金を使はれたんぢや。數萬ポンドのな！」（と彼はこの言葉を口で味ふやうにゆつくりと繰り返してあつた。）「君はこれまで着實な職人ぢやつた、ぢやがわしの意見では、またそれだけに腹藏なくいふが、君は横道に逸れかけてゐる。君は誰か惡い渡り者の話に耳を貸してゐるな。——彼奴等はいつものあたりをうろついてゐるんぢや。——君がすることの出来る最善のことは、それから抜け出すことなんぢや。あゝか。」——こゝで彼の顔色は不思議なほど鋭い表情になつた。——「わしは他の人間と同じやうに、世間のことに分るんぢや、恐らく他の大勢よりもつとよく分るかも知れん。わしは若いときには随分と苦勞したんぢやからな。こんな苦情の中には、どうも海龜のスープや、鹿肉や金の匙の形蹟が見える。さうぢや、見える！」と彼は頑強さうに狡猾さうに頭をふつて叫んだ。「たしかにわしには見える！」

ステイヴンはこれとはかなり異つた頭の振り方をして、深い溜息をついて言つた。「有難うござえま

した。御免下せえまし。」壁にかゝつてゐる自分の肖像を見て、今にもその肖像畫の中に飛び込みさうに威張り返つて脹れてゐるバウンダビーを残して、彼は立ち去つた。スパージット夫人は世間の悖德に全くがっかりしたといふ顔つきで、矢張り片足を例の鎧に突つ込んでゆるゆるとそれを動かしてゐた。

十二、老女

老ステイヴンは二つの白い段々を下り、眞鍮の把手を掴んで、眞鍮の標札のついてゐる黒い扉を閉めた。彼の熱した手が把手を曇らしたのを見て、上衣の袖で去り際にそれを擦つた。彼は地面に眼を伏せたまゝ街路を横切つて、悲しさうに歩いて行つた。その時誰かゝ腕に觸つたのを感じた。それは、こんな際に彼が最も欲しかつた手の感觸ではなかつた。——この上もなく崇高な愛と忍耐をもつた神の御

—四五〇—

手が高く上げられた時に、激怒する海を静めることが出来るやうに、彼の心の荒れ狂ふ波を、平穩にするこの出来る手ではなかつた。——だが、やつぱり女の手であつた。それは年をとつて、色艶こそ失せてはゐるが、背がすらりと高く、恰好のよい一人の老女であつた。立ち止つて振り返つたときに、彼の眼がその女にふれたのである。彼女は質素ではあるが非常にさつぱりした衣物を着てゐた。鞆にはまだ田舎道の泥がくつゝゐてゐて、今遠路をやつて来たばかりのところと見えた。馴れない街の噪音の中に、それは昂奮したその態度と、擴げて腕にひっかけてゐる用意の肩掛けと、重い傘と、小さいバスケツトと、手になれなひゆるゆるの指の長い手袋と、そのすべてが、質素な晴衣を着て、たまたまの休みにコークタウン見物に出掛けて来た田舎の老女であることを物語つてゐた。ステイヴン・ブラックプールは、彼等の仲間に獨特な鋭い觀察で、一目でこれを見てとると、女が彼に訊ねることをよく聞くために、その注意深い顔を傾けた。それは彼のやうな階級の多くの聯中の顔の例にもれず、はげしい噪音の中にあつて、眼と手で長い間働いてゐるために、耳の聾した人達の顔によく見かけられる妙に緊張した顔付であつた。

「一寸恐れ入りますが。」とその老女はあつた。

「あの旦那のお宅から出ておいでになつたのはあなたぢやございませんでしたかしら？」とバウンダビーの家の方を指さして、「お後を隨つて参りそこなつたのでなければ、たしかあなたと思ひますけれど。」

「ちうでござえます、奥さん。」とステイヴンは答へた。「わつしでした。」

「あなたは——この年寄りをお免し下さいませよ、——あなたはあの旦那にお會ひになりましたでせうか？」

「會ひやした。」

「旦那はどんな様子の方でございましたでせうか？どつしりとを肥りになつて、お強さうで、腹に毒のない、深切氣のある方でございましたか？」彼女が體を延ばして、言葉に動作を合せながら、頭をぐつと起したときに、ステイヴンはふと、以前この老女にどこかで會つたことがあるやうな氣がし、又この女が何となく厭になつた。

「えゝ、さうでござえます。」と彼はもつと注意深く彼女をみつめながら返辭をした。「旦那は全くあんたの仰しやる通りでござえました。」

「そしてお達者でしたか。」と老女はゐつた。

「お元氣で？」

「えゝ。」とステイヴンは答へた。「何だかあの人はぶんぶん蜂のやうに大きな音を立てゝうんと喰つたり飲んだりしてゐましたよ。」

—四五二—

「有難うございました。」と老女はこの上もなく満足してゐつた。「有難うございました。」

彼はたしかにこの女を以前に見たことはなかつたけれども、何だか夢か何かで一度ならず、このやうな女を見たことがあるかのやうに、心の中には臙げな記憶があつた。彼女は彼と並んで歩いて行つた。彼は、もの優しく彼女の氣分に調子を合せながら、老女に、コークタウンは忙しい土地ではないか、などと話してみた。彼女は「まあまあ！恐ろしく忙しいところですねえ！」と答へた、田舎から出てをひでなすつたやうに見えるがと彼が訊ねると、彼女はさうだと答へた。

「はい、今朝、割引列車でね、今朝、割引列車で四十哩先から参つたのですよ。午後にはまたこの四十哩の道を歸つて行くのでございます。今朝は停車場まで九哩ほど歩きましたね、歸りに誰か途中で序に車にのせてくれる人にも出會さないと、又九哩ほど歩かなくちやなりません。そりや、あなた、わたしの年ではどうして可成り骨でござりますよ！」と話好きの老女は昂奮に眼を輝かしてゐつた。

「全くでござりますとも、そんなことは餘り度々しねえ方がよすがすよ。」

「はい、はい、なかに一年に一度きりでございますよ。」と彼女は頭をふつていつた。「毎年わたしのお小遣がたまると、かふして使ふのでございますよ。街を歩いて、旦那様方を見るために、缺かさずやつて来るのでございますよ。」

「たゞ見るだけで？」とステイヴンがきつ返した。

「わたしはそれで澤山でござりますもの。」と彼女はひどく眞面目な、熱心な態度で答へた。

「わたしにはそんな大した望みは、ござりません！わたしはあの旦那が、とバウンダアビーの家の方へ再び頭を振り向けて、「出て來られるのを見たいので、道のこちら側に立つてゐました。ですが、あなたの方は今年が出るのが晩くて、たうとう見られませんでした。その代りあなたが出て來られたのでござります。わたしはあなたの方を二眼も見ないで歸らなければならぬのでござります。たつた一眼でいゝんでござりますけれどもねえ——まあ仕方がない、わたしはあなたにお眼にかゝりましたし、あなたはおの方にお會ひになつたんですし、わたしもそれでゐゝとしなくてはなりませんまいよ。」と彼女はかふいつて、心の中にステイヴンの容貌をしっかりと刻みつけようとするかのやうにちつと彼を見た、だがその眼は前程に輝いてはゐなかつた。

人間の趣味は十人十種といふことを考慮に入れても——コークタウンのお歴々達に全然服従してゐたとしても、その位のことではこんな大骨折りをするなどとはどうもこの老女の趣味がひどく變つてゐるやうに思はれたので、彼は

—四五三—

狐につまゝられたやうな氣がした。だが、彼等は丁度その時、教會の側を通つてゐたので、彼はふと時計に眼をやると、歩みを早めた。

あなたは仕事にお出掛けのところではないかと老女はいつて、自分もまたさつさと足をはやめた。

さうだ、時間は殆ど切れてゐる。彼が自分の働いてゐるところを話すと、老女は前よりも一層不思議な老女になった。

「あなたはお合せぢやないのでございますか？」と彼女は彼にたづねた。

「そりやね、――苦勞のない人間といふものは、まづ世間にはござえませんよ。」と彼はぼんやりとさう答へた。それは彼女が彼を、勿論ひどく合せせだらうと思つてゐる様子であるし、さう思つてゐる彼女を失望させる氣にもなれなかつたからであつた。世の中にはどつさり苦勞はあるものだといふことを、彼は知つてゐた。そして老女がこれ程長生きして、彼には苦勞がないと思ふことが出来れば、勿論彼女にとつてはそれだけよいことだし、彼にとつてもちつとも惡いことではない、彼はかふ思つた。

「はい、はい、家の中の苦勞があると仰しやるのでせう？」と彼女はあつた。

「時々はござえます。ほんの時々でござえますがね。」と彼は軽く答へた。

「だが、あんな旦那の下で働いてゐれば、工場に行けばそんな苦勞は忘れるでせうね。」

さうだ、さうだ、工場まで苦勞はついて来はしないと彼はあつた。そこでは萬事が正しい。そこでは何もかも調和してゐる（彼は彼女を喜ばせるために、そこには神の正義があるとまではひはなかつた。しかし近年になつて殆どそれと等しい立派な要求がされるのをわたしは聞いてゐる。）

彼等は今は工場近くの、眞黒く煤けた裡道に来てゐた。職工達は押し合ふやうに群つて構内に入つてゐた。鐘は鳴つてゐた。煙の蛇はぐるぐると幾重にもとぐるを巻いた。例の蓼矯意奮来てゐた。鐘は鳴つてゐた。煙の蛇はぐるぐると幾重にもとぐるを巻いた。例の『象』は用意が出来てゐた。この不思議な老女は、鐘の音を聞いたばかりでひどく喜んだ。それはこれまで聞いたこともない美しい鐘で、すばらしくるゝ響たと彼女はあつた。彼は入つて行く前に、深切にも老女と握手する爲めに立ち止まると、彼女は何年この工場で働いてゐるのかと訊ねた。

「十二年！」と彼は答へた。

「この立派な工場で十二年間も働いて来たといふお手をわたしに接吻させて下さいまし。」

彼は拒めれば拒みたかつたのだが、彼女はお構ひなしにその手を取り上げて、自分の脣に押しあてた。彼女の年齢とその醇朴さの外には、どんな調和が彼女のまはりにあ

―四五三―

つたものか、それは彼には分らなかつたが、この氣狂ひぢみた行爲にさへも、時と場所に不釣合ひだとはかり思へない或るものがあつた。他の誰にも彼女と同じやうに眞面目にこれをする（ことも出来ず、またそれほど自然に、人の心を動かすことも出来ないと思はれる或るものがあつた。彼はこの老婆のことを考へながら、たつぷり三十分程織機のところで働いたときに、丁度、織機の具合を調節するためにそのまはりを廻らなければならなかつたので、ふとその隅にある窓を見ると、彼女がまだ、驚嘆した様子で夢中になつて山のやうに重なり合つた工場の建物を見上げてゐるのが眼についた。煙や、泥や、温氣や、又、往復の長途などにはお構ひなく、彼女は工場の何階からも何階からも聞えて来る重々しくどしんどしんといふ織機の音が、彼女にとつては素敵な音楽でゝもあるかのやうに、この建物をぢつと見てゐるのであつた。

やがて、彼女は立ち去つた。その日も彼女の後を追つて暮れていつた。そして再び燈火が浮き上つた。急行列車は近くの鐵橋の上の、あの神仙の宮殿がよく見えるところを風のやうに過ぎて行つた。

――だが織機の音を立てゝある眞只中では、汽車の振動も餘り感じられず、織機のすさまじい響をのぞいては、殆ど何も聞えなかつた。暫く前から彼の考へは、あの小さな店の上の蔭慘な小さい部屋の

方に、そして、その寝臺の上に重く、しかし彼の心の上には尙重く、横はつてゐる恥知らずの女房の方に歸つてゐた。

機械は廻轉をゆるめた。絶え入る脈搏のやうに、弱々しく波打つてやがて止つた。鐘がなつた。光と、熱の輝かしさが消えた。暗い雨の夜に、工場はどつしりと臙ろな姿を見せてゐた——高い煙突は、高さを競ふバベルの塔のやうに空中にそゞり立つてゐた。

彼がレイチエルに言葉をかけて、少しばかり彼女と一緒に歩いたのはまだ昨晚のことであつた。それは實際である。だが彼に降りかゝつたこの新しい不幸を、たゞの一時でも慰さめてくれることの出来るのは、レイチエルの他になかつた。また、彼女の聲以外には誰の聲も、自分の怒りをやはらげてくれることは出来ないと思つてゐる彼は、彼女があゝゐつたが、今度だけは許して貰つて、もう一度待つて見ようかといふ氣になつた。

彼は待つた。だが彼女は彼を避けた。外の晩なら彼は彼女の辛抱強い優しい顔がなくても、どうにか濟ますことが出来たであらふが——あゝ家があつても、こんなことのために歸るのが、怖いやうなら、いつそ頭を横たへる家も何もない方がました。彼は喰べたり、飲んだりした、ぐつたりと疲れきつたからである、——けれども彼は何を喰つて、何を飲んだのか少しも知らなかつたし、又構はなかつた。冷た

—四五四—

る雨の中を彷徨ひ歩いて、いろいろ考へつゞけ、思案しつゞけた。レイチエルと自分との間には新しく結婚しやうなどといふ言葉は交されてゐたのではなかつた。だがレイチエルは何年か前からひどく彼に同情を寄せてくれた。彼もまた彼女一人だけにいつも、自分の不幸な世帯について、様々な胸の中の恨みを打ち開けてゐた。そして彼が自由の體になつて頼めば、彼女は結婚してくれることをよく知つてゐた。彼は若し、それが出来たら、今ごろは喜んで得意になつて家路を急いでゐたかも知れないことを考へてみた。その夜、自分は變つた人間になつてゐたかも知れない。今の重い鉛のやうな心も、さうなつたら、さぞ軽々となつたことだらう。今は、何もかもが無茶苦茶に引裂かれてゐるが、さうなつたら名譽も、自尊心も、平和もとるかへしてゐただらう。彼は自分の生涯の大半が浪費されたこと、その爲めに毎日々彼の性格が悪む方に變化して行つたこと、死んだやうな女に手も足も縛りつけられ、その女の形をして現はれた悪鬼に惱まされてゐる自分の生活の恐ろしさを考へてみた。また彼はレイチエルのこと、彼等が初めてかふした境遇に入つた時はどんなに若かつたか、そして今はどんなに年をとつたか、またどんなに早く老けてしまふかといふことを考へてみた。彼はまた彼女が、結婚して行く娘や女の數をどれだけ見たかと考へてみた。彼女が自分の周囲で成長するのを見て来た子供の家庭の數がどんなに多いことであらふ、彼女はどんなにか満足して——彼の爲めに——自分の淋しい静かな道を辿つて来たことだらう、それでも時々、彼女の幸縮な顔にも、うつすり憂鬱の影がさすのが見えると、それが後悔と、絶望とで、彼の心を苦しめた——彼はそんなことを考へてみた。彼は、彼女の面影を、昨夜の忌はしひ姿と並べて、置いて見た。そしてあんなにしとやかで、善良で、獻身的な女のこの世での道すぢが、あんな恥知らずの爲めに全く抑制されてゐてもあゝものだらうかとまで考へてみた。

かふした考へで一杯になつて、——全く一杯になり過ぎたので、體がぐゞとふやけたやうな、また自分が通りすぎてゐる周囲のものに對して、新たに何か病的な關係をもつてゐるやうな、ぼんやり輝く街燈といふ街燈のまはりの量が赧くなるのが見えるやうな不快な感じがしてゐた——彼はたゞ寝る爲めに家に歸つた。

十三、レイチェル

窓に蠟燭がぼんやり点つてゐた、この窓は、稼ぎ者の女房やお腹のすいた澤山の子供達にとつて、世の中で一番大事であつた『一家の柱』を滑り出させるために葬儀屋の眞黒な梯子が度々かけられたものであつた。ステイヴンは

―四五五―

様々な考への上に、世の中のあらゆる不幸の中でも、死といふものほど不公平に與へられるものは、一つもないといふ依怙地な考へを思ひ浮べてみた。生の不平等などはそれに較べればいふに足りない。例へば王子と、織機工の子供が、今晚同じ時間に生れたとしても、他人の役に立ち他人に愛されてゐる人間が死んで、この見棄てられた女が生きてゐる事に較べれば、その不釣合くらゐは何でもあるまい！

彼は家の外から重苦しい氣持で、息をこらし、聲音を緩めて、内に入った。部屋の入口まで上つて行つて、扉を開いて中に入った。

そこには、静けさと沈黙があつた。レイチェルが寢床の傍に坐つてゐた。彼女は、頭を振り向けた。彼女の顔の光が、彼の心の眞夜中の闇に明るく差しこんだ。彼女は彼の妻の看護をしながら寢床の側に坐つてゐる。即ち、彼は誰かそこに寝てゐるのを見たが、それは彼の妻であることは分り切つてゐた。けれどもレイチェルが垂幕を下ろしたので、妻は彼の眼には見えなくなつた。妻の汚ない衣物は取り去られ、レイチェルの衣物が部屋の中にあつた。何もかもが、彼がこれまで何時も片づけてゐたやうに、あるべき場所にきちんと整頓されてゐた。小さな洋燈の芯はきれいに切られたばかり、爐は今掃かれたばかりのやうに見えた。彼はかふいふすべてがレイチェルの顔のうちに見られたやうな氣がして、外には何も見えなかつた。その顔をぢつと見てゐるうちに、眼には涙が湧いて来て、俄にそれも朦朧となつた。けれどもその時までには、どんなに熱心に彼女が彼を見てゐたか、そしてどんなに彼女の眼にも涙が溢れてゐたかといふことを見た。彼女は再び寢床の方に向いて、寢床が静かであることを確かめると、低い、静かな、快闊な聲で言つた。

「それでも歸つてくれてよかつたのね。ステイヴン、大へん遅かつたわ。」

「あつちこつちと歩き廻つてゐたんだ。」

「さうだらうと思つてゐたわ。でも歩き廻るには大へん晩おちやないの。雨がひどく降つて、風も出たんですもの。」

風が？成る程、風が激しく吹いてゐた。煙突の中へどつと吹き込んで、波のやうに揺ぶる！こんな風の中に出歩いてゐて、風の吹くのも知らなかつたとは！

「わたし今日先刻一度此處に來たのよ、ステイヴン。お主婦さんがお晝時に呼びに來てくれたの。お主婦さんの話ちや、何だか看取つて上げなくちやならない人がゐるつてね。來て見たらその通でせう。もう噤言ばかりで、ほんとに夢中よ、ステイヴン。それに傷が出來たり、紫斑がついたりね。」
彼はそろそろ椅子のところに着つて行つて、腰を下すな

―四五六―

り、彼女の前に頭を垂れた。

「わたし及ばずながら、出来るだけのことはするつもりで来たのよ、ステイヴン。第一に、あの人はわたし達が二人ともまだ娘だった時代に、一緒に働いたことがあるのと、わたしがあの人のお友達だったときに、お前さんがあの人と想ひ合つて一緒になつたので・・・」彼は皺の寄つた額を手で支へて低い呻き聲を立てた。「そして、また、わたしはお前さんの心を知つてゐるしね。お前さんだつて根が慈悲深い心の人なんだから、看病もしないであの人を死なせることは、いへ、たゞ苦しませるだけでも、出来るわけではないと思つてね。お前さんは『なんぢらの中罪なき者、第一に女に石を擲て』(新約約翰傳第八章七節)と仰しやつた方を御存じでせう。さうしてもあゝ人達は澤山あつたのよ。でもお前さんは、あの人がこんなに零落れてゐるところを見ては、第一はおるかお終ひの石だつて擲るやうな人ぢやないわね。」

「うむ、レイチェル、レイチェル!」

「お前さんもひどく苦しんだのね。どうぞ神様がお酬い下さるやうに!」と彼女は同情にみちた調子であつた。「わたしは心からお前さんのお友達よ。」

先ほど、彼女がひつた傷といふのは、自業自得のこの放浪女の頸のあたりにあるらしい。レイチェルは、彼に矢張りその妻の姿を見せないで、傷に繃帯をしてやつた。彼女は洗面器の中に瓶から何か薬を注ぎ込んで、リネンの布片を浸して、やさしい手で痛みどころの上に當てゝやつた。三脚の卓子は寢臺のすぐ側に引きよせられて、その上に二つの瓶が置いてあつた。これはその一つであつた。この卓子はステイヴンからさう離れてゐなかつたので、彼の眼が彼女の手を追つたときに、その瓶の上に大きく書いてある文字を読むことが出来た。彼は死人のやうに青ざめたり、そしてぞつとする恐怖が不意に彼を襲つたやうに思はれた。

「わたし此處にゐますわ、ステイヴン。」とレイチェルは靜かに自分の席に腰を戻しながらゐつた。「三時の鐘が鳴るまではね、三時になるとまた手當てをしないといけないから、後は朝までそのまゝにして置いてゐるゝでせう。」

「だがお前だつて明日の仕事があるんだ。休まなきやいけえ!」

「わたしは昨夜よく眠つたからゐるゝの。わたしは用があれば幾晩だつて寝ないでゐられるのよ。お前さんこそ休まなくちやならないわ、——そんなに青い顔をして、疲れてゐるんだもの。あそここの椅子のところへ行つてお休みなさい、わたしが見てゐますから。きつとお前さんは昨夜は眠れなかつたんでせう。明日の仕事はわたしよりお前さんの方がよけい辛いわ。」

—四五七—

彼は戸外に、尙ほ猛り狂ふ風が、あらゆるものを揺ぶつてゐるのを聞いた。それは恰も、先刻までの怒りに満ちた心持ちが、再び彼を捕へようとして、荒れ廻つてゐるやうに思はれた。彼女はそれを投げ捨てゝくれた。彼女はそれを内に入れないやうに防いでくれるだらう。彼は自分を防いでくれることを彼女の手にまかせた。

「あの人はわたしの顔が分らないのよ、ステイヴン。あの人はまるで夢うつゝのやうに何かつぶやいて、ちつと見てゐるのよ。わたし時々言葉をかけてみたんだけど、どうしても氣がつかないの! それもその筈だわ。今度、氣がついた時には、わたし出来るだけのことをして上げませう。ちつとも分らないんですから。」

「あれが氣がつくまでにやどのくれえかゝるだらうね、レイチェル?」

「お醫者さんの話ちや、ひよつとしたら明日は正氣になるだらうつて。」

彼の眼はまたも例の瓶に落ちた、戦慄が全身を走つて、手も足もぶるぶる顫へた。レイチェルは彼

が濡れたので寒いのだと考へた。

「さうぢやねえ。」と彼はゐつた。「さうぢやねえんだ。ぎよつとしたんだよ。」

「ぢよよこゝ。」

「うむ、うむ、入つて来たときにな。おいらが歩いてゐた間、おいらが考へてゐた間、おいらが——」ふたゝび顫へが彼を襲つた。彼はいきなり立ち上つて、爐棚につかまつて、まるで痲痺したやうにぶるぶる顫へる手で、濕つぽい冷たい髪をしっかりと抑へた。

「おやステイヴン！」彼女は彼の方にやつて来ようとした。だが彼は手をのべて彼女をとめた。

「いけねえ！来ねえで、来ねえでくれ！寢臺の側に坐つてゐるお前を見さしとておくれ。どうかあの何處までも深切な、何處までも情深いお前を見さしとておくれ。おいらが入つて来たときの、あのお前を見さしとておくれ。さうやつてゐるのが、お前には一番似合ふんだ。一番、一番、一番！」

彼ははげしい顫への發作に襲はれたが、やがて、ぐつたりと椅子に坐りこんだ。暫くすると落ちついて、片膝に肘をつき、その手の上に頭をのせて、彼はレイチエルの方を見ることが出来た。彼のうるんだ眼でぼんやりした蠟燭の向ふを見ると、彼女の頭のまはりには後光がさしてゐるやうに見えた。彼はたしかにさうだと信ずることが出来た。外の風が窓をゆすぶつて、下の戸をがたがた鳴らして、わめいたり、嘆いたりしながら、家のまはりを過ぎて行つたと

—四五八—

きに、彼は全くそれを信じた。「あの人がよくなつたらね、ステイヴン、きつとまたお前さんのところを離れて、またお前さんを一人にしてあげるでせう。そしてもうお前さんに惡む目は見せないやうになるでせう。まあさう思つてゐませうよ。もうわたし、話は止めるよ、お前さんを眠らせたいから。」彼は自分の疲れた頭を休めるといふよりも、むしろ彼女に安心させる爲めに眼をつむつた。けれどもだんだん、風のはげしい音に耳を傾けてゐるうちに、彼はその音を聞かなくなつた。同時に、それが織機の運轉する音に變り、その日ほんたうに話した通りのことを話してゐる書間の人達の聲（彼自身も入れて）に變つて行つた。この不完全な意識さへも、やがて淡く消えて行つた、彼は長い苦しい夢を見た。

それはこんな夢であつた。彼と、彼が長い間思つてゐた或る女と——だがその女はレイチエルではなかつた、この事は夢の幸福の最中でさへも彼を驚かした——教會の中に立つて今から結婚するところであつた。やがて式が行はれる。彼が立會人を見渡して、まだ生きてゐる人達も幾らかあるが、死んだ人達が澤山あるなど思つてゐる間に、いきなり闇になる、續めて恐ろしい電光がやつて来た。それは祭壇のところにある十誠の文章のうちの一行から射し出て来て、その言葉で建物の中をかつと照らした。その言葉がまた、恰も火炎の一字々に聲があるかのやうに、教會中に響き渡つた。すると彼の前や周囲の有様が變つて、彼と、牧師の外にはもとの何も残つてゐなかつた。彼等は白晝非常に大勢の群集の前に立つてゐるのである。世界中のすべての人を一箇所に集めても、これより多く見えずすまひと彼はさう思つた。彼等は皆彼を憎んでゐた。彼の顔の上にそゝがれてゐるその何百萬の眼のうちには、たゞ一つも隣れみの情を浮べたり、親しげな感情を漂はしてゐるものがあなかつた。彼は自分の織機の下の高い壇の上に立つてゐた。そして織機の形の變つたのを見上げて、葬式のお勤めがはつきりと讀まれるのを聞いて、自分はこゝで死ぬはずなのだと思つた。忽ち彼が乗つてゐる壇が下に落ちたと思ふと、彼の姿がなくなつた。

どんな不思議から自分のふだんの生活に、自分の知つてゐる場所に歸つて来たのか彼は考へることが出来なかつた。けれども何かの方法でそんな場所に歸つてゐたには違ひなかつた。だが彼には、こ

の世でも次の世でも、想像も及ばない永遠のあらゆる時代にわたつてレイチエルの顔を見たり、その聲を聞いてはならぬといふ宣告を受けてゐた。希望はないが、そのくせ何だか分からないものを求め（たゞ自分はそれを求めなければならぬ運命なのだといふこと）

—四五九—

だけを知つてゐた、絶えずあちらこちらと彷徨ひ歩いて、彼は名の知れぬぞつとするやうな恐怖、或るものゝ形、しかもあらゆるものがさうらしく見えるのに對する致命的な恐怖に絶えず悩まされた。彼が見るものは何でも彼でも、晩かれ早かれその形に變つた。彼の惨めな生存の目的は、彼が出會ふ様々な人達のうちの誰にも、その形を認めさせないやうにすることであつた。見込みのない骨折りではある、若し彼がその形のある部屋の中から人々を出してしまつても、それが入つてゐるところの抽斗や押入れを閉めてしまつても、それが隠されてゐるのを知つてゐる場所から、好奇心に驅られた人々を引き出して、街路へ追ひやつても、工場の煙突までがその形になつた。そしてその周囲にはあの文字が印刷されてゐた。

氣がつくと風が尙ほ吹いてゐる。雨が家の棟を打つてゐる、そして彼が彷徨ひ歩いて來た大きな場所は、急に縮まつて彼の部屋の四壁にもどつた。たゞ明りが消えてゐることを除いては、彼の部屋は彼が眼をつむつたときと變りはなかつた。レイチエルは寢臺の側の椅子にもたれて、假睡をしてゐたらしい。彼女は肩掛けにくるまつて、ぢつと坐つてゐる。卓子は寢臺のすぐ側の同じ場所にあつた。そしてその上には、當り前の大きさと恰好をして、あんな度々夢の中で繰り返された瓶があつた。

彼は垂幕が動いてゐたのを見たやうな氣がした。彼は再び見返した。そしてそれが慥かに動いたのをたしかめた。一本の手が出て、一寸何か探りまはしてゐるのを見た。それから垂幕がもつとはつきり動いて、寢臺に寝てゐた女がそれをめくつて起き上つた。ひどく寒れて物狂はしげな、大へん重さうで大きな、いかにも悲しさうな眼で、彼女は部屋を見廻した。彼女の視線は、彼が椅子によつて眠つてゐる隅のところを過ぎた。彼女の視線は、またその隅のところに歸つた。彼女は眼の上には手をかざしながらその隅をのぞき込んだ。またもその視線は、殆どレイチエルのことなど氣にとめなからしく部屋の中を一巡すると、その隅のところに戻つて來た。彼女がふたゝび小手をかざした時に——彼は、十八年前に自分が結婚した女の面影は、その放逸な顔にも、又それと共に凄んだその心にも、一つとして、残つてゐないと思つた。若し彼女が少しづつ今日やうに墮落したのを見てゐなかつたなら、これが同じ彼女だとは、彼に信ずることが出来なかつたであらふ。

この間中、恰も魔咒でもかけられてゐるやうに、彼は力が萎えて、身動き一つせずに、たゞ彼女を見守つてゐた。

昏々と眠つてゐるのか、取り止めもないことを考へてゐる

—四六〇—

るのか、彼女は耳のところには両手をあて、頭をさへへて暫く坐つてゐた。が、間もなく彼女は、再び部屋の中をちろちろと見まはした。そしてその眼は、今初めて薬の瓶の載せてある卓子に止つた。直ぐに彼女は昨晩のやうに挑戦的な態度で、眼をまた隅のところに向つた。ひどく用心深く、音をたてぬやうに體を起して、その貪欲さうな手を差し出した。彼女は寢床の中にコップを引き入れた。そして二つの瓶の中のどちらを選ばうかと、しばらく考へて坐つてゐた。やがて彼女は効果が早くて、

確實な死の毒薬の入つてゐた方の瓶を狂ほしくひつつかんで、彼の目の前で、ユルクの栓を齒で抜いた。夢か現か、彼は聲が出なかつた、身動きする力もなかつた。これが現實なら、そして彼女の命數がまだつきないのなら、醒めよ、レイチェル、どうか眼を醒ましてくれ!

彼女もまたさう思つたらしい。彼女はレイチェルの方を見た、そしてそろそろと用心深く瓶の中味をコップに注ぎ出した。その薬が彼女の唇のところまで届いた。今一息で、彼女はどんな救助の手段も及ばなくなるだらう! どうか全世界の人間が眼をさまして、その全力を出して彼女の處に来てくれ。がその瞬間、レイチェルがあつといふ叫び聲を抑へて飛び上つた。寢臺の中の女は腕あて、レイチェルを打つたり、その髪を掴んだりした。けれどもレイチェルはたうたうコップを取り上げた。

ステイヴンはやつと魔咒を破つて、椅子から離れた。「レイチェル、あゝ恐ろしい夜だ! おいらは目を醒してゐるのか、夢を見てゐるのか!」

「何でもないのよ。ステイヴン。わたしも眠つてしまつたものですから。もう三時近くね。鐘が聞えますわ。」

教會の大時計の音は風の爲めに窓に運ばれて來た。二人は耳を傾ける。たしかに三時をうつた。ステイヴンはレイチェルを見た、そしてひどく彼女の顔色が悪ぬのを見、また彼女の髪が亂れてゐるのや、額の上に赧る指の痕がついてゐるのに氣がついて、先刻の自分の視覚も聽覚も大丈夫覺めてゐたのだと感じた。彼女は今でもその手にコップをもつてゐた。

「わたしはきつと三時ごろだと思つたのよ。」と彼女は落ちついて、ゴップの中のを洗面器にかけて、前のやうにリネンの布片をそれに浸しながらあつた。

「ほんたうにわたし居てよかつたわね。これをしてあげればもう濟むのよ。そら! もうあの人は靜かになつたの。洗面器に少し残つてゐるけれど、うちやつてしまひませう。少しでも残して置くとはよくないものですから。」彼女はさういひながら洗面器の中のを灰の中に明けて瓶は燈の上で壊してしまつた。彼女はそれから體に方掛けを巻い

—四六一—

て嵐の中に出掛ける用意をする外には、何もすることがなかつた。「レイチェル、時間が時間だから、お前を送つて行かうよ。」

「あゝよ、ステイヴン。すぐ家に歸れるんだから。」

「お前は心配ぢやねえのか。」——彼は入口まで出たときに、低い聲でかふあつた——「おいらとあの女を一緒に置いて行つて!」

彼女はちつと彼を見て、「ステイヴン!」とひつた時に、彼は彼女の前の汚ない階段に跪つて、彼女の肩掛けの端に唇をあてた。

「お前は天使だ。神様、神様! お恵みを下せえますやうに!」

「わたしはお前さんにあつたやうに、お前さんの貧しいお友達よ、天使なんてわたしのやうなものぢやないのよ。天使たちと、缺點だらけの女工の間には深い隔てがあるのよ。わたしの小さな妹は天使の一人になつてゐるんだけど、すつかり變つてゐるんですわ。」

彼女はかふあひながら、ちよつと天の方に眼を上げた、それからまたやさしく、和やかに彼の上へ落した。

「お前はおいらを惡から善に變へてくれるんだ。お前がゐんでおいらは及ばぬながら、もつとお前のやうになりてえとも望むんだ。この世の生命がお終ひになつて、こんな滅茶苦茶がきれいに濟んだとき、お前を失ふのが恐ろしいんだ。お前は天使だ、とにかくお前はおいらの魂を生きながら救つて

くれたんだ。」

彼女は自分の足もとに跪づいて、また手に肩掛けを持つてゐる彼を見たときに、唇まで出かけてゐた窘めの言葉が、彼の顔の動きを見て消え失せてしまつた。

「おいらは自棄になつて家に歸つたんだ。何の望みも持たねえで家に歸つたんだ。そしてたつた一言愚癡をあつたばつかしで、分らねえ奴だと思はれたことを考へて、氣違ひのやうになつてたんだ。おいらはぎよつとしたつていつたらう。それはあの卓子の上の毒の瓶のことだつたんだ。おいらは一度だつて生き物を殺したこたアねえ、だけど急にあれを見たんで、『おいらア自分にだつて、あの女にだつて、それともおいらとあの女の二人ともにだつて、どんなことが仕出かせるか分りやしねえ』と、さう考へたんだ。」

彼女は恐怖に満ちた顔で彼の口に両手を當て、その上いふのを止めさせた。彼は空いてゐる方の手で、彼女の両手を捉へて、なほ肩掛けの端を持ちながら急いであつた。

「けれどもレイチエル、おいらにや寢床の側に坐つてゐるお前が見える。おいら一晚中お前を見てゐたんだ。寢苦しかつた夢の中でも、お前がまだあすこにあるのを知つてゐたんだ。これから何時もあの女を見たり、あの女のことを考へ

—四六二—

たりする時にや、きつとお前の姿があの子の側に坐つてゐるにちげえねえ。おいら自分を怒らせるやうなものを見たり、考へたりするときや、きつとおいらよりもつと優れてゐるお前の姿を傍に思ひ出すことにしよう。そしておいらは、お前とおいらがやがて、あの深い深い隔ての海を越えて、お前の妹さんがある國を自由に一緒に歩けるやうな時を待つとしよう。その時を心から當てにしとくことにしよう。」

彼は再び彼女の肩掛けの端に接吻して、彼女を去らせた。彼女は嗚咽にとぎれとぎれな聲で、彼に別れを告げて外に出て行つた。

風は間もなく日が昇る方から吹いて來た——やはり強く荒れてゐた。空の雲は風に吹きまくられて晴れた、雨は降りつきたのか、他處に去つたのか、あとには星が煌々輝いてゐた。彼は頭に何も冠らず、往來の真中に立つて、彼女が小走りに見えなくなつて行くのを眺めてゐた。この男の粗野な想像の中では、レイチエルを彼の生活の平常の經驗とくらべると、まるで窓にともされてゐる蠟燭に對する空に輝いてゐるあの星のやうに思はれた。

十四、時——偉大な製作者

コークタウンでは、その機械と同じやうに時もどんどん働き續けた。澤山の材料が加工され、澤山の燃料が消費され、澤山の人力が消耗され、澤山の金が儲けられた。けれども時は、鐵や、銀鐵や、鋼鐵ほどには無情ではないので、この煙と煉瓦の荒涼たる曠野にも、それぞれ變化ある季節をもたらして、この町の不愉快な單調を破らうと、僅かに抵抗つてゐた。

「ルイザももう一人前の女になつたわひ。」とグラッドグラインドはあつた。時はその無限の馬力をもつて、誰が何とゐはふとお構ひなく働き通して、若いトマスの身丈を、父親がこの前特に氣をつけて見た時からみれば、もう一フイートも高くした。

「トマスも、もう一人前の若者になつたわひ。」とグラッドグラインドはあつた。

父親がこんなことを考へてゐるころ、時はその工場の中でずんずんトマスに働きかけてゐた。彼は

いつの間にか大人服を着、硬いカラーをつけてゐた。

「さうぢや。」とグラッドグラインドはゐつた。「もうトマスもバウンダアビイの處へ行つてゐるぢや。」

時はトマスにくつゝゐたまゝ、彼をバウンダアビイ銀行に送つた。そして彼をバウンダアビイ家の聯中と親しい人間にし、初めて剃刃を買ふ必要を教へ、自分だけの利害に關する打算をせつせと勉強させた。

—四六三—

この同じ偉大な製作者は、あらゆる生長の段階にわたつて、いつも、無数の仕事に手をつけてゐるので、同時にその工場でシッシイにも働きかけ、彼女に加工して、非常に可憐な品物につくり上げた。

「わしはかふ思ふんぢやがな、ジュープ。」とグラッドグラインドはゐつた。「この上お前が學校へ行くことはどうも徒のやうぢや。」

「えゝ、わたくしも徒だと存じます。」とシッシイはお辭儀をしてかふ答へた。

「本當のことをいふとぢや、ジュープ。」とグラッドグラインドは額に八字を寄せてゐつた。「お前の試験の成績を見てわしは失望した、ひどく失望したんぢや。お前はマックチョーカムチャイルド先生御夫婦についてゐながら、わしが期待してゐただけの精確な智識に近いものをさへ得なかつたんぢや。事實がひどく不足してゐる。お前の數字の智識は非常に限られたものぢや。全く進歩せん、標準點以下ぢや。」

「どうも残念でございますけれど、」と彼女は答へた。「それは本當でございます。でもわたくし一生懸命にやつてゐた積りでございました。」

「さうぢやとも。」とグラッドグラインドはゐつた。「お前が一生懸命でやつてゐたことはわしも信じてゐる。お前がやるのを見て來たんぢや、その點では少しも言ひ分はない。」

「有難うございます。わたくし時々かふ考へたのでございます——」とシッシイはこゝでおどおどして、「多分わたくしは餘り澤山學はうとし過ぎたんではないかしら、もつと少しのことをお許し下さるやうにお願いしたら、事によつたらわたくし——」

「いや、ジュープ、駄目ぢや。」とグラッドグラインドはひどく思慮ありげに、すぐれて實際家らしい風に首を振つて、ゐつた。「駄目ぢや。お前の踏んで來た課程は、一定の組織に——さう組織に——従つてやつて來たんぢや。それについてはかれこれいふべき事はない。わしはたゞお前の小さいころの境遇が、お前の推理力の發達には餘りよくなかつたといふこと、そして又、わし達の始めやうも少し晚かつたといふことが、推測出来るだけぢや。ぢやが今もゐつたやうに、わしはやつぱり失望したんぢや。」

「何の緣故もございませんのに、身よりのない娘に御深切にして下さつた上、かうして育てゝ下さいました旦那様に、もつと立派に御恩返しが出来たらと存じますけれど。」

「泣かんでもゐる。」グラッドグラインドはゐつた。「泣かんでもゐるんぢや。わしは別にお前の愚癡をゐつとるんではない。お前は愛らしい眞面目な、善良な若い娘ぢや、な——わし達はそれで満足しなくてはならんぢや。」

「本當に有難うござります。」と有難さうにお辭儀をして、

—四六四—

シツシイはゐつた。

「お前は奥さんの役に立つてくれるし、そして(何かにつけ)家中の役にも立つてくれる。ルイザもさういつてゐるし、わしも自分で見てゐるんぢや。さういふ譯で、」とグラッドグラインドはゐつた。

「かふいふことになつても、お前が精々幸福にやつていけるやうにとわしは願つてゐる。」

「わたくしは何も望むことはございませぬ、たゞ——」

「分つてゐる。」とグラッドグラインドはゐつた。「お前はやはりお父さんのことをいつてるのぢや。

お前がまだあの罎をもつてゐるといふことは、ルイザから聞いてゐる。さうぢや、お前が精確な結果の分る學問にもつと成功してゐれば、そんな點についても、もつと賢くなつてゐたぢやらうがな。いやもう何もゐはんことにしよう。」

彼は全くシツシイが氣に入つてゐたから、彼女を輕蔑するやうなことはしなかつた。でなかつたら、彼は彼女の計算力をひどく軽く見てゐたので、すぐ彼女の智力を輕蔑したにちがひなかつた。とにかく彼はこの娘には、殆ど記表の形式では、現はすことの出来ないものがあるといふ考へをもつやうになつて來た。彼女が物を定義する能力は、あの通り極めて低い點數で容易に示すことが出来る。數學の智識は零であふ。が、たとへば、議會の報告のどの欄かに、彼女を割りあてゝくれといはれると、どんな風に彼女を分類したらよいものか、十分はつきりと分つてゐるといふ確信は彼にはなかつた。

時といふ製作者が人間といふ織物をつくるとき、或る時期になるとその操作が非常に素早くなる。若いトマスとシツシイは兩方とも加工の時期にあるので、かふいふ變化はわづか一二年の間に仕遂げられた、だが一方グラッドグラインドは、その過程からいへば、一時停頓の有様にあるらしく、別に大した變化はうけてゐなかつた。とはゐへ、たゞ一つ例外がある。それは工場の必然的な製作過程とは別なことであつた。『時』は彼を、片隅にある、騒々しい、むしろ汚ない小機械の中に押し込め、コークタウン選出の國會議員にしてしまつた——瑣細な案件を根掘り葉掘りほじくりかへすかの尊敬すべき議員の一人に、掛算の九々の代表者の一人にして終つた、——そして、掛算の九々ならぬ他の案件に對しては、聾で、啞で、盲目で、跛足の——死人同様といふ頗る尊敬すべき議員の一人としたのである。聖王の死後、千八百餘年たつた今日でも、われはれが基督敎國に生きてゐるのは、そんな掛算の九々以外のことを考へる爲めだとは思ふが。

この間、ルイザは靜かに、つゝましく、夕闇に根の燃えながら爐の鐵格子の中に落ちて消えてゆくのを眺めてばかりすこして來たので、父親が彼女も一人前の女になりか

—四六五—

けて來たとひつたときから、——それはほんの昨日のことのやうに思はれたが——滅多に父の注意を惹くやうなことはなかつた。だが再び父の氣がついて見ると、もう彼女はすっかり一人前の女になり切つてゐた。

「すつかり一人前の若いぢや」どグラッドグラインドは考へながらゐつた。「驚いたわひ！」

これに氣がついてから間もなく、彼は暫く、いつもよりづゝと考へこんでゐるやうになつた。そして或る一つの問題をあゝのかふのと夢中に考へてゐるやうに思はれた。或る晩彼が出掛けるといふので、ルイザが彼を見送つて出て來たときに——彼は今夜晩くでなくては歸らないはずだから、彼女は明朝まで父に會へなかつた、——父親は兩腕に彼女を抱いて、愛情を罩めて、彼女の顔を見ながらかふゐつた。

「おゝルイザ、お前はもう一人前のぢや。」

彼女はいつか曲馬場を覗いて見つかつた晩のやうに素早い、探るやうな眼付で返辭をし、それから

眼を伏せた。「さうよ、お父さま。」

「ね、お前。」とグラッドグラインドはゐつた。「お父さんはお前とだけで眞面目に相談しなくてはならぬことがあるんぢやが、明日の朝、御飯のあとで、お父さんの部屋まで来て貰はふかね。」

「宜しうございますわ。お父さま。」

「お前の手はちつと冷たいな、ルイザ。具合が悪くのではないか？」

「何ともありませんのよ。お父さま。」

「元氣はどうぢや。」

彼女は再び父の顔を見て、彼女獨特な笑ひ方で微笑した。

「何時もの通りに、元氣でございます。」

「それや結構だ。」とグラッドグラインドはゐつた。そして彼女に接吻して出て行つた。ルイザは例の理髮牀のやうな落ちついた部屋に歸つて、頬杖をつきながら、落ちては直ぐ消えて灰になるあの生命の短い火花を再び眺めてゐた。

「そこにゐるの、ルウ姉さん。」とゐひながら、戸口から弟が覗きこんだ、彼は今は立派な遊蕩兒らしい青年紳士になつた、しかもさう人好きのする方ではなかつた。

「おや、トム。」と彼女は答へて、立ち上つて彼を抱いた。「ずゑぶん久しぶりだことね。ちつともわたしに會ひに来てくれなかつたぢやないの。」

「だつて、ルウ。僕は晩は定つて約束があるし、書間はバウンダアビイの親爺が、いつも仕事から離さないんだもの、奴が餘りひどいときには、姉さんのことを一寸いひ出すんだ。それで僕等は、お互ひにどうにか行つてゐるわけさ。ねえ姉さん、お父さんが昨日か今日か姉さんを呼んで何か

—四六六—

いひやしなかつたかい。」

「ゐゑ、トム。でも明日の朝いふことがあるからつて出かけに仰しやつたわ。」

「あゝ！そのことさ！」とトムはゐつた。「お父さんは今晚どこに行つたんだか知つてゐるかひ？」とひどく意味ありげな表情で彼はゐつた。

「知らないわ。」

「ぢや教へてあげよう。ゐゝかひ、お父さんはバウンダアビイの親爺のところだよ。二人は銀行で何時ものやうに一緒に話しこんでゐるんだ。何故銀行で話すと思ふ？うん、それも教へてあげよう。出来るだけスパージット夫人の耳に入れないやうにする爲めさ。」

弟の肩に手をかけて、彼女はやつぱり火をちつとみつめてゐた。弟はいつもよりも興ありげに彼女の顔を見て、腰のまはりに手をまはして、賺すやうに彼女を引き寄せた。

「姉さんは僕が大好きなんだね、ルウ？」

「もちろんよ、トム。あなたは長いことわたしに會ひにも来てくれなかつたりするんだけど。」

「そこでね、ルウ。」とトムがひつた。「姉さんがさういつてくれるだらうと僕も考へてゐたんだ。僕達はずつとたびたび一緒にゐようと思へば、容易に出来るんだ——さうだらう。いつも一緒にゐなければゐられるんだ、殆どね——さうぢやないの？姉さんが僕の知つてゐることも承知する決心さへしてくれれば、そりや大變僕の爲めになるんだけれども。僕にとつちやそれは素敵なことなんだよ。とても愉快なことになるんだがなあ！」

彼女はすつかり考へこんでゐたので、彼は狡猾さうにしげしげと彼女の顔を見たが、何にもならなかつた、彼女の顔からは何も見ることが出来なかつた。彼は彼女を抱きしめて、その頬に接吻した。

彼女も接吻しかへしたが、やはり火をちつとみつめてゐた。

「ねえ、ルウ。僕はね、今どんなことが始まつてゐるかつてことを、一寸姉さんの耳に入れて置いた方がゐゝと思つたんだよ。姉さんが知らなかつたにしろ、どんなことだか見當ぐらゐつきさうに思はれたんだがね。僕は今晚約束した聯中があるから、ゆつくりしちやゐられない。姉さんはどんなに僕が好きかつてことを忘れないでね。」

「えゝトム、忘れはしないわ。」

「そいつは本當に有難い。」とトムはゐつた。

「ぢや左様なら、ルウ。」

彼女は愛情をこめて彼に別れを告げた。そして入口まで彼を送つて出た。入口からは遠くの空をほうつと靨く染めてゐるコークタウンの燈火が見えた。彼女はそこに立つて、ぢづとそれを見ながら、去つて行く弟の聲音に耳を傾けて

—四六七—

ゐた。その聲音はさもストーン・ロッヂから去つて行くのを喜んでゐるかやうに、さつさと急いで遠ざかつて行つた。彼が去つてしまつて、四邊がひっそりとなつても、彼女はまたそこに立つてゐた。彼女は恰も、はじめは家の内の火の中に、それから戸の燈光の靨の中に、あらゆるものゝ中で一番偉大な、一番長續きのする紡ぎ手のあの『時』が、前に紡いで女といふものにして置いた糸からどんなたぐひの織物を織り出すつもりかを、發見しようとしてもしてゐるやうに見えた。けれども『時』の工場は祕密な場所であり、その仕事は音を立てず、その職工は音もなく動いてゐる。

十五 父と娘

グラッドグラインドは『青鬚』(お伽噺の主人公、妻を迎へては殺害してその死體を青色の部屋に隠して置く)の眞似をしたわけではないけれども、その部屋は青表紙の書物がぎつしりつまつてゐるので、まるで青色の部屋のやうに見えた。この青表紙が證明し得るものは何でも(諸君が好むものは大抵何でも證明するが)、新たな援兵を得て絶えず増大して行く軍勢のやうに澤山の青表紙が證明した。この魔法のかゝつた部屋の中では、最も複雑な社會問題も數字に計算され、精確な總計を出して、最後にきちんと精算されるのであつた、——全くかふした問題に關心を持つ人達にさうと知らしてやりたいものだが！恰も、天文臺が一ヶ所も窓を開けずに造られ、中にゐる天文學者がたゞペンとインキと紙だけで、星の全宇宙を案排してゐるかやうに、グラッドグラインドは彼の天文臺の中で(又、世間にはこれと似たものが澤山あるものだが)自分の周圍に幾萬となく集つてゐる人間を一眼も見ろ必要がなく、一枚の石盤の上で、すべて彼等の運命を精算し、汚ない小つぽけな海綿一つで彼等すべての涙を拭き消すことが出來た。そこでこの天文臺に、——それ棺の蓋に釘を打つやうな音をたて、一秒々々を刻んでゐる恐ろしく統計的な時計のかゝつてゐる嚴めしむ部屋であつたが——ルイザが約束通り翌朝姿を現はした。窓の一つはコークタウンの方に向いてゐた。彼女が父親の卓子の近くに坐つたとき、遠方に重苦しく立つてゐる高い煙突と、煤煙の長い尾が見えた。

「ルイザ、」と父親はゐつた。「わしは今から話さうとすることについてお前の眞面目な注意を促す爲めに、昨晚お前に前もつていつて置いた。幸ひにもお前は今まで十分に躰けられて來てもゐるし、また、これまで受けた教育も十分に役に立てることだから、お父さんはお前の常識に全く信頼してゐる。お前は衝動だけで動きはしないし、空想的でもない。お前はすべてのものを、理性と計算の慥か

な冷静な立場から見ること慣れてゐる。今からお父さんが話す

—四六八—

ことも、その立場からのみ、お前は見もし、考へもしてくれるぢやらうと思ふ。」

彼は娘が何とかあつてくれたら、嬉しいがとひつた様子で、待つてゐた。けれども彼女は一言もあはなかつた。

「ルイザ、お前の結婚の申込みをお父さんは受けてゐるんぢや。」

彼は再び待つた。再び彼女は一言も答へなかつた。これはひどく意外であつたので、父親はまたやさしく繰り返した。「結婚の申込みをぢや。」これに對して彼女は少し眼に見えるやうな感情を現はさずに答へた。

「聞いて居りますわ、お父さま。大丈夫、わたし注意して聞いて居ります。」

「さうか！」とグラッドグラインドは一寸當惑した後で、急にここにこしてゐつた。「お前は思つたよりも冷静だ。ルイザ、でなくば、お父さんが話してくれと頼まれて来たことを薄々知つとるんぢやないかね。」

「さうは申されせんわ、お父さま。只今何ふのが始めてでございますもの。知つてゐるにしろ、ゐないにしろ、兎に角お父さまのお口からすつかりお聞きしたいと思ひます、お父さまから表向き伺ひたいと存じます。」

不思議なことには、グラッドグラインドの方がこの時は娘ほどに落ちついてゐなかつた。彼は紙切りナイフを取り上げて、ひねくりまはし、下に置いたり、また取り上げたり——どんな風にかつたけようかと考へながら、暫くはナイフの刃をためつすがめつして見なければならなかつた。

「ルイザ、お前の言ふことは尤もぢや。ところでお父さんはお前に話してみてくれと、いはれたのぢや、その……つまりバウンダアビイさんが、長い間お前の成長を非常に興味をもつて喜んで眺めておいでぢやつたが、それと同時にお前に結婚を申込み日がやがて来るやうにと、長い間希望してゐられたと仰しやるのぢや。あの方がそんなに長い間、少しも心を變へず、楽しみにして待つてゐたその時が今やつて来たはけぢや。バウンダアビイさんがお父さんに結婚の申込みをされて、それをお前に話して何分にもよいやうに考慮して貰ひたいと希望してゐられるのぢや。」

彼等の間には沈黙があつた。恐ろしく統計的な時計の音はひどく空虚にひびいた。遠くに見える煙は眞黒で、重苦しかつた。

「お父さま。」とルイザがひつた。「お父さまは、わたしがバウンダアビイさんを愛してゐるとを考へでせうか。」

この思ひがけない質問に、グラッドグラインドはひどく狼狽した。

「さうぢやね、お前。」と彼は答へた。「お父さんは——全くその——うむ、何ともあひかねるんぢやが。」

「ではお父さま。」とルイザは前と少しも變らぬ聲で、かうつづけた。「お父さまは、わたしにバウンダアビイさんを

—四六九—

愛するやうにと要求なさるのでございますか？」

「いや、いや、ルイザ、お父さんは何も要求はしない。」

「お父さま。」と彼女はなほも追求した。「バウンダアビイさんがわたしに御自分を愛するやうにつて要求なさるんでございますか？」

「どうも、お前。」とグラッドグラインドはあつた。「お前の問ひに答へるのはちと難かしいな——」

「さうだとか、さうでないとか答へるのが難かしいのでございますか。お父さま。」

「さうぢや。といふのは——」とこゝで何かを論證する必要が出来たので、そのおかげで彼は陣容をたて直した。「といふのは、ルイザ、その返辭は根本的に、わし達が『愛する』といふ言葉を使ふときの意味によるのぢやからね。ところでバウンダアビイさんは、氣まぐれぢやとか、空想ぢやとか、或は(同じ意味の言葉を使つて見れば)、センチメンタルぢやといふやうなことで、お前に間違つた眞似はなさらんのだぢやし、御自分にもなさらんかつたんぢや。若しバウンダアビイさんがぢや、何か今いつたやうな理由で、お前に結婚の申込みをする程にお前の優れた理性の働きを忘れるやうぢやつたら(御自分のは勿論ぢや)、折角、眼の前にお前が大きくなつて行くのを見て來た甲斐がなかつたといふものぢやらう。ぢやから、多分その『愛する』といふ言葉は——お父さんは只お前の参考にかふいふまでぢやが——この場合少しあてはまらんかも知れんよ。」

「ではその代りにどんな言ひ方をしたらよいと仰しやるのでございますか、お父さま。」

「それはルイザ。」ともうこの時は十分落ちついて、「この問題を(お前が訊ねるからわしはいふが)、お前があらゆる他の問題を考へることになれてゐるやうに、只たしかな事實として、考へてもらひたひのぢや。無教育な人や、そゝつかしめ人は、輕薄な想像や、正しく見れば實在しない——全く存在しない——いろいろな妄想やで、かふいふ問題を面倒なものにするかも知れんが、お前は(お世辭ではないが)そんな馬鹿ではない。でこの問題の事實はといふとぢや、お前は丁度二十歳で、バウンダアビイさんは丁度五十歳ぢや。お互ひの年齢には少々不釣合があるが、お互ひの資力と地位には、少しも不釣合なところが無い。ないどころか大へん釣合つた縁組ぢや。そこで問題になるのぢや、今云つた一つの不釣合は、こんな結構な結婚の邪魔になるかどうかといふことぢや。この問題を考へるに際しては、英蘭土とウェールズの結婚の統計を手に入れられるだけ参考にして見ることは決して詰らんことではない。數字によつて見ると、非常に年の異つてゐる同志の間に結ばれてゐる結婚は可成り多い。又實例のやゝ四分の三以上は男の方

—四七〇—

が年上である。印度の英領内の土人や、又支那の大部分、韃靼のカルマツク人の間に於ても、旅行者に依つてわれはれに與へられてゐる最も慥かな平均數が同じやうな結果を出してゐるといふことは、この法則が一般に行き渡つてゐることを示すものとして、注意すべき點ぢや。従つてお父さんが今云つた不釣合も、殆ど不釣合でなくなるから、實際上はこの不釣合も全然消滅するといつてよい。」

「お父さま、わたしが今使ひました言葉のかはりに、どういふ言葉をすゝめ下さるのですか？」とルイザはたづねた。彼女の控へ目勝ちな冷靜な態度は、この暗示的な結果によつて少しも動かされなかつた。「あの間違つてゐるあひ現はし方の代りに——」

「ルイザ、」と父親は答へた。「お父さんにはこんな明らかなこととは思はれるがね。嚴密に事實だけに限つたらぢや、お前が自分自身にいふべき事實の問題はぢや。バウンダアビイさんはわたしに結婚してくれと仰しやるか？さうぢや、さう仰しやる。それで残る問題は只一つぢや。わたしはあなたの方と結婚すべきぢやらうかとな。これほど明瞭なことはないとお父さんは思ふのぢやが。」

「ではわたし、あなたの方と結婚すべきでせうか？」と彼女は非常に慎重に繰り返してあつた。

「さうぢや。それでゐよ。わしはお前のお父さんとして、お前がこれまで世間の若い娘達の持つて

ゐたやうな心持や生活上の習慣などで、この問題を考へんといふことを知つて、満足なんぢや。」

「え、お父さま、わたしさうは考へませんわ。」と彼女は答へた。「そこでお父さんは、お前が自分で判断するに委せる。」とグラッドグラインドはゐつた。「お父さんはこの問題が、普通實際的な心の人達の間述べられる通りに問題を述べてあげた。お前のお母さんとお父さんの問題が、あの當時述べられたやうに述べてあげたのぢや。あとはお前が決めるだけぢやよ、ルイザ。」

最初から彼女は、ちつと父親の顔を見て坐つてゐた。今彼が椅子にそり返つて、その深く坐つた眼で、ちつと彼女を見返してゐる時に、彼は彼女の心中の動搖の一瞬間を見ようと思へば見ることが出来たかも知れぬ。さうしたら彼女は彼の胸に身を投げかけて、胸のうちをすつかり打ち明けることが出来たであらふ。だがそれを見る爲めには、彼は自分と人間の微妙な本性との中間に、我と我が手で長年刻苦して築き上げた牆壁を、一とびに跳び越えなければならなかつた、——微妙な人性に對しては最後の審判の喇叭が響き渡る日迄も、代數學のこの上なく巧みな智慧が役に立たないのである——この牆壁は一と飛びに跳び越すには

—四七一—

あまり澤山過ぎて、高過ぎた。彼の頑強な功利的な實際的な顔を見て、彼女は再び硬くなつてしまつた。そして大事な瞬間は去り、もう測り知れぬ過去の深みに飛び込んで、溺れてゐるあらゆる失はれた機會の中に混り合つてしまつた。

彼の顔から眼をそらし、彼女は無言で町の方を眺めながら、いつまでも坐つてゐた。彼はたうたうゐつた。「お前はコークタウンの工場の煙突と相談してゐるのかね、ルイザ。」

「活氣のない單調な煙の外には、あすこには何もないやうに見えますのね。でも夜になると、燈火がさつと點るんですよ、お父さま！」と彼女は振り返つて答へた。

「勿論それは知つてゐる、ルイザ。どんな積りでそんなことをいふのか分らんがね。」實をいへば、彼はその意味が全く分らなかつた。

彼女は手を一寸動かしたゞけで、その問をはづした。そして再び父親の方に注意を向けてゐつた。

「お父さま、わたしこの頃、人の一生は大層短かひものだと考へましたのよ。」——これは明らかに、彼が好んで話す話題だつたので、彼は口を入れた。

「それや短かひのは勿論ぢや。ぢやが人間の壽命の一般的平均は近年長くなつて來たことが分るんぢや。とりわけて精確ないろいろな生命保目蓋や養老保目蓋會社の計算はこの事實を確證したんぢや。」

「わたし自分の一生のことを言つてゐるんでございますのよ。お父さま。」

「あゝさうか、ぢやが、」とグラッドグラインドはゐつた。「お前の一生も總體的に生命を支配してゐる法則によつて支配されてゐるといふ事は、わざはわざいふ必要もあるまい。」

「わたし自分の生命がつゞく間、わづかでも自分に出來るだけのことがしたい、自分に適してゐることがしたい、と思ひましたのよ。でもさうどうだつて構ひませんわ！」

グラッドグラインドはその最後の言葉の諒解に迷つたらしい。それでかふ答へた。「どう構はんのぢや。何が構はんのぢやね。」

「バウンダアビイさんは、」と彼女は父の言葉には構はつしつかりと、たゆまずに言ひ續けた。「わたしに結婚してくれとお頼みになつたのでございますね？そこでわたしが自分の胸に聞いてみる問題は、あの方と結婚したらあゝかといふことではございませぬ。さうでございませぬ、お父さま？たしかさう仰しやゐました。さうでしたわね。」

「たしかにさうぢや。」

「ではさうして置きませう。バウンダアビイさんがそんなにわたしを貰ひたひと思つてゐらつしやるのなら、わたしは満足してその申込みを受けますわ。お父さま、宜しい時に、これがわたしの返辭だとお話し下さい。出来るならば」

—四七二—

の言葉通り、繰り返して下さい。わたしは自分の言つた通りにあの方に知つて頂きたいのですから。」
「精確にするといふことはよいことぢや、」と父親は賞めるやうにゐつた。「お前の頼みはもつともぢや。お前の結婚の時期については何かいふことはないか？」

「「はいません。お父さま、そんなことはどうだつて構ひませんわ！」

グラッドグラインドは椅子を少し彼女の方に引きよせて、娘の手をとつた。けれども彼女が『構ひませんわ！』といふ言葉を繰り返したのが、彼には少し氣がりのやうに思はれた。彼はぢつと彼女を見て、なほ手をとつたまゝゐつた。「ルイザ、お父さんは、お前に先きに聞かなくてはならん事があつたんぢやが、それを別に必要ぢやとは思はなかつた。わしはそんな事がありさうには考へなかつたからな。が、お前は他に何か申込みでも受けてゐるんぢやあるまひな？」

「お父さま。」と彼女は殆ど嘲るやうにゐつた。「このわたしに、どうして、他の人が申込みをすることが出来たでせう？わたし誰かに會つたことがありますか。これまで、どこかに行つたことがありましたか。わたしの心がどんな經驗をしたこととせらる？」

「ルイザ。」とグラッドグラインドは、確信と満足とで答へた。「お前のいふ所では、お父さんは間違つてゐなかつた。わしはたゞ自分の義務を果すことを望んでゐただけぢや。」

「お父さま。」とルイザは落ちついた様子であつた。「趣味だとか嗜好だとかいふことについて、わたしがどんなことを知つてゐませう？熱望とか愛情とかいふことについて、わたしがどんなことを知つてゐませう？そんな柔かなものが育てられる部分が、わたしの性質のどこにありますか？證明される問題とか、掴み得られる事實とかいふものから、どんな逃路がわたしに與へられましたでせう？」
彼女はかふいふ時に、恰も堅いものでも握つてゐるかのやうに、思はず知らず手を握りしめた。そして塵か灰でも離すやうにそれを緩めた。

「全くぢや、全くぢや。」優れて實際的な父親は同意した。

「だつて、お父さま、何て妙なことをわたしにお聞きになるんでせう。赧ん坊の——少し大きなつた子供の間にさへよくあると聞いてゐる——好き嫌ひさへ、わたしの胸の中に、その無邪氣な休息の場所を持つたことがございません。お父さまが、あまりわたしに用心して下さつたので、わたしは、てんで子供らしい心を持つたこともございませぬ。あまり立派にわたしをよく仕込んで下さつたので、子供らしい夢も見ることがございませぬ。搖籃の中から今の今まで、あまり賢くわたしを扱つて下さつたので、子供ら

—四七三—

しひ信仰も子供らしい恐怖も持つたことがございせんもの。」

グラッドグラインドは自分の成功と、それを示す證據にすっかり感動してゐつた。「ルイザ、お前はお父さんの骨折りに十分酬いてくれた。さ、わしに接吻しなさい。」

それで娘は彼に接吻した、彼は娘を抱きしめたまゝゐつた。「ルイザ、お前の健全な決心で、お父さ

んはすつかり嬉しくなつたのだや。バウンダアビイさんは、全く非凡な人ぢや。お前達二人の間にあればあるとるへる僅かの不釣合ぐらゐ、——よしあつたところで——お前が得てゐる心の調和で、十分に埋め合されてゐる。お前がまた若い間にも(さういつてよければ)、殆どどんな年頃とも同じ心が持てるやうに、お前を教育するのがお父さんの目的だつたんぢや。さあ、もう一度接吻しなさい。ルイザ。さあ、下に降りてお母さんのところに行かう。」

そこで彼等は居間に降りて行つた。そこでは、身のまはりに『馬鹿々々しひ』空想の分子が少しもないといふあの尊敬すべき夫人が、いつものやうに寝てゐて、シッシイが彼女の側で働いてゐた。父娘が入つて行つた時、彼女もかすかに元氣を出すやうな様子を見せた。そして今にも消えさうな透き通つた體は、やつとのことので起き直つて坐つた姿勢をとつた。

「ミセス・グラッドグラインド」と、妻が起き直るのをいさゝかじりじりして待つてゐた夫はあつた。「バウンダアビイ夫人を紹介します。」

「まあ！」とグラッドグラインド夫人はあつた。「それでは、あなたはお決めたんですね！ルイザ、お前體だけは大事にしておくれ、わたしのやうに結婚すると直ぐ、お前の頭が裂けるやうに痛くなり始めやうものなら、さう他人様から羨まれることはなからうからね。お前も何處の娘でも考へるやうに、羨まれると思つてゐやうけれど。でもお目出度うよ、——そして、お前のふだんの學問を、しつかりと利用するやうに、お母さんは本當に望みますよ！さあ、お前にお祝ひの接吻をして上げなければ。でも右の肩に觸らないでおくれ、まるで一日中、何かそこを走り廻つてゐるやうに痛むんだから。」とグラッドグラインド夫人は愛情こめたお祝ひの接吻のあとで、肩掛けを直しながら泣聲であつた。「でも、わたしはあの方を何と呼んだらゐゝかと、朝も晝も晩も、心配で心配でね！」

「ミセス・グラッドグラインド」と夫は嚴かにあつた。「そりやどういふ譯ぢや？」

「ね、あなた、あの方がルイザと結婚してしまつたら、あの方をわたし何と呼んだらゐゝんでせうねえ！何とか呼ばない譯にはいきませんよ。だつて、」禮儀と不躰とがこん

—四七四—

がらかつてゐるやうな氣持で、グラッドグラインド夫人がひつた。「不斷にあの方とお話ししてゐて、名前をいはずにゐるなんて出来ないことぢやありませんか。あの方を、これジョサイヤなんて呼ぶことは出来ませんよ。なぜつて、あの名前はわたしにはとても我慢が出来ませんから、あなたとつてジョウと呼ぶのを聞きになりたくはないでせう。まさか娘の婿に何々さんとも言へませんでせう。わたしは病人なんですから身寄りの人達も、わたしを踏みつけにしまふでせうが、その時が来るまでは、どうしてもそんなことは言へませんよ。すれば、何と呼んだものでせう？」

そこに居合せたもので、この大事な場合に、誰も何の暗示も言ひ出さなかつたので、グラッドグラインド夫人は今述べた自分の言葉に、次のやうな遺言を追加して、又暫くの間この世と分れなければならなかつた——

「この結婚についてわたしの頼むかとはね、ルイザ——お母さんがこんなに響く程胸に動悸をさせて頼むのですよ。早く式を擧げてくれるやうにといふことです。でない、きつとわたしが絶えず不平を聞かされる種の一つになるんですからね。」

グラッドグラインドがバウンダアビイ夫人だといつてルイザを紹介したときに、シッシイは急に振り向いて、驚きや、憐れみや、悲しみや、疑ひや、その他いろいろな感情をこめてルイザの方を見た。

ルイザは彼女の顔を見たかつたけれども、それを知つてゐたし、見てもゐた。その瞬間からルイザは無感情に、高慢に、冷かになつた。——そしてシッシイを敬遠して、全く彼女に對して變つた性格に

なつてしまつた。

十六、夫と妻

自分の幸福を耳にしたとき、バウンダアビイの最初の不安は、如何にしてもスパージット夫人にその話をしなければならぬといふことであつた。彼はどうしてそれをしたものか、又話した結果がどんなになるか、はつきりとは分らなかつた。彼女が早速荷物を纏めてレデイ・スカツチャアズのところへ引き上げるか、屋敷内から身を退くことをきつぱり拒絶するか、それとも悲しむか、罵るか、涙を流すか、怒り狂ふか、或は胸を張り裂くか、姿見を打ちこはすか、バウンダアビイは全然豫測が出来なかつた。けれども、しなくてはならない以上、さうするより外に仕方がなかつた。で初めは手紙で傳へやうと、幾通も書きかけたが、どれもこれもうまく書けぬので、やむなく口で傳へる決心をした。彼がこの重大な用事を果す爲めに、特にとりのけて置いた夕方、銀行から家に歸る途中で萬一の用意にと藥種屋に

一四七五

入つて、一番きゝめのゝ氣附薬を一瓶買ひ込んだ。「くそつー」とバウンダアビイはあつた。「若しあの女がこの話を聞いて氣絶したら、何が何でもあの女の鼻の皮を剥いでやるんだ！」けれどもこれほど前もつて用心してはゐながら、彼が自分の家に入つた様子は、とても勇氣あるものとは見えなかつた。まるで喰料部屋から眞直ぐに出て來たところを見付かると心配してゐる犬のやうに、おつおつと女の前に姿を現はした。

「お歸りなさいまし、バウンダアビイさん！」

「やあ、只今。夫人、只今。」彼が椅子を寄せると、スパージット夫人は自分の椅子を後の方に引いた。それはまるで、「えゝゝゝ、此處はあなたのお家なのでございませうとも。よく分つてをりますよ。お宜しければ、全部占領なさらふと御自由です。」と言ふかのやうに受けとれた。

「そんなに隅つかに行かなくてもゝですよ、夫人。」とバウンダアビイはあつた。

「有難うございませう。」とスパージット夫人はいつて、椅子を戻したが、もとのところ迄は寄らなかつた。

バウンダアビイは坐つて彼女の方を見た。彼女は丈夫な鋭い缺の先きで、何か分らないが裝飾の目的らしく、白麻布の片に、穴をあけてゐたが、それはその大きな眉毛と、羅馬風の鼻とを考へると、強情な小鳥の眼をせつせとほじくつてゐる熊鷹をまざまざと思はせる所作であつた。彼女は夢中になつてそれをやつてゐたので、顔を上げるまでには何分もかゝつか。彼女が顔を上げると、バウンダアビイは急に頭を動かして、彼女の注意をひいた。

「いやスパージット夫人。」バウンダアビイはかふいつて、ポケットの中に手を突つ込んで、例の小瓶のコルクの栓がすぐ抜けるやうになつてゐるかどうか、右手で確かめた。「わしはこれまで申し上げなかつたが、あなたは氏も育ちも立派なばかりぢやなく、なかなか物の分りの早い方ぢや。」

「まあ、あなた。」と夫人がひつた。「あなたがわたしのことをお讚めなすつて、そんなに仰しやつたのは今度が初めてではございませぬ。」

「スパージット夫人。」とバウンダアビイはあつた。「わしはあなたを吃驚させやうと思つてゐるんぢやが。」

「おや、まあ？」とスパージット夫人は訝しきやうに、落ちつきませんでした態度で答へた。彼女は平常

指のない手袋をはめてゐた、で、今例の仕事を止め、その手袋の皺をのばした。

「わしは、その！」とバウンダアビイはゐつた。「トム。グラッドグラインドの娘と結婚する積りなんぢやが。」

「おや、さうですか？」とスパージット夫人が答へた。「あなたが御幸福であるやうにお祈り致しますよ。バウンダアビイさん。まあ本當にあなたが御幸福であるやうにお祈り

—四七六—

致しますよ！」彼女は非常に謙遜に、また彼に對してひどく同情するやうにゐつたので、バウンダアビイは彼女が、姿見に裁縫箱を打つゝけるか、爐邊の敷物の上に氣絶して倒れるよりも、つとどぎまぎした。そしてポケットの中の例の氣附藥にかたく栓をしてかふ考へた。「えゝこの阿魔め、こんな風におれの話聞かうとは誰が思ひつかふ！」

「わたしは心からさうお祈り致しますよ。」とスパージット夫人はひどく超然とした態度で——何だか彼女はこの一瞬の中に後々までも彼を憐れむ權利をしつかりと擲んだやうに思はれた——「あなたが何處からどこまで非常に御幸福でおいでのやうに。」とひつた。

「いや夫人」とバウンダアビイは、その調子に少し腹立たしきを含めて返辭したが、その聲はわれ知らず低くなつたことは明らかであつた。「有難う、わしはきつと幸福になるぢやらうと思ふです。」

「おやさうでございませうの！」とスパージット夫人は大へん愛想よくゐつた。「ですがそれが當然です。勿論さうでございませう。」

バウンダアビイはそれに續いてひどく手持ち無沙汰に黙つてゐた。スパージット夫人は落ちついて再び仕事にかゝつた。そして時々小さな咳拂ひをしたが、それは彼女の力強さと忍耐をわざと示すやうな咳のやうに聞えた。

「夫人」とバウンダアビイは再び言葉をつづけた。「そんな事情で、あなたのやうな御身分の方には、こゝにかふしてゐらつしやることは、氣持よくあるまいと思ふです。わしの方は、づゝとゐて下されば結構には結構ぢやが。」

「まあ、あなたどういたしまして、わたしは少しもそんなことは考へません。」と矢張りひどく超然とした態度で頭を振つた。そして例の咳拂ひを今度は少し變へた——恰も豫言の靈氣が自分の心中に湧き起つてゐるのだが、まあそんなものは咳拂ひで抑へて置いた方がよいといつたやうな咳であつた。

「ぢやが夫人」とバウンダアビイはゐつた。「銀行の方に部屋が幾つもあるんぢや、貴婦人に生れ貴婦人で育つた方なら、あそこの管理者になつて頂ければこの上もなくお訊へ向きぢやと思ふです。そして若し同じ條件で——」

「御免遊ばせ。あなたは御深切にも『條件』など、仰しやらずに、いつも年金といふことに約束なさいました。」

「なる程夫人、年金でした。若し同じ年金をあらで氣持よく受けて下さるなら、わしどもがお別れしなければならん理由はないんぢや。あなたの方であれば格別ぢやが。」

「あなた」とスパージット夫人が答へた。「その申出はあなたらしいでございますね。若しわたしがその銀行で占められる地位が、社會的の身分を落さないで、占めてゐられるも

—四七七—

のぢやございませうなら——」

「え、そりや勿論、さうです。」とバウンダアビイはあつた。「若しさうでなかつたら、夫人。このわしがあなたのやうに立派な社會にゐた婦人に、その申出をするとは、お思ひになりますまい。勿論、わしがそんな社會を好んでゐるわけぢやない。ぢやあなたがあなたはさうぢやから。」

「バウンダアビイさん、どうもあなたは思ひやりがおありになりますこと。」

「あなたの部屋も差し上げるし、石炭も蠟燭もそのほか何もかも差し上げる。それから小間使ひも置いて上げやう。用心棒として、使ひ番の若者もゐます。ぢやからあなたは、失禮ながらわしなら可成り結構ぢやと思ふ身分になるわけぢや。」

「あなた。」とスパージット夫人はあつた。「もうそれで澤山でございます。わたしがこの家をお預りすることが出来なくなりますと、どうせ獨り立ちで麵麩を喰べなければならぬ人間でございますもの。」——彼女はスパート・ブレットとゐれば、いつたかも知れぬ。といふのは、この美味しい物に、うまさうな、ブラウンソースをかけたものが、彼女の好物の夜喰だつたから——「ですから、わたしは外の人よりも、あなたからそれを頂いた方がゐるのでございます。わたしはあなたのお申出を有難く受けいたします。またこれまでのお思召を心からお禮申し上げます。そして」とスパージット夫人は極めてはつきりと同情に堪へないといふ風を見せて言葉を結んだ。「わたしは心からミス・グラッドグラインドがあなたのお望み通りの方に、あなたに相應しむ方になられるやうにお祈りいたしますよ。」

もはや何物もスパージット夫人を、彼を憐むといふ優越な地位から動かすことは出来なかつた。バウンダアビイが、いかに雄辯をふるつても、例の爆發するやうな態度でじやじや張つても徒であつた。スパージット夫人は一人の犠牲者として彼を憐むかと、固く決心してゐたのであつた。彼女は丁寧で深切で、快闊で、希望に溢れてゐた。彼女がますます丁寧に、深切に、ますます希望に満ち、模範的になればなる程、彼はますます頼りなる犠牲者となり餌喰となつた。彼女は彼の蔭鬱な運命に、ひどくやさしく同情してくれたので、彼の偉大な根ら顔は、彼女が彼を見るときにはたゞたゞ冷汗を流すばかりであつた。

やがてこの結婚は八週間経つて式を擧げること定められた。その間バウンダアビイは許婚として毎晩ストーン・ロッヂに出掛けた。かふいふ訪問の時には、愛は腕環の形を借りて現はされた。そのほかこの許婚の間には、あらゆる場合に、愛がまるで何かの製造元のやうな様子を帯びた。衣物がこしらへられ、寶石が造られ、菓子も、手袋も造ら

—四七八—

れた。財産上の協定が遂げられた。そのほか様々な種類の事實がこの約束に適當な敬意を表した。この婚約は最初から最後まで事實づくめであつた。時間は馬鹿げた詩人たちが、かふいふ場合に描くやうな薔薇色の音楽を奏で、過ぎて行きはしなかつた。時計もまたほかの場合より少しも進むやうな氣もしなければ後れるやうな氣もしなかつた。グラッドグラインドの天文臺の中にある恐ろしく統計的な記録者（時計）は、一秒々々が生れると、すぐその頭をたゞきつけて、例の通りきちんきちんとそれを埋めて行く。

つひに結婚の日が來た。だがそれは理性一點張りの人達にとつては、他のどの日がめぐつて來るのとも同じであつた。そしてその日がやつて來た時に、例のつややかなあの木造の脚のある——あの大流行の建築様式の——教會堂で、コークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイは、同區選出の國會議員、ストーン・ロッヂのトマス・グラッドグラインドの長女のルイザと結婚した。彼等は神聖な儀式で夫婦の誓ひをしてしまつてから、今述べたストーン・ロッヂで朝宴を祝ふ爲めに歸つた。

その目出度い席には事實偏重主義の改良派の一團が招かれた、これは自分の喰べたり、飲んだりしなければならぬものが何で出来てゐるのか、それがどんな風に輸入され、また輸出されるか、しかもそれがどの位の量の量で、何處の船に積まれるのか、英國の船にか、外國の船にか、さういふことに就いてはすべてを知つてゐる聯中であつた。侍女たちは小さいジェーン・グラッドグラインドに至るまで、智的な見地からいつて、あの打算家の若者(母)の恰好な協力者であつた。そして一座の來客のいづれにも、馬鹿げた想像的なところは一つもなかつた。

朝宴の後で、新郎は次のやうな言葉で一同に演説した。「紳士淑女諸君、私はコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイであります。諸君は私の妻と私の健康と幸福の爲めにお盃をあげて私達に敬意を表して下さいましたので、私はそれに對して、一言謝辭を述べなければならぬと思ひます。もちろん、諸君はいづれも私なり、また私の現在の身分なり、又私の素姓を御存知でありますから、柱を見ては『あれは柱だ』といひ、唧筒を見ては『あれは唧筒だ』といつて、柱を唧筒と呼んだり、又唧筒を柱と呼んだり、或はそのいづれをも小楊子と呼んだりさせられることのない私のやうな人間から、演説などは期待されないのであらうと思ひます。若し諸君が今朝演説をお望みなら、私の友人であり、また家内の父であるトム・グラッドグラインド君は國會議員でありますから、諸君は即ちその方に演説を御注文なさるのが當然だと思ひます。私は諸君のお對手になれる人間ではありません。併し私が今日この卓子を見廻して、

—四七九—

なる程私も少しは獨り立ちの出来る人間になつたといふ感じを抱いたといたしましても——又、私が街にうろついてゐた宿なしで、共同水道のところ以外では顔を洗つたことがなく、それも二週間に一度以上は洗つたことのなかつたやうなこの私が、その時分にはトム・グラッドグラインドの娘と結婚しやうなどは夢にも思はなかつたことを考へ合せて、多少感慨を持つたといたしましても、私は諸君がお許し下さることと思ひます。ですから諸君は私が獨立の誇りを感じるといふことには、さう御反對ではないと思ひます。若し御反對であつたとしても、私はさう感ぜざるを得ないのであります。私は本當に獨立の感じがするのであります。さて、私が述べ、また諸君がお述べになりましたやうに、私は今日トム・グラッドグラインドの娘と結婚したのであります。私はそれを非常に喜んでゐるのであります。それは私の多年の宿望でありました。私は彼女が成長するのを眺めて來ました。それで彼女こそ私にふさはしひ女性だと信じてをります。又同時に——偽りのないところを申せば——私もまた彼女にふさはしひ人間だと信じてゐるのであります。それで私達二人は、諸君が私達二人に示して下さつた御好意に對して深く感謝致します。さて私が列席の未婚者の方々に差し上げ得る最善の好意はかふであります。即ち、未だ獨身の男子の方は、わたしが見付けたと同じやうなよい奥さんを見付けられるやうに、また未だ獨身の御婦人はわたしの家内が見付けたやうなよい夫を見付けられんことを希望致します。」

この大演説が終ると、間もなく新郎新婦はリヨンに新婚旅行に行く筈であつたので、——それはバウンダアビイがこれを機會に、その地方の勞働者は、どんな風に働いてゐるか、又、彼等も金の匙で喰事することを要求してゐるかどうかを見る爲めでもあつた——この幸福な新夫婦は停車場に向けて出掛けた。新婦が旅行の支度をして階下に降りて來ると、トムが彼女を待つてゐた。彼は感情のせいか、朝宴の一杯機嫌のせゐるか、顔を眞赧にしてゐた。

「何といふの、子だらう、こんな一等の、姉さんになつてくれるなんて、ねえルウ！」とトムがさやいた。

彼女は彼を飽いた。今日だけは何かもつと良いものを抱擁することだつたとでもいふやうに。そして彼女の冷靜な落ちつきが、初めて少々ゆらいだ。

「バウンダアビイの親爺さんはすつかり支度が出来たよ。」とトムはゐつた。「時間がなくなる。行つてゐらつしやゐ！あなたが歸る時には停車場まで迎へに出るよ！ねえ、ルウ姉さん！かふなりや素敵に愉快ぢやないか！」

第二編 刈入れ

一、銀行小景

かつと晴れ渡つた眞夏の一日、——コークタウンにさへ時にはこんな日があつた——こんな日、天気の日でも遠方から見ると、コークタウンは、自ら造り出した雲霧に包まれて、太陽の光線が通りさうにもない。

そこにその町があるといふことだけはこれで分る、といふのは、一つの町もない見通しの野ならかふいふ鬱陶しひ汚點のあり得る筈はないのだから。風が出たり止んだり、または方向を變へると、煤煙の汚れた一塊りが、むらむらと亂れて右し左し、空の青天井へのぼるかと思ふと、また蔭凄に低く地を這ふ。——これは濃密な形のない渾沌で、中に縦横に交錯する火花を藏してゐる、その光も團々たる暗黒のほか何物をも照し出さぬのである。蜜にコークタウンは、遠くから見るとその一片の煉瓦も見えないけれど、明らかにそれ自身のあることをほめかしてゐるのであつた。それよりも更に不可思議なことは、この町がまだそこにあるといふことであつた。この町が破産したことは幾度か數知れぬ程で、どうしてそれがかくも度々の激動にたへたものか、全く驚かれるくらゐであつた。實際コークタウンの工場主達は、たとへて見れば出來の脆い磁器のやうなもので、どんなに手柔かに扱つても、それは、直ぐに碎けてしまふので、以前からひゞが入つてゐたのではあるまいかと疑ひたくなる程である。これらの工場主達は工場法が出來て、少年労働者を、學校に通はさなければならなくなつた時に、一度破産した。彼等はその工場を視察する監督官が、任命された時にも、破産した。また監督官達が、これらの工場主は機械で労働者をあくまで切り刻んでも構はないものであるかどうか、大いに疑問とすべきだとゐつた時にも、破産した。又彼等工場主は、恐らく何時もこんなに澤山煤煙を出さなくても濟むだらうとほめかされたときに、すつかり降参してしまつたのである。コークタウンで一般に信じられてゐたバウンダアビイの、例の黄金の匙以外に其處には、工場主達の間に仲々優勢なもう一つの假作話があつた。それは一種の脅迫めいた姿をとつて現はれた。若しコークタウンの人間が、自分は虐待されてゐるなど感づくと、——つまり自分が何をしようとも、全然そつとして置いてくれないで、自分のあらゆる行爲の結果に對して、責任を持たねばならぬやうなことが言ひ出されると、——必ず彼は、「そんなくらゐならおれの財産を大西洋にぶち込んだが餘つぽど増した」と恐ろしい脅迫ぢみた言葉でやり

一四八一

出すのであつた。これが内務卿を五六度も、頭の先きから足の先きまで縮み上らせたものである。

とはゐへ、コークタウンの人は何といつてもひどく愛國心に富むので、未だその財産を大西洋にぶち込んだことがないどころか、財産を極めて大切にするほど人情深い聯中ばかりであつた。そんな譯で、この町はあそこの雲霧の中に残つて來た、そして増大し繁殖したのである。

この夏の一日、街々は熱して埃つぽかつた、太陽はコークタウンの上に垂れかゝる重い雲霧をさへ射通してぎらぎらと輝いてゐる程で、とても眞直ぐ凝視することなど出来なかつた。火夫達は低い地下道から、工場の中庭に飛び出して、階段や找や棚の上に腰を掛け、汗びっしよりの面を拭つて、石炭の山を眺めてゐた。町全體がまるで油で揚げられてゐるやうに見えた。到る處、煮えたつた油の息がぶる臭ひがした。蒸気機關も油で光つてゐた、職工の仕事着もそれで穢れてゐた。工場はどの階もどの階も油をにじみ出させ、滴らしてゐた。この『神仙の宮殿』の空氣は砂漠を吹く熱風の呼吸のやうであつた、職工達は、暑さに瘦せて、物憂げにこの砂漠の中に働いてゐた。けれども、どんな暑さでも、あの『憂鬱の蟲にとりつかれた象』に對しては、何の力も及ぼし得なかつた。彼等の退屈げな頭は、暑からうが寒からうが、晴れやうが降らうが、何時も同じ速度で動いてゐたのであつた。壁にうつる彼等の影の整然とした動作こそ、ゆらぐ樹立の影さへないコークタウンが、その影の代りに示さなければならぬものであつた。一方また、夏蟲のうなり聲の代りとしては、年百年中、月曜日の夜明けから土曜の夜まで、機軸や車輪の廻轉する音を提供することが出来た。

機軸や車輪は一日中いかにも睡げに唸り廻して、工場の扉際を通る徑來の人を一層ねむたく、一層むし暑くさせるのであつた。日除布と撒水が大通りや商店區域をいくらか涼しくした。けれども工場や廣場や露路は烈しい暑熱に焦げついてゐた。色素で紫黒色に染まつて、どんよりとした川の下手には、コークタウンの子供等のうち、何處にも動めてゐない二三の聯中が、——そんな子供達はこゝでは滅多に見られない——調子の狂つたボートを漕いでゐたが、それがことりことりと動くと、水面には泡立つ舟足の蹟が出来た。そして撓を水中におろすごとに、厭はしひ臭ひがかき立てられた。だが太陽そのものは、一般には如何にも仁慈なものだが、コークタウンにとつては嚴寒の霜よりも一層むごく、町の中でもぶつと狭苦しい區域を熱心に覗く毎に、生命よりも死の方を餘計に生みつけて行かないことは、滅多になかつた。この天の眼は、それとそれの光が祝福しやうといふ物象との間に、無能な、または不潔な職工達が

—四八二—

置かれるときに、邪惡な眼と化するのであつた。

この日の午後、スパージット夫人は油でたぎる町の日蔭になつた側にある銀行の彼女の部屋に坐つてみた。營業時間はもう過ぎた。一日のうちこの時刻には、ゝ天氣なら、彼女はきつとその淑かな姿を事務室の上の支配人會議室に運んで来て、色彩を添へるのが常であつた。彼女自身の居間はもう一階上にあつた。その窓際を見張りの場所として、彼女は毎朝バウンダアビイが道を横切つて來るとき、いかにも犠牲者に投げるにふさはしひあの同情澤山な眼つきで彼に挨拶しようとするのであつた。彼は結婚してからも一年になつてゐた。それでもスパージット夫人は自分が定めたあの憐憫の氣持を彼に對して、一瞬もゆるめないものであつた。

銀行の建物はこの町全體の單調さを破るやうなことはなかつた。それもやはり赧煉瓦の建物で、外には黒い鎧戸、内に緑色の日覆があり、黒い正面扉は白い二段の階段の上に立つてゐて、眞鍮の門札があり、眞鍮の句讀めゐた扉の把手があつた。それはバウンダアビイの邸宅より一まはり大きかつた、他の家はそれよりも一まはり乃至六まはり位も小さかつた。その他の細かい點では、他の雛形と寸分違はなかつた。

スパージット夫人は夕刻に、机や筆墨などばかりならんでゐるこの部屋に現はれる毎に、貴族的な高雅な感を與へるのは勿論、如何にも女性らしい優美さを事務室に與へるのだと確く信じてゐた。裁縫仕事や、または編物道具を手にして窓際に坐ると、彼女は自分の貴婦人らしい風采によつて、この

場所の殺風景で、事務的な色彩が矯正されるのだといふ自讃的な意識を持つてゐた。かふいふ自分の面白い使命に自ら感心して、スパージット夫人は、自分のことを銀行の仙女とも思ふのであつた。ところがこゝを往き來するときに、彼女を見た街の人々は、彼女のことを深山の寶物を見張つてゐる銀行の毒龍だと思つたのである。

しかしその寶物がどんなものか？彼等はもとよりスパージット夫人も殆ど知らなかつた。金貨、銀貨、大枚の紙幣、また一朝あばかれた日には得體の知れない人間（概して彼女が嫌つてゐた人達）に得體の知れぬ破滅を及ぼす祕密の數々などが、寶物に關して彼女の頭の中に描き出された目録の重要項目であつた。そのほか彼女は營業時間後には、自分が事務室のあらゆる器物に對して、また三つの錠前のある嚴重に錠の下りた金庫室に對して、最上の權威を持つてゐるのだといふことを知つてゐた。この金庫室の戸口には、あの白ちやけた使ひ番のビツアが、毎晩その頭を押しつけて、夜明け時分に消えてなくなる車附寢臺の上に寝てゐるのであつた。その上、彼女は掠奪癖ある外の世

—四八四—

界とは嚴重な忍び返りで交通を斷つた圓天井のある地下部屋の二三に對しては女王の權力があつた、またインキの汚點や使ひからのペン先や、封緘紙の切れ端や、細々と破られて彼女がどんなに讀まうと思つても何も面白い事柄が讀みとかれたことのない紙片のやうな、一日の仕事の殘物に對してもさうであつた。最後に彼女は事務所の爐飾りの一つに如何にも恨めしげに列べられた短劍とか、騎馬銃とかの小武器庫の番人でもあり、また大金を扱ふ業務の場所にはどうしても離すことの出來ぬ尊敬すべき傳統となつてゐる一山の消火桶の番人だつた。かふいふ桶はまさかの場合には、とても大した用に立つまいと思はれるものであるが、たゞこれを見る大概の人々の精神に及ぼす影響の點では、殆ど金銀の大塊と等しいものと見られてゐた。

聾の女中と使ひ番の若者、スパージット帝國の人民はこの二人からなつてゐた。聾の女中はなかなかの金持といふ評判だつた。そしてコークタウンの下層社會の間では、彼女はそのうちにきつと、銀行の門が閉つたころ、その臍線金のために盜賊に殺されるだらうといふ話が、何年間も行はれたのであつた。實際、彼女はこれこれの夜と、その殺される時日まで當てがはれさへしたので、餘程むかし死んでゐなければならぬのだと一般に考へられてゐた。だが彼女は意地悪なねほり強さで、その生命をも地位をも保つてゐたので、少からぬ不興と失望とを招いてゐた。

スパージット夫人のお茶は、様子ぶつた三腳の小生意氣な卓子の上に丁度彼女の爲めに置かれたばかりのところだつた。その卓子は彼女が營業時間後にそろそろと動かして、部屋中央に踏みはだかつた嚴格な、革張りの、長い會議卓子の傍に列べたのである。あの使ひ番は敬意を表するしるしとして額に指の甲をあてゝ、この卓子の上にお茶の道具をのせた。

「御苦勞だね、ビツア。」とスパージット夫人はゐつた。

「ゐゝえ、どういたしました、奥さん。」と使ひ番は答へた。

この使ひ番はいかにも白ちやけた若者であつた。髪も顔も白ちやけたところは丁度、あの少女組の二十番の代りに眼をばちばちさせつゝ馬の定義をしたときと同じであつた。

「戸閉りはみんななしましたね。ビツア？」とスパージット夫人は言つた。

「戸閉りはみんな濟みました、奥さん。」

「それから、」とスパージット夫人はお茶をつぎながらあつた。「何か今日は變つた話でもありますか？何もない？」

「はあ、奥さん、格別變つた話は、まだ聞きませんでしたね。この邊の聯中は皆、悪でいいます

よ。でもこんなことは變つた話にはなりません。お氣の毒ですが。」

「あの穩かでないやくざ達は今何をしてゐるのです？」と

—四八四—

スパージット夫人は訊ねた。

「たゞ相變らずのことをやつてゐるのですよ。組合をつくるやら、同盟を結ぶやら、お互ひ同志で援け合ふ約束をするやら。」

「本當にまあいけないことですよ。」とスパージット夫人はその鼻をますます羅馬人らしく、その眉毛をますますコリオレイナス流に、嚴つい顔をますます嚴つくしてかふあつた。「雇主側でそんな聯中の組合などを黙つて許して置くなんて。」

「さうですとも、奥さん。」とビツアはあつた。

「主人側だつて同盟してゐるんだから。誰でも同盟など結んでゐるやうな人間を雇はせないやうにするのが本當ですよ。」とスパージット夫人はあつた。

「やつて見たのですとも、奥さん。」とビツアはそれに答へた。「ところが見事失敗してしまつたといふ譯でしてね。」

「どうも、わたしには譯が分らない、といふより外に言ひやうがないね。」とスパージット夫人はきつと威嚴をとりつくろつてあつた。「もともと、わたしはそんな世界とは、大變違つた社會に生れたのですし、スパージットだつてパウレア家の一人として、そんなことしたことは縁がなかつたのですからね。わたしはたゞそんな人達は抑へつけてやらなければいけないといふこと、そしてやるなら今のうちだといふことを知つてゐるだけですよ。」

「さうですとも、奥さん。」とビツアはスパージット夫人の神託の權威に非常な敬意を表してあつた。

「實際あなたのお言葉以上にはつきりとの問題を述べることは出来ません、奥さん。」

何時もこの時刻に彼は、スパージット夫人と打ち解けたお喋りをするのが習慣だつた上に、また早くも彼女の眼差に氣がついて、今にも彼女が彼に何か問ひたげな風だと見てとつたので、彼は故意と簿記棒やインキ壺などを揃へる風をしてぐづぐづしてゐたのであつた。一方この生れながらの貴婦人は、開け放たれた窓から下の通りの彼方へ視線を投げつゝ、お茶を飲んでゐた。

「今日はお仕事で忙しかつたのですか。ビツア？」とスパージット夫人はあつた。

「大して忙しくもなかつたやうです、奥さま。いつもの通りでございます。」彼はたまには奥さんといはずに奥さまといふ言葉を使った。それはスパージット夫人のお人柄の尊貴なものと、彼女の當然うけるべき尊敬をわれしらず認めたやうに思はれるのだつた。

「事務員の方達は、」とスパージット夫人はその左の手袋からバタ附パンの眼に見えぬくらゐな層を念入りに拂ひ落しながらあつた。「みんな正直で、几帳面で、よく働んでせう」

—四八五—

ね、もちろん？」

「はあ奥さん、可成りよく働きます。何時もの例外を除きますとね。」

彼はこの銀行では事務員總體の諜者兼密告者といふ有難い役目をしてゐた。そしてこの自發的な奉仕に對してクリスマスにその週給よりも多い賞與を貰つてゐた。彼はどこまでも頭の明哲な、綿密で、用心深い若者に生ひ立つたので、その立身出世は慥かなところであつた。彼の精神はひどく精確に統

整されてゐたので、彼には愛憐も情熱もなかつた。彼のあらゆるやり口は精密冷静この上のない打算の結果であつた。だからスパージット夫人が平素から、彼のことを自分の知つてゐる限り心がけの一番しつかりした青年だと見てゐたのは、理由のないわけではなかつた。父の死んだとき、母親がコークタウンに住んでゐる権利のあることを十分確かめた上、この優れたる經濟學の若き學徒は、母の有するこの権利を主張して、嚴重に經濟學の原則に則つたので、それ以來母は養老院に閉ぢこめられてゐることになつた。但し、彼が母に年半ポンドのお茶を與へたことは認めてやらねばなるまいが、彼としては大きな弱點だつた。といふわけは第一、すべて物を無料でやることはその受ける者を必然的に貧乏にならせる傾きがあり、第二に品物に對する彼の正當な扱ひ方は、出来るだけ少額で買つて、出来るだけ多額に賣らうとすること、たゞ呉れてやることではなかつたから。何しろ哲學者さへ明らかに、この安買ひ高賣りの一點に人間の義務の全部——人間の義務の一部でなしに、その全部——が在ることを主張したのであつた。

「可成りよく働きますよ、奥さん。たゞ何時もの例外を除きますとね。」とビツアは答へた。

「まあ！」とスパージット夫人はその茶碗の上で頭を振りつゝ、ぐつと一息長くのみながらゐつた。

「トマス君のことですよ。奥さん、私にはトマス君のすることが、ひどく解せないのです。私はあの人のやり方がちよつとも氣に入りません。」

「ビツア。」とスパージット夫人はひどくビツアの胸に應へたやうにゐつた。「以前お前さんが人の噂を名指であつた時に、わたしがいつて上げたことを憶えてゐますか？」

「これは濟まないことを申しました、奥さん。奥さんが人の名を出して話してはならぬと仰しやつたのは、本當です。何時だつて名ざしすることは、差し控へた方がこの上なく善いのですから。」

「どうかわたしがこゝをお預りしてゐることを忘れないで下さい。」とスパージット夫人は嚴めしむ様子をしてゐつた。

「こゝではね、ビツア、わたしはバウンダアビイさんに信任

—四八六—

されてゐるのですよ。昔だつたらあの方がわたしの庇護者になつて、年金を下さるといふやうなことが、バウンダアビイさんにもわたしにも、思ひもよらなかつたことでせうが、今ではわたしとしてはあの方を庇護者といふ眼で見ないわけには行きませんのですよ。バウンダアビイさんからわたしは自分の社會上の位置をいつも認めて頂き、またわたしの家柄を何時も尊敬されて參つたのですよ、わたしが思ひ付けてゐましたやうにね。それだけではありません——どうして、それだけではありませんせんとも。ですから、わたしとしても、自分の恩人に對して几帳面に忠實でありたいと思つてゐるのです。それなのに運悪く——最も運が悪くことには、——（それは疑ひのないことですから）——あの方に多少とも關係のおありなさる方の名が、」と、スパージット夫人は手近にあらん限りの名譽と道德を列べ立てゝ、いふのであつた。「この屋根の下で話されるのを若しわたしが、黙つて聞いてみますやうでは、わたしは自分を几帳面に忠實であるとは、考へもしませんし、また考へやうともしませんし、また考へることも出来ません。」

ビツアは再びその顔に指の甲をあてゝ、またもお詫びを乞つた。

「ねえ、ビツア。」とスパージット夫人は續けていつた。「或る人がとを言ひなさい。さうすればお話を聞いてあげます、トマスさんなんていふなら、もうわたしは御免を蒙らなければなりません。」

「何時もの例外はございませぬがね、奥さん。」とビツアは話を元に戻しつゝ言つた。「或る人のことですが。」

「まあ！」とスパージット夫人は同じ言葉と、茶碗の上で頭を振ることゝ、ぐつと一息長く茶を飲むことを繰り返した。そして、先刻途切れたところから、また始まり出した會話に相槌をうつた。

「或る人のことですがね、奥さん。」とビツアはあつた。「こゝへ初めて来てからといふもの、自分の守らねばならぬことを一度でも行つたことがございませぬ。その人は道楽もので、錢使ひが荒くて、飛んでもない懶者です。その人は全く三文の値打もありませんよ、奥さん。その人はこゝのお店に御鼻肩の縁者の方がなかつた日には、その三文さへ得られはしなかつたでせうよ、奥さん！」

「まあ！」とスパージット夫人はもう一度その頭を物悲しげに振つてあつた。

「ねえ、奥さん。」とビツアはあつた。「私はあの人の御鼻肩の縁者の方が、あの人にあゝいふ風なことをさせる金をやらないと大變なと思ふのですよ。やらないと、奥さん、そんな金が誰のポケットから來るのか、私等にはよく分るん

—四八七—

ですけれど。」

「まあ！」とスパージット夫人はまたその頭を物悲しげに振つて嘆聲を洩らした。

「その人は可哀さうですよ、奥さん。あの人にお金をやる人達の中でも、私が只今それとなく申し上げたおしまひの方の係り合ひの人なぞ、實に可哀さうですよ。」とビツアはあつた。

「さうですよ、ビツア。」とスパージット夫人はあつた。「わたしは何時もあの料簡違ひを可哀さうに思つてあました、何時でも。」

「その例外の人はといへば、奥さん。」とビツアは聲を低めて、近く寄りながらあつた。

「あの人はこの町の誰とも同じやうな後前知らずなんです、あの聯中の後前見ずがどんなものかかつては奥さんも御存知でせう、實際、奥さんのやうな御身分の方よりもそれを知つてゐるなんてことは、誰にだつて出来るものではございせんから。」

「こゝの人達が、」とスパージット夫人は答へた。「お前さんを手本にしてくれゝばいゝのですけれどもね、ビツア。」

「いや有難うございます、奥さん。奥さんが私のことを仰しやるので申しますが、まあ、私を見てやつて下さい、奥さん。私はこれでも一寸ぐらゐは溜めてをりますよ、クリスマスにあたく賞與にも、私は指一つ觸れようとはしません。奥さん、私の給料は決して大したものではないけれども、その給料の中から溜めてさへ居ります。それだのに私のやうに、何故こゝの人達は出來ないのでせう？奥さん。一人の人間の出来ることは、ほかの人間にも出来る筈です。」

これもまたコークタウンの假作話の一つであつた。六ペンスから六萬ポンドの財産をつくつた其處の資本家は、誰でも常に、何故手近にゐる六萬人の職工の一人々が六ペンスから六萬ポンドの財産をつくるに到らなかつたかを、大いに不思議としたのであつた。そして彼等の一人々々に向つて、こんな小手先きの藝當が出來ないのを多少とも責めるのであつた。わしがやつたことは、お前がたも出来る筈ぢや。何故お前がたはそれを思ひ立つて、やらうとせんのか？

「こゝの人達が氣晴しを欲しがるなんてのはです、奥さん。」とビツアはあつた。「皆、謔言や寢言に過ぎませぬ、私には、氣晴しなどいりませぬ。今迄でも一度もいらなかつたし、これからでもきつと要りやしません。私はそんなことが嫌ひなんですから。あの人達は組合をつくつてあますけれど、あの人達の大概は、お互ひのことを見張り合つたり、知らせ合ひたりして、金にせよ好意にせよ、時々

—

一寸した心付けを貰つて、自分の生活をもつとよくすることが出来る筈なんです。本當ですとも。では何故その人達は自分の生活をもつと改善しないのでせう？奥さん。道理の分る者なら誰しも一番に其處を考へねばならぬことですし、またこれは、あの人達が必要だと口癖のやうに言つてゐるものなんですからねえ。」

「まつたく、口癖のやうにね！」とスパージット夫人はあつた。

「やれ妻がどうか、家族がどうかいふことは、實際私達は始終耳にしてゐますよ、奥さん。いやもう胸の悪くなるくらゐです。」とビツアはゐつた。「それが私はどうです。

奥さん！私は妻も家族も要らないのです。何故あの人達には要るんでせう？」

「それはあの人達が後前見ずだからですよ。」とスパージット夫人はあつた。

「さうですね、奥さん。」とビツアは答へた。「問題はその點にあるのですね。みんながもつと分別があつて、あれ程根性が曲つてゐなければ、奥さん、皆はどうするでせうな？きつとあの人はかふいふでせう、『おれの帽子の下には家族のものがかゝつてゐるが』とか『わたしのボンネットの下には家族がかゝつてゐるんだけど』とか、めいめい場合によつてゝすね、奥さん、『おれが養つて行かねばならぬ者は一人しかない、そして、それがおれの一番養つてやりたいと思つてゐるものだ』といふでせう、きつと。」

「本當にね。」とスパージット夫人は輕燒煎餅を喰べながら同意した。

「有難うございました、奥さん。」とビツアはスパージット夫人がなかなか爲めになることを言つてくれた返禮のつもりで、また額に指の甲をあてゝ言つた。「もう少し熱いお湯を持つて参りませうか、奥さん。それとも何か私を持つて來るやうなものはございませんか？」

「今のところは何もありませんよ、ビツア。」

「有難うございました、奥さん。私は奥さんのお喰事、殊にお茶のお邪魔はしないやうにいたしませう、奥さんのお茶のお好きなのはよく承知してゐますから。」とビツアはあつた。そして少し頸を延して、自分の立つてゐるところから街の方を眺めたが、「おや、紳士が一人此方を一二分ばかり見上げてゐたが、道を突つ切つてやつて來るぞ。案内を乞ふらしぬ。あれはあの人が叩いてゐるのです。奥さんきつとさうですよ。」

彼は窓際に歩み寄つて、外を眺めたが、またその頭を引込めて、自分の言葉に裡書きした。「さうですよ、奥さん。あの紳士をお通しゝませうか、奥さん？」

「どんな方でせうかしら？」とスパージット夫人は口の邊

りを拭ひ、手袋をととのへていつた。

「見なれない方ですよ、奥さん、慥かに。」

「用事に遅れたのでないとすると、夕刻の今時分、見も知らない人が銀行に何の用があるんでせうね。」とスパージット夫人はあつた。「けれどもわたし、バウンダアビイさんからこの建物をお預りしてゐるのですから、逃げかくれなどは致しません。そのお方にお會ひするのがわたしのお受けした義務の一部分なら、お會ひすることに致しませう。お前さんの考へで決めて下さいよ、ビツア。」

此方ではその紳士がスパージット夫人の鷹揚な言葉を少しも知らないで、音高く叩打した。氣輕な使ひ番は扉を開けに急いで下りて行つた。一方スパージット夫人は用心深くいろいろ茶道具をの

せたまゝ、その小卓子を、戸棚にかくし、それから階上の居間へと引き上げたが、それはまさかの時に、一度威厳を備へて姿をあらはすつもりからであつた。

「奥さん、あの紳士がお差文へがなければあなたにお會ひしたいと申して居ります。」とビツアはスパージット夫人の鍵穴からその白ちやけた眼をのぞかせてあつた。そこでビツアの来る迄に、帽子を一寸直して恰好をととのへたスパージット夫人は、その古典的な姿をまた下へ運んで行つて、まるで攻め寄せた敵將と談判する爲めに市の城壁の外へ出て行く羅馬の女丈夫のやうな風で會議室へ入つて行つた。

その時訪問客は窓際へぶらぶら歩み寄つて、無心に外の方を眺めてゐたので、この印象的な御入來を感じたらしい氣もなかつた。彼は想像され得る限りの冷淡な、まだ帽子を冠つたまゝ、酷暑と極端な上品振りから来る一種物憂げな風を帯びて、人に聞えぬくらゐに口笛を吹きながら立つてゐた。といふのも、彼が全く當世式に仕上げられた紛ひない紳士で、どれにもこれにも倦怠してしまつて、悪魔の外の何物にも信仰を置かないのだといふことは、半分眼をつぶつて見ても分ることだつた。

「あなう、あなた様はわたくしに會ひたひと仰しやられましたさうで。」とスパージット夫人は言つた。

「いやこれは失禮致しました。」と彼は振り返つて、帽子をとつていつた。「どうか平にお許しを。」
 「ふむ！」とスパージット夫人は嚴かにお辭儀をしながらかふ思つた、「三十五六、よい男振り、よい姿、よい齒並び、よい聲、よい躰け、よい身装、黒い髪、大膽な眼付。」流石に女で、これはみなスパージット夫人が、——丁度水槽に頭を突つ込んだ土耳其の王様みたいに——たゞ頭を一寸もぐらして又持ち上げて來る間に見て取つたところであつた。

「さあ、どうぞお掛けなすつて。」とスパージット夫人はい

—四九〇—

つた。

「は、有難う。失禮ですが。」彼は彼女の爲めに椅子を据ゑたが、彼自身は無頓着に、卓子に體をもたして、ぶらぶらしたまゝであつた。「丁度、荷物の面倒を見させて下男を停車場に残して參りましてね、——えゝゝ、どうも満員の列車で、貨物車まで皆ぎつしり一杯でした——停車場からあたりを眺めながら、ぶらぶらやつて來たのですよ。馬鹿に綺麗な處ですね。こんなことをお訊ねしては何ですが、こゝは何時もこんなに黒いのでせうか？」

「何時もはもつと黒つゞぎいますよ。」とスパージット夫人は彼女の手強いところを見せて答へた。

「ほう、さうですか！失禮ですがあなたはこの土地のお方ぢやありませんね。きつと？」

「えゝゝ。」とスパージット夫人は答へた。「幸か不幸か存じませんが、——わたくしのまだ寡婦にならない頃は——づゝと違つた世界に暮したものでございませう。わたくしの夫はパウラア家の一人でございますました。」

「御免下さい、何家とか仰しやりましたな？」とこの見知らぬ人はあつた。「その方は——」

スパージット夫人はまた同じことをあつた。「パウラア家の一人です。」

「うむ、パウラア家。」と客は一寸考へてからあつた。スパージット夫人はうなづいて見せた。客は少し餘計に疲れたやうに見えた。

「あなたはこゝでは随分と御退屈なすつてゐらつしやるでせうな？」彼は今の會話から推察してかふあつた。

「ゐゝえ、わたくしは境遇の僕でございますから。」とスパージット夫人はあつた。「それにわたく

しは自分の生活を支配する力にもう長く馴れて来たものでございますから。」

「いやどうもひどくお悟りなすつたこと。」と客は答へて言った。「また、あくまで摸範とすべき、賞讃すべきことで——」だがそんなことを並べるのは如何にもつまらなくなつたと見えて、彼は物憂さうに時計の鎖を弄つてゐた。

「お訊ねしては何でございますが、」とスパージット夫人はゐつた。「かふしてあなた様とお會ひしますといふのは、何方かの——」

「はあ、」と客はゐつた。「あなたの方から仰しやられて恐縮いたします、私は銀行家バウンダアビイあての紹介状を持つて参つたものです。ホテルで夕喰の用意をして貰つてゐる間に、私は馬鹿に眞黒なこの町をぶらぶら歩きながら、行き會つた男に一寸訊いてみたのです。それは勞働者の一人らしく、何でも綿毛を頭から浴びたといったやうな恰好でしたが、あれはきつと原料品でせうね——」

スパージット夫人は頭をうなづかせて見せた。

—四九一—

「成る程、原料品でせう。——で、その男にバウンダアビイさんといふ銀行家のお住居は何處かと訊いたのです。すると銀行家といふ言葉できつと聞きちがつたのでせうが、その男は私に銀行の方を教へてくれたのです。ですが、たゞ今拜見するところでは、銀行家のバウンダアビイさんは、私がお話ししてゐるこの建物にお住ひの御様子には見えませんがね？」

「え、」とスパージット夫人は答へた。「あの方はこゝにお住ひではございません。」

「いや有難うございます。私は此處でその紹介状をお渡し、やうとは思つてをりませんでした、また今も思つてをりません。ですが、暇潰しのつもりで銀行までぶらぶらやつて來まして、運よく窓の方を見上げますと、——その窓の方へ物憂げに手を振つてから、一寸お辭儀をした——「大へん、お人柄な、お淑かたお姿の御婦人を見かけましたので、こりや不躰でもあの御婦人に、銀行家のバウンダアビイさんが何處にお住ひかほ訊ねしようと、思ひついたのでございます。そんな譯で、かうして伺つたのでございます。」

彼の物腰には無頓着と遊惰などころがあるが、それはスパージット夫人の考へでは、彼女に敬意を表したくつろいだ殷勤さによつて十分補はれてゐた。例へば彼は今この瞬間に、まるで卓子の上に腰掛けんばかりの態度で、スパージット夫人のうちに彼女を——いかに彼女らしく——魅力あらせる美しさを認めてもしたやうに、彼女の上に無作法にもしかゝつてゐる風であつた。

「銀行といふところは何處も油斷のないもので、また職務上さうなげなければならないのは、私もよく存じて居ります。」と客はゐつたが、彼の氣輕み、なだらかな話しぶりは、又心地よいもので、話の事柄を實際よりも、氣の利いた愛嬌のあるものに聞えさすのであつた。——そんな話し振りは恐らく、ごの數多くの信者のある宗派を創立した男（その偉人が如何なる人にしても）の抜目のない新工夫であつたのだ。「それで申し上げた方が宜しからうと思ひますが、私の紹介状は——こゝに持つてはあます——御當地の國會議員グラッドグラインド氏から頂いたもので、この方と私は倫敦でお近づきになつたのでございます。」

スパージット夫人はその手蹟を認めてこのやうな證據は全くありませんのにと一寸ほめかすやうにいつて、バウンダアビイの住所を知らせ、いろいろ必要な道しるべや方角を參考までに教へたのであつた。

「いやあろいろ有難うございます。」と客はゐつた。「無論あなたは、この銀行の御主人をよく御存知であらうしやるのですね。」

—四九二—

「ええ。」とスパージット夫人はそれに應じていった。「あのお方にかふしてお世話になるやうなつてから、もう十年間も存じて居ります。」

「随分昔からなんですか！あの方はグラッドグラインド氏のお嬢さんと御結婚なすつたんださうですが？」

「はい。」とスパージット夫人は急に口をきつと結んでゐた。「結——結構なことにはねえ。」

「そのお方はなかなか哲學者ださうですね？」

「ええ。」とスパージット夫人はゐつた。「さやうでございますか？」

「いや、無遠慮なお訊ねをして相済みません。」と客は宥めるやうな様子で、スパージット夫人の眉毛の上にひらひら羽搏きするやうに言葉を投げかけながら、話を續けるのであつた。「ですが、あなたはその御家族を御存知で、また交際社會のことも御存知でせう。私はこれからその御家族と近づきになるので、一緒にいろいろな仕事をしなければならぬかも知れないのです。奥さんはそれほど驚く可き方ですか？あの方のお父さんはあの方を、恐ろしく惻巧な人と賞めてゐましたので、私は一刻も早くお知り合ひになりたいのです。あの方は、絶対にお近づきになれないやうな方ですか、そばにも寄れないくらゐにお惻巧な方ですか？あなたの意味ありげなお笑ひからお察し、ますとさうではないやうに見えますな。内々心配してゐましたが、お蔭でほつと安心しましたよ。ではお年のところは、四十くらゐでせう！それとも三十五くらゐですか？」

スパージット夫人は本當に笑つた。「ねんねさんですよ。」と彼女はゐつた。「お嬢入なすつた時まだ二十になりませんでしたもの。」

「いや、これはどうも。」と客は卓子から體を離しながら答へた。「こんなに吃驚したことは、今迄にまだありませんね！」

それは實際、彼をこの上は驚けないところまで驚かしたやうに見えた。彼はその報告者を四分の一秒ばかりちつと見つめてゐたが、その間中自分の驚きを胸に深く銘じたやうな風だつた。「いや、パウラア夫人。」と、やがて彼はひどく疲れたやうにゐつた。「實際あの方のお父さんのお話では、その方がどうも手ごはひ、骨の固りきつたやうなお年齢としか思はれなかつたものだから。何よりも、お蔭で飛んだ思ひ違ひを直すことが出来ました。どうも飛んだお邪魔を致しまして、有難うございました。では左様なら！」

彼はお辭儀をして出て行つた。するとスパージット夫人は、窓の垂幕に隠れて、彼が、町中の人目を惹いて日蔭になつた道をぶらぶら彼方へ去つて行くのをちつと見送つて

—四九三—

ゐた。

「あの紳士をあなたはどう思ひます。ビツア？」使ひ番が取りかたづけに來たとき、彼女はかふ訊いた。

「身装に大へん金をかけて居りますやうで。」

「それは咎めるわけには行くまいね。」とスパージット夫人はゐつた。「非常に凝てゐらつしやるんだから。」

「さうですね、奥さん。」とビツアは返辭をした。「でもお金をかけるだけのものがありませうかね。」

それに奥さん。」とピツアは卓子の上を拭きながら言葉をつづけた。「あの人は勝負事をやつた人のやうに私には見えませよ。」

「勝負事はよくありませんね。」スパージット夫人はあつた。

「馬鹿らしいですよ、奥さん。」とピツアはあつた。「勝負事をする人達は運に又向ふやうなものすから。」

スパージット夫人は暑さの爲めに仕事が出来なかつたからか、それとも腕がしびれてしまつたからか、その晩彼女は仕事をしなかつた。彼女は太陽が煙の背後に沈みかけたとき、窓際に坐つてゐた。煙があかあかと燃えてゐた時にもその色が褪せた時にも、暗闇が徐々に地上から立ち上り、上へ上へと屋根の頂きへ、教會の尖塔へ、工場の煙突の頂上へ、やがて大空へ這ひ昇るやうに見えた時にも、彼女はそこに坐つてゐた。部屋の内には蠟燭もつけずに、兩手を前に置いて窓際に坐つてゐた。だが夕暮れの物音、——子供等の騒ぐ聲や、犬の吠聲や、車輪の響や、通行人の足音や話し聲、街上で何か叫んでゐる金切聲やいつもの刻限に通る木靴の舗道を行く音や、商店の戸を閉めてゐる物音など——を、大して考へてゐるわけではなかつた。スパージット夫人は使ひ番が夜喰の御馳走が出来たのを告げに来るまで、物思ひに沈んだまゝ立ちもせず、その濃い黒い眉毛——その時分には餘り考へ込み過ぎて皺になつてしまつて、火熨斗でもかけなければなるまいと思はれたが——を階上へ向けやうとしなかつた。

「まあ、お前さんはお馬鹿さんだよ！」とスパージット夫人は一人で夜喰の席についてゐた時にあつた。誰を指してゐつたのか、彼女はあはなかつた。だが恐らくその御馳走のことを意味したのでないことは分つてゐた。

二、ジエームズ・ハートハウス

グラッドグラインド黨は、美の女神達の咽喉を掻き切るのに援兵を必要とした。彼等は斬り手を募りに此處彼處と歩き廻つた。だが、何もかも無價値なものとしてゐる代りは、又何でもござれに手を出すあの上流社會の紳士達の間にも増して、新手を募り得る場所が何處にあつたらう？その上、この崇高な無關心の高處に到達してゐる『健全な精神』の人達は、グラッドグラインド派の大勢にとつて、

大
—四九四—

した魅力を持つてゐた。彼等は上流の紳士を好んだ。好かぬやうな風はしてゐたけれども、その實は好きであつた。彼等はいかふ紳士を眞似しようとして、精の盡きるほど骨を折つた。彼等はものはいふには彼等を眞似て、悠暢な口のきゝ方をしたり、いかにも疲れたらしい様子で、經濟學の徹くさい一片を切り賣りし、それで弟子達に御馳走した。かふして造り出された雑種ほど驚くべき種族は、かつて地上に見られたことはなかつたのである。

型通りにグラッドグラインド黨に屬してゐるわけではないが、これらの上品な紳士達の中に、門閥もよく、風采も優れた一人があつた。彼は圓轉自在のユーモアの持主で、或る鐵道事故に關する彼の（そして又重役會議の）意見を下院で滔々と述べたときに大いにその効果を見せたものであつた。その鐵道事故なるものは、と聞くと、かつて聞いた中でも最も自由な理事者達に雇はれ、かつて工夫された最も巧妙な機械組織に助けられて、かつて知られた最も綿密な従業員達が、かつて建設された最も上等の線路の上を運轉しながら、何か事故を仕出來して、五人を轢殺し、三十二人に重傷を負はしたと

いふのである。だがかふいふ事故もなければ、卻つて全組織の優秀なところが、決定的に不完全だと思はれたことであらふ。死んだものうちに牝牛が一匹ゐた。また誰のものとも分らない散亂した品物のうちに、寡婦さんの帽子があつた。そこで、この尊敬すべき下院議員は、この帽子をその牝牛の頭におつかぶせて下院（それはユーモアに對する微妙な理解を持つてゐる）を大いに笑はせたので、それは検死官の調査に關する眞面目くさつた陳述などに我慢しきれず、拍手喝采と哄笑をもつて、その鐵道事故を吹き飛ばしてしまつたのである。

さてその紳士には彼より風采が立派な弟があつた。この弟は龍騎兵の下士官として世に立つたのに、忽ちそれが厭になつてしまつた。その後、或る英吉利大使の一行に加はつて外國で身を立てようとしたが、それも厭になつてしまつた。それからジェルサレムまで、ぶらぶら出掛けたが、そこでもうんざりしてしまつた。で、今度は快走船に乗り込んで、世界漫遊と出掛けたが、到るところでうんざりしてしまつたのである。その弟に向つてあの尊敬すべき愉快な下院議員は、いかにも兄らしい口調で或る日かういつて聞かせた。「ジム（ジェームズ）、近ごろあの事實一點張りの實務聯中の間に、あゝ立身の機會があるのだ。あの聯中は人を欲しがつてゐる。どうだね。お前が統計を少し『やつて見て』は。」ジムは、この思ひつきの新奇なのに大いに動かされもし、それに變化を欲しがつてゐた時だつたので、直ぐさま統計で『され、他の如何なるもので』と『やつて見よう』とかゝつた。彼はそれを本當に始めた。彼は二二

—四九五—

冊の青表紙（議會報告）でうまく要領を呑みこんだ。そこで彼の兄は實務家達の間はその事をいろいろと吹聴して歩いて、かふあつた。「まあ諸君、諸君の爲めに立派に代辨出来るやうな小綺麗な奴を何處かに使つて見たいと思はれるなら、わしの弟のジムの奴の面倒を見て貰へまいか、あれなら諸君には打つてつけの人間に出来てゐるんだから。」公會の席で二三度勇敢にやつてからは、グラッドグラインドも政界の長老達の協議會もジムを認めた、さうして彼はコークタウンに下つて、近隣へかけて顔を買つて來るがよいと決議されることになつた。そこでジムが昨晚スパージット夫人に示し、又今はバウンダアビイがその手にしてゐる紹介狀が書かれたといふ次第であつた。『コークタウンにて、銀行家、ジョサイヤ・バウンダアビイ殿、特にジェームズ・ハートハウス殿を御紹介申上候。トマス・グラッドグラインド』と表記してあつた。

この手紙とジェームズ・ハートハウスの名刺とを受け取つてから一時間もたゝないうちに、バウンダアビイは、帽子を冠つて、そのホテルへ出掛けた。行つて見ると、ジェームズ・ハートハウスは窓から外を眺めてゐたが、さも詰らないとひつた風で、早くも他の何かを『やつて見たい』氣が半ば起つたらしい様子であつた。

「わしの名は、」と彼の訪問客はゐつた。「コークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイと申します。」ジェームズ・ハートハウスは久しく望んでゐた面會の榮を得て、非常に満足だとゐつた。（尤も彼はそんな風には殆ど見えなかつたが。）

「コークタウンは、その、」とバウンダアビイは無遠慮に椅子を引き寄せながらかふあつた。「あなたが今まで居られたやうな處ではないです。そこでぢや、あなたが差支へなけりや——いや差支へがあらうとなからうと、わしはもともと飾り氣のない人間ぢやから、——肝心のお話を進める前に、その點についてあなたに一寸お話し致しませう。」

ハートハウスは喜んで伺ひますとひつた。

「さう喜ばれるのはまだお早い。」とバウンダアビイはゐつた。「わしはその點のお約束は出來んの

ぢやかち。第一にあんたはわし等の町の煤煙がお見えになるぢやらう。あれはわし達の喰物でもあり飲みものでもありますのぢや。ありや、どの點から見ても世界中で一番健全なものなのぢや。殊に肺臓の爲めにはな。若しもあんたがこの煙を無くせよと仰しやる仲間の一人なら、わしはあんたと意見が合ひませんのぢや。わし達は汽罐の底を現在やつとる以上に、早く消耗させやうなどは思つとらんのです。大ブリトンや愛蘭の誤魔化しやの感傷家達が何とゐはふともぢや。」

「どこまでも『やつて見る』といふつもりを見せて、ハ―

―四九六―

トハウスはかふ應じた。「バウンダアビイさん、誓言して申します。わたしは一から十まであなたのお考へと同じです。慥かに。」

「それを伺つて大いに安心致しましたぢや。」とバウンダアビイはあつた。「さて、あんたはわし達の工場の仕事についてちや、随分と澤山お聞き及びのことでごさいますうて、大方な。うむ、成る程な？いや大きに結構。わしはあんたにそれに関した事實を申し上げませう。いやこの仕事といふのは愉快この上なしの、樂なことはこの上なしの、支拂はれる賃銀の高も、この上なしのものぢやて。これ以上には到底わし達は工場そのものを改善する餘地はありません、まあ土耳其古出来の絨毯を牀にでも敷くとなれば別ぢやが、そんなことまでわし達はしようと思つとりませんぢや。」

「いや、バウンダアビイさん、至極御尤もです。」

「最後にぢや、」とバウンダアビイはあつた。「この職工のことをお話し致しませう。この町の職工には、あんた、男にせぬ、女子にせぬ、子供にせぬ、一生に一つの目的を持つとらんものは一人もありません。その目的とは、金の匙を使つて、海龜のスープと鹿肉とで喰事をするといふのです。ところがぢや、何時までたつても、彼等には、金の匙を使つて、海龜のスープと鹿肉とで喰事をするものが、どうも出来さうにもありませんのぢや――彼等の誰ぢやとてな。これでこの土地の様子も大體お分りになつたといふものです。」

ハートハウスは、これほど見事にコークタウンの全問題を壓縮した大要を伺つたので、實に教へられるところもあり、興味も深かつたとお辭儀をあつた。

「いや、御覽の通り、」とバウンダアビイは答へた。「わしは他人様とを近づきになる時には、その人と、殊にその方が世間に名のある方の場合には、腹藏なく話し合つてみると氣が濟みませんのでな。わしはもう一つだけあんたに申し上げとかふと存じますのぢや、ハートハウスさん。さうしてから、わしは最善の努力をして、友人のトム・グラッドグラインド氏の紹介状にある通りにすることをお約束致しますせう。あんたは名家のお方ぢや。ぢやがどうかはしが名家の生れぢやなどと、一時なりとも思ひ違ひをされては困りますのぢや。わしは襤褸に包まれた貧乏人の片割れですて、正眞正銘の裡店の出ですて。」

若し何物かバウンダアビイに對するジムの興味をそゝつたとすれば、慥かにこの貧乏人の片割れといふ事實であつたらう。彼はさうバウンダアビイに語つたのである。

「さて其處でぢや、」とバウンダアビイはあつた。「わしとあんたは平等に握手をしてもよろしいと思ひますのぢや、わ

―四九七―

しが平等と申したのはぢや、つまり自分がどのやうな人間か、また自分の身を持ちあげて、抜け出し

て来た溝の深さが精確にどれだけあるか、わしは誰よりもよう承知しとるとはいふものゝ、わしとてあんたと同様に、大いに誇るところがありますからぢや。わしは丁度あんたと同じ位に誇りをもつて居りますのぢや。いや、これでわしは自分の一本立ちになつたことを立派に申し上げた譯ぢやから、今度はあんたに御挨拶を申し上げませうて。さあ、わしはあんたの御健勝を祈りますぢや。」

ハートハウスは彼と握手したときに、コークタウンの健康な空氣のお蔭で、尙更健康を増したといふことを述べた。

バウンダアビイは上機嫌でその返辭を受けた。

「多分あんたは御存知かも知れんが、」と彼はあつた。「いや多分御存知ないかも知れんが、わしはトム・グラッドグラインドの娘を家内にしとりますのぢや。で若しあんたが格別御用がなくて、わしと御一緒に町へお出掛け下さると仰しやるなら、わしは喜んでトム・グラッドグラインドの娘にあんたを紹介させて頂かうと思ひますが。」

「いや、バウンダアビイさん。」とジムはあつた。「あなたのお話は私の願つてゐるところと申すもので。」

彼等はその上別に話はずに出掛けた。そこでバウンダアビイは、彼とは如何にも際立つた對照をなすこの新知人の案内をして、鎧戸の黒い、内側の日覆の緑色の、そして二段の白い踏段の上に黒い正面扉がある、あの鍛煉瓦造りの私邸へと聯れて行つた。その邸宅の客間に入ると、間もなく彼等のところへ、ジェームズ・ハートハウスのこれまでに見たこともないやうな素敵な娘がやつて来た。彼女は、何處までも几帳面に堅くるしさうで、しかも何處までも無頓着であつた。非常に遠慮深いやうであつて、また大へんよく氣がついた。ひどく冷たく高慢らしいやうであつて、また彼女の夫の自慢まじりの謙遜ぶりをひどく敏感に恥かしがつてゐた。——彼女はその自慢が出る度にまるで斬られたり打たれたりでもしたやうに感ずるらしく、體を竦めるのであつた。彼女のかふいふ様子を見てゐると、ハートハウスは、全く一種新しい感銘を覺えた。容貌だけについてゐつても、彼女はその物腰に劣らず素敵なものであつた、彼女の顔立ちは立派なものであつたが、自然のまゝの動きが深く閉ぢこめられてゐるので、その生れつきの表情がどんなものかは、推察することが出来なかつた。全く無關心で、全く自分を恃んで決して當惑した様子も見せず、さりとして打ちつけてもゐず、體だけは彼等の間に仲間入りしてゐるものゝ、その心は明らかに全く獨りぼつちなことが分る——これでは全くこの娘を諒解しようとして『やり出して見て』もどうにもならなかつた。あらゆる洞察も彼女をつかむこ

—四九八—

とは出来なかつた。

訪問客は、この家の主婦から家そのものに眼を移した。この部屋には無言のうちに女氣のあることを語るやうなものは何もなかつた。優美な小裝飾とか、空想に富んだ意匠など、およそ、いかにつまらない物にしても、女のある氣配を示すものは一つもなかつた。愉快さもなく、慰めもなく、たゞ傲慢に頑固にごてごてと金ぴかものを並べたといふ風で、この部屋は、そこにゐる人達を四方から睨みつけてゐたが、殆ど一寸ちの女氣の躋さへないので、和らぎや寛いだ氣持は、まるで感じられなかつた。丁度バウンダアビイがその屋内の神々（家庭生活の諸要素の意味）の眞中に突つ立つてゐると同じやうに、かふいふ情け容赦もない神々の方でも、バウンダアビイの周圍にそれぞれ自分の席を占めて、負けず劣らず、互ひによく釣り合つてゐた。

「これが、」とバウンダアビイはあつた。「わしの家内のミセス・バウンダアビイで、トム・グラッドグラインドの長女ですぢや。これ、ルウ。この方は、ジェームズ・ハートハウスさんと仰しやるん

ぢや。ハートハウスさんは、今度お前のお父さんの黨員名簿に入られた方ぢや。この方はまだ當分トム・グラッドグラインドの同僚議員でないにしても、わしはこの方が少くとも、この近隣の町の一つを代表して名を擧げられるに違ひないと信じとる。御覽の通り、ハートハウスさん、家内はわしにはづと年下でしてな、これがわしをどう見て結婚する氣になつたのか、わしには分らん。ぢやがこれは、わしを何處か見どころのある男だと思つたものでせう。さもなければ、これはわしと結婚しなかつたぢやらうと思ひます。これは、なかなか金のかゝつた學問を澤山持つとりましてな、あなた、政治學ちやとか、その他のことも、若しあなたが何か至急に覺えなけりやならんことがありましたら、わしはルウ・バウンダアビイより立派な御相談相手をおすゝめすることが一寸出来なからうと思ひますよ。」

これ以上氣持のよい相談相手は、つまり、この人ほどに自分が教へて貰ひたひと思ふやうな人をすゝめてくれることは出来なからう、——ハートハウスはかふあつた。

「そこでぢや。」とこの家の主人はあつた。「若しあなたが社交がお好きでゐらつしやれば、わしの家へ来てなさるがひゝと思ひますな、こゝらでは誰もあなたのお對手になるやうな人はをらんからぢや。わしは自分としては一寸も社交など學うとしたことがありませんでな、ぢやから、わしは、別に社交の仕方を知つてるやうな風は一向に見せませんのぢや。事實わしはそれを輕蔑しとります。ぢやがあなたのお育ちはわしのととは雲泥の相違ぢや。わしのは實地から來とるんでな、慥かに！あなたは紳士ぢや。がわし

—四九九—

は紳士ぢやといふやうな顔はせん。わしはコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイぢや、それだけでわしは澤山なんぢや。併し、わしは禮儀作法とか自分とかいふものに感心はせんが、ルウ・バウンダアビイは感心するかも知れんです。あれはわしの持つ長所を持つとらん。——あなたはそれを短所とゐはるゝかも知れんが、わしはそれを長所と呼びまづのぢや——そこで、あなたは折角の力を徒になさるやうな事はなからうと存じますて。」

「バウンダアビイさんは、」とジムは微笑を浮べてルイザの方へ向きながらあつた。「ゐはゞ比較的自然に近い情態の高尚な動物と申し上げてゐゝですな。私のやうな因襲に捉はれた貸馬車の馬は、馬具に縛られて働いてるのですが、御主人は全然それをつけてゐられんですから。」

「あなたは、バウンダアビイを大へん尊敬してゐらつしやいますこと。」と彼女は靜かにかふ應じた。「あなたがさうを考へなのも御尤もでございます。」

世間をあくまで廣く見て來た紳士としては、彼は不體裁にも、背負投げを喰はされた形だつた。で考へた。「さあ、おれは今の言葉を一體どうとつたらひゝのか。」

「バウンダアビイの申しましたところによりますと、あなたはお國の御用に一身を捧げてお盡くしなさるおつもりで、あなたは、」とルイザは最初入つて來たときと同じやうにやはり彼の前に立つたまゝかふるあつた。——彼女はひどく落ちつきすましてゐながら、何だか明らかにもぢもぢしてゐる様子に見えるのが、妙な對照をなしてゐた——

「この國に種々な困難を切り抜ける道をお示しなさらうと御決心遊ばされたのでございませう。」

「いや、バウンダアビイ夫人。」と彼は笑ひながら答へた。「そんな、大したことぢやないのです。

私は、あなたにそんな風に見せかけやうなどは思ひません。私は、少しばかり其處此處、上下の社會を見物したに過ぎません。私は何れも大變つまらぬものだといふことを見抜いたのです。皆さんと同じやうにですね、それをさうと告白する方もあるし、告白しない方もありますけれど、皆さう思つ

てはゐるのです。それで私はあなたのお父さんの御意見に従つて一働きすることにしたのです。

それも實際、私にはこれといふ意見を選ぶことが出来ないからのもので、別にそれに限つたことはありません。外のどんなものを後援したつてゐるのです。

「あなたは御自分の御意見は、お持ちではございませんので。」とルイザは訊いた。

「それどころか私は極く一寸した性癖といつたやうなものでさへ、残して置かなかつたのです。正直に申せば、私はどんな意見でも、大して大事なものだと思ひません。私も

—五〇〇—

種々様々のうるさいことを経験しました結果、一つの確信（確信といふと、私がこの點に對して持つてゐる遊惰な感情を現はすには、どうも少し嚴しすぎる言葉に聞えますが）、到達したのです。つまりどの思想の體系でも、中には利益を獅らすのもあ彰、弊害を齎らすのもあるといふのです。いつか面白い伊太利の格言を家憲とした英吉利人の家庭がありましたよ。それは『なるやうになるだらう』といふのです。これだけは何方でも通用する眞理ですな！

かふいふ具合に、誠實を不誠實のうちに装はせるとひつた意地悪の態度が——それは、非常に危険な、非常に致命的な、また非常に月並な悪趣味である——彼の見たところでは、いさゝか彼女に感銘を與へて、彼に好意を抱かせた如く見えた。彼はこの好機會を逸さずに、最も愉快な態度で、——この態度に對して彼女が、如何に多く、または如何に少く意味を附したかそれは知らないが、——話をつづけた。「二位、十位、百位、また千位の數字を並べて、たとひ少しにしても成功することが出来るのを見せてゐるやうな黨派は、最も面白い慰めを與へるものゝやうに、また人間にもつとも成功しよい機會を與へるものゝやうに私には思はれるのですな。バウンダアビイ夫人。私はまるで自分がそれを信じてゐるやうに、あくまでその黨に熱心になつてゐるのです。私は、同じ程度に、それに加はつて何時でも一働きしようと思つてゐるのです。ですから私がそれを信じてゐたにしても、恐らくこれ以上のことが私に出来たでせうか！」

「あなたは一風變つた政治家であらうしやいますのね。」とルイザはゐつた。

「これは恐縮です。さう仰しやられる値打さへございませんのですが、實際のところバウンダアビイ夫人、若し私達がめいめい附焼刃の地位から皆抜け出して、一緒に再審査を受けるやうなことになりましたら、きつと私達の仲間が、この國中で一番大きな黨派に違ひありませんね。」

仕方なしに黙つたまゝ今にも爆發せんばかりにふくれてゐたバウンダアビイは、こゝで家族の晚餐を六時半まで延さうといふ動議をきつかけに、この會話に口を挿んだ。そしてその間にハートハウスを聯れて、コークタウン及びこの近所の選舉權所有者やその他の面白い著名な人々を一巡りしようといひ出した。一巡の訪問が行はれることになつた。そこでジェームズ・ハートハウスは例の青表紙から拾つた知識を慎重に應用して、意氣揚々と出掛けた。實にうんざりする煩さゝる仕事ではあつたのだが。

夕刻に歸ると彼は晚餐の喰卓に四人分の支度が出来てゐるのを見た、だがそこに坐つたのは三人だけだつた。晚餐はバウンダアビイにとつて、彼が八歳のとき、街路で半へ

—五〇一—

ンスだけ買った蒸煮にした鰻の味のことや、彼がその喰物を洗つた時の、特に撒水として使はれてゐた不潔な水のことなどを述べたてるには、實にもつて來ぬの機會であつた。同様に彼はスープと魚の

出る間に、その客をもてなすつもりで、自分の若い頃にポロニ（半ば料理された豚肉のソーセージ）やセエヴロイ（鹽漬の豚肉でよく乾し上げられたソーセージ）だと思つて喰つた馬肉は少くとも馬三頭位になるだらう、といふことを計算までして見せた。かふいふ自慢話をジムはさも懶さうな態度で、「素敵ですな！」といふ合の手を入れながら聞いてゐた。若し彼がルイザのことでこれほど好奇心を起さなかつたなら、恐らくこんな話には參つてしまつて、明日の朝にでも直ぐ再びジェルサレムへ行くつもりになつたことであらふ。

「何かないものかしら、」と彼は彼女が喰卓の正席についた時、彼女の方をちらりと見てかふ考へた。そこでは彼女の若々しくて小さい、ほつさりとした、だがあくまで優美な姿は、いかにも可愛らしく見えて、まるでそこに坐らされたのが間違ひのやうに思はれた。——「あの顔を動かさせるものは何もないかしら。」

いや、あるのだ！神かけて慥かにあるのだ、しかもそれは、こゝに思ひ設けぬ形で現はれた！トムが現はれたのである。扉が開くと同時に彼女の顔は忽ち變つて、こぼれんばかりの微笑を湛へた。實に美はしひ微笑である。彼女の無感覺な顔をあんなに長く訝つて眺めてゐなかつたら、ジェームズ・ハートハウスは、この微笑をそれほど美はしいと考へなかつたかも知れない。彼女はその手を——可愛い小さな柔かい手を差し出した。彼女の指はその弟の指をしっかりと握つて、まるで弟の指を自分の唇に持つて行かうとするやうに見えた。

「は、はあ。」と客は考へた。「このやくざ青年が、この女の唯一のお氣に入りなんだな。さうか、さうか！」

このやくざ青年は紹介されてから、自分の椅子についた。やくざ青年といふ名は、決してお世辭でゐつたものではなかつたが、しかし不當なものではなかつた。

「わしがお前くらゐの年頃にはな、トム。」とバウンダアビイはゐつた。「時間は精確に守つたものぢや、さもないと御馳走の席などには就かれんかつた。」

「あなたが私位の年には、」とトムは直ぐかふ應じた。「計算の間違ひなんてものをやり直さなくともよかつたし、それを濟ましてから衣物を着かへなくてもよかつたでせうからね。」

「こゝでそんなこと言はんでもよい。」とバウンダアビイはゐつた。

「そんなら、」とトムはぶつぶつゐつた。「あなたの方でそんなことを言ひ出さないで下さい。」

—五〇二—

「バウンダアビイ夫人、」とハートハウスはこの二人の力み合ひを十分に聞き取つてかふゐつた。「あなたの弟さんのお顔は私には何だか覺えがあるやうに思ひますよ。何處か外國でお見かけたことがあつたぢやないですかね？それとも多分何處かの學校で、も？」

「あゝえ。」と彼女はすつかり感興をそゝられた様子で答へた。「あれはまだ外國に參つたことは、ござりません。教育もこの土地で、家庭で受けたのでございます。トムや、わたしはね、お前を外國で見かけた筈がないとハートハウスさんにお話ししてゐるんですよ。」

「あゝえ、あなた、そんな運のゐゝことがあるのですか。」とトムはゐつた。この弟には、姉の面上を晴れ晴れさせるやうなものは殆どなかつた。といふのは彼は氣むづかしやの青年で、彼の態度は姉に對してさへ不躰であつた。それだけに彼女の胸の中の寂寞と、それを誰かに打ち明けたいといふ氣持とはますます大きいに違ひなかつたらう。「だからこそ、このやくざ青年はますますこの女の可愛がつてゐる唯一の人間となつてゐる譯なんだな。」とジェームズ・ハートハウスは繰り返して、考へた。「それだからこそだ。それだからこそだ。」と。

姉の前にゐた時にも、姉がこの部屋を去つた時にもこのやくざ青年はバウンダアビイに對する輕蔑を隠さうとさへせず、この獨立獨歩の成功家の眼につかない時には、きまつてその顔を擧めたり、片方の眼をつぶつたりして、輕蔑を現はせて見せるのであつた。かふいふ電報的の通信には應答はしなかつたが、ハートハウスは、宵のうちは大いに彼を勵まし、並々ならぬ好意を彼に示したのであつた。最後にホテルへ歸らうと立ち上つたが、さて夜で道が分るかどうかとゐさゝか危んだときに、このやくざ青年は直ぐ案内者の役目を申し出て、ホテルまでお供しようと一緒に出かけた。

三、不良兒

不自然な拘束といふことに一貫した方法で教育されて來た青年紳士が、偽善者になるといふことはいかにも珍らしいことであつた。だがトムの場合にはまさしくそれに違ひなかつた。ものゝ五分間と續けて、自分の意志に従つて行動するのを許されたことのない青年紳士が、遂に自分で自分を制御することが出来なくなるなどゝは、大いに不思議なことであつた。だがトムの場合にはまさしくさうであつた。

その想像力を既に搖籃のうちで絞め殺されてしまつた筈の青年紳士が、未だに、下劣な肉慾と化した想像力の幽靈に悩まされるとは、全く解し難いことであつた。だがかふる

一五〇三

ふ怪物がトムであることに、寸分疑ひはなかつた。

「君は煙草はおやりですか？」とジエームズ・ハートハウスは、二人でホテルについたときに訊ねた。

「やりますよ。」とトムはゐつた。

で彼はトムに上つてくれといふ外はなかつた。そこでトムは上らな譯にかなかつた。この暑氣には打つてつけの冷たい飲みものやら（しかし冷たいわりにそれほど弱くない）、この邊りでは一寸手に入らない珍しい煙草をやつたりで、トムは忽ちソファの片端に、すつかり伸び伸びしたこの上ない打ち解けた氣持になつて、他の端に腰をかけてゐる彼の新しい友達をいよいよ讚美せずにはゐられなかつた。

トムは一寸の間煙草を喫んでゐたが、煙を脇に吹きやると、その友をまぢまぢと眺め出した。「この男は身装なんか氣にしてはゐないやうな風をしてゐるが」とトムは考へた。「ひどく氣をつけてゐるんだな。この男は何といふ氣輕なしやれものだらう！」

ジエームズ・ハートハウスはトムの眼差をひよいと見て取つたので、自分はちよつとも飲らぬがと斷つて、無雜作な手つきで、彼のコップに注いでやつた。

「有難う！」とトムはゐつた。「看難う。ねえ、ハートハウスさん、あなたは今晚バウンダアビイ爺さんの自慢話には居眠りでも出たでせうね。」トムはかういひつゝ又その片方の眼を閉ぢて、コップ越しに意味ありげに彼の響應者を見つめたのである。

「實際大變にゐゝ人ですな。」とジエームズ・ハートハウスは答へた。

「あなたはさうを思ひなすね？」とトムはゐつた。そして又、その片眼を閉ぢた。

ジエームズ・ハートハウスは微笑を洩らした。それから腰掛けてゐたソファの片端から立ち上り、自墮落に背中を爐棚にもたして、トムと眞正面に向き合ひ、彼を見下して、煙草を吸ひながらかふるつた——「君は義兄さんに比べると實に可笑しな弟さんですな！」

「義兄さんのバウンダアビイの爺さんてのはどうも可笑しいですな、とかふ仰しやるんでせう。」とトムはゐつた。

「いや、なかなか辛辣ですね、トム君。」とジエームズ・ハートハウスはやり返した。かふいふ胴衣を着たしやれものところほど仲よくなるのは、——またかふいふ親しげな態度や聲音でトムと呼ばれるのは——これほど早速に、しかもかふいふ頬鬚のある大人と無遠慮に話の出来る仲になるといふことは、何かしら大變に愉快だったので、トムは一人で竝々ならぬ御機嫌であつた。

「さう、あなたがさう仰しやるなら。」と彼はゐつた。「僕は

一五〇四

バウンダアビイ爺さんを好かないのだと白状ませう。僕はバウンダアビイ爺さんを、爺さんのことを話す時は何時でも、かふ呼んでゐたし、また何時も同じ風に爺さんのことを考へてゐたものですからね。僕はバウンダアビイ爺さんのことで、今更特別に丁寧にしようとは思ひません。やらうたつても大分遅いですからね。」

「いや僕の前でなら心配しなくてもゐます。」とジエームズは答へた。「けれども奥さんが傍においでの時なんかは、一寸注意した方がゐるゝでせう。」

「奥さんですと？」とトムはゐつた。「姉のルウですか？あゝ、成る程——彼は大聲に笑つた。そして冷たい飲みものをもう少し呷つた。ジエームズ・ハートハウスは相變らず同じ場所であらうして、自堕落な風に煙草を吸ひ、愉快げにこのやくざものを眺めてゐた。——自分は一種の愉快な惡魔で、このやくざの上に黒い翼をのしてゐる、自分の一言で、このやくざは靈魂をすつかり自分に差し出すに違ひない、といふことを知り抜いてゝもゐるかのやうに。流星のやくざも、この『愉快な惡魔』の魅力にはすつかり參つたやうに見えた。

彼は對手を盗むやうに眺めた。彼は對手を讚美するやうに眺めた。彼は對手を大膽に眺めた。そして片足をソーファの上に投げ出した。

「姉のルウですか？」とトムはゐつた。「ルウは、バウンダアビイの爺さんなんか、ちつとも好きぢやなかつたんですよ。」

『好きぢやなかつた』は過去形だね、トム君。」とジエームズ・ハートハウスは、そのシガーから小指で灰をはたき落しながらかふ應じた。

「僕等は今、現在形で話をしてゐるのぢやないですか。」

「ではゐるゝですか、自動詞で『好かぬ』といふやつですよ。直接法で、現在形ですよ。第一人稱單數『私は好かない。』第二人称單數『あなたは好かない。』第三人稱單數『彼女は好かない。』どんなもんですね。」とトムは答へた。

「上出来、どうも、面白いね！」と彼の友はゐつた。「だがまさか君は本氣でいふつもりではあるまいがね。」

「いへ、本氣も本氣、大本氣ですよ！」とトムは叫んだ。

「斷じて虚言はない！いやあなたゝつて、ハートハウスさん、姉のルウがバウンダアビイ爺さんを好いてゐると本當に想像などはなさらんでせう。」

「ねえ君。」と對手は答へた。「結婚した二人が仲良く幸福に暮らしてゐるのを見てゐるのに、僕は何を想像しなけりやならないといふのかね？」

トムはこの時には、その兩脚をソーファの上ののせてしまつてゐた。若し一方の脚が、ねえ君といはれた時にはま

一五〇五

だそこに載つてゐなかつたとすれば、彼は會話が丁度この大事なところに達したときに、それを載せたのであらふ。その時、彼は何かしなくてはならないやうに感じたので、背一杯に延びをしてみ、後頭をソーファの一端にもたせ、不精の極みを盡して、煙草を吹かしながら、平凡な顔と、餘り素面ではない眼差とを――如何にも無頓着さうには見えたが、然し力をこめて彼を見下してゐる顔の方にさし向けたのである。

「あなたはうちの親父を知つてませう。ハートハウスさん。」とトムはゐつた。「それならルウがバウンダアビイ爺さんと結婚したのに何も驚くには當らんですよ。姉は戀人を持つたことがなかつたんです。そこへ親父がバウンダアビイ爺さんをすゝめたので、姉さんは承諾したまでです。」

「君の面白い姉さんはなかなか親孝行なんですね。」とジエームズ・ハートハウスはゐつた。

「えゝ、しかし姉だつて格別親孝行つて譯ちやなかつたかも知れないし、またその話だつてさう容易に運ばなかつたかも知れませんよ。」とやくぎ青年は答へた。「それが皆僕の爲めにならなけりやね。」誘惑者はたゞその眉を上げたゞけであつた。だがやくぎ青年は話を進めざるを得なかつた。

「僕が姉さんを説きつけたのです。」と彼は何か大層なことを教へでもするやうに偉さうな態度であつた。「僕はバウンダアビイ銀行に押しこまれたんです(ちつともそんなところへ入りたくなかつたんですが)。それで姉さんがバウンダアビイ爺さんの御機嫌を損じてくれるやうなことがあると、僕は、自分が大いに苦境に落ち込むことになるに違ひないと思つたのです。で、僕は姉さんに自分の註文を話すと、姉さんは承知してくれたんです。姉さんは僕の爲めになら何でもやつてくれるんですからね。本當に弟思ひぢやありませんか?」

「それは素敵だつたね、トム君。」

「でも、それが僕にとつてほど姉さんにとつても重大だつたはけでは決してなかつたんです。」とトムは涼しい顔をしてつゞけた。「何しろ僕の方は自由も愉快も、また恐らく僕の財布の重みも、みんなそれにかゝつてゐたんでせう。ところが姉さんには外に戀人などがなかつたんだし、家にちつとしてゐるのはまるで監獄に閉ぢこめられてゐるやうなものだつたんですね。――殊に、僕がゐなくなつてからはですね。何も姉さんがバウンダアビイ爺さんの爲めに、ほかの戀人を捨てたといつたやうな譯ぢやなかつたんです。」

しかし、でも姉さんとしちやなかなか深切にしてくれた譯だつたんですね。」

「そりや結構だつたですね。また姉さんもあゝして平和に

一五〇六

やつてゐらつしやるんだから。」

「えゝ。」とトムは輕蔑したやうな恩人氣取りを見せてかふ答へた。「ありや型に嵌つた女ですよ。女は何處でだつてやつて行けます。女は一度生活に落ち着いてしまふと、ちつとも氣にかけませんからね。そりやどんな生活だつて同じことなんです。ルウは女だけれども、あれでなかなか月並な女でないところもあるんです。姉さんは自分の中へしつかり閉ぢ籠つて、一時間でも續けざまに考へてることが出来るんですよ――僕は度々姉さんが坐つたまゝ、ちつと火をみつめてゐたことを知つてゐるんですから。」

「おや、おや? 姉さんは姉さんで、別に御自分の思惑をお持ちなのですな。」とハートハウスは靜か

に煙草を吹かしながらゐった。

「それだつてあなたが想像なさる程のものぢやないでせう。」とトムは答へた。「もともとうちの親父は姊さんにいろいろ面白くもない詰らぬものを無暗に詰めこませたものですからね。それが、親父のやり口なんですよ。」

「御自分の娘さんを御自分といふ雛盤通りに仕上げたのですね？」とハートハウスは暗示した。「自分の娘を？えゝゝ！その上に誰でも彼でもやつたんですよ。えゝゝ、僕だつてその方法を適用された一人なんですからね。」とトムはゐつた。

「まさか！」

「いや實際やつたんですよ。」とトムはその頭を振りながらゐつた。「僕はかふるひませう、ハートハウスさん。僕が初めて自分の家を出てバウンダアビイ爺さんの處へやつて来た時には、まるで僕は煖繻器のやうに平板で、人生なんてことについていや、牡蠣みたいは何も知りませんでしたからね。」

「いや、トム君、僕にやそんなことは信じられないね。そりや、冗談の冗談でせう。」

「いいへ、どうして、どうして！」とやぐさ青年はゐつた。「僕は眞面目ですよ。本當に眞面目ですよ！」彼は暫く大へん眞面目くさつて、鹿爪らしく煙草をふかした、それから満

足らしい口調でかぶ言ひ足した。「えゝゝその後僕もちつとはいろんなことを覺えましたよ。僕は否認しやしません。しかしそりや僕自身でやつたんで、親父さんなどのお蔭ぢやないんです。」

「では、君の利巧な姊さんは？」

「僕の利巧な姊さんは、以前のところにうろふろしてゐますよ。姊さんは女が普通に頼りとするやうなものを一つも持つてゐないつてことをよく僕にこぼしてゐました。その後どうして凌ぎをつけてゐるのか、僕には分かりませんがね。ですが姊さんは大して氣にしないでゐませんよ。」と彼は

—五〇七—

又もやそのシガーをふかして、いかにも小賢し氣にかふるひたした。「女といふものは何時だつてどうにかやつて行くもんですからね。」

「昨日の夕方バウンダアビイさんのお所を訊ねに銀行へ行くと、あそこに一人お年寄りの御婦人をお見かけしましたが、君の姊さんをひどく讚美してゐるやうだつたですね。」とジェームズ・ハートハウスは丁度吸ひ終つたシガーの最後の小さな残りを投げやりながらゐつた。

「スパージットの小母さんですか？」とトムはゐつた。「へえ！するとあなたはもう小母さんと會つちまつたんですね？」

彼の友は首肯した。トムは口からシガーを離して、その片方の眼（それはもう彼の自由にはならなくなつてゐた）を一層意味ありげに閉ぢて、自分の鼻を五六度指で叩いてみせた。

「ルウに對するスパージット小母さんの感情と來ちや、讚美どころぢやありませんよ。」とトムはゐつた。「愛情に獻身とひつた方がゐゝでせう。スパージット小母さんは、バウンダアビイが獨身時代に引つけようなんてことは一度もしなかつたんですからね。えゝゝ、決して！かういつてしまふと、やがてやくさ青年は、眩暈がして眠くなり、あとは全くの前後不覺に落ちてしまつた。彼は何だか安らかでない夢心地で、長靴で揺り起されたり「さあ、もう遅い。歸りたまへ！」といふ聲をかけられたりしてから、われに返つた。

「さて！」と彼はソーファから這ひ出しながらゐつた。「僕はもう失敬しなきやなりません。えゝゝ。あなたの煙草は實にゐゝものですね。だが、ちと弱すぎますね。」

「やうです、弱すぎます。」と、彼の饗應者はゐつた。

「そりや——そりや滑稽なくらゐに味が弱いすな。」とトムはゐつた。「戸口は何處です？お休みなさうぞー！」

彼は又奇妙な夢心地に陥ちて、何だか霧の中を給仕に連れ出されたと思つてゐると（彼は暫く面喰つてゐたが）、その霧が自然にとけて大通りになり、彼は、ぼかんとたつた一人でそこに立つてゐた。それから、可成り容易に家路に就いたが、まだ彼の新しい友人の姿や感化力などの印象がすっかり抜け切つてはゐなかつた、——ゐは、彼の友人が、先刻と同じ顔つきでトムを眺め、同じ無雑作な態度で、空の何處かにぶらぶらしてゐるやうに思はれた。

やぐざ青年は家へ歸り、寢床に入つた。若し彼がその晩やつた事に就いて少しでも意識があつたら、そしてこれほどなやぐざ者でなく、もつと弟らしい感情をもつてゐたら、彼は途中で足をとめ、眞黒に染つた惡臭のする川に下りて行つて、川の中で永久の寢床に入つて、永久に頭の上に汚い水の垂幕を引いてこの世にお暇したことであらう。

一五〇八—

四、仲間同志

「お、友人諸君、コークタウンの踏みにじられた職工諸君！お、我が友人たる同國人、鐵腕で搾取を仕事にする壓制主義の奴隷たる諸君よ！お、我が友人にして共同受難者の諸君、同僚職工諸君、同朋諸君よ！おれは諸君にかふいふ、我々が一つの結合した力としてお互ひの周圍に聚合しなくちやならん時が來た、永い間我々の家族の利益を餌にし、我々の額の汗を餌にし、我々の手の勞働を餌にし、我々の筋肉の力を餌にし、神の創造になる人類の榮光に満ちた權利を餌にし、神聖な永遠な世界同朋の特權を餌にして、私腹を肥して來た壓制者共を粉碎しなくちやならん時が來たのだと！」

「うまいぞー！」「ヒヤ、ヒヤ、ヒヤー！」「萬歳！」その外の叫聲が、ぎつしりと人の群れた、息詰るやうな會場の四方からいろいろな聲で揚げられた。會場では演壇に立つた演説者が、今いつたやうなのやその外あらん限りの出まかせをしきりに竝べ立てゝゐた。彼は猛烈な勢ひで述べたてゝゐた、そして熱してゐただけに嘎れ聲になつてゐた、ぎざぎざする瓦斯の燈光の下で精一杯の聲で怒鳴つたり、拳を握しめたり、眉をひそめたり、齒を喰ひしはつたり、手でしきりに叩いたりしたので、彼はこの時にはもう可成りへとへとなつて、一寸休んで水を一杯飲んだ。

演説者がその一杯の水で面上に燃ゆる火を消さうと努めながら立つてゐた時に、彼と、彼の方に向いてゐる熱心な顔の群との間に見える比較は、彼にとつてひどく不利なものにうつた。生來の相貌から判断してみると、彼は、その立つてゐる演壇を除けば、會衆に優つたところがほんの少しよりなかつた。反對に、彼はいろいろな大事な點で、根本的に彼等に劣つてゐた。彼は彼等ほど誠實でなく、彼等ほど愛想よくはなかつた。彼の狡智は彼等の眞率に代り、彼の激情は彼等の安全な、健實な思慮に代つた。不恰好な體つきの、肩の怒つた男で、八字眉の爲めに顔の相好がゆがんで、何時も醋つばいやうな表情を見せてゐる——彼は勞働者よりづゝと立派な衣物をきてゐるが、粗末な仕事衣を着た彼の聽衆と對照されるとひどく不利な印象を與へた。この種の會衆では何處でも會衆を指圖する得々たる人間は、貴族にせよ、平民にせよ、大抵は智慧のない人間ばかりで、彼の空虚な頭を、會衆の四分の三の人々がつめてゐるぐらゐの腦力まで引き上げることには到底出來ない相談だといつて、程だが、それでも會衆がかふいふ人間の退屈な指圖に溫和しく従つてゐることを考へると全く不思議といはざるを得ない、中でもこの熱心な顔をした會衆——彼等が概して誠實なことは、偏見のない相應た觀察者な

一五〇九—

ら疑ふことが出来ない——がこんな指導者に依つて煽動されてゐるのを見ることは、特別に不思議であり、又特別にいたましいものでさへもあつた。

うまいぞ！ヒヤヒヤ！萬歳！すべての人々の顔に現はれてゐる、熱心な注意と決心が、それをこの上なく印象深い観物にした。そこでは、無頓着や、懶さや、徒な好奇心が——他のあらゆる會合の場合に見られるやうなさまざまな無關心の影の何れもが——ほんの一寸の間も認められなかつた。あらゆる人が、自分の境遇はもつとよかるべき筈なのに、何故だか知らないが、思つたよりづゝと惡ゐと感じてゐたこと、あらゆる人が、自分の境遇をより良くするためには、外の聯中と一緒にすることが何處までも必要だと考へてゐたこと、あらゆる人が、彼の只一つの希望は彼の周圍にある仲間に分を結合させることにあるのだと感じてゐたこと、それから、正しからうと間違つてゐようと（不幸にしてこの時は間違つてゐたが）、この會衆の全體がかふいふ考へを抱いて、眞面目に心から忠實に熱心になつてゐたこと、かふいふことが、そこに流れて空氣を見ようと欲した人になら誰にでも、その屋根の露き出しの梁や、白く塗つた煉瓦の壁と同じやうにはつきり見えたに違ひなかつた。またさういふ觀察者なら、この人々がいろいろな迷想をもつてゐるにも係らず、この上なく満足に、この上なく立派に役に立てられ得る偉い素質を見せたといふこと、それから、彼等の全部が何の理由もなく、彼等自身の不合理な意志だけによつて邪路に走つたと斷言するのは（どんなに何時でも當てはめられるやうになつてゐる包括的な格言があつたにしても）、火のない煙、生のない死、種子のない收穫、無から生じた有、或は一切があり得ると斷言するのと同じだといふことを、心の中で認めない譯にはゆかなかつたらう。

演説者は水で元氣をつけてから、小さくたゞんだ半巾で皺の寄つた額を右から左へと何度か拭つた、そして、彼の復活した力を集めて、びどゐ侮蔑がにがにがしさのこもつた嘲弄を爆發させた。

「だがおゝ我が友人にして、兄弟なる諸君よ！おゝ諸君英國人よ、踏みにじられたるコークタウンの職工諸君よ！おれは諸君に問ふ、諸君の窮狀も諸君のうける迫害も、この國の骨の髄まで損傷められてゐることも、實際によく知つてゐながら、そして諸君が壓制者を身慄させるほどの氣高い嚴かな満場一致で、聯合總評議會の基金に寄附することを決議し、如何なるものにせよ、諸君の利益の爲めにこの團體で發表した命令を守ると決議したことを聞いてゐながら、諸君を賣らうとする男がある、否、労働者がある（この光榮ある名を彼につけるのは遺憾だが許して貰はふ）——

一五二〇—

かふいふ時に臨んで自分の立場を棄て自分の立場を賣るやうな労働者（おれは彼がさういふ奴だといふことを認めないわけにはいかないのだ）、かふいふ時に裡切者、臆病者、變節漢となるやうな労働者、かふいふ時に諸君に對して、自分だけは仲間へ入りたくない、自由と權利の爲めに勇ましく立つたこの同盟の一人になりたくはないといふ卑怯な恥知らずな誓言などをして平氣であるやうな労働者のことを、諸君は果して何といふか。」

會衆はこゝに來ると二つに別れた。怒鳴り聲や、叱責の聲もいくらかはあつたが、一般の名譽觀念が相當強かつたので、たゞ一人の間でも彼の意見を聞かずに排斥するといふことはしなかつた。「お前のいふのが本當だぞ、スラックブリッジ！」「その男を出せ！」「その男に言はせろ！」かふいふことが四方八方からゐられた。最後に一つの張の聲がかふ叫んだ。「その男はこゝにゐるか、スラックブ

リツヂ、若しその男がこゝにゐるなら、お前の代りにその男がいふことを聞かせる。」これは満場の喝采で賛成された。演説者のスラックブリツヂは、對手の意氣に薄氣味悪く思はせるやうな微笑を浮べて自分の周りを見廻した、そして右の手を腕一杯に延ばして（これはすべてスラックブリツヂのやうな聯中の癖だが）百雷のどろく海を鎮めるやうな身振りをしながら深い沈黙が来るまで待たせてゐた。

「おゝ我が友人にして同朋たる人々よ！」やがてスラックブリツヂは激しい侮蔑の色を浮べて頭を振りながらゐつた、「おれは、諸君、壓倒された勞働の子等がかふいふ男の存在を信じないのを怪みはしない。だが昔は一杯の羹の爲めに自分の家督を賣つた人間がゐた、キャッスルリイ（愛蘭合同問題で賣國奴と言はれた外交官）もゐた、さうして今現にこの男がゐるのだ！」

こゝまで來ると演壇の傍で何か一寸こたこた押し合つてゐたが、やがてその男自身が演壇に出て來て、演説者と竝んで會衆の前に立つた。彼は青白い、いくらか昂奮した顔をしてゐた——彼の唇が特別にそれを示してゐた。だが彼は左手を頸にあてたまゝ、ぢつと立つて、自分のいふことが聞かれるのを待つてゐた。そこには會の進行を取締る司會者がゐた、それで今度は司會者がこの問題を自由にさばいた。

「諸君。」と彼はゐつた。「わしは、諸君の司會者といふ役目によつて、この問題については少し熱し過ぎたかと思はれる友人スラックブリツヂにお願ひして席について頂きます代りに、今問題になつたステイヴン・ブラックプール君のいふことを聞いて下さい。諸君は何方もこのステイヴン・ブラックプール君を知つてゐます。諸君は彼の不幸と彼のゐゝ評判のことを知つてゐると思ひます。」

—五二—

司會者がかふいつて無雜作に彼と握手し、また席についた。スラックブリツヂも同様に腰を下して、彼の熱した額をふいた——何時も左から右へ拭いて、決して反對にはやらなかつた。

「皆さん。」ステイヴンは死んだやうな沈黙の中にかふ始めた。「わつしは自分のことで何かといはれたのを聞いた、わつしにはそれを直さうと思つても出來まひ。わつしはこんなに大勢の前で何かいふことが出來ねえので、頭がぼんやりしたり、言ふことが滅茶々々になるかも知れねえけれど、自分についての本當のことは、他人の口でなしに自分の口から皆さんに聞いて貰ひてえと思ふのだ。」

スラックブリツヂは如何にもにがしがさうに、まるで頭を振りもぎつてしまひさうに振つた。

「わつしがバウンダアビー工場の中間の人間の中で、あの皆さんの相談になつた規則に賛成しねえたつた一人の人間なんだ、わつしはあれに賛成することが出來ねえ。わつしには、あんなものがいくらかでも皆さんの爲めになるかどうか分らねえ、それどころか、皆さんの害になるぐれえのものかも知れねえ。」

スラックブリツヂはあはゝと笑つて、腕を組んで嘲笑ふやうに顔をしかめた。

「だが、わつしが立つたのはそんなことをいふ爲めぢやねえ。若したつたそれだけのことだつたら、わつしは外の聯中に賛成したつてよかつたんだ。だがわつしにや賛成出來ねえだけの理由があるんだ——わつしだけのけれど、賛成出來ねえのは今だけぢやねえ、何時だつてもだ——何時でもなんだ——生涯だ！」

スラックブリツヂは踊り上り、彼の傍に立つて、齒ぎしりをして猛りたつた。「おゝ、諸君よ、おれは諸君にちやんとかふ言つて置いたではないか。おゝ我が同國人諸君よ、おれはちやんとかふ警告して置いたではないか。それにも拘らず、不平等な法律が重く落ちかゝつてゐるのが分つてゐる人間に、こんな變節的な振舞ひが見られるのは、どういふ譯だ。おゝ諸君英國人よ、おれは諸君に問ふ、自身自身の解放と諸君の解放に對し、諸君の子女等、諸君の子女等の解放に對して、これ程同意

してゐる諸君の中の一人に、こんな偽誓がどうして見られるのか。」

この言葉を聞くと、いくらかの喝采と、その呪はれた男を嘲るいくらかの叫びが聞えた。だが聴衆の大部分はちつとしてゐた。彼等はステイヴンのやつれた顔を眺めて、その興へる素樸な表情の爲めに卻つて憐れみの氣持を持たされてゐた、彼等はその深切な性質から、腹を立てるといふよりも、むしろ氣の毒に思つてゐた。

「お喋りをするのはこの委員の商賣だ。」とステイヴンが

一五二一

ゐつた。「あの人はそれだけの報酬を貰つてみる、あの人は自分の仕事をちやんとしてゐる。あの人は勝手に自分の仕事をさしとくがひ々。あの人にはわつしが堪へなくちやならんものなんぞのことにや、ちつとも氣を付けてもらはんでもえ々。あ、あの入の仕事ちやねえ。それや、わつしの外の誰の仕事でもねえ。」

かふいふ言葉には、よし威嚴とはいへぬまでも、剴切なところがあつた、それが聴衆をもつと靜肅にもつと注意深くした。前と同じ強い聲が叫んだ。「スラックブリッジ、その男にものをぬはせろ、お前は黙つとれ！」するとその場所は不思議な程靜かになつた。

「わつしの兄弟。」ステイヴンはかふゐつた、彼の低い聲はつきりと聞えた。「わつしの兄弟労働者達、——皆さんはこゝに居るこの委員にとちやさうでねえけれど、わつしにとちやさうだつてこたア、わつしが知つとる——わつしはたつた一言いひてえのだ、話せば夜が明けるまでも話せても、わつしはそんなには言ふことが出来ねえ。わつしは自分の行手に何があるかつてこたアよく知つてる。わつしは、皆さんが今度のことで皆さんに賛成しねえやうな男とはこれから附き合ひをちつともしねえことに決心してゐる。こたアよく知つてる。わつしが自分が道でのたれ死にをしさうになつてゐても皆さんがわつしの傍をまるで外國人か他國者のやうに見ねえ振りを通り過ぎてやらうと思つてる。こたアよく知つてる。わつしが擱んだ御鬮はわつし一人で出来るだけ持ち堪へなくちやならねえんだ。」

「ステイヴン・ブラックプール。」と司會者が立ち上つてゐつた。「もう一度それを考へて見たらどうだ。君が古い友達から仲間はずれにされる前に、もう一度、考へてみたらどうだ。」

誰も口に出してはつきりとはひはなかつたが、同じやうなことを呟く聲が會場一杯に聞かれた。皆の眼がステイヴンの顔に据ゑられた。彼が自分の決心を後悔したなら、皆の心から重荷が下されたことであらふ。彼の心には彼等に對する怒りの芽生が一つもなかつた、彼は、彼等の兄弟労働者でなければ出来ないやうに、彼等の表面の弱點や思ひ違ひのづゝと底まで彼等のことを知りぬいてゐた。

「わつしはもうそのことはよく考へたのだ。わつしは、たゞ賛成が出来ねえといふだけだ。わつしは自分の前に擴がつてゐる道を歩いて行かなくちやならねえ。わつしはこゝにゐる皆さんにお別れしなくちやならねえ。」

彼は兩手を差し延べて彼等に對して一種の敬禮をした、そして暫くその姿勢で立つてゐた、その手がそろそろと兩脇に落ちるまでは、口をきかなかつた。

「こゝにゐる皆さんの中にやはつしにいろいろ深切な言葉

一五二二

をかけて下さつた方もゐる、わつしが若くて今よりもつと浮々した心を持つてゐた時に、初めてお會

ひした澤山の顔がこゝでわつしの眼に入る。わつしは生れてからこつち、わつしと同じやうな人は誰とだつて一遍も喧嘩をしたことがねえ、今だつてわつしが自分からしやうなどと思つてゐるわけぢやねえことは神様も御存じだ。お前さんはわつしを裡切者だとか何とかいふが、——お前さんのこつたよ。」と、スラックブリッチの方にゐひかけて——「だが、口先では何とでもゐへるが、本當に氣持が分つてくれるなア難かしひ。まあゐゝとしよう。」

彼は演壇から降りるつもりで一足二足動いた、その時彼は何かまだ言はなかつたことを思ひ出したと見えて、また歸つて來た。

「大方。」と彼はいひ出した、そして近くにある人々と遠くにゐる人々に論なく、聽衆全體に——「お前は一人づゝにでも——話しかけられるやうに、そろそろその皺のよつた顔を振り向けた——「大方この問題が取り上げられて議論される段になつたら、わつしを皆さんの中でやつぱり働かして置いてゐゝのかつていふ嚇かしが出るかも知れねえ、わつしは、そんな時が來る前に死にたいと思つてるが、それまでは、わつしは一人ぼつちで皆さんと一緒に働かして貰ふ——本當だ、わつしはそれより仕方がねえのだ、兄弟、皆さんに楯を突くつもりからぢやねえ、生きなくちやならねえからだ。わつしは外に生きていかれる仕事はねえのだ、それにまるつきり子供だつた時からこのコークタウンで働いて來たこのわつしが外に何處へ行けるか。わつしは、今といふ今から仲間はずれにされて見捨てられるつていふ辛い目に會はされてもちつとも恨みはしねえ、だが働くことだけは働かして貰ひてえ。若しもわつしに權利なんてものがあるなら、兄弟、わつしはこれがさうだと考へるんだ。」

誰も一言もあはなかつた。この建物の中では物音一つ聞えなかつた、たゞ聞えるのは、部屋の眞中あたりで、彼等が餘儀なく友達の縁を切らなければならぬ破目になつたその男を通してやる爲めに、人々が道を開ける低いざわめきだけであつた。誰の顔にも眼を向けず、何一つ主張せず、何一つ要求しない謙遜なしつかりした態度で自分の道を歩きつゝ、ステイヴンはいろいろな心配を頭に入れたまゝその場を立ち去つた。

スラックブリッチは、彼が出て行く間、ひどく心配らしい様子で、また不思議な精神の力で會衆の昂奮した感情を抑へてゝもゐるやうに、例の雄辯な腕を擴げて立つてゐたが、やがて彼の元氣を鼓舞してかふ叫んだ。おゝ我が英國民諸君よ、昔羅馬のブルータスは彼の息子に死刑を宣告したで

一五二四一

はないか、また、おゝ勝利の間近な我が友人諸君よ、昔スパルタの母親達は、戰場から逃げ歸つた子供等を敵の劍の尖に追ひ返してやつたではないか、然らば、聖淨な神々しひ大義の爲めに張つたテントから裡切者を投げ出すのは、かゝる先祖を前に持ち、かゝる賞賛する世界を周りに持ち、かゝる子孫を後に控へてゐるコークタウンの人々の神聖な義務ではないか、と。天の風はそれに然りと答へた、そしてその答へを東と西と北と南に運んで行つた。その結果、聯合總評議會の爲めに萬歳が三唱された！

スラックブリッチは代表者の役をつとめて挨拶をした。會衆の疑念を持つたやうな顔は（少し良心に咎められたやうな）この聲に明るくなつた、そしてそれに和した。個人的な感情は公衆としての主義にゆづらなければならぬ。萬歳！會衆が解散したときに、屋根は萬歳の聲で今一度ふるへた。

かふして、ステイヴン・ブラックプールは、容易にこの上なく孤獨な生活に——日頃顔なじみな大勢の間に交つた孤獨の生活——に入つた。この國に初めて來て、一萬の未知の人々から理解のある一瞥を求めても得られないやうな人さへ、かつては友人の顔だつた十の背向けられた顔の傍を毎日通りすぎなければならぬ彼に較べたら、まだまだ愉快な境遇にゐるとゐへよう。かふいふものが今は、

彼の生活の中の眼の覺めてゐるあらゆる瞬間に渡つて、ステイヴンの經驗にならなければならなかつた、工場にゐる時でも、工場に往き來する途中でも、自分の家の戸口でも、自分の部屋の窓でも、何處でもさうであつた。皆が言ひ合はしたやうに、ステイヴンが何時も歩く往來の片側を除けて通りさへした、そしてあらゆる職工の中でたゞ彼にだけそこを歩かせて置いた。

彼は何年かの間、物靜かな無口な男として外の人達とは餘りつき合ひもせず暮して來た、だから自分一人の考へを相手に暮すことに慣れてゐた。彼は、自分の心の中にひそんでゐる、時々の一寸した點頭き、一寸した一瞥、一寸した一語で受ける同情といふものゝ強さを以前には知らなかつた、またさういふ一寸した手段で、一滴々と彼の心にそゞぎ込まれた慰安の莫大な量を知らなかつた。彼自身の良心の中で、自分が自分の同僚から見棄てられたことを、根據のない恥辱と不名譽の感じから引き離すことは、彼が考へたよりもずっと困難であつた。

彼が堪へ忍んだ最初の四日はひどく永い重苦しい日に思はれたので、彼は自分の前途のことで寒心し始めた。彼はその間中づゝとレイチエルに會はなかつたばかりでなく、彼女に會ふあらゆる機會を避けた。何故なら彼は工場に働いてゐる女工達の方までは禁止の命令がまだ正式には行き渡

—五二五—

つてゐないことを知つてゐたけれども、彼は自分と知り合ひだつた女工の二三の彼に對する素振りが違つたことに氣がついた、で、レイチエルが彼と一緒にゐる處を見られたなら、彼女も亦外の女工から仲間はずれにされはしまいかと恐れたのであつた。それで彼はこの四日の間全く一人であつた、誰にも口をきかなかつた、ところが或る夜、彼が工場を出ようとしてゐた時に、色の生白い若い男が往來で彼に話しかけた。

「お前さんの名前はブラックプールつてんぢやないかね。」とその若い男がひつた。

ステイヴンは、話しかけられるのが有難かつたのか、それとも餘り急に話しかけられた爲めか、多分その二つの爲めに帽子を手にしてゐる自分を見て赧くなつた。彼は帽子の裡を直す風をしながら、

「へゐ、さうですが。」とひつた。

「きつと、皆が仲間はづれにした職工といふのはお前さんだらうね。」とピツァー—今あつた色の生白い若い男—が、あつた。

ステイヴンは、また「さうですが。」と答へた。

「皆がお前さんだけを除け者にしてゐるのを見て、さうだらうと思つてゐた。バウンダアビイさんが、お前さんに話があるさうだ。お前さんは、あの人の自宅を知つてゐるだらうね。」

ステイヴンは、また「へゐ。」と答へた。

「それぢやあそこへ直ぐに行つておくれ。」とピツァーがひつた。「向ふではお前さんを待つてゐるんだ、でお前さんはたゞ女中さんに『おれだ』といへばあゝんだ。僕は銀行の人間だ、だから若しお前さんが一人で直ぐに行つてくれたら（僕はお前さんを聯れて來るやうにいはれたが）、お蔭で僕は一散歩出來るといふもんだ。」

ステイヴンは、反對の方向に歩きかけてゐたが、踵を返して、ゐはゞさうしなければならぬ義務でもあるかのやうに、巨人バウンダアビイの根煉瓦のお城へと赴いた。

五、雇人と雇主

「さあ、ステイヴン。」とバウンダアビイが例の風でも吹き出しさうな勢であつた。「一寸聞いたが、

一體どういふことなんだ。あのやくざ者どもが君をどうしようといふのだ。入つてすつかり話すがひん。」

かふして彼は應接間に呼びこまれた。お茶の卓子が出てゐた、バウンダアビイの若い妻君と彼女の弟と倫敦から来たえらい紳士が姿を見せてゐた。ステイヴンは彼等にお辭儀をして、戸を閉めて、帽子を手にしたまゝその傍に立つてゐた。

「これが今あなたにお話ししてゐたあの男なんです、ハー」

—五二六—

トハウスさん。」とバウンダアビイがひつた。彼がかふ呼びかけた紳士はソーフアに掛けてバウンダアビイ夫人に何か話をしてゐたが、起き上つて物ぐさうにかふあつた。「あゝ、さうですか。」そしてバウンダアビイが立つてゐた爐邊絨毯のところをぐらぐらやつて行つた。

「さあ。」バウンダアビイがひつた。「話した、話した！」

彼が過つたあの四日間のあとでは、かふいふ言葉は、ステイヴンの耳に荒々しい不愉快なものにひびいた。それは彼の傷ついた心を亂暴に取扱つたばかりでなしに、彼が實際評判どほりの利己主義な脱盟者だと肌理てゐるやうに見えた。

「何でござえましたかしら？」とステイヴンがひつた。「わつしに御用だと仰しやいますなあ。」

「何ぢやない、わしが君に話したぢやないか。」とバウンダアビイがひつた。「君が男なら男らしくすつぱりいふがゝ、君自身のことゝ、あの組合のことをわし達に話すがひん。」

「お言葉でござえますが、」とステイヴン・ブラックプールがひつた。「そのことなら、わつしは何も申し上げることがござえません。」

バウンダアビイは何時もうくらか風に似てゐたのだが、これを聞くと彼の行手が何かに遮られたのを見て、直ちに面と向つて吹きたてゝ來た。

「さあひんですかね、ハートハウスさん。」と彼はあつた。「こゝに居るのがあいつ等の見本なんですよ。この男が前に何時かこゝに來た時に、わしはこの男に、何時もこの邊にまごまごしてゐる性質の悪め渡り者には用心をしろと戒めて置いたんです、——あいつ等と來た日には見付かり次第絞罪にされる値打が十分あるんですからね、——わしはこの男に、お前は悪め方へ逸れさうだといつて置いたんです。ところがぢや、とても本當には出來ん話ですが、あいつ等の方でちやんとこの男に仲間はずれの極印を打つて居るのに、この男はまだ何處までもあいつ等の奴隷になつて、あいつ等のことゝいへば口も開けないのだから驚くですて。」

「何も申し上げるがものはねえと申しただけで、別にわつしが口を開くのをおそれつゝるわけぢやござえません。」

「うむ、君はさうあつた。なあ！わしは君がいつたことは知つてゐる、そればかりぢやない、君の本當の心が何だかも知つてゐるんだ。口と腹が定つて、何時も同じものぢやない！それこそ大違ひなんだ。君は早くわし達にかふ話すがひん、あのストラックブリッチといふ奴は、今この町には居らんで、労働者を煽動して歩いてゐる、とな。あいつは労働者達の正當な資格をもつた指導者ぢやない、つまり

—五二七—

とてもひどい悪者なんだ、とな。君は早くわし達にさう話した方がゝんだ、君はわしを瞞すことは

出来ん。君はわし達にさう話したがつてゐるんぢやないか。何故しないんだ。」

「わつしも、あの聯中の指導者たちが悪む時にやお前様かたと同じに残念に思つとります。」とステイヴンはいつて頭を振つた。「あの聯中は手當り次第の指導者を捉まへるんです。きつとあの聯中がもつとゝ指導者を捉まへることが出来ねえ時にや、あの聯中の不仕合せもちつとやそつとちや濟みません。」

風が喧ましく吹き出した。

「さあハートハウスさん、かふいふと、あなたにや可成りよく聞えるぢやらう。」とバウンダアビイはゐつた。「かふいふと、あなたには相當強く考へられるでせう、あなたはかふ仰しやるぢやらう、きつとこれはわしの友達が扱はななくちやならんものゝ可成り綺麗な見本なんぢやとね、だがこんなものは何でもないんです！この男に一つ質問をして御覽に入れませう。どうだねブラックプール君、——風はひどく早くやつて来る——」君に一つ訊きたいと思ふんぢやが、君がこの組合に入ることを拒んだのはどういふわけかね。」

「どういふわけだと仰しやるんです。」

「うむ——バウンダアビイは上衣の袖に拇指を挿し入れ、眞向ふの壁と内證話でもしてゐるやうに、頭をぐつと出して、眼をつぶつてかふゐつた。「どういふわけかね。」

「わつしは自分が好き好んで、そいつをやつた譯ぢやござえません、ですが折角のお訊ねで、——丁寧なお言葉でござえますから、——御返辭申ませう。わつしは約束をしましたからなんです。」

「わしにぢやないな。」とバウンダアビイがひつた。(風の強い天氣には時々人欺しな風ぎがある。今がぞんな風ぎの最中である。)

「へゑさうで。お前様にぢやござえません。」

「まあ、どうかといへば、わしの爲めを思ふ氣持なんてはまるきりそれに關係がなかつたんだらうな。」とバウンダアビイがまだ壁と内證話をつゞけてゐるやうにかふゐつた。

「若しもたゞコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイのことが問題になつたゞけなら、君はちつともぐつぐつせずに組合に入つたんぢやらうな。」

「へいまあさうでござえますな。大方その通りでござえます。」

「その癖この男は、バウンダアビイがひつた。今度は、疾風が吹くのである。「あいつ等が十分島流しになるだけの値打のある悪黨や暴徒の寄り集りだつていふことは知つて

—五二八—

ゐるのに！どうです、ハートハウスさん、君はかなり長く世界の諸方も見て來られた方だ。この有難い國の外で、あの男のやうな人間に出會したことがありましたか。」かういつてバウンダアビイは怒氣の満ちた指で、よく見るとゐはんばかりに彼を指さした。

「ゐゝえ奥様、ステイヴン・ブラックプールは今いはれた言葉に毅然と反對の態度を見せながら直覺的にルイザの顔をちらつと見た後で彼女にかふるひかけた。「暴徒ではござえません、悪黨では尙更ござえません、そんなもんぢやござえません、奥様、そんなもんぢやござえません。あの聯中はゝつしに一つも深切なことはしてくれませんでした、わつしはそれをよく知つてもゐるし、感じてゐます。

でも奥様、あの聯中のなかには十二人位のは——いへ十二人は難かしくても、六人位のは——他方自力のおかげで自分自分の義務を果たしたと信じてゐる者が居りますよ。あの聯中がわつしをどんな目に會はせたいしろ、あの聯中と生涯知り合つたり近づきになつたりしたこのわつし——あの聯中と一緒に喰つたり飲んだり、あの聯中と一緒に坐つたり働いたり、あの聯中を愛したりして來たこのわつしが、

眞實のことで、あの聯中の味方になれねえなんてことは神かけて出来ません！」

彼は彼の身分と境遇にふさはしひ粗野な熱心をこめてかふあつた、——恐らくそれは、自分は仲間
の者の不信を受けてゐながらも、彼等に對して忠實だといふ誇らかな意識で深められてもゐたであら
ふ、だが彼は自分が何處にゐるのかといふことを十分わきまへてゐた、それで高い聲を出しさへもし
なかつた。

「さうでござえますよ、奥様、さうでござえます。あの聯中は死ぬまでもお互ひに眞實で、忠實で、
愛し合つてをります。若しもお前様があの聯中の間の貧乏人だったり、病人だったり、それから貧乏
人の戸口にいつも悲しいことを持つて来る澤山な原因のどれかのせいで遺瀨無え目に會つたりしてゐ
るとして御覽なせえまし、きつとあの聯中はお前様に優しく、ゐたはつて、慰め、信心深くしてあげ
ませうから。それは本當でござえますよ、奥様。あの聯中がきれぎれに引裂かれたつて、間違ひつこ
はござえせんから。」

「つまり、」とバウンダアビイがひつた。「あいつ等が、そんなに澤山の取り柄があるから、君を仲
間はづれにしたんだ。いや、君がゐひかけたことなんだから言つてしまふがゐ。すつかり言つてし
まふがゐ。」

「それなのに、奥様」とステイヴンが矢張りルイザの顔にその自然な避難所を見付けようとしてゐ
るやうにかうつづけた。「どうしてわつし等下々の者の持つてゐる一番善い

—五一九—

ところが、わつし等の大概の人間にごたごたと不合せと誤解とだけより呉れねえのか、わつしにや
分りません。でも實際、その通りなんでござえます。わつしは、お天道様が煙のかげでわつしの頭の
上にお出でになるつてことをちやんと知つると同じやうに、その眞實なことも知つとります。わ
つし等はまた辛抱づよくつて、一體に眞直な事をしてえと思つるのでござえます。それなのに、悪
ることといへば何でもわつし等にはつかりあるんだ、思はれません。」

「ところでちや、君。」バウンダアビイはゐつた。ステイヴンは、そんなことにはちつとも氣がつか
なかつたのだが、彼がルイザの方に訴へるやうな様子を見せたので、バウンダアビイはまをすつかり
御機嫌を悪くしてゐたのであつた。「君が一分間の半分位ゐわしのいふことに注意してくれる氣があつ
たら、君に一言二言話したいことがあるんだ。君はたつた今、今度の出來事についてちやわし達に話す
やうなものが何でもないといつたね。話を進める前に念を押して置かう、そりや大丈夫だらうね。」

「大丈夫でござえます。」

「こゝにおいでになるのは倫敦からお見えになつた紳士なんぢや。」——バウンダアビイは拇指で後
ろ様にジェームズ・ハートハウスを指さした——「議會のお方ぢや。わしは、君とわしとの間の話を
どつさり御馳走に出すことは止めにして、ほんのちよつぴりお聞きに入りたいと思ふ——何故なら、
わしには、もう前から、それがどんなものになるか分つてゐる、わし程よく知つてる人間はないんぢ
や、ゐゝかね！——人の君を通り聞かずに、わしの口から聞くがひ。」

ステイヴンは倫敦から來た紳士に頭をさげた。そして何時もよりもつと困惑した心持を顔に見せた。
彼は我知らず眼を以前の避難所の方に向けたが、その方から一目向けられたので（直ぐではあつたが
意味は分つた）、彼はその眼をバウンダアビイの顔に据ゑた。

「そこで、何かお前に苦情でもあるのか。」とバウンダアビイは訊ねた。

「わつしがこゝに來ましたのは、」とステイヴンは彼に思ひ出させた。「苦情をゐひたかつたからぢ
やござえせん。わつしはお呼び出しかからやつて來たのでござえます。」

「一體」とバウンダアビイは腕を組んでかふ繰り返した。「君達労働者はどんな苦情があるんだね。」ステイヴンは一寸の間いさゝか躊躇して彼の顔を見てゐたが、やがて決心したらしく見えた。

「そのことなら、わつしもわつしだけのことは感じとりますが、すっかり申し上げるのは、わつしにやうまく出来ま

—五二〇—

せん。實際、わつし等は、滅茶々々なんぞごぜえませす。町のまはりを御覽下せませまし、——どんなに金持ちしくゆつたりして居りますか、——それからこゝに聯れて來られて、織らされたり、毛を梳かせられたりしてどうやら暮しを立てゝあるあの大勢の労働者を御覽下せませまし、何にしましても、あの聯中の搖籃と墓場の間には、皆同じ一本の道だけでごぜえませす。わつし等がどんなにして暮しとるか、どんなところに住んでゐるか、どんなに大勢だか、どんな見込みがあるか、どんなに皆同じだかといふことを御覽下せませまし、そして工場が何時もどんなに動いてゐるか、またわつし等をもつと高い遠いものに進ませしてくれることがどんなにねえか——死ぬことの外には、定つて——を御覽下せませまし。お前様方は、わつし等のことをどんなに考へてゐなさるか、どんなに書いてゐなさるか、どんなに話してゐなさうか、大臣方にどう報告委員を出しなさるか、それからお前様方がどんなに何時も正しくて、わつし等がどんなに何時も間違つてゐて、生れてからこつちわつし等には道理なんてものがちつともねえやうに見えるかつてことを御覽下せませまし。これが一年々々に、一代々々に、どんなにだんだん大きく、廣く、難かしくなつて來るかつてことを御覽下せませまし。どんな人だつてこれを見て、それでも無茶ぢやねえ、なんて、立派に言へる人がありませうか。」

「そりやない。」とバウンダアビイがひつた。「ところで君は、きつとこの紳士に、その滅茶苦茶を(君がよくさういふから)君がどうして立て直すことが出来るか教へて上げられるだらうね。」

「わつしにや分かりませせん。わつしはそんなことを望まれても駄目でごぜえませす。そんな註文を出されるなあ、わつしなぞぢやごぜえませせん。それはわつしの上にある、何時もわつし等皆のもの、上にあるお方達でごぜえませす。若しもあの方達がそんなことをなさらねえなら、あの方達の責任とかいふものが何處にあるんでごぜえませう。」

「わしは、おつゝけ、その事についてちや何か君に話してやる。」とバウンダアビイが返辭した。「わし達はその六人ばかりのストラックブリッチどもを見せしめにしてやるんだ。わし達はあの悪者どもを重罪犯で訴へて、あいつ等を懲役殖民地へ送らせてやるつもりだ。」

ステイヴンは重々しく頭を振つた。

「わし達に出來まひなどゝいつちやいくわん。」とバウンダアビイがひつた。この時までには、もう立派な颯風が吹き出してゐる。「わし達はきつとやるんだから、あゝか、いつて置くぞ！」

「お前様」とステイヴンが、確實に信じてゐるところがあるらしく靜かにかふ應じた。「よしんばお前様が今百人の

—五二一—

ストラックブリッチを捉へて——あいつ等は何時だつてうよふよしてゐるし、數だつてその十倍もごぜえませす——その聯中を別々の袋に縫ひ込んで、そいつを陸地がまだ出來ねえ前にちやんと出來てゐた一番深い海に沈めることが出來なさいまして、このごだごだはやつぱり今のまゝでごぜえませせう。性質の惡の渡り者でごぜえませすか、」とステイヴンが心配さうな微笑を浮べてかふゐつた。「何時

だつて、わつし等が物心づいてからこつち、その性質の惡い渡り者つて言葉を聞かなかつたことがござえませんが、ごたごたが出来るのはあの聯中のせみぢやねえんです。わつしはあの聯中の最上なるわけぢやござえませんが、わつしにはそのわけがねえんですから——けれども、あの聯中からあの商賣を取り上げる代りに、あの商賣からあの聯中を取り離さうなんてことだけ考へてお出でなさるんぢや、望みもねえし、役にも立ちません！今この部屋で、わつしの身の廻りにあるものは何でも、わつしが来る前こゝにあつたんだし、わつしが行つちまつてかちだつてこゝにあるでござえませう。あの時計を船に乗つけて、ノーフォークの島へ送つたにしろ、時間の進みはやつぱし同じことでござえませう。スラックブリッジのことだつて、みんな同じでござえませよ。」

かふいつて以前の避難所の方に一寸眼を向けると、彼は彼女の眼が用心深く戸口の方に動くのをみとめた。彼は後退りして、戸の把手に手をかけた。だが、彼はまだ自分の本當の意志を語つてはゐなかつたので、心の中で、自分がこの頃受けた兄弟労働者達のあの侮辱的な扱ひに對する氣高い返禮として、彼を除け者にしたあの聯中に最後まで忠實につくしてやりたいといふ氣持を感じた。彼は立ち止つて自分の心にあるだけをいつてのけた。

「お前様、わつしは學問もなけりや當り前のことしか知らねえんで、この紳士の方に、どうしたらこんなごたごたをさめることが出来るかつてことは、お話が出来ませぬ——

尤も、きつとこの町の職工の誰かには出来ませうが——でもわつしは、何がこのごたごたをさめることが出来ねえかつてことだけは、あの方にお話が出来ませぬ。第一に壓制なやり方ぢやそれが出来ませぬ。勝つて威張りたいなんてんぢやそれが出来ませぬ。自分を不思議なほど何時も何時も正しいものにし、對手を不思議なほど何時も何時も間違つたものにしようと思つてゐるんぢや、それが出来ませぬ。さうかといつて投げ遣りにして置いたんぢや、矢張り出来ませぬ。何千人もの人間を打つちやつとゐて、皆同じやうな暮しをさせたり、同じやうなごたごたに落ちさせたりして置いて御覽なせえまし、きつと長からうと短からうと、こんな不合せなことが續いてゐる間は、あの聯中

一五二一

が左になり、お前様が右になつて、お前様方の眞中に眞黒な渡ることの出来ねえ割目が出来ちまひませう。下々の手合に、深切辛抱と氣持のよい物腰で近寄らなけや、お天道様が一日に二度廻るまでは、それが出来ませぬ。——下々の手合は自分達にいろいろな面倒のある時にや、さういふ風にして付き合ひます、自分達に苦しいことがある時にや、自分の要るものを持ち出してまでもお互ひに大事にし合ひます、——わつしは失禮だがさう思つとりませぬ。大方そこにお出での紳士の方が旅行中に社會ひなすつたどんな人達にだつて負けねえでござえませうつて。中でも、あの手合をたゞその數だけの仕事にして見積つたり、あの手合をまるで勘定書の數字か機械でゝもあるやうに取縮つたり、愛情も好き嫌ひもねえやうに、記憶も氣質もねえやうに、疲れたり望みをもつたりする心がねえやうに扱つたりする——ごたごたのない時にやあの手合をちつともそんなものゝねえ人間のやうに引きずり廻して、萬事がごたごたになる時にや、あの聯中のお前様達に對する仕向けにちつとも人情らしいものがねえとひつて責め立てる——こんなことぢや神様のお造りなすつた世界がすつかり壊れちまふまでは、とてもごたごたをさめるなんてごたごた出来つかありません。」

ステイヴンは開いた戸に手を掛けたまゝ、まだ何か自分に用があるのかどうかを知らうと思つて、立つて待つてゐた。

「一寸待ち給へ。」とバウンダアビイが恐ろしく赧の顔をしてかゝあつた。「君がこの前こゝに苦情を持つて來た時に、わしは方向を轉換してそいつから抜けた方がゐるといつて置いた筈だね。君も覺

えてゐるだらうが、そんな苦情はあの金の匙と海龜のスープの見込みが本物になるやうにと一生懸命になつてゐることなんだといふことも話して置いた筈だね。」

「わつしは自分ぢやそんなものを望みやしなかつたんでした、こりや本當でござえます。」

「それでわしにもはつきり分つたが、」とバウンダアビイがひつた。「君もやつぱり何時も苦情の絶え間がないあの聯中の一人なんだな。君はぶらぶら廻つて歩いちや、そいつの種をまいて收穫を刈り込むんだな。これが君の生涯の仕事なんだらう。」

ステイヴンは頭を振つて、無言のまゝ、自分の生涯には爲すべき外の仕事があるのだといふ抗議の意をみせた。

「君はまるで熊蜂のやうな、蝮のやうな、性質の惡い男だね、君。」とバウンダアビイがひつた。「だから君自身の組合さへ、君を一番よく知つてゐる人間達でさへ、ちつとも構はうとしないのぢやらう。わしはあの聯中に何處か正し

一五三三

るところがあらうとは考へてゐなかつた、だが本當のことをゐはふ！わしは例外としてあの聯中に一つ賛成することがある、それは、わしも君にはもう構はんといふことだ。」

ステイヴンは素早く眼を擧げて彼の顔を見た。

「君は、今かゝつてゐる仕事だけは仕上げてくれ。」とバウンダアビイは意味ありげに點頭めてゐつた。「それがすんだら、外のとこに行くがひ。」

「お前様も御存じの通り、」とステイヴンは力をこめてゐつた。「若しわつしがお前様のとこの仕事をこととはられちまつたら、外でありつくことが出来ねえのでござえますけれど。」

それに對する答へはかふであつた。「わしが知つてゐることはわしは知つてゐる、君の知つてゐることは君が知つてゐる。わしはもうそれについては一つも言ふことがないんぢや。」

ステイヴンは又ルイザをちらと見た、だが彼女の眼は最早、彼の方にあげられなかつた、それで溜息をついて、殆ど吐く呼吸に擬ふやうな聲で、「神様、この世界のわつし達皆をお助け下せませまし！」といつたまゝ、彼は立ち去つた。

六、零落

ステイヴンがバウンダアビイの家から出て來た時は、もう暗くなりかけてゐた。夜の影は迫つてゐたので、後ろに戸を閉めて、あたりを見ようとせせず、眞直ぐぐに街路に出てこつこつ歩いて行つた。以前にこの家を訪ねた折會つたあの奇妙な老女のことなどは、てんで彼の念頭になかつた、だが今、自分の後ろに覺えの聲音を聞いたので、振り返つて見ると、彼女がレイチエルと一緒にゐるのを見た。

彼はレイチエルが眞先きに眼にとまつた、彼女の聲だけしか耳にしなかつたからであつた。

「あゝ、レイチエルか！おや奥さん、お前さんがこの人と一緒で！」

「えゝ、さぞ吃驚なすつたでせう、御無理もございませぬよ。」と老婦人は返事をした。「わたしは又此地へ參つたのでございますよ。」

「でもどうしてレイチエルと御一緒なんです？」とステイヴンはいつて、自分の歩調を彼女のと同じにゆるめ、二人の間に割り込んで交る顔を見るのであつた。

「なにね、この深切な娘さんと御一緒になつたのも、いつかお前さんとお近付きになつたのとそっくり同じことなんですよ。」この老女は自分で答へを引き取つて、愉快さうにいふのであつた。「今年

は何時もより御當地をお訪ねする時期が少し遅れましてね、それといふのも息切れがするの

―五二四―

で、一寸苦しかったものですから、お天氣がよくなつて、温かくなるまで延ばしてゐたのでございますよ。さういふ譯で、一日ではつゝとこゝまでやつて來られませんので、二日がりにしましてね、今夜は向ふの線路の脇の旅人宿で（一寸さつぱりした店でございませうよ、泊まることにしまして、明日の朝六時の割引列車で歸るつもりでございます。えゝ。でも、それがこの深切な娘さんとどんな關係があるんだ、とお前さんは仰しやるんでせう？今お話し致します。わたしはバウンダアビイさまが結婚なすつたと聞いたのでございませうよ。わたしは、そのことは新聞でも讀みましたが、その記事といつたら、それは大變なものでございませうよ―えゝえゝ、それは素晴らしいものでございませうよ！―と老女はそのことを不思議なうちに述べ立てた。「それでわたし、奥さまに一目お目にかゝりたいと思ひましてね。まだ一度も奥さまにお目にかゝつたことはございませうから。ところがわたしは虚言はいひませんけれど、奥さまは今日はお午から一寸もお家からお出ましなさらないので、それで、わたしの方では、奥さまにお會ひするのをさう易々とあきらめることが出来ない譯もあるので、もう少しだけと思つて待つてゐますとね、この深切な娘さんに二三度出會つたのですよ。この娘さんが大へんお近附きになれ易さうにお見掛け申したものですから、わたしがこの方にお話をしかける。この方がわたしにお話をして下さい、といふことになつたのですよ。まあ、そんな譯でしてね！」と老女はステイヴンにかうあつた。「それからのことはお前さん一人でお察しがつきませう、わたしがお話しするよりもずつと早く出ませうよ、きつと！」

彼女の素振りには極めて正直で、飾りが少しもなかつたが、ステイヴンはまたも本能的にこの老女が厭になる氣持を抑へなければならなかつた。そして、彼自身の持前の、また彼の知るところでは同様にレイチエルにも持前の柔和な物腰で、彼は老女がこの年になつてこんな知りたがつてゐる事柄を述べ始めた。

「いや。」と彼はあつた。「わつしはあの奥さんを見ましたがね、また若くてなかなか綺麗な方でござえましたよ。考へ深さうな黒い眼をしてゐて、落ちついた物腰でな、レイチエル、あんなのはおいらは見た事がないくれえだつた。」

「若くつて綺麗ですつて、さうですとも。」と老女は夢中に嬉しがつて叫んだ。「薔薇のやうにお美しくつて―まあ、何てお合せな奥さまでせう！」

「あゝ、奥さん、わつしもさう思ひますよ。」とステイヴンはあつた。だがレイチエルの方には、どうだかねえといふやうな一瞥を見せた。

「さう思ひますつてゝあゝえ、さうに違ひはありません。」

―五二五―

あの方はお前さんの御主人の奥さまぢやありませんか。」と老女はあひ返した。

ステイヴンはさうだと轉頭した。「でも、主人といふが。」と彼はまたレイチエルの顔をみてかふるつた。「もう主人ぢやねえんで。あの人とはつしとの間は、もうさつぱりと切れちまつたもんでなあ。」

「お前さんは、ではあの人の工場を止めたの、ステイヴン？」とレイチエルは心配さうに一寸せきこんで訊ねた。

「さうさ、レイチエル。」と彼は答へた。「おいらがあの人を御免蒙つたにしろ、あの人の方

でおいらに御免蒙つたにしろ、それは同じわけだが、あの人の工場とおいらとは手が切れちまつたんだ。さうなる方が結構だ、良過ぎるくれえ結構なんだ、おいらアお前がおいらと一緒に歩く時のことを考へてあつたんだ。おいらがあそこにあつて見ねえ、面倒に面倒が重なるやうなもんぢやねえか、おいらが出ちまふのは大方大勢の者にもよからうと思ふんだ。ともかく、さうならねえぢやならねえんだからな。おいら暫くコークタウンから面ア遠のけて、また初めから出直して一仕事見つけねえぢやならねえんだ。」

「お前さんは何處へ行くつもりなの、ステイヴン？」

「おいら今夜のところはまだ分らねえ。」と彼は帽子を擧げて、その薄い髪の毛み掌で撫でながらゐつた。「だが、おいら今夜ア行かねえよ、レイチェル、明日もまだ行かねえ。何處へ行つたもんか、そいつを決めるなア、さう易々とは行かねえよ。だがその中には、おいらの胸にも元氣が湧いて來るかも知れねえんでな。」

此處でも又、他人の上をのみ氣遣ふ思慮が彼に力をつけた。彼はバウンダアビイの戸を締めぬ先きから、少くとも自分が出なければならぬのは、彼女の爲めにゐることだと思つた、といふのは、さうなれば、彼女は彼から離れないことを問題にされるやうな憂き目を見ずとも濟むからであつた。彼女と別れるのは、彼にとつては堪らなくつらい思ひがするけれども、また、自分に對する皆の批難がついて廻らずに濟むやうな、同じ職がありさうにも思へなかつたけれども、この四日間の辛抱を思へば、それを逃れて先きの分らぬ困難や困窮に追ひやられるのさへ、恐らく救ひのやうなものだつた。彼がかふあつたのは、全く本當だつた。

「かふなつて見るとな、レイチェル、自分で思つてゐたよりづゝと氣樂だよ。」彼女としては、この上彼の重荷を一層重くするのはいけないことであつた。彼女はそれに慰めるやうな微笑で答へた、そして三人は一緒に歩きつゞけた。

年寄りといふものは、殊にその人が他人の世話になるまいとし、元氣を見せようとする場合、貧しい人達の間では

―五二六―

大きな思ひやりを起させるものである。この老女は何處やら上品で、ちつとも愚癡を竝べなかつたばかりか、その虚弱な體がこの前ステイヴンと會つた時より一層ひどくなつてゐても、それを少しも苦にしなかつたので、彼等は二人ともこの老女に心を惹かれるやうになつた。彼女は大へん元氣で、自分の爲めにこの二人の足を遅くさせるやうなことはさせなかつた、然し話しかけられるのは非常に嬉しさうで、また喜んで何處までも話すのだつた。それでこの町の彼等の住居まで來た時には、彼女は一層勢ひよく、元氣になつてゐた。

「奥さん、わつしのけちな住居にほひでなせえ。」ステイヴンはかふあつた。「お茶の一杯も上げてえから。さうすれやレイチェルも來ませう、奥さんは後でわつしがあの宿屋までお送りしますから。レイチェル、これでお前とも又長えこと會へる機會がねえかも知れねえんだ。」

彼女はこれに同意した、三人は彼の間借りしてゐた家へと行つた。彼等が狭い通りに曲ると、ステイヴンは何時彼の荒れ果てた世帯につき纏ふ一種の恐ろしさから、自分の部屋の窓をちらりと見た、しかし窓は、彼が出た時のまゝ開いてゐた。だからそこには誰もゐないことが分つた。あの彼の生涯の悪靈は數ヶ月前に再び飛び出して行つた。それ以來彼は彼女のことは何も耳にしてゐなかつた。今では、彼女がこの前歸つて來た時の證として、たゞ部屋の家具類が尙ほ少くなつたこと、彼の頭髮が一層胡麻鹽になつただけであつた。

彼は蠟燭に火を点け、その小さな茶道具を持ち出し、下から熱い湯を持つて来た、直ぐ近所の店からお茶と砂糖をほんの少しと、一塊のパンといくらかのバタを買つて来た。パンは出来立てで硬く、バタには鹽が入つてゐず、砂糖は勿論塊りで、——この聯中が王侯貴人のやうな暮しをしてゐるといふ、コークタウンのお歴々方の公式報告を立派に裡書きするものだつた。レイチェルがお茶を入れて（お客さまがあまり大勢だつたので、茶碗を一つ借りて來なければならなかつた）、お客さまは大變うれしがつた。これこそ、主人がこの何日かの間に初めて觸れた人氣らしいものゝ片影だつた。彼も、世間といふ廣る曠野が、目前に描かれてゐたので、この喰事がひどくうれしかつた——これもまたこれらの人々には全く打算の缺乏してゐたことをよく示した點で、お歴々の言葉を裡書きしてゐた。

「わつしはまだ、奥さん。」とステイヴンはゐつた。「お前さんのお名前を聞いてゐねえやうに思ひますが。」

老女は『ペグラア夫人』だと名乗つた。

「寡婦さんでござえませうね？」とステイヴンがひつた。

「えゝ、それはもうづゝと以前からでございますよ！」へ。

—五二七—

グラア夫人の夫（記録に残つてゐる最も善い人の一人だとゐつた）はペグラア夫人の計算によると、ステイヴンが生れた時分には、もう死んでゐたのであつた。

「そんないゝ人を亡くしちまふなんて、運が悪かつたんでさあ。」とステイヴンはゐつた。「子供さんにお幾人？」

ペグラア夫人の茶碗は——彼女はそれを丁度手にしてゐたが——下皿に當つて小刻みな音を立てた、それは彼女に神経質などころがあることを示した。「ゐゝえ。」と彼女はゐつた。「今は申し上げられませんが、今は申し上げられませんが、今は申し上げられませんが。」

「お歿くなんなすつたんだよ、ステイヴン。」とレイチェルは小聲にゐつた。

「そりや濟まねえことしたな、そんなこと訊いて。」とステイヴンはゐつた。「おいらア餘つぽどむごい心にならねえぢや、そんな痛々しいところに觸られるもんぢやねゑんで。おいらア——をひらア全く濟まねえ。」

彼がかふいつて詫びると、老女の茶碗はますます小刻みな音を立てた。「わたしには息子が一人あつたのでございますよ。」と彼女は妙にしをしをと、普通の悲しみの表情のどれとも全く違つた様子であつた。「そしてあれは成功もしました、驚く位に成功もしてくれました。が、どうぞあれのことはゐはせないで下さい。あれは——」彼女は茶碗を置いて、兩手を動かしたが、まるで手振りで『歿くになりましたんでね！』とゐひ添へたやうに思はれた。やがて彼女は聲に出してかふあつた。「わたしはあれを失くしてしまつたのですよ。」

ステイヴンが、この老女に苦しい思ひをさせたのを濟まないと思ふ氣持がまだ消えないうちに、此處の主婦さんが狭い階段をつまづくやうに上つて來て、彼を部屋の外に呼び出して、何か彼の耳に囁いた。ペグラア夫人は決して聲ではなかつたので、彼女はその囁きが交されてゐるのを聞きとつた。

「おやバウンドアビイですつて！」と彼女は卓子から飛び上り、聲を殺してかふ叫んだ。「あゝ、わたしを匿して下さい！後生ですからわたしを見つからないやうにして下さい。わたしが行つてしまふまであの人が上つて來させないで下さい。お願ひです、お願ひです！」彼女はわなはな顫へて、怖ろしく昂奮してゐた。レイチェルが彼女を落ちつかせようとしても、彼女は後ろに匿れて、まるきり前後の見境もないやうだつた。

「いや、奥さん、お聞きなせえ、お聞きなせえつていふに。」とステイブンは吃驚してかふるつた。「バウンダアビーさんぢやねえんで、あの人の奥さんなんだ。奥さんなら何も怖かアねえだらうに。お前さんはつい一時間も前にや、あの

―五二八―

奥さんに馬鹿に夢中になつてゐたぢやござえませんか。」

「でも本當に奥さまの方で、旦那さまの方ぢやございませんか？」と彼女はまだ顫へながら訊ねた。

「大丈夫でござえますつて！」

「それぢやどうかわたしに口なんか利いたり、わたしの方を見たりなさらないで下さいましよ。」と老女はゐつた。「あの隅に一人そつとさして置いて下さいましよ。」

ステイブンは首肯して見せた、――そしてどういふ譯かといふやうにレイチェルの方を見たが、彼女にも全く説明がつかかなかつた――獵燭をもつて下へ行つたが、二三分もするとその光でルイザを部屋に案内して來た。彼女の後にはやくざ者のトムがついて來た。

レイチェルは立ち上つて、自分の肩掛と帽子を手にもつたまゝ、脇の方に離れて立つてゐた。ステイブンも内心この訪問にはひどく吃驚してゐたらしかつたが、そのまゝ獵燭を卓子の上に下して、卓子の上に手を重ねて立つたまゝ、何とか話しかけられるのを待つてゐた。

ルイザは生れて初めてコークタウンの職工の住居の一つを訪ねたのであつた。彼女は生れて初めて、かふいふ人達に繋りのある人間らしい或る部分と眞正面に相對したのであつた。彼女は、幾百となく幾千となく彼等のあることを知つてはゐた。彼女は限られた人數の彼等が、與へられただけの時間に、仕事の上でどの位ゐの結果を生み出すことが出来るかといふことを知つてはゐた。彼女は、彼等が群をなして、蟻か甲蟲のやうにその巢に出入りするのを知つてはゐた。けれど彼女は、いろいろな本を讀んでゐたので、これらの生きた男女の労働者のことよりも労働する昆蟲の方のことをづゝと精しく知つてゐた。幾らいくら労働させられて、いくらいくら給料が支拂はれる――たゞそれだけのものだとか、需要供給の法則で間違ひなく決定されてゐるものだとか、この法則に逆らふと、苦境に陥つて跪くとか、小麥が高値になつた時には、少し惰氣するが、小麥が安値にでもなると、直ぐはしやぎ出すとか、これこれの率でそれが増すとか、一方にこれこれの犯罪率が増し、更にこれこれの貧窮率を生ずることになるとか、卸賣りをするやうなもので、彼等を土臺に、莫大な利益があがるとか、時には、海のやうに荒れ出して、大分の損と徒とを（主としてそれ自身に）來たしては、又鎮まつて行くものであるとか――かふいふのがコークタウンの職工といふものだ、と、彼女は知つてゐた。けれども彼女は、海そのものをその一滴々々に引き離して考へてみなかつたと同じやうに、彼等を個々に引き離してみようとは殆ど考へたことがなかつた、彼女は暫く部屋のまはりを見廻しながら立つてゐた。

二三脚の椅子、二三冊の本、ありふれた版畫、寢臺から、

―五二九―

彼女の眼は二人の婦人へ、次にステイブンへ順々に移つて來た。

「わたし先程のことで、あなたにお話があつて參りましたのでございます。お厭でございませんでしたら、何かお役に立ちたいと存じましてね。この方はあなたのお上さんですか。」

レイチェルは眼を擧げた、その眼は十分にゐゝと答へて、又さがつた。

「わたし思ひ出しましたわ。」とルイザは自分の思ひ違ひに赧面しながらゐつた。「わたし今思ひ出

しましたわ、何時でしたか、あなたのお家のもめごとのお話を伺ったことがございましたのね、尤もあの時はわたし細々したところまでは氣をつけてみませんでしたけれど。わたし別に、こゝにおゐでの何方かに苦しい思ひをおさせせることをお訊ねしようと思つたのではございません。ですから、何か他のことをお訊ねしたときに、若しそんなことがございまして、どうぞわたしがどうお話をしてゐるのか分らないのだとお思ひなすつて下さい。」

丁度、ステイヴンが一寸前に本能的に彼女に話しかけたのと同じく、今度は彼女が本能的にレイチエルにかゝ話しかけた。彼女の態度は素氣なゐぶつきら棒なものであつたが、また逡巡ひ氣味で怖々したところもあつた。

「あの方は、御自分とわたしの夫との間に起つたことをあなたにお話しなすつたでせうね？きつとあなたがあの方の一番のお話し相手だらうと存じますけれど。」

「はい、そのお話のおしまひだけは伺ひました。奥さま。」とレイチエルはゐつた。

「わたしは何處か一人の雇主に斷られた方は多分何處の雇主にも斷られるだらうといふやうに伺ひましたけれど、さうでせうか？あの方がさういふやうに仰しやつたと思ひましたが。」

「雇主の間に評判を悪くしたやうな人には、よい口と申すものは少ないのでございますよ、奥さま——殆どないと申してもよろしい位のでございます。」

「評判を悪くしたと仰しやると、それはどういふことですか？」

「はい、面倒な奴だといふやうな評判でございます。」

「ではあの方は、お仲間の方達の偏見と、もう一方の方達の偏見の両方から犠牲者になつたわけですか？この町ではその両方がそんなにひどく分れ分れになつて、たつた一人の正直な労働者も間にいれて置くやうな餘地がないのでございますの？」

レイチエルは黙つたまゝ頸を振つた。

「あの方は。」とレイザはゐつた。「仲間の織工とは一緒に

一五三〇

ならないと約束なすつたので、織工の仲間達に疑はれるやうになつたのでございます。わたしあの方がそんな約束をなすつたのは、あなたに對してはなかつたかしらと考へますの。何故あの方がさうなすつたのか、お訊ねしても宜しうございませうかしら？」

レイチエルはわつと泣き出した。「わたしはあの人にそんなことをさせる積りではなかつたのでした。可哀さうに、わたしのお蔭であの人がこんな事にならうとは、思ひもかけませんでしたから、わたしあの人を爲めとばかり思つて面倒なことにはかゝり合つてくれるなど頼んだのでございます。でも、あの方は百度死ぬやうな目にあつたつて、決して自分の約束は破らないのを、わたしよく存じて居ります。あのごときはよく存じて居ります。」

ステイヴンは今迄何時もの通りの何か考へ込んだやうな様子をして、手を腮のところへ當てがつたまゝ、ちつと注意しながら黙つてゐた。彼はやがて何時も程しつかりしてゐない聲でかゝ言ひ出した。

「わつしがレイチエルにどれ程の名譽や愛や、尊敬をさゝげてるか、またそれにどんな譯があるかつてこたア、わつしの外の方には、とても分りやしません。わつしがこの人にあの約束をした時にや、わつしは本當のことを話して、あの方は全くわつしの生涯の、天使だつて言ひました。あれや聖なる約束でござえました。わつしは何時までたつても變らねえと約束したんでござえました。」

レイザは彼の方へ頭を向けて、彼女には覺えない敬虔な氣持でそれを下げた。彼女は彼からレイチエルの方へ眼を移したが、その面上には優しさがあふれてゐた。「あなたはどつなさるお積りですか？」

と彼女は彼に訊ねた。その聲には優しさが聞かれた。

「え、奥さま。」とステイヴンはあつた、微笑を浮べて、努めて何でもない様子をみせようとしながら。「わつしはやりかけてゐた仕事をやちまつたんでござえますから、こゝを退いて何かほかのことをやんねえちやなりません。運にも、不運にも、人間はやつてみねえことにや仕方ねえんでしてね。先づやつてみねえことにやどうすることも出来やせんから——でなかつた日にや寝轉んで、日干しになるだけでござえませう。」

「出かけるときには何で出かれますの？」

「歩いて行きますア、奥さま、歩いて行きますよ。」

ルイザは赧面した、彼女の手の中には財布が握られてゐた。紙幣のかさかさいふ音が聞えた、彼女は一枚の紙幣をひろげて卓子の上ののせた。

「あのレイチエルさん、あなたから仰しやつて下さい——あなたならどうしたらお氣を悪くならずに納めてゐた。」

—五三—

けるかよく御存知でせうから、——これをあの、何かお旅立ちのお役にでも立てゝ下さるやう、あなたからこの方にお願ひして下さい。」

「奥さま、それはいけません。」と彼女は頭をわきへそらして答へた。「あなたが可哀さうなこの人を、それほど御深切にお思ひ下さるだけでも本當に有難う存じますわ。けれどこの人の本當の氣持や、又その氣持から見て、何が正しいことだかつてことは、この人でなくては分りませんでせうから。」

さつきの會見の際にはあれほど眞率で、しつかりしてゐたこのひどく落ちついた男が、忽ちその落ちつきを失つて、顔を手で掩つたまゝ立つてゐるのを見たときに、ルイザはそれが信じ難くもあり、驚かされもし、俄に同情に打たれもして、ぢつと見守つた。彼女は彼にさはらふとでもするやうに、手を伸ばしたが、すぐに自分を制して、そのまゝぢつとしてゐた。

「レイチエルだつて、」ステイヴンはやがて顔から手を放して、立ち直つてゐた。「こんな御深切な贈り物を、一層有難くしてくれるやうな言葉は一言だつて添へることは出来ませぬ。わつしは物の道理や恩てえものを知らねえ男ぢやねえ證として、二ポンドほどいたゞるとききます。いへお返しするつもりでお借りするとしときませう。たゞ今のお情けに生涯忘れねえ有難味を、わつしがもう一度しみじみこの身に應へさせることが出来ませうやうに。あゝ、わつしの今までやつたことの中で、こりや一番氣持のぬゝ義務でござえます。」

彼女は喜んで再びその紙幣を取り上げて、彼がゐひ出した遙かに少ない金額のものを取りかへた、彼はどの點から見ても、丁寧でも、美しけれども、優雅でもなかつたけれども彼がそれを受け取つて、何事もいはずにその感謝を現はす様子は、あのチェスタアフィールド卿が百年の月日をかけても、その息子に教へることの出来ないやうな優美さがあつた。

この訪問が、この場面に達するまで、トムは寢臺に腰を下したきり、一向われ關せずとひつた態度で片方の足をぶらぶらさせながら、ステッキの頭をしきりにしやぶつてゐた。姉が歸りさうなのを見ると、彼はやゝ慌てた風に立ち上つて、一言かふはさんだ。

「一寸待つて下さい、ルウ姉さん！歸へる前に僕は一寸この人に話してきたことがあるんです。思ひつたことがあるんだ。ブラックプール君、階段のところへ来てくれないか、僕アそれをお話しますから。君、燈火なんざあゝよ！」トムは彼が戸棚の方へ獵燭を取り出しに行つたのを、ひどくまだるつこしがつた。「燈火なんかいりやしな」

―五三三―

るよ。」

ステイヴンは彼のあとについて出た、トムは部屋の戸を開けて、その把手を自分の手に押へてゐた。「かふなんだ！」と彼は囁いた。「僕ア君に何かお世話が出来やしないかと思ふんだ。だが結局何にもならんかも知れんから、どんな仕事だと訊ねられると困るがね。しかし僕がやつて見るだけは悪くないさ。」

彼の息はまるで焰のやうにステイヴンの耳にかゝつた、それはひどく熱かつた。

「今晚君の處へ言傳を持つて行つたのは、僕等のところの使ひ番なんだ。あの男を僕等のといふのは、實は僕もあの銀行に勤めてゐるからなんだ。」

ステイヴンはかふ考へた。「この人は何て慌てゝゐるんだらう！」彼の言葉はそれ程しどうもどうであつた。

「そこでだ！」とトムはゐつた。「あゝかね！何時君は發つのだい？」

「今日は月曜日でござえますから。」ステイヴンは考へながら答へた。「えゝと、旦那、金曜日か土曜日、まあそんなところでござえませうよ。」

「金曜日か土曜日だね。」とトムはゐつた。「あゝかね！僕ア自分が君にしてやらうと思つてゐる世話がうまくいくかどうか自信がないんだがね、――ありや僕の姉なんだ、今君の部屋にゐるのは――だが僕は出来るかも知れんと思ふんだ。若し僕に出来なかつたとしたところで、別に害になるといふ譯のものでもないからね。そこで打ちあげた話でえのはかうなんだ。君は僕等の處の使ひ番を覺えてゐるだらう？」

「へえ、覺えとります。」とステイヴンはゐつた。

「そりや好い。」とトムがひつた。「それぢや君が夜業を濟ませたら、今日から君が立たうといふ日まで、銀行の近所を一時間はかりぶらぶらしてゐてくれないか？君はあの男に、ぶらぶらしてゐるのを見られても、何か用があるやうな風を見せんやうにしてくれ給へ。といふのは、僕は君にして上げようと思ふお世話がいよいよ出来るまでは、あの男を君のところへ話しにやるわけにやいかないんだ。いよいよ出来るとなつたら、あの男に手紙を持たして君のところへ知らせにやるよ。だがそれが出来ないとやらないからね。あゝかね！よく分つた、どうらうね？」

彼は暗闇の中でステイヴンの上衣の釦の穴にそろそろと指を這ひ込ませた、そして上衣の隅をしつかりとからみつけて、變に思はれるほどぐるぐる捲き上げた。

「よう分りました。」とステイヴンはゐつた。

「あゝかひ！」とトムは繰り返してゐつた。「ぢやきつと間違はないやうにしてくれ給へ、それから忘れないやうに。」

―五三三―

僕は歸り途に自分の思つてゐることを姉さんに話して置かう、姉さんもきつと賛成すると思ふよ。ゐゝかね！大丈夫かね？すっかり分つたかい？ぢやそれでゐゝ。行きませう、ルウ姉さん！」

彼は姉にかふ聲をかけて戸を押し開けたが、部屋へは戻らず、また狭い階段を燈火で下へ照らして貰ふのを待たうともしなかつた。姉が下り始めた時には、彼はもう下にゐた、姉が彼の腕を取ることが出来る前に、もう町通りに出てゐた。

ペグリア夫人は姉と弟が歸つてしまふまで、またステイヴンが獵燭を手にして戻つて来るまでその片隅の處にぢつとしてゐた。彼女はバウンダアビー夫人を賞めたひが賞める言葉がないやうな心地であつた、そして譯のわからない年寄りがよくするやうに、『あの方は本當にお綺麗で深切な方だ。』といふので、泣き出した。けれどもペグリア夫人は、彼女の賞讃してゐるその人が、ひよつとしたら戻つて來はしないか、それとも他の誰かゝ來はしないかと、ひどくまごまごしてゐたので、その夜は彼女の快闊さはもうそれきりでお終ひになつた。それに朝早く起きて、精一杯働かなければならない人達には、もう大分夜が更けてゐた。で、お茶の會はこれで終りとなつた、ステイヴンとレイチェルは、この不思議な知り合ひをあの旅人宿の戸口まで送つて、そこで二人は彼女と別れた。彼等はレイチェルの住んでゐる通りの角まで一緒に戻つて來たが、そこへ近づけば近づくほど、沈黙が彼等の上にかぶさつて來た。二人は今まで稀にでも出會つた折には、何時も別れることにしてゐた、あの暗い角まで來た時に、足を止めたが、やはり黙つたまゝだつた、まるで二人とも口をきくのを恐れてゝもゐるやうに。

「おいらア發つ前に、お前ともう一度會ふやうにしてえと思つてるが、レイチェル、若し——」

「お前さんはわたしがきつと會うまいと思つてるんでせう、ねえ、ステイヴン。わたし達はお互ひに胸の中を打ち明けることにした方がゝと思ひますよ。」

「お前のいふな何時も本當だ。その方がぐつと遠慮がなくなつてゐたらう。おいらアか考へてゐたんだ、レイチェル、あと一日か二日しか残つちやゐねえんだから、なあ、おいら一緒にゐるところを見られねえ方がお前の爲めにやよからうと思つてゐたんだ。でねえと、お前も面倒の卷添へへをくつて、よくねえことになるだらうからな。」

「わたしの考へてるのはそんなことぢやありませんよ、ステイヴン。でもお前さんはいつかのわたし達の古い約束を覚えておいでせうね、わたしあのことを考へてゐたんですの。」

—五三四—

「さうか、さうか。」と彼はあつた。「そりや、その方がゝこたアゝ。」

「お前さんわたしに手紙をくれて、お前さんの身にあつたことは何でもみんなわたしに知らせてくれるでせうね、ステイヴン？」

「ゝゝとも。おいらア今もう何も他にいふこたアねえ、たゞ神様がお前を離れず、神様がお前をお恵み下さつて、神様がお前にお禮をあつてお報いして下さるやうに、といふだけさ。」

「ではステイヴン、お前さんも何處にゐても旅の間は御無事のやうに、それからお終ひには平和と安息とがございますやうに！」

「なあ、おいらアあの晩お前に話して置いたつけ。」とステイヴン・ブラックプールはかゝあつた。「おいらア自分の腹の立つものを見たり考へたりする毎に、おいらよりづゝとよいお前の姿がその側に見えるんだつてな。今のお前が丁度さうなんだよ。お前のお蔭でおいらアそれが前よりやゝ眼で見られるんだ。ぢや仕合せでおいでよ。お休み、さやうなら！」

それは、何處の街中にもよく見られるあわたゞしひ別れに過ぎなかつた。だが、この二人の平凡な人間にとつては、神聖な思ひ出であつた。功利主義の經濟學徒よ、骸骨ぢみた學校教師よ、事實一點張りの代表委員よ、お上品で無氣力な無信仰の輩よ、小つぼけな、もみくちやになつた、澤山の信仰簡條の駄辯者どもよ、君達の傍に、貧乏人は何時でもゐる。まだ時のある内に、急いで彼等にこの上もない優美な空想と愛情と培つてやりたまへ、そして裝飾がまるで缺けてゐる彼等の生活を飾りたてゝやりたまへ、でないと、君達が勝利を得て、浪漫的な憧憬が彼等の魂から蹟形もなく追ひ拂はれ、

彼等が根柢々の生存と面々相對することになつたが最後、現實は虎狼のやうな性向を帯びて來て、やがては君等を滅亡させてしまふだらう！

ステイヴンは翌日もその翌日も働いた、誰からも一言も慰めの言葉をかけられず、出るにも入るにも前のやうに皆に顔をそむけられた。二日目の終りになると、彼の仕事は片づいた。三日目の終りには、彼の織機は空になつてゐた。

彼は最初の二晩、銀行の前通りにとしばらくの間たゞずんでゐた。でもそこでは、あゝにしても、惡ぬにしても、何事も起らなかつた、彼は約束したことを自分の方で等閑にしてはならないと、三日目の最後の晩は、たゞふり二時間は待つことに決心した。銀行には、バウンダアビー家の前家政婦であつた夫人が、以前に彼が見たやうに一階の窓際に坐つてゐた、又そこにはあの使ひ番もゐて、或る時は彼女と話したり、或る時は『銀行』といふ看板の眞上の鎧

一五三五

戸越しに外を眺めたり、或る時は戸口のところに出て來て、踏み段の上に立つて外氣を吸つたりしてゐた。彼が最初出て來たときに、ステイヴンは彼が自分を探してゐるのかも知れないと思つたので、彼の傍近くを通りすぎて見た、だがこの使ひ番は彼に對してきよろきよろした視線を投げたきりで、何もゐはなかつた。長い一日の勞働をすました後で、二時間もぶつ通しにぶらぶらするのは少し長すぎた。ステイヴンは或る戸口の階段に坐つたり、拱道の下の壁に凭れたり、あちこちとぶらぶらしたり、教會の時計の音に聴き入つたり、立ち止つて、往來で子供等の遊ぶのを眺めたりした。或る目的か他の目的を持つのはどんな人達にも極く自然なことだから、たゞぶらぶらしてゐる人間は、いつも異様に見えるし、また自分でもさう感ずる。最初の一時間が経過したころ、ステイヴンは、暫くの間にいかゞはしひ人格の人間に見られてゐるといふ兩白くない印象を自分に持ち始めたのであつた。やがて點燈夫が來たので、長い二列の燈火が、街路の遠景にずつと點ゐた、遠くなるにつれ、それは融けあつて、消えてゐるやうに見えた。スパージット夫人は一階の窓を閉め、鎧戸を下して、二階へ上つて行つた。と直ぐに彼女の後から一つの燈火が二階へ上つて行つた、その途中に、先づ戸口の欄間窓のところを通つて行くのが見えた。やがて二階の鎧戸の片隅が、丁度スパージット夫人の眼が、そこからのぞいてゐるやうに動いた、もう一方の片隅も、例の使ひ番の眼がそつちの側からのぞいてゐるやうに動いた。だがステイヴンには何の報知もなかつた。その二時間がたうとう過ぎると、ほつとした氣持になつて、彼はまるで、何時間もうろふろしてゐた暇潰しの取返しのもりで足早やに立ち去つた。あとはたゞ自分の住居の主婦さんに別れの挨拶をして、牀の上の間に合せの寢臺の上に横になるだけでお終ひであつた。といふのは彼の持物は明日の用意に束ねられてゐて、すべて出發の用意がちやんと整つてゐたからであつた。彼は朝早くこの町を引き拂ふつもりだつた——職工がまだ町通りに姿を見せぬうちに。

彼がいよいよその部屋に別れの一瞥をくれて、何時またこれを見ることであらうかと嘆きのうちに、も思ひを残して出かけたのは、まだ夜も明けきらぬころだつた。町はずつかり人氣がなくて、まるで住民が彼と交際するくらゐならんと、こゝを見捨て、行つたものゝやうに思はれた。その時刻には何もかも、色褪せて見えた。昇る朝日でさへもの悲しい海のやうな、青ざめた荒地を空につくつてゐた、けであつた。

行く途には當つてゐなかつたのだが、レイチェルの住んでゐた場所を通り、根柢瓦の街路を通り、まだふるへてゐな

る静寂な大工場の傍を通り、次第に明けて行く空に危険信號燈の薄らみゆく鐵道線路を通り、線路近くの半ば毀され、半ばその形を保つてゐる襤褸家の竝んだところを通り、煙にくすぶつた常磐樹が無精な嗅煙草をかぐ人達のやうに穢ない黒い粉を降りかけられてゐる根煉瓦の別荘の竝んだあたりを通り過ぎ、石炭屑の小徑や、種々雑多な不潔物を通り越して、ステイヴンは丘の頂上に達すると振りかへつて見た。その時には町の上には煙々と陽が差しかけてゐた。家々の竈にはまだ火は入らずに、工場の高い煙突が自分達だけで空を占領してゐた。毒々しい煙をどつと吐き出してゐるので、それが空を蔽ふてしまふかとも間もなくであらふ。だがこゝ半時間ばかりは、澤山の窓のうちの或るものは金色にかざやいてゐた。そこはくすぶつた硝子を透して、永久に蝕けてゐる太陽をコークタウンの人々に示した。

煙突から小鳥の方に眼を向けると實に奇妙に思はれた。自分の足に石炭の燃でなしに白い土埃がついてゐるのを見るのは、實に奇妙に思はれた。この年になるまでかふして暮して來ながら、しかもこの夏の朝にすつかり少年のやうに、新しくやり直さなければならぬといふことが、實に奇妙に思はれた！かふいふ物思ひを胸にかくして、荷物を小脇に抱へて、ステイヴンは注意深い顔を國道の方に向けた。すると彼の頭上にアーチ型の繁り合つた青葉の樹は、彼が後ろに、眞實な、愛情のあるたつた一人の人を残して來たことを囁くのだつた。

七、火藥

ジエームズ・ハートハウスは一旦仲間入りしたグラッドグラインド黨の爲めに『やり直す』と、直ぐさまめきめき成績を擧げ始めた。政界の長老達には更に一寸新しいところを講義して聞かせたり、一般の交際にはお上品な無頓着さを一寸見せ、例の不誠實へ誠實の風をつかぶせるといふ、體裁のゝ恐ろしい罪のうちで最も有望な、最も人好きのするものを非常に巧みに操つてみせたので、彼は忽ち將來有望な人物だと考へられるに至つた。熱誠などゝいふものに煩はされぬのが彼の大きな強味なので、お蔭で彼は事實偏重主義の聯中に對しても、生れつきの同類のやうに至極易々と交際ふかとも出來、他のすべての聯中を自分でもそれと意識してゐる偽善者だとばかり、海中へ投げ込むやうな眞似をして平氣な顔であることも出来るのであつた。

「彼等を信ずるものは私達のうちでは一人もありません、ねえバウングアビー夫人、又、彼等は自分でも自分を信じちやあないのです。やれ美德だ、やれ仁愛だ、慈善たなんて——名前なんかどうでもゝですが——そんなことを觸れ廻る先生達と、我々との間に、何處か違つてゐる

るところがあるとすれば、私達の方はそんなことの無意味なのを百も承知してゐて、それをはつきりといつてやるのに、あの先生達と來たら、私達に劣らずそれを承知してゐる癖に、決して口に出しては言はないといふ位ののところせう。」

何故、彼女はこんな定り文句にぎやつしたり、警告されたのであらうか？それは彼女を驚かさずには置かぬ程、彼女の父の主義や、昔受けた教訓と、似ても似つかないものではなかつたのに。この兩者の説くところが、何れも彼女を物質世界の現實に縛りつけて、他の何物をも信じさせまいとしてゐる以上、何處にこの兩派の間の大變な相違点といふものがあらふ？一體彼女の魂のうちには、まだ

頑是ないころトマス・グラッドグラインドに育て上げられたもので、今ジェームズ・ハートハウスが打ち壊さなければならぬやうなものが何かあつたらうか？この場合の彼女にとつて一番都合の悪いことには、彼女の心の奥に――まだ彼女のすぐれて實際的な父親が手を下してこね上げぬ前から――彼女のかつて耳にしたものよりもつと廣汎な、もつと崇高な人道を、何とかして信じようとする傾向が植ゑつけられてゐて、それが絶えず疑惑の雲や鬱憤の焰と闘つてゐたことであつた。疑惑の雲は、その魂の憧憬が彼女の青春のうちに全く無慘にも踏みこまれてしまつた爲めに、暗くはびこり、鬱憤の焰は、よしそれが眞理の囁きであつたにしても、彼女にこれまで加へられた不正の爲め暗く燃えた。このやうに、引き裂かれ、寸断されて、長いことたゞと自制にのみ馴らされて來た彼女の心の上に、今ハートハウスの哲理が、恰も救ひか光明のやうに下つて來たのである。一切が空虚で、無價値である以上、今更彼女は何をなくしたわけでも、何を犠牲にしたわけでもなかつた。父が彼女に夫をもてとすゝめた折にも、どうでも構はないと彼女は父にゐつた。どうでも構はない、と未だに彼女はいつてゐる。嘲笑に満ちた自負を抱いて、彼女は「何か構はなければならぬやうな大したものでもあるのかしら」と我と自ら問うてみた――そしてそのまゝ暮して行く。何方の方へ？彼女は歩一步と進んで行く、何處かへだんだん下つて行く、しかもそれは彼女自身では身動きもせぬと信じたくらゐ、如何にも緩慢なものであつた。ハートハウスの方はといへば、元來何處を目指してゐるのか、考へもしなければ、氣にもかけなかつた。彼は何等格別の目論見や計畫を目前に描いてゐるのではなかつた、まして努力のある悪企みなどをして、自分の怠け性を掻きたてる積りはなかつたのである。彼は今のところ立派な紳士たるにふさはしひだけ興がつたり、氣にとめたりするに止めてゐた。だが恐らく人に聞かせると、ふだんの彼の柄に適はしいとは

一五三八―

かりはいへぬまで行つてゐたかも知れない。彼はこゝに到着して間もなく、冗談すきな尊敬す可き國會議員の兄に、物憂ささうな筆つきで、バウンダアビー家の聯中は、『面白い人達ばかり』だとか、更にバウンダアビーの妻君は豫想してゐたやうなメヂューサのお化どころではなくて、年も若いし、どうして、なかなかの美人だと書いてやつた。それつきり、彼は最早や彼等の動靜に就いて一通の便りも認めず、彼等の家に出かけて行つて暇つぶしをするのを仕事にしてゐた。彼はコークタウン地方を飛び廻つたり、訪ね廻つたりしつゝある一方、頻繁にバウンダアビー家を訪問した。そして主人のバウンダアビーに大いに欵待されたのである。一體あなた方上流社會に縁故のある人は餘り私は好かんとか、しかし妻のトム・グラッドグラインドの娘がそれを好くなら、あれはそんな方々にはあゝ對手でせうとかひつて、例の風でも吹き出すやうな調子で周圍の人達に吹聴するのがバウンダアビーの何時もの癖であつた。

ジェームズ・ハートハウスは、あのやくざ青年の爲めにあゝまで美し變つた顔が、自分の爲めにも變つてくれたなら、こりや一寸目新しいお慰みだと考へ始めた。彼はなかなか觀察が鋭敏だつた。記憶力も慥かで、トムの口から洩らされる啓示の言葉は一つも忘れなかつた。彼はそれを、自分でルイザの舉動から見て取つたすべてのものと織り混ぜた。かゝつて段々に彼女といふものが分つて來た。が慥かに、彼女の性格でも、殊にすぐれた底深い部分は、彼の知覺力の範圍には入らなかつた。何故なら人間の性質に於いても、海と同じやうに、深處は深處に應ずるからである。けれども彼は熱心な研究者の眼で間もなくその餘の部分を読みとき始めた。

バウンダアビーは町から十五哩ばかりのところの地所つきで邸宅を手に入れたが、その一二哩附近までは、鐵橋を幾つも越え、一帶の荒蕪地を貫いて、汽車で行くことが出來た。荒蕪地の地下には、

廢坑となつた石炭坑がいくつも掘り残されてゐる。夜になると、その坑口に据ゑつけられたまゝになつてゐる、四邊の闇にも紛れぬ黒々とした機械の姿や、燈火がまばらに點在して見えるのであつた。土地はバウンダアビイの別荘に近づくに従ひ、次第に和らいで來て、春にはヒイズが黄金色に輝き、山楨が雪を欺く、夏季は又青葉のさやぐ樹蔭に飾られた一幅の田園風景に溶け込んでしまふ。コークタウンのお歴々の一人がこの景色のよい土地に建てた邸宅と土地が、抵當流れてバウンダアビイ銀行の手に入つたのである、彼は竝々ならぬ手段で一舉に手つ取り早く莫大な富を得ようとあせつて、卻つて二十萬ポンドばかりも損をしてしまつたのであつた。かふいふ事件はコークタウンの最もよく取締りの行き届いてゐる家

一五三九

庭でも折々起つた、だが何の貯へもない階級は一度も破産事件の味など知らなかつた。バウンダアビイはお蔭で、居心地の多いごぢんまりとした住居に腰を落ちつけて、花壇にわざはぎ甘藍を植ゑるといふ、例のこれ見よがしの『卑下』に耽ることが出来るので、この上もなく満悦の態だつた。彼は優美な家具にとりまかれながら、何處までもバラック流に暮すのを喜び、そこらに懸つてゐる種々の繪畫さへ、自分の素姓を引合ひにしてやつけるのであつた。「どうです、あんた。」と彼は客に向つてよくゐつた。「わしの聞いた處ではニキト家の聯中は」——これは以前の家主である——「あの濱邊の繪一枚に七百ポンドも出したさうぢや。ぢやが實のところわしが一生のうちには、一遍百ポンドとして、あの繪を七度も眺めたとして御覽なさい、それだけでとても飽き飽きしちまつて、もうその上見ようなんて氣はしません。いやしませんとも、わしは自分がコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイといふことを決して忘れはしませんからな。この長年の間わしが所藏してゐた……。いや、わしがそれを盗んだのでないとすると、まあ、どうにかしてわしの手に入るやうになつた繪はといへば、そりやわしが鞆を磨くときに、喜んで使つとつた靴墨の罫のレットルでしてな、長靴を鏡代りに使つて、顔を剃つとる男の版畫でした。それでも靴墨が空つぽになつちまふと、鏝錢と引き代へに賣り拂つたもので。一文でも手に入れて喜んだものでした。」やがて彼は同じ口調でハートハウスに言葉をかけるのであつた。「ハートハウスさん、あんたは馬を二頭聯れてましたね。何なら半ダースくらゐ引つぱつて來たまへ、十分飼つとく場所はあるんぢやから。こゝにや一ダースくらゐの馬なら何時でも厩があるんぢや、ニキト家の聯中はあんなにならん前は、厩一杯の馬を飼つたもんです。なあに丁度一ダースでぢや。あの人は子供の時分ウエストミンスターアの學校へお上の費用で參つとつたもんです。その時分のわしと來たらやつと厩物なんか喰つて壽命をつないでたもので、寝るとひつたところ市場の策の中でしたんぢや。ぢやが、若しわしが一ダースの馬を買はふと思つたところ——そんなことはしませんがな、一匹の馬でわしには澤山ぢやから——わしにはこゝの馬部屋に馬なんか入れとく氣にはなれません。自分が昔から一體ごんなどころに住つとつたかと考へちまふまんでな。ぢやからわしはそんな馬を見るが早いか勿體ない氣がして早速引き出しちまふに定つてゐますんぢや。が、世の中は廻り持ちとひゝますな。まあこの邸を御覽なすつて下さい。この邸がどんなもんかはあんたも御存知ぢや。まあこの國中はおろか、いや何處へ行つたとて——えゝ何處の國だつてかまはん——これほどお誂へ向きの家はあるもんぢやありません——

一五四〇

しかもかふして、その邸の真中に、まるで胡桃にくひ込んだ蟲みたいにジョサイヤ・バウンダアビイ

が突つ立つてゐるんですぢや。ところがニキト家の聯中はぢや（昨日わしの事務所にやつて來た男の話では）——ニキト家の聯中と來たら、昔ウエストミンスターの學校でよく拉丁語で芝居をやつたもので、この國の裁判長になつとる方々や、貴族の方々が顔が眞黒になるほどあの男を喝采したもんぢやさうだが、このごろは貧しい生活をしとるさうぢや——貧しい生活ぢやよ、あんた——アントワーブの狭い、暗い、裡通りの隅つかの五階とかでな。」

ハートハウスが初對面のときから奇異な思ひを抱かされたあの顔をもつとよく試して見よう、それが果して自分にとつても變るかどうか一番當つて見ようとしたのは、この別荘の樹蔭の中で、長い蒸暑い夏の日のことであつた。

「おやお一人ですか、バウンダアビイ夫人、お一人のところをお目にかゝれるとは、こんな仕合せなことはございません。實は先日から特にあなたに申し上げたいことがございましたので。」

彼がこゝで彼女に出會つたのは少しも不思議な廻り合せではなかつた。時刻からいへばそれは何時も彼女が一人である時分であり、そこは彼女がかねてから好きな静かな場所であつたから。それは暗い森の中の空地で、何本かの樹が倒れてゐる、彼女はそれに腰を下して何時も去年の落葉を眺めてゐるのであつた、恰も實家にゐたころ爐の中に落ちた灰を眺めてゐたやうに。彼は彼女の顔をちらりと見やつて、彼女の傍に腰を下した。

「御令弟ですな、トム君のことですが——」

彼女の顔色がさつと輝いた。彼女はその言葉に引つこまれた面持ちで彼の方へ向いた。「おれは今まで、」と彼は思つた、「この顔の輝く時ほど素敵な、うつとりさせられるものを全く見たことがない！」そんな氣持が我にもなく彼の顔にありくと出た——いや恐らく、それは彼に不意打ちを喰はして出たのではあるまい。がそれは、さうしろといふ祕密命令の通りにやつたものかも知れなかつた。

「いや、これは失禮。弟さん思ひのお心遣ひがお顔に見えまして、實にお美しいものですから——トム君は當然それを自慢の一つにしておいでなのも當りまへです——いやこんなことを申して、ほんとに失禮ですが、ついお讚め申さずにゐられなかつたものですから。」

「まあ、場あたりがお上手でゐらつしやいますのね。」と彼女は平然としてゐた。

「あゝえ、バウンダアビイ夫人、わたしが奥さんに心にもないことをお話し申すわけがないのは御存知ぢやありませんか。御承知のとほり私は慾張り者でして、相當の値段なら

—五四—

いつだつて、自分を賣る男です。ですから古風な艶つぼむことなどは、まるで出来る人間ぢやありません。」

「弟のことで何かお話があるさうでござりますが、」と彼女は言葉を返した。「早く伺ひたうございませう。」

「いや、これは手厳しむ。だが、全く私といふ奴にはそれも御尤もですよ。私は全くいづれお分りになるでせうが、何の値打もない犬です。唯私は假面をかぶりません。——えゝ、假面を。いや餘り奥さんに驚かされたので、弟さんといふ本題から脱線しちまひましたよ。實は私は弟さんのことになり興味を持つて居りますんでね。」

「おや、ハートハウスさん、あなたでも何かに興味をお持ちなさるんですか？」と彼女は半信半疑ながら、それでも謝意を籠めて問うた。

「そりや、私が初めてこゝに參つたときに、奥さんからさうを訊ねを受けたら、きつとひゝえと申し上げたことでせう。けれども今では、全くその通りと申し上げる外ないのです。何をゐゝ加減な、

と奥さんの不信用を——それも御無理はないのですが——買ふやうな恐れがあるのですが……」
 彼女は何か言ひたさうに一寸體を動かしたが、鬨が出なかつた。が、やがて彼女はあつた。「ハート
 ハウスさん、わたしあなたが弟のことをお心にかけて下さることをお信じいたしますわ。」

「有難う。全くそりや本嘗なんですから。御承知の通り、わたしはあまり他人様に信用してくれな
 ど、申したことはありません。ですが今度だけはさうを願ひ致します。奥さんは弟さんの爲めに随分
 といういろいろなことをなさいましたし、大へんに可愛がつておいで。全くバウンダアビイ夫人、奥
 さんの御一生は弟さんの爲めには御自分の身をお忘れなすつたやうなもので、實にお美しいと思ひ
 ます——いやまた失禮を申し上げて、——大へん脱線ばかりで相済みません。私に弟さんに對しては、
 弟さん御自身の爲めに心配して上げてゐるわけです。」

彼女は一寸身を動かして、今にも急いで立ち上つて、行つてしまひさうに見えた、その途端、彼は
 今述べてゐる本筋に歸つたので、彼女は又そのまゝ腰を落ちつけた。

「バウンダアビイ夫人」と彼は一層氣輕な態度であつたが、努めてそれをつくらつてゐるらしい様
 子が見えた、それは以前の態度より一層意味ありげなものであつた。

「弟さんくらゐの年配では、輕はずみとか、前後の見境がないとか、物要りが多い——つまり世間
 でいふ一寸錢使ひが荒い——とかいふやうなことは、決して取り返しのかぬといふほどの咎ぢやあ
 りません。弟さんもさうでせう。」

「えい。」

一五四一

「まあ打ち明けてゐはして下さい。奥さんは弟さんが何か勝負事をやるとを考へてですか？」

「どうもあれは賭事をやるやうでございませぬの。」ハートハウスは彼女の返辭がまだ終りにならぬも
 のゝやうに待つてゐるので、彼女はあひ添へた。「あれが勝負事をやることは存じて居ります。」

「無論、随分負けるのでせう？」

「えい。」

「賭事をすれば誰でも損をします。かふ申しては何ですが、多分そんなことの爲めに、奥さんは弟
 さんに幾らかづゝでも、お貢ぎになつてゐらつしやるのでせうね？」

彼女は首垂れて坐つてゐた。が、かふ問はれると、探るやうに、また少し立腹したやうに眼差をも
 たげた。

「バウンダアビイ夫人、餘り不躰な申しやうですが、私にはどうもトム君が次第に深みにはまり込
 みはしないかと思はれますので。自分も散々よからね事をやつて來た覺えもありますから、一つ手を
 延して助けて上げたいと思ふのです——トム君御自身の爲めにと敢めて誓ひませうか？その必要があ
 りですか？」

彼女は何か答へようとしてゐるらしかつたが、一言も口からは出なかつた。

「私の心に浮んだことを何もかも打ち明けて申しますと、」とジェームズ・ハートハウスは無理にも
 つと氣輕な態度にならうとしてゐる様子を見せながら、再び話をすゝめた。「果してトム君がいろいろ
 な便宜をお持ちになつてゐるかどうか、正直に申せば私には疑問と思はれます。果して——露き出し
 に申して失禮ですが、——トム君とお父さんとの間に諒解がちゃんと出來てゐるやうにもないと思ひ
 ますが。」

「あるらしいとは、」とルイザは彼の言葉が彼女自身の大事な思ひ出にふれたので、ぱつと顔を赧ら
 めながら、言つた。

「思ひませんけれど。」

「それともトム君と——奥さんなら私の申すことを本當によく御理解下さることゝ思ひますが、——奥さんの御主人との間にはいかがです。」

彼女はますます顔を赧くして、燃えるやうに眞赧になつて、小さな聲で答へた。「それもありませんが、思ひません。」

「バウンダアビー夫人」とハートハウスは一寸黙つてゐた後であつた。「奥さんと私との間だけでもう少し立ち入つたお話が伺はれませうか。トム君は奥さんからかなりなお金をお借りしてはゐませんか？」

「えゝハートハウスさん、お分りでございませうけれど。」と、彼女は多少逡巡した後で、返辭をした——彼女は「この會話を通じて、多少不安な、惑つたやうな心持であつたが、それでも大體その落ちついた態度を失ひはしなかつた。」

一五四三—

——「お分りでございませうけれど、さうまで仰しやつて下さるので、わたし申し上げるには申し上げなくても、決して愚癡や悔で申すのではございせんよ。わたし決して何事にも怨みがありません」とは申したくありませんし、自分のしたことを、一寸でも後悔などは致して居りませんのですから。」

「これはまた健氣なものだ！」とジェームズ・ハートハウスは思つた。

「わたし此方へ参りましたとき、もう弟が随分借金してゐることを知つたのでございます。弟としては多いといふ意味ですけれども、大へんな金額なので、わたし仕方なく自分の身につけてゐる飾りものを少し賣りましたやうな譯でございます。別に犠牲といふ譯でもありませんが。わたし喜んで賣つたのでございますわ。わたしそんなものは何とも思つて居りませんでした。そんなものは私には全く値打などなかつたものでしたから。」

彼がこのことを知つてゐるのを、彼の顔のうちに見て取つたからか、それとも、自分が今ゐつた飾り物といふのは夫の贈物だといふことを彼が知つてゐるのを、良心に咎めた爲めからか、彼女は言ひ淀んで、又赧くなつた。見かけよりづゝと感じの鈍い男だつたにしても、又、たとひ彼がそのことを前に知つてゐなかつたにしても、かういはれては、それと承知したことであらう。

「その時以來といふもの、いろいろの折にわたしは都合の出来るだけお金を弟にやりました。つまりわたしの手に入つたお金をでございます。あなたが弟のことを折角御心配して下さるのをお信じして、何もかもお打ち明け致すのですから、決してゝ加減のことを申し上げようとは思ひません。あなたが宅へお訪ね下さるやうになつてからも、あれは一度に百ポンドの金を都合してくれと申して参りました。わたしにはとてもそのお金を都合してやる事が出来ませんのです。わたしはそんなこんなで弟が飛んでもないことになりはしないかと心配してをりますが、今まではそのことを何方にも黙つて居りました、それを唯今、あなたにだけにお耳に入れた譯なのでございます。わたし全く何方にもお打ち明けしなかつたのでございます。その譯は——あなたはもうその譯をお察しのことのでございませうね。」彼女はかゝりつて突然言葉をきつた。

彼は抜目のない男だつたから、この機會をつかむと、表面は如何にも彼女の弟のことらしく紛らしながら、實は彼女自身の胸のうちを、彼女に代つてそつくりそのまゝ述べた。

「バウンダアビー夫人、私は殺風景な俗人ですが、貴際今のお話には、大へん感動させられました、私とて、到底弟

さんをひどく責めるやうな氣持になれません。奥さんが弟さんのいろいろな失敗をお氣遣ひなさる賢いお考へは、私にもよく分りますし、又同感です。グラッドグラインドさん、バウンダアビイさんの御兩人に對しては、そりやもう限りなく尊敬はして居りますが、でもトム君は一體教育の點でもさう仕合せだつたとはいへない氣がしますね。トム君は將來大いになさねばならぬ社會に對して可成り不利な育て方で育て上げられたので、トム君は長い間——そりや無論トム君に對して、よかれとのみ願つてなされたことでせうが——無理に押しつけられてゐた一方の極端からあつた極端へ突き進むことになりすな。バウンダアビイさんの立派な峻嚴な英吉利生粹といふ獨立心は、極めて立派な特徴には違ひないのですが、あれでは一寸——先刻、私も奥さんも成る程と思ひましたやうに——諒解がつき難いのです。まだ若い身で誤解され、性格は全然誤認され、能力さへ見當違ひの方に向けられてしまつた人が、救ひや導きを求めようとて、すがる濃やかな情といふものゝ、まるきりない世界では、殊にその諒解などつきさうにない、まあかふ申し上げて見れば、大體これが私の眼に映じたまゝの實相なわけです。」

腰を下したまゝ、草葉の上にゆらめく光線を越えて、彼方の森の暗がりの方へ、——眞直ぐにちつと視線をやつてゐる姿をみて、彼は今はつきりと述べたてた言葉が、彼女の胸に思ひ當るらしいのを、その顔色で見て取つた。「そこで」と彼は續けた。「本當にお氣を悪くなさつては困りますが、まあさうは申すものゝですな、私はトム君に大變な缺點が一つあると思ひます。そればかりは私も黙つて見えてゐることが出来ません。卻つてトム君を大いに責めたいくらいです。」

ルイザはその眼を彼に向けて、その缺點といふものはと彼に訊ねた。

「いや、」と彼は答へた。「多分もうそれだけ申し上げれば澤山でせう。まあ大體それはあはんで置いた方が、多分よからうと存じますから。」

「でも氣になるではございませんか、ハートハウスさん。どうか仰しやつて下さいまし。」

「何でもないことで御心配をおかけしてもいけませんし、——それに慥かに弟さんのことに就いては、私としては何より有難いことに、奥さんと私との間にかふした打ち明け話さへ出來た位ですから——申し上げることに致しますせう。私がトム君のことで黙つて見る譯に行かぬといふのは、トム君の一番あゝ友の獻身的態度なり、彼女の眞實に利己的でない點なり、彼女の犠牲的努力なりに對して、トム君がふだんの言葉なり眼つ

きなり、行ひなりからいつて、すこし無頓着すぎはせんかといふことです。その女の方にトム君のした仕打ちが私の見たところで、どうも實にひど過ぎると思ひます。その方がトム君のためになしたことを考へると、トム君はあんな不機嫌や依怙地ではなしに、不斷の愛と感謝とを捧げねばならん筈です。そりや私は無頓着極まる男ですがね、バウンダアビイ夫人、弟さんのかふしだ短所に無頓着であたり、或はそれを大した罪でないと考へてしまふほど私は氣のきかん男ではないのです。」

森が彼女の眼の前でぼうと霞んだ。彼女の眼には涙が一杯にじんで來たからだ。それは長い間人目から匿されてゐた深い井の底から湧いて來た涙だ、彼女の胸は刺されるやうな痛みにみちて、あふれ落ちる涙のうちにも、慰めが見出されなかつた。

「バウンダアビイ夫人、手短かに申し上げますと、私が是非とも思つてゐるのは、弟さんのかふした點をなほして上げたいことなのです。私は弟さんの事情もよく存じて居りますし、弟さんをお助け

するの私の考へなり、忠告なりは——まあ、トム君よりもつと場敷を踏んだやくざがお口添へするので、多少お役に立てばと内々願つてゐるところですが——少しは弟さんの上に効果がありませうから、私は自分の手に握ることの出来るものは、すべてこの目的にきつと使つてお目かけます。いやこれだけ申せば澤山でせう。もう随分お喋りをしましたから、何だか私は自分がゝ人間だと、しきりに言つてるやうに見えたか知れませんが、私はそんな風な見せかけをするつもりは毛頭ありません。むしろ、自分は決してゝ人間ぢやないと明らかに言明してゐるのです。御覽なさい、向ふの樹の間に、」と彼は言ひ添へて、眼をあげて、あたりを見廻した——何故なら今まで彼はちつと彼女をみつめてゐたのだから。——「弟さんがゐます、きつと、もう此處へやつて來られるでせう。こちらへぶらぶらおいでのやうですから。こちらからも出かけて行つて、途中ではつたり出會ふことに致しませう。弟さんは近頃、黙つてばかりゐて、何となく元氣がないやうですな。大方兄弟としての良心が咎めてゐるのでせう——良心なんてものがあつたらですね。いや全くのところ、私なども良心々々といふ言葉を餘り聞かされたので、それを信ずる氣なんかなくなつたんです。」

彼は彼女の手を取つて立ち上らせ、彼女は彼の腕をとつた。さうして二人はやくぎ青年の方へ進んで行つた。彼はぶらぶら歩きながら、氣のなきうに樹の枝を叩いてみたり、こゝんで樹の幹から、ステッキで容赦なく苔などを剝がしたりしてゐた。彼はその苔剝がしの暇つぶしをやつてゐたときに、二人が傍へやつて來たのでひどく吃驚した、そして

—五四六—

顔の色を變えた。

「やア！」と彼は口訥りながら言つた。「姊さんやあなたが此處においでだとは知らなかつた。」

「トム君」とハートハウスは片手を彼の肩に置いて、此方を見せながら、三人一緒に家の方へ歩き出した、「誰の名前だね、あの樹に彫りつけてあつたのは？」

「誰の名前？」とトムは訊き返した。「お！あなたは何處の娘の名かといふんですね？」

「いや君の様子がどうも樹の皮に美人の名でも彫んでゐるやうに怪しかつたんでね。」

「飛んでもないことを、ハートハウスさん、まあ財産でもどつさり特つた綺麗な娘が、自分の方から僕に御執心と來てくれたなら格別ですがね。でなかつたら、娘は不纏織でも、なかなかの金持で、まかり間違へば僕に逃げられても心配しないといふやうなのでもゝですね。さういふ娘でしたらいくらでも向ふさまのお好きだけ、お名前を彫つてあげますがね。」

「トム君、どうも君はちと勘定高いぢやないか？」

「勘定高い、」とトムは答へた。「勘定高くない人がありますか？姊さんに聞いて御覽なさい。」

「あなたはそれがわたしの缺點だといふことをちやんと見つけたの、トム？」とルイザは彼の不満や根性曲りには別に氣もとめない風でかふ言つた。

「ルウ姉さん、姊さんは自分があてこすられたんかどうか分るでせう。」と弟は佛頂面をして、言ひ返した。「姊さんに思ひあたる點があつたら、惡いところを直したらゝでせう。」

「トム君は今日は大分人間嫌ひになつてゐますな、とかく人間は面白くなくなると、皆折々はかふなるもんですよ。」とハートハウスは言つた。「パウンダアビー夫人、弟さんの言ふことなんか本當にしちやいけません。弟さんはそんな分らず屋ぢやないんです。弟さんがもう少し優しくしないなら、私は奥さんのことを弟さんが内々私にどういつてるかそれを一寸打ち明けてやりませら。」

「そんなことを言つたつて、ハートハウスさん」とトムは自分の庇護者にはすつかり參つてゐるので聲を柔げたが、しかし矢張り澁面をして首を振りながら言つた。「僕が姊さんを何時か勘定高いと賞

めたなどゝはまさか仰しやれやしなひでせう。僕はその反対のことで姉さんを賞めたことがあつたかも知れませんし、今度だつて賞めていゝ理由でもあつたら、屹度賞めるつもりであるんです。でももうそんなことは皆やめてしまひませう。あなたにも大して面白いことぢやなし、僕もそれで氣を腐らしてゐるんだから。」

彼等は家に向つて歩きつゞけたが、そこへ着くとルイザ

—五四七—

は彼女の客の腕から手を離し、家の中に入った。彼は彼女が階段を昇つて、扉の蔭に隠れて行くのを立ち止つたまゝ見送つてゐた。それから又、彼女の弟の肩に手を置いて、意味ありげに點頭めて見せて庭に来るやうに誘つた。

「ねえ、トム君、君に一寸話があるんだがね。」

彼等はちつとも手入れをされてゐない薔薇の叢の中に立ち止つた、——ニキト家の薔薇をどしどし滅らしてしまふのをバウンダアビイは例の『卑下自慢』の一部か何ぞのやうに考へてゐたのである。

——トムは露臺の牆に腰かけて、薔薇の蕾を揺つてはそれを細々に引き裂いてゐた。一方彼々に憑ゐてゐる悪魔（ハートハウス）は牆に片足をかけて膝に支へた腕で頬杖ついて、彼の上にのしかゝるやうにして佇んでゐた。丁度彼等のあるところは彼女の窓からよく見えた。恐らく彼女は彼等を見てゐたであらう。

「トム君、一體どうしたんだ？」

「えゝ、ハートハウスさん」とトムは呻くやうに言つた。「僕はもうどうにもならなくなつてしまつて、生きてゐるのも厭になつたんです。」

「だつて君、僕だつてさうだよ。」

「あなたが？」トムはそれに答へた。「あなたは『自立』の看板見たあな方ぢやありませんか。ハートハウスさん。でも僕は何もかもひどく滅茶々になつてしまつたんです。僕が今どんな破目にまで落ち込んだかあなたは御存知がないでせう——姉さんさへその氣になつてやつてくれたら、本當に僕はこんな破目から脱け出られるんだのになあ！」

彼は今度は薔薇の蕾を噛んで、衰弱しきつた老人のやうにふるふる手で、齒の間からそれを引きちぎりはじめた。その様子を極めて注意深く見てから、彼の對手は何處までも氣の置けないやうな態度をしてみせた。

「トム君、君はちと考へがなさすぎやしなひか。何しろ君は姉さんに餘り無理を言ひすぎるんだ。

君は姉さんから随分とせびつたらう、えゝ、せびつたぢやないか。」

「えゝハートハウスさん、そりやせびりましたよ。さうでもしなけりや、僕にどうして金の都合がつきましたらう。バウンダアビイの爺さんと來たら、僕位の年頃には月二片で暮したとかどうとか、そんなことばかり自慢にしてゐるぢやありませんか。僕の親父はまた親父で自分で方針といふものをちやんと書きつけて、僕を根ん坊の時分からそれへびつたりあて嵌めやうとはかりしてゐるんぢやありませんか。お母さんと來たら、文句や愚癡をいふほかに何の能もないんです。一體、誰が金の心配なんかしてくれるんでせう、姉さんのところでもなきや何處へも金の都合をつけに行けないぢやありませんか。」

彼は今にも泣き出さんばかりであつた。そしてその蕾を

—五四八—

何十となくまはりへ噛み散らした。ハートハウスは諭すやうに彼の上着を掴んで、彼を止めた。

「しかしだ、ねえトム君、姉さんにそれだけのお金がないとしたら――」

「ないとしたらですつて、ハートハウスさん？僕は姉さんにあるなど、言ひやしません。きつと僕は姉さんの都合の出来さうな金よりはづゝと澤山吹つかけたんでせう。それにしたところで、姉さんはそれを工面してくれなきやならないんです。姉さんは何としても、工面がつくんです、もうこれだけ言つてしまつたんですから、今更あなたに何か隠し立てしたつて仕方がありません。あなたがつて御承知でせう、姉さんがバウンダアビイの爺さんと結婚したのは自分のためでも爺さんのためでもないんです。全く僕のためだけにしたことなんです。そんなら何故姉さんは僕が頼んだものを、僕のために、バウンダアビイから貰つちやくれなゐんでせう？姉さんは何もその金をどうかふすると説明なんかする必要はないんです。姉さんはなかなか機敏です。しようと思へばバウンダアビイから瞞して取ることも出来るんです。僕がその金がないと大變なことになるといつてゐるのに、何故姉さんは便宜を計つてくれないんでせう。でもてんで駄目なんです。あの通り姉さんはバウンダアビイの前に出ると、石みたいに冷たい風をしてゐるんですもの。愛想をよくして手軽くそれを引き出すなんてことはしちやアくないんです。あなたは何と仰しやるかしれませんが、僕からゐれば、實際むごいやり方なんです。」

「牆の向ふにはその直ぐ下に小さい池があつたが、ジェームズ・ハートハウスは小トマス・グラッドグラインドの言葉をきいてゐる中に遮二無二彼をこの池に投げ込んでやりたくなつた。丁度コークタウンの工場主達が何か氣に喰はぬことでもあると、おれの財産を大西洋の中に投げ込んでやるぞと嚇したのと同じやうに。だが彼はさり氣ない風を續けてゐた、――一塊りとなつて、浮島みたいに水面を浮游してゐる薔薇の蕾よりも重いものが、石の手摺越しに投げとばされずにすんだ。

「ねえ、トム君。」とハートハウスは言つた。「僕が君の銀行家にならふぢやないか。」

「頼みますから、」とトムはいきなりかふ答へた。「銀行家なんてことは決して言はんで下さい！」そして彼の顔色は薔薇とゐる、對照をなして蒼白くなつた。ひどく、蒼白くなつた。

ハートハウスは全く身柄のゐる人間として、最も上流の社會にばかりなれてゐたので、はしたなくも、吃驚した様子など見せはしなかつた――彼は直ぐに平靜な様子を取

―五四九―

り戻すことが出来た――けれども彼の目蓋は少しもち上げられた、ゐはゞ餘り不思議にうたれて、はつと上げられでもしたやうに見えたりとはゐへ、不思議に思ふなど、いふことは、グラッドラインド黨の教へに反してゐると同様に、彼一流の掟にも反してゐた。

「さしづめどれだけ要るんですね、トム君？百單位かね？ゐひ給へ。いくらだか聞かせ給へ。」

「ハートハウスさん。」と今度は本當に泣き出しながら言つた。その態はどれほど惨めなものに見えようとも、彼の涙は煩さく怨言を並べるよりはづゝとよかつた。「もう間に合はないんです。今ではもう僕にその金は何の役にも立たないんです。も少し前にその金が手に入りさへしたなら大變役に立つたんでした。しかしあなたの御好意は大變着難いんです。あなたのやうなお方が本當の友人なんです。」

「眞の友人だと！やくざ奴、やくざ奴！」ハートハウスは、懶い氣持でかふ考へた。「お前は、何といふ馬鹿だらう！」

「あなたの仰しやつて下さつたことは非常な御深切です。」とトムは彼の手を握りしめながら言つた。

「非常な御深切です、ハートハウスさん。」

「それは」と相手はかふ答へた。「今の話をもつと用に立つ時が来るかもしれないと思ふね。だから、ねえ君、若し君が何か大變困つて抜き差しのならんやうな時があつたら僕に打ち明け給へ、君が一人で思案するよりは少しは増しな抜け道が僕には見付かるかもしれないからね。」

「有難う。」とトムは元氣なく首を振り振り薔薇の蕾を噛みながら言った。「實際、僕はあなたともう少し早くお近づきになつたらよかつたと思ひますよ。ハートハウスさん。」

「それでね、トム君、君も知つての通り、」とハートハウスは、結論としてかふ言つた——陸地の一部にならうとでもするやうに、小休みもなく石垣の方へ漂つて行く例の薔薇の浮島に一丈、足前をしてやるつもりか、彼もまた二輪の薔薇を投げながら——「人間は誰だつて、そのすることが利己的なもので、僕とて外の人と全然同じなんだ。僕は懸命にかふ願つてゐるんだ……」——しかも、その懸命だといふ懶げな様子には熱烈なものがこもつてゐた——「君が姉さんに優しくしてあげるのを——それは當然君のすべき事だと思ふんだ。それから君がもつと姉を愛する快闊な弟さんになることだね——それも君の當然の道だと思ふよ。」

「ハートハウスさん、僕はきつとさうなります。」

「トム君、今がその時期だ、直ぐになり給へよ。」

「きつとなります。ルウ姉さんも屹度さういふでせう。」

「まあそれで話は済んだから、」とハートハウスは又波の

—五五〇—

肩をた玉ゝて言つたが、その時の風は、この話がたゞほんの好意上から、相手に成るだけ鹿爪らしい感謝の念など起させまいとして取りつくろはれたのだ、とも取れば取られるものだった——そして愚かにも、相手はさう思つた。「では又晚餐の時に會はふ。」

トムは晚餐の前に姿を現はしたときには、彼の胸の中は如何にも重苦しげであつたが、その舉止動作はいくらかきびきびしてゐた、それに彼はバウンダアビーの来る前に現はれたのであつた。「ルウ姉さん、僕は別に怒つてはゐなかつたんですよ。」と彼は姉の方に手を差し出して姉に接吻しながら言つた。「僕だつて姉さんが僕を好いてくれるのは知つてゐるし、姉さんだつて、僕が姉さんを好いてゐるのは知つてゐるでせう。」

これを聞いてから、その日のルイザの顔には、或る人に對する微笑みが浮んでゐた。あゝ、或る人に對して！

「すると、それだけあのやくざ奴が、彼女に好かれる唯一の人間でなくなつた譯だな。」とジェームズ・ハートハウスは、彼女の綺麗な顔を初めて見た時の印象を回想しながらかふ言つた。「それだけ、さうでなくなつた譯なんだ、さうだ。」

八、爆發

翌朝は晴れ晴れした天氣で、寝てゐるには餘り勿體ない程であつたので、ジェームズ・ハートハウスも早くも起きて、化粧部屋の氣持のゝ張出し窓に腰かけて、彼の若い友人に、いつかの夜あれほど大した効果を見せた例の珍らしい煙草を吹かしてゐた。まともに目を浴びながら、身の周りに東洋風な煙管から芳香を漂はせて、夏の香の濃やかに、而も和んでゐる外氣の中に消えて行く、夢のやうな煙を燻らしつゝ、今彼は怠惰な賭博者とその儲けを勘定するやうに、自分の有利な點をいろいろと

數へ上げてゐた。彼はその間ちつとも退屈な思ひをせず、それに、一心になつてゐることが出来た。彼と彼女の間には夫を全然除外した一種の默契が出来上つた。彼と彼女の間に出来上つた默契には、彼女の夫に對するルイザの無關心と、夫婦の間には現在もまた何時いかなる時にも少しの温情もないといふことが絶對の條件になつてゐた。彼は彼女の心の、ごく微妙な隅々までも知つてゐるといふことを、言葉巧みに、しかしはつきりと彼女に信じさせた。彼は彼女の心の最も可憐な、感じ易い情緒にうつつたへて、十分彼女に接近した。彼はその感情をわが身にも纏はしめた。かふして彼女が自分自身に匿まつてゐた牆壁は見事に除けられた。何もかも極めて偶然で、また極めて満足であつた！とはゐへ、彼は今になつてさへ、心底から邪惡な目論見を抱いてゐたのではなかつた。彼と、彼

―五五二―

もその一人となつてゐるあの有閑階級の人間達とが本心からきつぱりと惡であつた方が、一般的に言つても個人的に言つても、彼が生きてゐた時代に取つて、無關心で、わざとらしく振舞ふよりは、どれ程よかつた分らないのである。所定めず漂ひ行く氷山こそ、何處かでの海流かに落ち合ふとき、よく船を難破させ勝ちである。惡魔が、吼り獅子のやうな姿で徘徊するとしたら、野蕃人か獵人でてもなければ、その姿に心を引かれる物は殆どあるまい。けれどもそれが當世の流行に従つて、めかし込んでゐる時、又ゝも悪いも十分嘗め飽きて、地獄の硫黄火にも、天國の祝福の火にも、鈍感になつてしまつたときには、それこゆ彼が赧束紐（政府）のお勤めに一心になつてゐようと、赧束焰を燃えたゝすのに一心になつてゐようと、彼は眞物のるべき惡魔となる。かふいふ譯で、ジエームズ・ハートハウスは窓に寄りかゝり、自墮落な様子で煙草を吹かし、現在自分が不圖足を踏み入れた路の上を行く一步々々を數へ上げてゐるのであつた。彼が行く道の目的地は、彼の眼前にかなりはつきりと見えてゐた。然し彼はそれに就いて別にどうといふ打算で自分の心を煩はさうとはしなかつた。例によつてなるやうになるだらうと思つて。

彼はその日一寸遠乗りをせねばならなかつたので―といふのは、一寸遠いところだが『ものにならさうな』政治上の會合であつて、グラッドグラインド黨のために一働きする好い機會が見えてゐたから―朝早く身装をとゝのへ、朝飯に下へ降りて行つた。彼は彼女が前夜あれから逆轉してゐはしないかと内々心配してゐた。だが大丈夫である。彼は丁度昨日彼女とわかれたときのまゝの位置に立つてゐることに氣がついた、其處にはまたも、彼に對して好意ある顔があつた。彼はその日一月中、さういふ氣疲れた會合にはいかにも相應しいだけ満足な（或は不満足な）氣持ですごして、六時頃、馬で歸つて來た。門番小屋と母家までの間は約半哩ばかりのだから道である。彼が昔ニキト家のものであつた平らな砂利道に、並足で馬をすゝめて來ると、不意に藪の間から恐ろしい勢で、バウンダアビイが飛び出したので、彼の馬は驚いて道の外へ逸れた。

「ハートハウスさん！」と、バウンダアビイは怒鳴つた。「あんた聞きましたか？」

「何をですね？」とハートハウスは馬を鎮めながらかふ言つたが、心の中ではバウンダアビイの態度を餘り面白く思つてゐない。

「それぢやまだお聞きではないんぢやな！」

「いやあなたの仰しやることだけは聞きましたよ。その外は何も聞きやしません。」

バウンダアビイは眞赧にぶんぶんして、馬の鼻頭の路の

―五五二―

真中に立ちほだかり、更に力をこめて、その爆裂弾を爆發させた。

「銀行へ盗賊が入りよつた！」

「何ですと？」

「昨夜、盗賊が入りよつた。そのやり口を見ると竝の奴でない。合鍵で盗みよつた。」

「澤山やられましたか？」

バウンダアビイは盗難といふことをこの上なく重大に見せかけようと思つてゐたので、ハートハウスに答へなければならぬことが、ひどく癢に觸つたらしかつた。「いや、そりや大した高ではない。だが、すんでのことで大金をやられたかも知れんかつた。」

「如何程です？」

「いやはや！金高としては——あなたがさう金高のことばかり聞かれるんぢや申さにやならんが、——やつと百五十ポンド位のところぢや。」とバウンダアビイはぢりぢりしながら言つた。「然し問題は金高ではない。盗賊が入つたといふ事實ぢや。銀行に盗賊が入つたといふ事實問題ぢや。それが重大な點ぢや。わしは實に驚いた。あなた程の方にそれが分らんとは。」

「バウンダアビイさん、」とジェームズは馬から降りて手綱を召使ひに渡しながらかつた。「それはよく分つて居ります。私だつてその光景を心の中に思ひ浮べて見た。けであなたのお氣に召すほど吃驚させられましたよ。ですが忌憚なく申すと、私はあなたにお祝ひを述べたい位です——心の底から述べたい位です——それだけの御損害ですんだといふことを。」

「いや、有難う。」とバウンダアビイはぶつきら棒な無愛想な風で答へた。「ぢやが、かふも言へませんですか、一萬ポンド盗まれたかも知れんかつた。」

「そりや盗まれたかも知れんかつたでせう。」

「盗まれたかも知れんかつたでせうですと——ちゑつ、でせうと仰しやるのは御勝手だ。本當ぢや！」とバウンダアビイは頭を縦横に振り廻して嚇かすやうに言つた。「一萬ポンドの倍もやられたかも知れんかつた、實際、盗賊が何かに驚かされんけりや、どんな事になりをつたか、全く知れたものでなかつたのです。」

ルイザがやがてやつて來た。スパージット夫人も、ビツアも。

「あなたはお知りなさらんでも、こゝにあるトム・グラッドグラインドの娘なぞは、どうなるか知れんかつたのを、よく知つとります。」と、バウンダアビイは鼻息荒く言つた。「いやあんだ、わしが話したときにや、これは鐵砲で射る抜かれでもしたやうに倒れさうぢやつた。これが、あんな様子

—五五三—

を見せたのは今迄に一度もないことぢや。場合が場合ぢやで、わしは腹の中でこれに感心しましたぢや。」

彼女はまだ氣絶しさうな蒼白い顔をしてゐた。ジェームズ・ハートハウスは彼女に自分の腕にお繼りなさいと言つた。そして極くそろそろと歩きながら、彼女に盗賊が入つた一部始終を問うた。

「いやわしは今それを、話さうとしつたのぢや。」とバウンダアビイは苛々しながらその腕をスパージット夫人に貸しながら言つた。「あなたが金高のことばかりやかましく言はんけりや、わしはとつくにその事を話しつた筈ぢやつた。あんたはこの貴婦人を御存じかな。(この方は立派な貴婦人ぢや)——スパージット夫人と仰しやる方ぢやが。」

「どうからお近づきを願つて曆ります——」

「そりや結構。それからこの若い人はビツアと云つて、多分同じ折にお知合ひになつとるでござい

ませうな？」ハートハウスがさうだと背いて見せると、ビツアはその額に指の甲をあてた。

「そりや結構ぢや、この人達は銀行に住つとります。この人達が銀行に住つとるのは、多分あなたも御存じぢやな。そりや結構ぢや。昨日の午後、店を閉める時間に何時もの通りすべて取片付けられましたのぢや。この男が其處の扉口の所で寝ることになつとる金庫室には、まあどれ程入れてあつたかそりやどうでもゐゝんですが。トムの部屋にある小さな金庫にや百五十ポンド一寸ありました。そりや小出しの時に使ふ金庫としてありますぢや。」

「百五十四ポンド七志一片でした。」とビツアが言った。

「何ぢやと！」とバウンダアビイは立ち止り、ぐるりと彼の方へ向き直つて應戦し出した。「餘計な口を出して話の邪魔をせんがゐゝ、お前が鱧腹つめた氣持よさに鼾聲を立てゝぐつたりと眠つとる間に盗まれたといふだけで十分ぢや、四ポンド七志一片などゝ口出しはせんで居れ。ゐゝか、わしはお前位ゐの年頃には鼾聲などは立てはせんかつたぞ、よいか。碌々喰ふものもないので鼾聲など出ん位ゐぢやつた。四ポンド七志一片などゝ寝言にも言はんかつた。知つてをつたとて決して言ひはせんかつた。」

ビツアは如何にもこそそした風でその額をまた指で弾めた、そしてバウンダアビイが今言つた克己の教訓に對する實例談に特別に感心したやうな、また愜氣たやうな様子を見せてゐた。

「百五十ポンド一寸ありましたでな、」とバウンダアビイは、また元の話に戻つた。「その金をトムは今申した金庫に収めましたのぢや——大して頑丈な金庫ぢやないですが、しかしそんなことはどうでもゐゝです。まあ、一切合財きちんと、取片付けられましたのぢやな、すると夜中の何時頃か

—五五四—

ともかくこの青年が鼾聲をかひとつた時分のことぢやが——スパージット夫人、あんたはこいつの鼾聲をお聞きなすつたと仰しやつとつたな？」

「はあ！」とスパージット夫人は答へて、「この人が慥かに鼾聲をかいてゐたのを聞いたとは申せませんのですから、さうはつきりと申し上げてはいかゞかと存じます。けれども冬の晩などに、この人が卓子にもたれて眠つてゐました時などは、わたしはこの人が、まるで息でもつまつたと申してよいやうな音をたてるのを、度々聞いたことがございます。そんな時にこの人は、丁度、折々和蘭時計が立てるあゝゐつた風の音を立てるのをよく聞いたものでございました。あゝえ。」とスパージット夫人は自分が十分誤りのない證言をたてるといふ氣高い感情に驅られて言つた。「わたしは何もこの人の行狀に對して、一寸でも疑ひを挾まうなどと思つてゐるものではないです。それどころか、わたしは何時もビツアさんが正しい主義をもつた青年だと固く信じて居ります。それにはわたしはいくらでも證人に立つつもりでございます。」

「よろしい！」とむつとしてバウンダアビイは言つた。「この青年が鼾聲をかひとつたか、息づまる音を立てとつたか、和蘭時計みたいな音を立てとつたか、或はまたその他の何なりと好きな音を立てとつたか知らんが——とも角ぐつすり寝込んでた間にぢや——前々から銀行に隠れてゐたものか、或は入口に附かぬやうに入り込んだものか、とも角或る奴等がどうにかして、トムの室の金庫に忍び寄つて、それをこじ開け、中味をそっくり攫つてしまつたのですぢや、その時何に驚いたか、そいつ等はそのまま逃げ居つたのです。正面の戸口から逃げ出して、その後を二重鍵で閉めてゆきをつたらしひ（あれは二重鍵前になつとつて、その鍵はスパージット夫人の枕の下に置いてある筈ぢやつたです。）今日の十二時頃、銀行に近い町通りでその合鍵の落ちとるのが見つかつたのです。ところがこのビツアといふ奴が、今朝起き出して事務所を開けて愈々事務を取るために、準備をするまでは、何の

騒ぎも起らんかつたわけです。その時こいつがトムの部屋の金庫を見ると、その扉が左右に開いて、錠はこじ開けてあり、金は行方知れずになつたわけです。」

「それはさうと、トム君は何處に居りますね？」とハートハウスは、あたりを見廻しながら、訊ねた。

「あれは警察の人達と一しよに、銀行に居残つとる筈です。」とバウンダアビイは言った。「わしがあなたの年頃の時分に、かふした盗賊どもに一遍見舞はれたかつたと思ひますよ。若し奴等がその仕事に一志半でも元手をかけやうものなら、きつと入費の丸損で身代限りをさせられたでせう」

—五五五—

からね。いや、わしはきつと奴等にさう言つてやりますて。」

「嫌疑者でも擧りましたか？」

「嫌疑者？ 大方誰かに嫌疑がかゝつとりませう。實際ぢや！」とバウンダアビイはスパージット夫人の腕を放して、熱くなつた頭を拭きながら、かふ言つた。「コークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイが、人に物を奪られて、誰にも嫌疑がかゝらんといふことがありますか。なあに、お拭き下さるんでゐますよ。」

ハートハウスは誰が嫌疑者だか言つてはくれまいかと訊ねた。

「さうぢやつた。」とバウンダアビイは立ち止ると、振り返つて一同を真正面に見つめながら言つた。

「皆に話しくとしよう。何處へでも行つてこんなこと喋つてもらつちや大いに困るんぢや、どんなところでゝも口外して貰ひたくないもんぢや。かふしてこの事件の悪黨どもを（たしかに一人二人でないにきまつとるんぢや）油断させとかにやらんでな。ぢやからくれぐれも口外せんやうにして貰はんとな。一寸、待つて貰はふ。」バウンダアビイは再びその頭を拭いた。「あんた方は一體どう思ひなさる？・・・」——と彼は此處で猛烈に爆発し出した——「この事件に或る職工が一人關係しとるとすると、ぢや。」

「まさか、」とハートハウスは懶さうにあつた。「いつか會つたブラックポットとかいふ人ではないでせうな？」

「ポットでない、プールとお言ひなさい。」とバウンダアビイは答へた。「えゝ、あいつがその男ですて。」

ルイザは信じ難いといふやうな驚きの聲を微に立てた。

「いやたしかにさうぢや、わしは知つとる！」と、その聲を直ぐ聞きとがめてバウンダアビイは言つた。「わしは知つとる、わしはそんなことにはよくなれとるんぢや、わしはそんなことはみんなやうく知つとる。奴等は世界中で一番油断のならん奴ぢや。あいつらはな、仲々お喋りにかけては上手なもんぢや。あいつ等はな、唯自分達の權利を説きたてゝばかり貰ひたがつとるんぢや、ぢやがわしはかふ言ひたひ、このわしに誰か不満をもつとる職工を見せてみたまへ、直ぐにわしはそいつがどんな悪事でもしかねんのを證據たてゝ見せてやる。それがどんな悪事ぢやらうとかまはんが。」

これがコークタウンの今一つの周知な假作話で——それが世間に弘まるまでには相當骨の折れたものだつたが——しかも實際にそれを信じてゐる者もあつた。

「ぢやがわしはかふした奴等のことはよく知つとる。」とバウンダアビイは言つた。「奴等の心中は、わしには本でも讀んどるやうに、よくく分つとる。スパージット夫人、わしは

—五五六—

あなたに證人になつて貰ひます。あいつが初めて家にやつて來をつた時に、わしが何と忠告してやつたか、あの時あいつは緊急な用だとなかして、どうしたら宗教を、叩きのめして、國教會を粉微塵にしてしまふことが出来るかといふことを尋ねにやつて來をつたのぢやが？（結婚は教會です、離婚は宗教の侮蔑）スパージット夫人、あなたは立派な家柄で、貴族と同じ位に貴い方ぢやが——わしがあいつにかふ言つてやつたかやらんかつたか、一つ證しを立て、貰ひたひのです、『お前はわしに眞理を匿さうとしても駄目ぢや、お前のやうな男はわしは一寸む好かんのぢや、お前はきつとひゝ目は見んぢやらう。』とな。」

「はい、そりやもう慥かなこと。」とスパージット夫人は答へた。「あなたは大變にお力をこめて、あの男にたゞ今のやうな御教訓をしておやりになりましたに相違ございませぬ。」

「奥さん、そいつはあの時あなたを驚かしたですな。」とバウンダアビイは言つた。「あの時あいつはあなたの感情をぞつとさせただけですな？」

「えゝ、それはあなた。」とスパージット夫人は弱々しく頭を振つて言つた。「そりやもう慥かにあの男には吃驚させられました。けれどわたしは自分がある事には臆病かも或は馬鹿かも——（かふ申す方がお宜しければ）——知れないなごゝ申すつもりは毛頭ございませぬ——唯、今度のやうな目に何時でもあひましたら、多少は臆病になつてゐないものでもございませぬけれど。」

バウンダアビイはハートハウスの顔をはち切れさうな誇りで見つめてゐたが、それはまるで、『この女はわしの使用人ぢやが慥かにあなたの一顧に値する人間ぢやごわせんかな』と言つてるやうであつた。やがて彼は又、長談議のあとをつゞけた。

「ハートハウスさん、あなたがあいつに會つたとき、わしがあいつに言つてやつたことほ御自分でよく覺えとりませうが。わしはあいつに一寸も遠慮會釋なく言つてやつたものぢや。わしはあゝいふ奴等には、決して甘い顔は見せん。あいつらをわしはよく知つとるんぢやから。そこぢや、あなた。あの後三日して、あいつは不意にゐなくなつたんぢや、何處へ行つちまつたものか、知つとるものは一人もない——丁度わしの小さい頃、わしの両親がゐなくなつたやうにぢや。ぢやが一寸違つとるのは、あいつはわしの母親に比べると、一段惡の奴ぢや、まあ言つてみればぢやが、あいつは逐電するまへに何をし出かし居つたか？あなたはどう思ひなされる。」——バウンダアビイは帽子を手に持つて、その長廣舌の一節毎に、帽子の頂邊を扁鼓のやうにぼんぼんと叩くのであつた——「あいつは——每晚の

—五五七—

やうに——銀行を窺つとつたといふぢやないですか？——あの邊に忍んどつたといふぢやないですか——しかも日が暮れてからぢや？——それで遂にはスパージット夫人も氣がついたわけぢや——人眼を忍んどの以上は、きつとよからぬことを企らんどつたに違ひない譯ぢやとな——スパージット夫人はそれをビツアに注意する、それで二人であいつに眼をつけることになつたのです。——それが今日、調べてみるとぢや——あいつなら近所の人達の眼にもとまつとつたといふわけぢや。」バウンダアビイはいよいよ、雄辯の最高頂に達したので、東洋風舞蹈の踊り手みたいに、その扁鼓を頭上にのせた。

「うむ、疑はしひ。」ジェームズ・ハートハウスは言つた。

「慥かに。」

「わしはさう思ひますぢや、あなた。」とバウンダアビイは言つて、挑むやうに肯いて見せた。

「わしはさう思ふのぢや。しかしそれには、もつと聯累者があるんぢや、老婆が一人ゐる。かふい

ふことは、得て悪事が行はれんうちは兎角人の耳に入らんものぢやて。馬が盗まれてみて、初めて厩の戸口に手拔かりのあるのがいろいろと分つて来るやうなもんぢや。そんな譯で老婆が一人今になつて出て来たのです。魔法の箒の柄に跨つて折々市中へ飛んで来るらしい一人の老婆なんぢやがな。その老婆は例の男が仕事をする前の日は終日或るところを覗つとつたが、丁度あなたがあの男に會はれた晩に、あいつと一緒にこつそり出掛けてゐつて、何か打ち合せをしたものぢや。——大方見張りが濟んでから老婆にその報知をさせたんぢやらう、くそ婆め、地獄にでも落ちこんでしまへ。」

「あの晩そんな女があの人の部屋にゐて、人に見られないやうに引つこんでゐたつけ。」とルイザはかふ考へてゐた。

「もう奴等のことはこれでわし等には分つた譯ぢやが、またそのほかいろいろなこともあるんです。」と幾度かまだ意味ありげに點頭ゐて、バウンダアビイは言った。「ぢやが、今のところはわしのゐつた處で十分ぢや。どうか必ず内密にして、こんなことは誰にも言はんで欲しひ。相當時がかゝるか知れんが、わし等はきつと奴等を捉まへてみせる。奴等を暫くなすまゝにしとくのは一種の策略ぢやて、何もそれに兎や角言ふことはありません。」

「無論、そいつらは制札に出てゐるやうに、嚴罰に處せられませうな。」とジェームズ・ハートハウスは答へた。「さういふ奴等は當然のことです。銀行を覗ふ奴などは十分見せしめを加へてやらなければなりません。でなければ、私達は皆、銀行に忍び込むかも知れません。」彼は丁寧なルイザの手から日傘をとつて、それを彼女にさしてやつた。日はその邊に照つてゐなかつたが、彼女は傘の蔭を拾つて行

—五五八—

つた。

「ルウ・バウンダアビイ、當分の間。」と彼女の夫は言った。「こゝにゐられるスパージット夫人のお世話をして貰はにやならん。スパージット夫人は今度の出來事で、大分神經がお疲れのやうぢやから。こゝに一兩日滞在して頂かうと思つとるんぢや。ぢやからよくお待遇を上げておくれ。」

「ほんたうに有難うございます。あなた。」とこの抜け口の無い貴婦人は言った。「どうかもうお構ひ下さいませ、わたしなぞは何でも結構でございますから。」

直ぐに分つたことだが、スパージット夫人がこの家庭にとつて極めて扱ひにくい點があつたとすれば、それは彼女が極端に、自身のことは度外視して、たゞ他人のことばかりに氣を配つてゐて、卻つてわづらはしひ氣持を起させる程であるといふ一事であつた。先づ彼女の部屋へ通されると、彼女はむやみにその部屋の居心地よさを勿體ながつて、はては洗濯部屋の火熨斗臺でその夜を過した方が氣安いなどゝ言ひ出した。成る程それは、パウラア家やスカツチャアズ家の者は豪奢な生活振りをしつてゐたのだが、「しかし、わたしとしては」とスパージット夫人はいかにも氣高く濫雅を極めた風をしてかふいふのが癖であつた。殊に誰かこの家の召使ひが其處にゐたときには——「昔の自身と今の自身とは全く違ふといふことを忘れないのが自分の義務だと存じてゐるのでございますから。本當に。」と彼女はいふのであつた。「若しわたしが夫のスパージットがパウラア家の者であつたとか、わたしがスカツチャアズ家の縁者だとかいふことをすつかり搔き消すことが出來ますなら、でなければさうした事實を全く揉み潰して、自分を普通の家柄の、普通の社會の人間にしてしまふことが出來ますなら、喜んでさうしたひと願つてはゐるのでございますけれど、只今の境遇では、さうするのが當然だと考へねばならないのでございますから。」かふした世にかくれたいといふ同じ心から、彼女は晚餐のときに御馳走を盛つた皿にも飲み物にも手を觸れようとはしないので、遂にはバウンダアビイ

が見かねて、禮式張つて一つ召し上つてと言ふのであつた。すると彼女は、「本當にあなたは御深切でございます。」と言つた。そして彼女は自分から形式ばつて皆に言ひふらしたその決心から暫く離れて、「マットン（羊肉）を少々。」と言ひ出すのであつた。彼女は喰鹽を取つて貰ふにさへ極めて慇懃に禮を言つた。そしてバウンダアビイが彼女の神經のことであつた言葉を、何處までも十分に證明してやらねばならぬと可愛らしくも感じたやうに、折々彼女はその椅子に身を引いて坐つたまゝ、聲もたえずに泣くのであつた。さういふときには、水晶の耳飾りほど大粒な涙が彼女の羅馬型の鼻筋を流れるのが見られたであらう。（いや）

—五五〇—

寧ろ見られたに違ひなかつた。何故ならその涙は皆に見られたがつてゐたから。然し、始終スパージット夫人の特徴となつてゐたものは、バウンダアビイを隣れまふと決めたあの心をひるがへさない點であつた。折々彼女は彼を見ながら、『あゝ、哀れなるヨリックよ』（「ハムレット」第五幕五場の句）とでもいふやうに思はず知らず感に打たれてその頭を振るのであつた。かふした感慨に打ち沈んだ風を見せたあとで、彼女は強ひて嬉しさうな色を顔面にたゞやらせて、發作的に快闊になり、「あなたはまだお元氣なところがありませんね、それを拜見して本當に有難いことに思ひます。」といふのであつた。そしてバウンダアビイがこんな不幸にあつても、かうして耐へ忍んでゐるのを、祝福すべき天の賜物か何ぞのやうに賞讃してゐるらしく見えるのであつた。彼女は一つの持前の癖のため度々お詫びをせねばならなかつたが、でもどうしてもそれを直すことが困難であつた。彼女はバウンダアビイ夫人を『グラドグラインドのお嬢さま』と呼ぶ奇妙な癖があつて、その晩のうちに少くとも六十年代か八十度位それをくり返すのである。この誤りを繰り返す度に、スパージット夫人は如何にも内氣らしく思ひ感つた態であつた。しかし、と彼女はかふ言ひ譁した。彼女をグラッドグラインドのお嬢さまと呼ぶのは、少しも可笑しく思はれないのであるが、反對に小さい時分からよく知つてゐたお嬢さまが、本當にバウンダアビイ夫人となつたとは、到底彼女には思ひ込むことが出来ないのでもあつたと。それにこのあり得べからざる誤認が尙更不思議で仕方がない點は、彼女がそれを考へれば考へる程、ますますそんな事實があり得さうにもないやうに見えて來ることであつた。「その違ひ方と申しましたら。」と彼女は言つた。「こんなにはつきりして居りますのにございますよ。」

晚餐後、客間でバウンダアビイは次難事件の審問を開始して、證人を取り調べ、證據書類を作成し、嫌疑者を有罪なりと認めて、彼等を法律上の極端な重刑に宣告した。これをなし終へると、ピツアは郵便列車で歸れといふトムへの傳言をもつて急いで町へ出發した。

蠟燭の火が持つて來られたときに、スパージット夫人は「お力を落さないで下さいまし、あなた、さあ何時もの通り、どうか陽氣になさつて下さいまし。」とさゝやくやうに言つた。この慰めの言葉を受けると、バウンダアビイはどう間違つたものか、一種妙に感傷的にさせられて、巨大な海獣みたいになふと深く溜息をもらした。「そんな御様子をなさつては、わたしはもう堪りません。」とスパージット夫人は言つた。「さあ、わたしがお邸に御厄介になつて居りましたところよく遊ばしましたやうに、雙六でもおやりなさ。」

—五六〇—

れたらいかゞでございます。」

「いや奥さん、わしはあの時以來といふもの。」とバウンダアビイは言つた。「雙六は一度もしな

つたんですよ。」

「左様でございませうとも。」とスパージット夫人はなだめすかすやうにみつた。「それはわたしもよく存じて居ります。グラッドグラインドのお嬢さまは、勝負事をお好みでないのをわたしよく憶えて居ります。あなたが対手になつて下さいますなら、本當にわたしは有難いと存じますけれど。」

そこで彼等二人は庭の方に開いてゐる窓際で雙六をやり出した。晴れた夜で、月はなかつたが、蒸著く、花の香がたゞやつてゐた。

ルイザとハートハウスとは庭園に散歩に出た。彼等の話し聲は何を語り合つてゐるのかよく分らないが、あたりが静寂なので開えて來るのであつた。スパージット夫人は雙六盤に向つて、腰を掛けてゐながら、紹えずその眼を、外の闇を覗ふやうに、ぢつと見張つてゐた。

「どうなさつたかな？奥さん。」とバウンダアビイは言つた。「あなたは野原の燈火でも御覽なさつとるんですかね。えゝ？」

「ゐゝえ。」とスパージット夫人は答へた。「夜露のことを考へてみましたものですから。」

「夜露といつて、夜露がどうかしましたかな、奥さん？」とバウンダアビイは言つた。

「ゐゝえ、わたしの事では無いのでございませうよ。」とスパージット夫人は答へた。「グラッドグラインドのお嬢さまがお感冒を召しはせぬかと心配なものですから。」

「あれは一度も感冒を引いたことなぞないんです。」とバウンダアビイは言つた。

「本當でございますか？」とスパージット夫人は言つた。そして空咳を一つしてまぎらした。

一同寢間に入る時間が近づくと、バウンダアビイはコップに一杯水を飲んだ。

「おあ、あなたは。」とスパージット夫人が言つた。「檸檬や肉豆蔻をおいれなすつた温めシエリ酒はお上り遊ばさないのでもございませうか。」

「なあに、わたしは今ではそんなものをやる癖をやめてしまつとるんですからな、奥さん。」とバウンダアビイは言つた。

「それはまた重々お氣の毒でございませうこと」とスパージット夫人は答へた。「今に昔の結構なお癖がみんなおなくなりでございませう。さあ元氣におなり遊ばして！グラッドグラインドのお嬢さまのお許しさへへございませうと、昔わたしが度々いたしましたやうに、直ぐにこさへて差し上げますでございませうが。」

—五六—

グラッドグラインドの令嬢は直ぐにスパージット夫人に何事もお好きのやうにと許したので、この思ひやりの深い老貴婦人は彼女のみつた飲物をこさへて、バウンダアビイに渡した。

「大へんよろしうございませうよ、それを召し上ると、あなたのお心が、ほつと温まるのでございませうから。これこそあなたになくてならない、是非召し上らなくてはならないものでございませう。」そしてバウンダアビイが、「奥さん、あなたの御健康を祝しますぞ！」と言つたとき、彼女はひどく感動して、「有難うございませう、御同様にあなたも御壯健で、お合せでございませうやうに。」と答へた。最後に彼女はひどく哀れげな聲で彼にお休み遊ばせと言つたが、バウンダアビイは何がなしに優しい或るものに出會つたやうな一種涙もろい氣持になつて寢に就いた。勿論彼にはその優しいものが一體なんだか一生かゝつたところで口に語ることは出来なかつたらう。

ルイザは着物を脱いで横になつてから可成り時間がたつても、尙まじまじとして、弟の歸るのを待ちかねてゐた。とても夜中の一時過ぎでなければ歸りはしないのを、彼女はよく知つてゐた。だが、彼女の思ひ亂れた胸の中を、尙更ら搔き立てはしても、決して宥め靜めることはなかつた田舎の靜寂

のうちに、時の歩みは遅々たるものであつた。やがて暗闇と静寂とが數時間のあひだ互ひに深くなりまきつたかと思はれたころ、彼女は門の方に鈴の音を聞きつけた。彼女はそれが夜の明けるまで鳴りつづけてあてくれるなら、どんなに嬉しいか知れないといふやうな感じがした。だがその鈴の音は止んで、その最後の餘韻が、あたりの室氣中にだんだん微かに、だんだん遠くへ擴がつて行くと又すべてが寂然としてしまつた。彼女は、彼女の勘定では更に十五分ばかり待つてゐた。それから起き上ると、ゆるやかな着物を纏つて、部屋から眞暗な中へ出て階段を上つて弟の部屋へ行つた。彼の部屋の扉は閉つてゐたので、彼女はそれを靜かに開けて、彼の寢床に聲音も立てずに近寄つた。彼女は寢臺の傍にひざまづき、彼の頭に腕を廻して、その顔を自分の顔に引き寄せた。彼女は彼がたゞ寢たふりをしてゐるのをよく知つてはゐたが、彼に何事も言はなかつた。やがて彼は今しがた眼をさまされでもしたやうに、驚いた風で誰だ、何の用だと訪ねた。

「トム、あなたは何かわたしに話をするやうなことはないの？若しあなたが今までにわたしを愛してゐてくれたなら、またほかの誰にでも匿してゐるやうなことがあつたなら、どうかわたしに聞かしておくれ。」

「ルウ姉さん、あなたの仰しやることは僕にはまるで分らないよ。あなたは夢でも見てゐたんぢやないの。」

—五六二—

「ねえトム。」—かふ言つて彼女は、頭を彼の枕に凭せると、その髪の毛か彼の上に振りかゝつて、まるで彼女が彼を他のすべての人から匿したいとでも云ふやうに見えた——「ほんとにあなたは、わたしに言はなきやならないことはないの？思ひ切つて話す氣になつたら、話せるやうなことはないの？あなたがどんな事を言つたからつて、わたしは決してあなたに對する氣持は變りはしないんだからね。さあ、トム、姉さんに本當のことを話しておくれ。」

「僕には姉さんの言ふ事がまるで分らないよ。ルウ姉さん」

「ねえトム、あなたがかふして此處にたつた一人で淋しく夜寢てゐるやうに、何時かは何處かでこんなに寝るやうになるのだよ、その時にはわたしは生きてゐたところで、もうあなたの傍などにゐやしなひのだよ。わたしが今鞆も穿かず、着物も着ずに、暗闇に姿をかくしてかうしてあなたの傍にゐるやうに、朽ちて行く體を横たへて、長い長い夜の間寢てゐなければならぬのだよ。さうしてお終ひには土になつてしまふのだよ。ね、トム、その時のことを思つて、今のうちにわたしに本當のことを話しておくれ！」

「何のことなの、姉さん、そんなに知りたいといふのは？」

「心配しないでゐよ。」—彼女は愛の力に動かされて彼を子供か何かのやうに胸に抱きしめた。——「わたしは決してあなたを責めはしないし、それどころか何處までもあなたに同情して、本當に盡して上げるつもりなんだからね。またどんな事があつても、わたしはあなたを助けて上げるつもりなんだから。さ、トム、あなたはわたしに話さなければならぬことはないの？さ、極く小聲で一寸言つて御覽。『ある』とだけでも言つておくれ、それでわたしにはあなたの心の内がすっかり分るのだから！」彼女は耳を彼の唇のところを持つて行つた。だが彼は固く沈黙を守つたまゝだつた。「トム、何も言つてくれないの？」

「僕は姉さんの言ふことが何だかちつとも分らないつてのに。どうして『ある』の『ない』のなんてゐへるの。ルウ姉さん、僕は考へたんだが、姉さんは勇氣もあるし、深切だし、僕なんかの姉さんには勿體なさすぎるんだ。だが僕には別にいふことはないよ。お休みよ、お休みよ、姉さん。」

「お前はくたびれてゐるのね。」と彼女はすぐ、何時もの口調に返つてかふ囁いた。

「あゝ、すっかりくたびれちまつたんだ。」

「今日は随分と駈け廻りたり、吃驚した事があつたんだからね。何か新しい手がかりでも見付かつたの？」

「姉さんが聞いてゐる位ものことだよ。あの人の口から。」

「トム、あなたは、わたしとあなたが、あの人達を訪ねたことや、あの三人の人と會つたことなどを誰かに話したことがあるの？」

—五六三—

「あゝえ。姉さんは彼處へ一緒に来てくれつて僕を誘つたときに、あれほど内證にして置いてと言つたんぢやないの？」

「えゝ、でもあの時はどんなことになるか分らなかつたのでね。」

「僕だつて知るもんか。知つてるわけがないぢやないか。」

彼は早急に彼女にかふ言ひ返した。

「こんなことになつてしまつたからは、何時かあそこを訪ねたことを話したものでらうかしら？」
姉は弟の寢床の傍に立つたまゝ言つた——「言つてしまつたものかしら？言はなければならぬかしら。」

「何を言ふの、ルウ姉さん。」と彼女の弟は答へた。「姉さんは今まで僕に相談なんか持ちかけたことはなかつたんぢやないか。好きなやうにしたらゝんだ。姉さんがそれを内證にして置くのなら、僕だつて内證にして置くよ。姉さんがそれをあつてしまやア、その話はそれでお終ひさ。」

暗かつたのでお互ひ相手の顔が見えなかつた。だが二人ともひどく氣を配つて、口をきく前に頻りに考へてゐた。

「トム、あなたはわたしがお金をやつたあの人が今度の犯罪にほんとに關係してると信じてゐるの？」

「僕にや分らない。何故あの男がそんなことに關係しなげやならなかつたのか、ちつとも分らないよ。」

「あの人はわたしの眼には正直らしい人に見えたけど。」

「ところが姉さんには、外の人が不正直に見えて、その實さうぢやないかも分らんよ。」

沈黙が續いた。何故なら彼は逡巡して口を噤んだから。

「つまり」とトムは恰も吃と決心したやうな面持ちで言葉をついだ。「姉さんがさう言ふから言ふけれど、僕はあまりあの男の肩を持つわけにはいかなかつたから、外へ聯れ出して、靜かにいつてやつたんだ。僕の考へぢや、お前さんは相當に暮らしてゐるんだから、僕の姉さんから貰つたものは、受けるには及ばないと自分でも思つてゐるだらう、それだけ僕はお前さんにそれを大いに善用してくれることを願ひするのだつてね。姉さんは僕があ男を聯れだしたかどうか覺えてゐるだらう。僕はあの男の悪口をいつてゐるんぢやないよ。あれが可成りゝ奴かも知れない、といふことに反對する事實も無いんだからね。本當にさうであつてくれるとゝいふけれどね。」

「あの人はお前がさう言つたので怒りはしなかつたの？」

「あゝえ、あの男は少しも腹なぞ立てずに、聞いてゐたよ。なかなか丁寧だつたよ。何處にゐるの、ルウ姉さん？」かふ言つて彼は寢臺から起き直つて、彼女に接吻した。「ではお休み、お休み！」

—五六四—

「ではあなたはわたしに何も話すことはないんだね？」

「ないよ、ある譯がないぢやないか？姉さんだつて何もわたしに嘘をついてもらひたくはないだらう。」

「あなたの一生のすべての夜のうちでも今夜だけはそんなことをして貰ひたくないの。もつと仕合せな夜が澤山あることをわたしは祈つてあげるけれどね。」

「ありがたう、ルウ姉さん。僕はひどくくたびれてゐるんで、もう寝つくから何も言はないかも知れないよ、お休み、お休みなさい。」

彼女を再び接吻すると、彼はくると體をかへして、夜具を頭から引つかぶり、横になつたまゝ身動きもしなかつた。まるで今しがた姉が彼に祈つた時が來たかのやうに。彼女は暫く彼の寢床の傍に立つてゐたが、やがて靜かに離れた。彼女は戸口で立ち止つた、そしてそれを開けた時にふり返つて、呼びはしなかつたかと彼にたづねた。だが彼はちつと寝てゐたので、彼女はそつと戸を閉めて自分の部屋に戻つて行つた。するとこのやくざ青年は用心深く眼をあげて、姉の立ち去つたのを見ると、寢床から這ひ出して戸に錠を下した、そして又もや枕の上にと頭を落すと、髪をかきむしつて、泣き呻き、怨みながらも、姉を愛し、われとわが身をひどく憎んで、だが一寸も後悔の言葉はもらさずに當り散らしては又、同じく憎まげに、たゞ徒らに世のありとあらゆるものに當り散らしてゐた。

九、最後の言葉

スパージット夫人は、バウンダアビイの別荘で神経の疲れを癒すために休んでゐたが、夜も晝も、そのコロオレーナス型の眉毛の下から鋭く見張つてゐたので、物腰に穩やかなところがなかつたなら、彼女の兩眼は、そばだてる岩石の荒磯に取圍まれた一對の燈臺のやうに、あらゆる用心深い船乗り達へ、あの絶壁の巨巖——彼女の羅馬型の鼻——と、その附近の暗礁區域には近寄るなど警告したことであらふ。夜、寢室に引きさがるのが、決して形式のためでないとはなかなか信じられなかつた程、彼女の古典的な兩眼は屹と大きく見開いてゐたし、又それほど彼女の嚴めしむ鼻はどんな睡魔にも屈服しさうに見えなかつたのである。けれども彼女が坐つて（その不愉快なことはいふまじ）、薄氣味惡る手袋（それは蠅帳のやうな薄地のもので出來てゐた）を撫で廻してゐるときの様子や、木綿の足掛けを笠として片足をその中に突つ込んだまゝ何處とも知れぬ運命の土地へよたよたと椅子にまたがつて行くときの様子は、實に穩和そのものとひつてよかつたから、それを見た人は大概、彼女が元來鳩であつたのに、何か自然の手違ひから、この地上で鉤形の嘴の鳥類の一羽に身を現はした

—五六五—

と思はずにゐられなかつたであらふ。彼女は家のそこをうろつき廻る點にかけては極めて不思議な女であつた。どうして彼女がそれぞれの階から階へ傳はり歩くものか、それは解き難い神祕であつた。これほど禮儀正しい、これほど高貴な身分の貴婦人が、もとより手摺を越えて飛び降りるとか、それを迂り下りるとか疑はれるものではなかつた、とはゐへ、彼女の人間業とも思はれない、自由自在の運行振りには、さういふ途方もない考へも起させたのである。今一つスパージット夫人に就いて注意すべき點は、彼女が決して慌てぬことであつた。彼女は屋根から廣間へ無上の速力で、矢の如くやつて來たとしても、そこに姿を現はした刹那にはその息使ひといひ、威嚴といひ、寸分亂れてはゐ

ないやうに見えた。彼女が非常な速さで急いで行くのはまた誰も見たことがなかった。彼女はハートハウスに大變しとやかな風をして見せた。そしてこゝへ来てから間もなく、さもうれしやうに彼と會話を交へた。彼女は或る朝、喰事前庭に彼と會ふと威嚴を正してお辭儀した。

「まるで昨日のやうでございますよ。」とスパージット夫人は言った。「あなたがバウンダアビイさんのお所をお訊ねにお出で下さったとき、銀行でお目にかゝりましたのは。」

「あの時のことは、私にとつて何時までたつても忘れることが出来ません。」とハートハウスは頭をスパージット夫人の方へ傾けて、極めて無造作な風でかふ言つた。

「わたし共はほんとに不思議な世間に住んでるのでございますね。」とスパージット夫人が言つた。

「私共の思ふところがびつたり一致した點は、今でも内々嬉しく思つてゐるんですが、あの時、私が一言申し上げたのは、結局、それと同じ意味なのでしたな、唯それほど言葉には、警句的な鋭さはなかつたですが。」

「本當に不思議な世間でございますのね。」とスパージット夫人は、その黒い眉を一度下げて彼のお世辭に對する返禮をしてから、かふ話をすゝめたが、その聲が氣持のよい調子で優しくかつたに似ず、その眉の興へる表情は決してそんなに優しくなかつた。「今でこそかうして御懇意に願つて居りますけれど、一寸前までわたし達はめいめい全く赧の他人だつたのでございますから。わたしはまだ覺えてをりますよ。あの時あなたは本當にグラッドグラインドのお嬢様が少し怖いやうに思はれるとまで仰しやりましたね。」

「いや、奥さんは私の申し上げた話らんこと迄よく御記憶なさるので、卻つて恐縮致します。奥山さんが御深切にお教へ下さつたので、私は自分の臆病な考へを捨てるにどんなに力を得たか知れませんが、申すまでもないですが、奥さんのお言葉に十分違ひありませんでした。スパージット夫人のお持ちなさる——すべて適確を必要とすることなら何で

—五六六—

も應ずる才能はですな——お心の強さと——そのお家柄の力とに結びついて、すな——日頃から大變に發達してゐらつしやるので、こんな疑問を持つ餘地などございませぬのですな。」彼はこのお世辭を長々と述べ立てるのに、危く眠つて倒れてしまひさうな氣がした。それを言つてしまふまでには時間がかゝつた、言つてゐるうちに、彼の心は度々遠くへ彷徨ひ出したからだつた。

「いかゞでございます、グラッドグラインドのお嬢様は——まあ、わたしは本當にバウンダアビイの奥様とどうしても口に出ないのでございますよ、何といふ馬鹿でございますせうね、——わたしの申し上げたやうにお若うございましたでせう？」とスパージット夫人は猫撫で聲で言つた。

「こちらの奥様は何處からどこまであなたの仰しやつたゝとほりでした。」とハートハウスは言つた、「十分違ひませぬでしたよ。」

「大變に人好きのするお方でございますのね」とスパージット夫人はその手袋を靜かに互ひ違ひに廻しながら言つた。

「大變に人好きのする方ですな。」

「グラッドグラインドのお嬢様は何となく元氣がないと人様には考へられてゐるやうでございますけれど。」とスパージット夫人は言つた。「何ですかこの頃は、目立つやうに元氣ついておいでになつたやうでございますのね。おや、まあバウンダアビイさんはこちらにおいでになりましたか！」とスパージット夫人は何度も何度もその頭を首肯させながらかふ叫んだ、まるで彼女が今まで彼を描いて他の何人のことを語つたり考へたりしてゐなかつたやうに。「今朝はお氣分はいかゞでございます

か？どうぞお元気のところをお見せなすつて下さいまし。」

さて、この何時もながら彼の不幸を慰め、その重荷を軽めてくれる言葉が、この頃では効果を見せ始めたものか、バウンダアビイはスパージット夫人には何時もより一としほ優しくなつてゐたが、彼の妻を始め多くの人に對しては氣むづかしくなつてゐたのであつた。そこで、夫人が強ひて氣輕の風をして、「お喰事を召し上げるのでございませうね。でも直きにグラッドグラインドのお嬢さまがお出で遊ばして、喰卓のお世話をなさいませうから。」と言ふと、バウンダアビイはかふ答へた。「いや家内の手を待つとするのでは、奥さん、あんたも御存知の通り、わしは何時まで待たされるやら底が知れん。ぢやから、一つあんたにお茶の世話をして戴きたいのぢやが。」スパージット夫人は喜んで承諾して、昔のやうに喰卓の世話を引き受けたのである、そのことがまたこのお歴々の婦人をひどく感傷的にした。彼女はその上に極めてつゝまじやかであつたので、ルイザが姿を現はすと席を立ち上りてかふ言ひ譯をした。

—五六七—

昔は度々バウンダアビイさまの朝食のお世話を申し上げたものだが、グラッドグラインド夫人が——まあ、失禮を……バウンダアビイのお嬢様と申上げるつもりでしたのに、と彼女は詫びたが——お出でになつた以上、たゞ今では決して自分はこの席に着いてゐたゐるなどゝ毛頭思つてゐない。そして呼名を間違つたことに就いては、「是非お許しなすつて下さいまし、本當にまだ口慣れませんので、でも追々それにも慣れて参りませう。かふしてお世話になつてゐるうちには」と言つた。「それといふのも（と彼女は皮肉にやり出した。）グラッドグラインドのお嬢様のお出ましが少し遅れましたので、バウンダアビイさんは一刻でも大切なお體であらつしやありますから、それにわたしはバウンダアビイさんが、時間通り是非ともお喰事をなさらねばならないのを昔からよう存じて居りますので、御主人の仰しやるまゝにいつい自分が勝手に致しましたやうな譯でございませう、長い間御主人様の仰しやることとはわたしには捷のやうになつてゐたのでございませうから。」

「あゝ、いやいやーもうおやめなさい、奥さん。」とバウンダアビイは言つた。「もうおやめなさい！ 家内は卻つて手が省けるので大喜びに違ひないのぢやから。」

「そんな事を仰しやるものではござりません」とスパージット夫人は手きびしい位の調子で答へた。「さう仰しやつてはバウンダアビイ夫人に大變おむごいと申すものでございませう。それにおむごいことを仰しやるのはあなたらしくもないぢやありませんか。」

「奥さん、あなたはちつとも氣にかけることはないんぢや。——ルウ、お前は別に何とも思ひはせんぢやらう？」とバウンダアビイは妻に向つてさう腹立たしげに言つた。

「勿論ですわ。そんなことは何でもないことぢやありませんか、何でわたしにどうかういふところ

がございませう。」

「何んで誰かにどうかういふところがありませうですと、スパージット夫人。」とバウンダアビイは、さも侮蔑を感じたやうに脹れ上りながら言つた。「奥さん、あなたは餘りそんなことを重くを考へ過ぎますぢや。いや、あなたのお持ちなさるお考へも此處ではまるで臺なしぢや。奥さん、あんたは少し舊弊すぎますぞ。あんたはトム・グラッドグラインドの子供達よりも、ちと時代が遅れてゐますのぢや。」

「あなたはどうかかなすつたのですか？」とルイザは冷やかに驚いた風で訊ねた。「何でお腹立ちなされるのでござりまするか？」

「腹立ちぢやと？」とバウンダアビイは鸚鵡返しに返事した。「わしが人から馬鹿にされたときに、

それを二々と指し示して、相手に改めさせるやうなことをしてはいかんと思つとるのか？ わしは真正直な人間ぢや。慥かにさう

—五六八—

ぢや。わしは横道を探し廻るやうな眞似は決してせん。」

「わたし何方だつてあなたのことを、こんなにひどい含羞みやだとか、こんなに神経過敏なお方だと、お考へになつたことはなからうと存じますよ。」とルイザは彼に平然と答へた。「わたしは子供の時も、大人になつてからもあなたにそんなことで兎や角申した事はございません。わたしにはまるで分りません。どうしろと仰しやるんですか。」

「どうしろぢやと？」とバウンダアビイはそれに應じた。「いやどうもせん。ルウ・バウンダアビイ、さうしろと言はんけりや、お前にはわしが、このコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイが、さうして貰ひたがつとるのが全く分らんといふのか？」

彼が卓を叩いて、茶道具をがちやり鳴らしたときに、彼女は誇りの色を顔に湛へながら、彼をみつめてゐた。ハートハウスは、これは新しい變化だと思つた。「今日は朝から大變御機嫌が悪うございますこと。」とルイザが言つた。「もう文句を仰しやるのは止めて下さいまし。わたしはあなたの仰しやることなど少しも聞きたくないのでございますから。どうなつたつて構やしませんわ！」

この件については最早や一言も語られなかつた。ハートハウスは直ぐに別の話題をいろいろと、他愛もなく面白さうに喋り出した。だが、この日からバウンダアビイに對するスパージット夫人の魅力のために、ますます、ルイザとジェームズ・ハートハウスとが結合した。そして二人の間で、彼女の夫に對する危嶮な疎隔や祕密や反感やをますます強めた。ルイザはその中へ次第々に實に微妙に落ち込んだ、彼女が氣がついて抜け出さうとしても、さう出来ない位になつてしまつた。しかし、彼女が果して抜け出さうとしたかどうかは、彼女の閉ぢられた心の底にひそんでゐることであつた。

スパージット夫人はこの特殊の出來事に非常に心を打たれたので、喰事後バウンダアビイに帽子をとつてやり、彼と二人だけで廣間に來ると、彼の手にしとやかな接吻をして、「お情け深い御恩人さま！」と呟くやうに言つたまゝ、悲しみに耐へかねて引き下つた。けれど、信じ難い事實と思はれるか知れないが、物語の認めたところでは、バウンダアビイが、帽子をかぶつてこの家を出てから五分の後、かのスカッチャアズ家の一族で、パウラア家の一名士と縁組した彼女は、その右の手を彼の肖像畫にふりたてゝ、その藝術品に輕蔑した白齒を見せて、「お馬鹿さんや、あゝ氣味だ、わたしは胸がすふとしたよ！」と言つてゐた。

バウンダアビイがまだ餘り遠くも行かぬ中に、ビツアの姿が見えた。ビツアは、ストーン・ロッヂの特使となつて、昔の廢坑や今尙ほ採掘してゐる炭坑が一面に見える荒

—五五〇—

蕪地を貫ひた長い幾つもの鐵橋を越えて、喚きつゝ我鳴りたてつゝ走つて來る下り列車でやつて來たのである。それはグラッドグラインド夫人が危篤だといふことをルイザに知らせる急報であつた。彼女は娘の知つてゐる限りでは、一度も體の具合のよかつたことがなかつた。だがこの二三日來見る見る悪くなり、そして昨夜は夜通し今か今かの情態をつゞけて、生きる力が、その魂の今にも離れんばかりの情態なのを、辛うじて保つてゐるだけなので、殆ど死んだも同じだといふのであつた。

ルイザはコークタウンへ向つて昔の廢坑や今尙ほ採掘してゐる炭坑を打ち越して轟々と走つて行つ

た。お伴に立つたのは、世にも生つ白い使ひ番のビツアであつたが、彼はグラッドグラインド夫人が死の門をたゞくときに、その門を開けさせるためにはいかにも適當な蒼白い僕と思はれたであらう。レイザは、コークタウンの煙を濛々と吐き出してゐる町中へ捲き込まれてしまつた。彼女は使ひ番を彼自身の用先きに行かせたあとで、彼女の昔の住居へ馬車を走らせた。彼女は結婚後は滅多に家へは歸らなかつた。父は大概倫敦で議會の『燃燼』を掻き廻し掻き廻してゐて（その灰の中から多くの貴重な論文を掘り出すといふのもなく）、更に國家の『塵捨場』へ出てはまだそれに一生懸命になつてゐたのであつた。ソーフアにもたれて横になつてゐる勝ちの母は、たまに娘の訪問を受けると、まるで邪魔ものあつかひにするばかりであつた。又、その若い人々に對しては、レイザの方ですつかり氣が合はないやうに感じてゐた。シッシイに對しては、この浮浪人の娘が眼をあげてバウンダアビイの未來の妻たるべき彼女の顔をちつと見たあの夜以來、レイザは二度と和らいだ氣持になることが出来なかつた。こんな譯で、彼女は歸つて見たい氣には少しもなれなかつたので、滅多に行かなかつた。今彼女は昔の我が家に近づいても、そこからは何の懐しむ感興も彼女の上に迫つて來なかつた。子供時分の夢——その幻のやうなお伽噺、彼岸の世界の優しい、美しい、情味の深い、この世にあるとも思はれない、そのいろいろな裝飾、——それは一度はどうしても信じなければならぬ善美なものであり、又大人となつたときにも、何時までも思ひ出されるほどに善美なものである、といふのは、その時はその中の最も小さいものでさへも人の心の中で最も大きな恵みの立像と化し、小さい子供等とその最中に聯れて來ては、その清い手で荆棘の多いこの世の道に花園をつくらせて、すべてのアダムの子等が、天眞な素樸な、信實に溢れた、この世のものとも覺えない心で、この花園で日なたぼこりを樂しめば樂しむほど、いかに彼等の心に美はしむ結果を與へるかといふことを教へるからだが一然し彼女はこれらの

—五七〇—

ものと何の關係があつたらう。彼女や幾百萬の無邪氣な子供達が希望したり、想像に浮べたりした空想の道を通つて、彼女の未知の國にどんな旅をしたことか、いかに彼女が優しい空想の光りを潜つて、初めて理性に出會つてそれが恵み深き一の神なのを見て、その理性と同じやうに偉大な神々にも従ふことになつたか、いかに理性が手から足まで金縛りにむた生贖をむさぼり、大きな無言の姿を据ゑて、視力のない眼を見張り、幾十幾百ほどの挺を使はぬと何物にも動かされ難いやうな、兇惡な、殘忍冷酷な偶像ではなかつたかといふ思ひ出——彼女がそんなものと何の關係があつたらう。我家や子供時代に對する彼女の思ひ出は彼女の若い胸にありとあらゆる泉が、湧き出るか出ないうちに、乾上げられてしまつたといふ思ひ出に過ぎない、あの空想の黄金のやうな水は、そこにはなかつた。それはたゞ荆棘から葡萄を集め、薊から無花果を集める土地に灌ぐためだけにのみ流れてゐるものであつた。彼女は胸に一種の重い、かたくなになつた悲しみを抱いて、家に入り母の居間に通つた。彼女がこの家を去つて以來、シッシイは家族の人達と同じやうに暮してゐた。シッシイは彼女の母の傍にゐた。また彼女の妹の今年十か十二のジェーンもその部屋にゐた。

いろいろと手を盡して見てから、やうやうのこととグラッドグラインド夫人にその姉娘の來たのを分らせることが出・來た。彼女はたゞ習慣の力で、例の何時もの通りの姿勢で、まるで手のつけやうのない品が保存されてゐる時のやうに、長椅子の上に體を支へて倚りかゝつてゐた。彼女は頑として寢臺に移されるのを拒んだ。その理由はといふと、若し自分が寢床をつくことになれば、何時までも口やかましい小言を聞いてゐなければならぬといふのであつた。彼女の弱々しい聲が澤山の肩掛につままれてゐるのでひどく遠方に聞えるし、何か言ふ他人の聲が、彼女の耳に達するまでには、非常

に時間がかゝるので、まるで彼女が井戸の底にでも横になつてゐるのではないかと思はれた。この哀れな老夫人は、今こそいつもよりも眞實（死）に近づいてゐたのだ、その點も大に關係してゐた。パウンダアビイ夫人のお出で、と告げられると彼女は、あの男が、ルイザと結婚して以來、自分はあの男をそんな名で呼んだことはないとか、いろいろ相應しむ名を詮索した揚句、自分はあの男を「ジョサイヤの頭文字」と呼ぶことにしたとか、さう呼ぶまいとしても未だ他にゐつまでも使はれるやうな代りの名が用意されてゐないので、さうま行かぬとか、とんちんかんな返事をした。ルイザは暫くの間彼女の傍に坐つて、母に自分が誰だかはつきり分るまで、幾度か話しかけてみた。やがて彼女は俄に分つたらしく見えた。

「あゝ、さうかひ、お前。」とグラッドグラインド夫人は言

—五七一—

つた、「どんな真合だね、お前、わたしも満足に行つてくれたらと願つてゐるんだけどね。何しろお前のお父さんがしたことでね。お父さんがさう決心してしまつたことだからね。お父さんにも知らして上げなくてはいけないよ。」

「お母さま、わたしはお母さまのことを伺ひしたいのですわ。わたしの事だなしに。」

「わたしのことを聞きたいのだつて、お前、そりや珍らしいね。本當に、わたしのことを誰かゞ聞きたがるなんて、どうもほんたうに思はれないだよ。でもルイザ、大變弱つちまつて、目まひがするのね」

「お母さま、お苦しくはないんですか？」

「この部屋の何處かに苦しいところがあるやうだけれどね。」とグラッドグラインド夫人は言つた。

「わたしは苦しいんだか、何だかはつきり言へないよ。」

こんな妙な事を言つたあとで、彼女は暫く黙つて寝てゐた。ルイザはその手を持つて見たが、もう脈の打つのが感じられなかつた。だがそれに接吻してみると、ほんの微かな生命の絲がゆれゆれに動いてゐるのを感じる事が出来た。

「お前は滅多に妹に會はなかつたね。」とグラッドグラインド夫人はゐつた。「あれはお前位に大きくなつてね。まあ會つてやつておくれ。シッシイ、あれを此處へ聯れて來ておくれでないか。」

妹は聯れられて來た。彼女は手を姉の手に握られた儘立つてゐた、ルイザは彼女がシッシイの頸筋に片方の腕を巻いてゐるのを見て、その親しさに差別があるのを感じた。

「ルイザ、お前似てゐるとは思はないかひ？」

「えゝ、お母さま。わたしこの人は自分に似てゐると思ひたひのですけれど——」

「え？あゝ、さうだよ、わたしも何時もさう思つてゐるんだよ。」とグラッドグラインド夫人は意外に生氣をもどすと共に、泣き出した。「それでわたしは思ひ出したがね。わたしは——わたしはお前に話さうと思ふのだが、あのシッシイや、あゝ子だからお前達は少し彼方へ行つて、おくれ。」

ルイザは妹の手を放した。彼女は妹の顔の方が昔の自分の顔よりも美しくつて、づつと晴々してゐると思つた。そしてその顔の中にこの部屋にゐるも一人の顔——眞實味のこもつた眼をしてゐて、看病や同情のためよりも、その黒みが、つた房々とした髪のために蒼白く見える可愛い顔——の持つしとやかな或るものを見たので、この場合この時でさへ、むかむかと腹立たしい感情がこみ上げて來るのであつた。母親と二人きりになつたルイザは、母がその顔に畏ろしいやうなあきらめの安息を浮べて横つてゐるのを見た、それは丁度大水に押し流された人が、もう到底抗する力がつきたので、その流れのまゝに諦めて、自由になつて

―五七二―

ゐるのに似てゐた。ルイザは再び母の手―といふよりもその影に過ぎなくなつたものを、そつと自分の唇の上に置いて、彼女を呼びもどした。

「お母さま、お母さまは何かわたしにお話し下さると仰しやりましたのね。」

「え？・あゝ、さうだつたね、お前。お前も知つての通りお父さまはあゝして殆ど、あちらにばかりゐらつしやるんでね。わたしはそのことをお手紙でお知らせしなければならぬと思ふのだよ。」

「何のこと、お母さま？御心配なさらなくてもゐゝわ、何のこと？」

「忘れちゃいけないよ、お前、わたしが何か言ひ出すと、それがどんな事柄でも、何時も果しいふものがなかつたんだからね。それだもの、わたしはもう長いこと何も言はないことにしてしまつたんだよ。」

「お母さま、わたしは何でもお伺ひしてよ。」だがもう細りきつて、かすれかすれの聲を聯絡のある言葉として聞きとるためには、母の口のところにごゝむと同時に、母の唇の動く様子をちつと注意して見つめてゐなければならぬのであつた。

「ルイザや、お前も随分と學問をしたし、お前の弟だつてさうだよ。朝から晩までいろいろなこと學問づくめだつたからね。でも、もうどんな事でも、ぼろぼろにされてしまふほど此處で散々勉強されなかつた學問といふものがあつても、名前も聞かせて貰ひたくないと思ふのだよ。」

「お母さん、お母さんさへお話をしつゝけられるなら、わたし何時までも伺つてますわ。」この言葉は、母親の流れ去るのを辛くも喰ひ止めんためであつた。

「でもきつと何かまだあると思ふのだよ―學問のことぢやないがね―それがお前のお父さんには見付からなかつたか、忘れられてしまつたんだらうけれどね、ルイザ。それが何だかわたしにも分りはしない。でもわたしは度々シッシイを傍に置いて坐りながら、それを考へたものだよ。今ぢや、わたしにはとてもその名前を附けられさうまないがね。けれどお父さんならつけられます。そのためにわたしは、不安心で仕方がないんだよ。わたしはそれが何といふものかどうか見付け出してくれと、お父さんに手紙を出したくて仕方がないんだよ。わたしに筆をとつておくれ、筆をとつておくれ。」

だが、最早體を慄はす力さへ去つてしまつてゐる、―たゞ微かに左右にその哀れな頭をづらす僅かな力を除いては。ともかく母は彼女の願ひが、聞きとゞけられて、持つ力さへない筆がほんとその手の中にあるのだと想像した。彼女が體を包んでゐる肩掛の上に、どんなに不可思議

―五七三―

無意識な文字を書き始めたか、それはどうでもよい。その手は直ぐ文字を書く眞似の最中に止まつてしまつた。か弱い透明な影像の背後に、何時も弱々と臙ろに射してゐた光は、消えてしまつた。そして人間の肉身が、その中を辿りつゝ徒らに胸をわなゝかすあの影の世界を脱げ出ると、グラッドグラインド夫人さへも、賢者や聖徒のやうな恐るべき莊嚴な相好を帯びたのであつた。

十、スパージット夫人の階段

スパージット夫人の神経ははかばかしく平調に復さなかつたので、この立派な貴婦人はバウンダアビイの別荘に、數週間續けて滞在してゐた。昔と今とは境遇が違ふといふ意識に基くいかにも隠遁者

知る通り、ロムラスやレムス（羅馬建國の祖）だとして待つとることが出来たなら、ジョサイヤ・パウ
ンダアビイとして待つとることが出来ますぢや。ぢやが、若い時分、この二人はわしより合せぢやつ
た。二人は牝の狼を乳母として育つたのぢやが、わしと來たら牝の狼が祖母さんに當つとつたのぢや
からね。祖母さんは一滴の乳もくれはせんで、奥さん、傷痕をつけてくれたぢや。その點ぢや
祖母さんは本物のアルダアネ（兇暴な牛の一種族）のやうだつたな。」

「まあ！」と言つてスパージット夫人は溜息をついて身を顫はした。

「いや奥さん。」とバウンダアビイは續けた。「わしは今度の事件で何も新しい事は一つも聞かん。
ぢやが何か聞くのももう間があるまいて。それにトム君の若造が、今のところ少し仕事に凝り出したや
うな鹽梅で——あれとしては一寸

—五七五—

珍しいことぢや、なにしろあれはわしのやうな教育は受けんかつたのぢやからね——今度の件も助太
刃をやつとるんでな。わしはすべて内證に見せんけりやいくわん、と命じてありますのぢや。内々で
どんなことをするともぢや、やつとることを人に感付かれんやうにせんけりやいくわん、さもないと、
奴等が五十人も力を合せて、逃げ出してしまつとるあの男

を手の届かん處へ隠さんとも限らんでな。内々にしとけば泥棒どもは段々と氣をゆるめ出すからそ
こを捉へてくれるのぢや。」

「うまい考へでございませうこと、」とスパージット夫人は言つた。「大變に面白さうでございませうこ
と。で、あなたのお話なすつたあのお婆さんとかのことは——」

「わしの話した老婆はぢやな、」とバウンダアビイはこれには別に自慢の出來さうなところがなかつ
たので、手つ取り早く打ち切るやうにかろ言つた。「まだ縛には就いとらんぢやが、そのうち捉まる
から當にして待つとるがひ、それであいつの年取つた性惡な心に満足ぢやといふならぢや。とも角、
奥さん、あんたがわしの意見を聞きたいと仰しやるなら言ふが、あの老婆のことは、人の口に上らな
ければ、上らないだけ都合がよいと思つとるのぢや。」

その晩、スパージット夫人は、荷造り最中一寸手を止めて一休みしながら室の窓から、例の大きな
『階段』の方を見ると、ルイザがやはりずんずん降つて來るのが見えた。彼女は庭の四阿でハート
ハウスの傍に坐つて、極く低聲に話してゐた。彼は立つた儘彼女の上に身を屈めて、何か囁いてゐる
らしく、彼の顔は殆どルイザの髪にふれさうであつた。「ふむさうでもなかつたら、」とスパージ
ット夫人は言つて、その鷹のやうな眼を極度に凝らした。スパージット夫人のゐるところは少し距離
が遠すぎてゐたので、彼等の話は一言も聞えなかつたし、その話をしてゐるといふことさへ彼等の様
子から察知する外なかつた。だが實際を言へば彼等の話してゐるのはかふであつた——

「ハートハウスさん、あなたあの人を覺えてゐらして？」

「え、はつきりと覺えてゐますとせ。」

「その男の顔、そぶり、それから言つたことも？」

「え、はつきりと。それであの男は僕には退屈な人間に思はれましたね。實に極端に冗漫な、か
さかさした奴にね。雄辯も種々ですが、下手に出て、吃々と説き出す點などは仲々抜け目がなかつた
です。けれど實際あの時、僕は、『をひ君、少しやり過ぎるぞ』と思ひましたよ。」

「わたしどうもあの男を悪く思へなかつたんですけれど。」

「ねえ、ルイザ——これはトム君の口眞似です。」が、トムは決してそんなことは言はなかつた。「あ
なたはあの男の

—五七六—

るゝ點を知つちやアゐないでせう?」

「えゝ、それはさうですわ。」

「また、ほかのあゝした男のことも?」

「どうしてわたし知つてゐませう。」と彼女は、このごろさう見せたことのないあの以前の素振りを一しほ際立たせてかふ返辭をした。「わたしあの人達のごとは、男の方も、女の方も、一寸も知らないのですもの。」

「レイザ、ではあなたの本當の友達がいふ素直な言葉をお聞きなすつて下さい、その男の方があゝいふ立派な兄弟達のいろいろな聯中のことを少しは知つてゐますからね——いや、全くあの聯中が人並優てゐることは、僕だとして直ぐ信じられましたよ。そりや、奴等には何時も手當り次第に摺むといふ一寸した癖はありますがね、あの男はよく喋ります。だがどんな奴でも喋りますからね。又、その男は教訓を口にしたがりです。だがそれはどんなにかさま師だつてやりますよ。議會から懲治監に到るまで、私達のやうな仲間を別にすると、到るところで教訓が口にされるぢやありませんか。たが實際、私達がかふ例外になつてゐればこそ、私達の聯中に全く頼ることが出来るのです。あなたは今度の事件を御覽なすつたし、又お聞きなすつたでせう。私の尊敬する友人バウンダアビイ氏——私達の知つてゐるやうにぐつと摺んだ手を弛めるやうな遠慮氣味の微塵もないあの人が、例の綿の毳だらけの聯中(織物職工)の一人を極度に手荒くとつちめてやつたとします。この綿の毳だらけの聯中の一人がひどく氣を悪くして、大變怒つて、ぶつぶつ言ひ乍ら家を飛び出すと、丁度出會つた奴が、その男に今度の銀行事件に一口入らないかとすゝめたので、早速入つて、それまで空つぽだつたポケットにいくらから入れたものですか、何だけひどくゝ氣持になつてしまつたんですね。實際若しあの男がかふした機會を利用しなかつたら、そりや普通の人間ぢやない、まあ變物ですな。さうでなくとも智慧のある奴だつたら、きつと自分でそれぐらゐの仕事は工夫したらうとは思ひますがね。」

「わたし何だか、レイザは暫く考へ深げに坐つてゐた後にかふ答へた。「あなたのお言葉にさう易々と納得したり、餘り安心したりしては、悪いやうな氣がしますの。」

「私はたゞ道理に合つたことを言つてゐるだけです。何も悪くはないですよ。私はその事をトム君とも一度ならず離したのです。——無論トム君と私とは前からすつかり胸襟を開き合ふやうにしてゐるのですからね——で、トム君も全く私の意見には贊成ですし、私もトム君の意見には全く贊成です。ちと歩いて見ませんか?」

二人は薄明の中に朧になり出した小徑の方へぶらぶらと歩いて行つた——彼女は彼の腕に凭れながら。「そしてレイ

—五七〇—

ザは自分がかふして例のスパージット夫人の階段を下へ下へと降りて行つてゐるのには少しも氣がつかなかつたのである。夜となく晝となく、スパージット夫人は執拗くもその階段をしつかりと立たせてゐた。レイザがその底まで行つて深淵に墜落してしまへば、階段はその時次第で、レイザの上に倒れ落ちてしまふまゝであつた。けれどもその時までには、スパージット夫人の眼前にちやんと立つてゐなければならなかつたのだ。そしてレイザが何時もその階段の何處かにゐた。しかも下へ下へと下へ來てゐる!

スパージット夫人はジェームズ・ハートハウスの往來するのを見た。彼女は彼の聲をそこゝで聞いえ、またハートハウスが思ひを凝らして打ち眺めたあのルイザの顔の變化を認めた。彼女はそれがどんなに何時曇るか、またどんなに何時晴れるかといふことを精密に目をとめた。彼女は心から興味を惹きこまれて、一抹の憐憫も抱かず、一點の悔恨もなく、ルイザが誰にも引きとめられずに新しい巨大な階段の底にだんだん小止みもなく近づいて行くのを見る興味に惹き込まれて、その黒い眼を大きく見張つてゐた。

又彼女は、肖像畫に對するのとは打つて變つて、バウンダアビーには限りのない尊敬を捧げてはゐたものゝ、ルイザが降つて來るのを引き止めやうなどいふ氣持は微塵もなかつた。早くその結果が見たいものだと、辛抱強く、彼女は最後の没落が來るのを待つてゐた、恰も自分の希望の收穫が、熟して實るのを待つやうに待つてゐた。ちつと息を殺して期待しながら、彼女はその油斷のない眼を階段の上に配つてゐた。降りて來る姿に、人知れず右の手袋（その中を拳を握りしめながら）を振り上げるこゝろさへ殆どせずに。

十一、下へ、下へ

ルイザの姿は大階段を小止みなくずんずん下つて行つた——深く水中に垂れた錘のやうに、階段の底の眞黒な深淵の方に一段づつ近づいて行つた。

グラッドグラインドは妻の死亡の報知を受けたので、倫敦から遙々と戻つて來て、事務的に彼女を埋葬した。それから倉皇としてあの議會の『燃燼』の山へと引つ返し、そこを引つ掻き廻して、その望むがらくたを探したり、又、がらくたを望む人々の眼中に塵埃を抛り込んでやつたりする仕事に、——言葉を換へると、議會の仕事に、再びとりかゝつたのであつた。

一方スパージット夫人は、その間にも瞬きもせず見張つて用心してゐた。まる一週間はこの別荘から、コークタウンを遠ざけてゐる鐵路の長さだけ、彼女の階段とは離れ離れになつてゐたとはあへ、彼女は尙も猫のやうにルイザを見

—五七六—

張つてゐた。彼女の夫を通し、彼女の弟を通し、ジェームズ・ハートハウスを通し、手紙や小包の表書を通し、またどんな時でも、その階段に近づいた有生無生のあらゆるものを通して見張つてゐた。

「奥さん、お前さんの足は一番終ひの段にかゝつてゐるんだよ。」とスパージット夫人は手袋を嚇かすやうな勢ひで振り廻して、ルイザの下りて來る姿に呼びかけた。「お前さんがどんな術をつかつたつて、わたしは瞞されはしないからね。」

とはあへ、どんな徳なのか、又自然にか、——ルイザの氣質の本幹だつたか、またその氣質に周囲の事情が加はつた接枝だつたか——兎に角ルイザの不思議に寡黙な點が一面スパージット夫人のやうな炯眼の女性の好奇心を刺戟するが、同時にその眼をくまらずのであつた。ジェームズ・ハートハウスでさへ彼女の眞意が分らぬ時があつたのだ。彼があれば時を費して窺ひ通したその顔を読み抜くことの出來ぬ時もあつたのだ。引立役の一群の衛星に周圍をとり巻かれた社交界のどんな女よりも、この孤獨な娘の方がづつと偉大な神祕と見える時があつたのだ。

かふして時が過ぎて行つた。やがてバウンダアビーが是非出張しなければならぬ用事があつて、三四日家を留守にする時が來た。それは或る金曜日のことであつた。彼はこの事を銀行でスパージット夫人に告げた後で「ちやが、奥さん、あんたには明日やはりお出でを願ひたひです。わしが居るつも

りでお出でを願ひたひです。わしが居つても居らんでも、あんたには決して違つたことがないですから。「とゐひ添へた。

「まあ、あなた。」とスパージット夫人は答め立てするやうな口調で答へた。「そんなことは仰しやらないで下さいまし。あなたがお出で遊ばさなければ、わたしは少しくらゐの違ひではございませぬ。あなたも御存知のくせに。」

「いや、奥さん。それぢやわしの留守の間はあんたの好き自由になさつて頂きませうて。」とバウダアビイは満更嬉しくないでもないやうにかふあつた。

「バウダアビイさん。」とスパージット夫人は返辭した。「あなたのお言葉はわたしにとつては掟のやうなものでございます。お言葉がなければ、折角の御深切な仰せに御辭退を申し上げねばならぬのでございます。と申しますのも、わたし、あちらに参りまして、あなたのお情け深いおもてなしに預りますことが、グラッドグラインドのお嬢さまの、お氣に召すかどうか、案じられますからでございますよ。でも、もうその事は仰しやらないで下さいまし。わたしはお招きに預りました通り、あちらに参ることに致しますから。」

「いや、わしがあなたをお招きするのも。」とバウダア

：五七九一

ビイは兩眼を大きくしながらあつた。「是非よそのお招きはお受けなさらんやうに願ひしたいからだな。」

「それはもうあなた。」とスパージット夫人は答へた。「わたしとしましてもその通りでございます。では、あのもう仰しやいませんやうに。また、以前のお元氣なお顔にお目にかゝれますやうに。」

「と仰しやると、奥さん。」とバウダアビイは力み出してあつた。

「はい。」とスパージット夫人は直ぐそれに應じた。「あなたは何時もお元氣でございましたのに、この頃、それがお見受け出来ませんのでつい悲しい氣になりましたね。どうぞあなたお元氣であらうしやめますやうに。」

バウダアビイはこの難かしい願ひを彼女の同情たつぷりな眼差を添へていはれたお蔭で、力なげな滑稽な身ぶりで頭を搔くほかはなかつた。そしてその日の午前中、聞えよがしに事務室の小者どもを怒鳴り散らして、彼はそれとなく遠まはしにスパージット夫人に元氣を見せつけるやうな様子だつた。

「ピツア。」とスパージット夫人は、その日の午後、彼女の保護者が旅行に立つてしまつて、銀行が店を閉める時分にかふあつた。「トマスさんによろしくいつてね、わたしの處へお越し下すつて、仔羊の胡桃ケチャップ（合）で印度ビールの一杯も召し上つて下さるかどうか、御都合を伺つて下さいね。」若いトマスはさういつたことは何時だつて厭とはひはなかつたので、快よい返辭をして直ぐにやつて来た。「トマスさん。」とスパージット夫人はあつた。「かふした話らないものばかり並んでゐるんですから、あなたがうまくお出で下さるかどうかと思つてあましたよ。」

「有難う、スパージット夫人。」とやぐさ青年はいつて、蔭氣くさくさつと喰へ始めた。

「トムさん、ハートハウスさんは如何ですか？」とスパージット夫人は訊ねた。

「あゝ、あの人は元氣です。」とトムはあつた。

「あの方は今時分どちらにお出でなせうね？」スパージット夫人は、内々對手が黙り氣味なので仕返しをしてやるから覺えておいでといふやうにわざと氣輕の口調で訊ねた。

「ヨークシヤアで獵をやつてゐます。」とトムはあつた。「昨日はルウ姉さんに會堂の半分もあらう

といふ大きなバスケットを送つて來ましたよ。」

「あゝいふ紳士の方は、」とスパージット夫人はさも懐しさうにゐつた。「獵はなかなかお上手でせうね！」

「素敵なものです。」とトムはゐつた。

彼はづゝと以前から俯向きがちな青年であつたが、この特質は近頃非常にひどくなつて、誰の顔にも三秒間とその

—五八〇—

視線を向けてゐることはなかつた。従つてスパージット夫人には、その氣になれば、十分彼の顔をつめることが出来たのであつた。

「ハートハウスさんは、わたし大へん好きなのでございますよ。」とスパージット夫人はゐつた。「尤も、あの方は大概の人には好かれるんですけれど。あの方に、近々のうちお目にかゝれませうかしら、トムさん？」

「えゝ、僕は明日あの人と會ふことになつてゐます。」とやぐやぐや青年は答へた。

「まあ！それは耳よりなことですこと！」とスパージット夫人は穩かに叫んだ。

「僕はこゝの停車場で、夕刻あの人に會ふことに約束したのです。」とトムはゐつた。「それから僕は多分一緒に飯を喰ひに行くと思ひます。あの方はこゝ一週間ばかり田舎の家へも來ないので、何處かに用があると見えまして、まあ、そんな風なことをいつてゐました。だが僕はあの方がこゝで日曜を過して、ぶらぶらあちらへ出かけるのぢやないかと思つてゐます。」

「それで思ひ出しました！」とスパージット夫人はゐつた。「トムさん、ではお姊さまにお言傳をお頼みしても、大丈夫お忘れはなさらないでせうね？」

「えゝ、話ませう。」とやぐやぐや青年は不承無精に答へた。「あまり長いのでなければ。」

「たゝ、わたしの心からの御挨拶を申し上げて頂けば宜しいのですよ。」とスパージット夫人はゐつた。「それに、わたしは今週はもうお姊さまのお宅へ伺へまいかと存じますから。まだ少し神経が落ちつきませんので、多分引籠つてゐた方が良くはないかと存じますのでね。」

「あゝ、それだけのことなら、」とトムはゐつた。「僕が言ひ忘れたとしても大したことでないのですね。ルウはあなたにお目にかゝらない限り、あなたの事を考へさうにもありませんから。」

この至つて愛想のよい御挨拶で、折角の饗應に禮をゐつてしまふと、彼はいかにも下司ばつた黙り方で黙つてしまつたが、やがて印度ピー七ルが少しも残つてゐなくなると、彼は、「では、スパージット夫人、僕は失禮しなければなりません！」といつて、行つてしまつた。

翌日は土曜日であつた。スパージット夫人は一日中窓際に坐つて、客の出入りを眺めたり、郵便配達を見守つたり、町通りの雑沓する様子に眼を据ゑたり、胸中に種々様々な事を思ひ廻らしたり、殊に、注意を例の『階段』にずつと差し向けたりしてゐた。夕刻になると、彼女は帽子と肩掛を身につけて、靜かに出て行つたが、それはヨークシヤから旅客の到着する停車場近くをこつそりとうろついて、別に

—五八一—

表だつて驛の構内には姿を見せず、圓柱の後ろや、物蔭やまたは婦人待合室を窺越しに外から窺はふと思つたからであつた。

トムは既に待ち受けてゐて、當の列車が到着するまで其處此處をうろついてゐた。だがその列車にはハートハウスは乗つてゐなかつた。トムは人波が散つて、混雜が過ぎてしまふまで待つてゐた。それから列車の時間表を眺め、驛員達に問ひ合せてみた。それが濟むとのろろ出て來たが、往來に立ち止まつて、此方を見上げ、彼方を見やつて、帽子をとるやら、又かぶるやら、欠伸をしたり、伸びをしたり、次の列車の來るまで、まだ一時間と四十分も待たなければならぬ人がよくやつて見せるやうに、散々に退屈し切つた様子を見せてゐた。

「これは邪魔物のトムを出し抜く計略だ。」とスパージット夫人はゐひながら、靜かになつた事務室の窓蔭から飛び出した、彼女はそこから彼を見えなくなるまで見てゐたのだ。「ハートハウスは今頃は、きつとあれの姉と一緒にゐるのだ！」

それは直感した利那の考へであつた。彼女は、出来るだけ急いで、その對策を講じにかゝつた。バウンダビーの別荘に赴く列車の停車場は、町の外端になつてゐて、時間は少しもかなひし、途も樂でなかつた。けれども彼女は素早く空いた貸馬車に飛び乗り、素早くそれから飛び下りて、金を拂ひ、切符を掴み、列車に潜り込んだ。かふして彼女があつた荒れた炭坑地に蜒蜿と列なる古い坑口新しい坑口を越えて運ばれる様子は、まるで雲中に捲き揚げられ、旋風に吹き飛ばされて行くやうであつた。

この道中、決して後方に飛び去ることなく、ちつと空中に不動のまゝ、——丁度夕空に巨大な樂符を描き出す電線が彼女の暗い肉眼にはつきりと見えてゐたやうに、その心眼にはつきりと——あの階段がかゝつてゐるのをスパージット夫人は見た、又それを下りて來る人影を見た。それはもう一歩でどん底であつた。深淵の絶端に足をかけてゐた。

薄曇つた九月の夕暮は、今、夜の帷帳に閉ぢこめられやうといふころ、その重く垂れ下つて來る帷帳の裾から、スパージット夫人が這り出で、この小さい停車場の木造の段々を降り、石ころ道に出て、それを横ぎり、緑の小徑に入つて、枝もたわゝに繁つた葉蔭にと隠れてしまつた。遅く埒に戻つた鳥が一二羽眠げに轉るのや、蝙蝠が一つ重たげに彼女の頭の上を行つたり來たりするのや、天鵝絨のやうに感じられる厚い塵埃が彼女の足に踏まれて舞ひ立つなど、——スパージット夫人が極めて靜かに或る門を閉める時までに、眼に見、耳に聽ゐたところは僅かにこれだけであつた。彼女は灌木の中に姿を隠すやうにして、家の方に歩み

一五八二一

寄り、また廻つて、樹の葉の間から低い方の窓を窺つてみた。窓は大概かふいふ暖かい天氣の日にも何時もするやうに、すつかり開け放たれてあつたが、まだ燈火も入らず、すべてが寂然としてゐた。彼女は庭を窺つたが何分手がゝりもなかつた、彼女はあの森に氣がついて、その方へ忍び寄つた——丈高い草も、荆棘も、蟲も、蚯蚓も、蛞蝓もその他どんな爬蟲類にも構はずに。その黒い兩眼と、鉤鼻とを油断なく前に突き出して、スパージット夫人は深く繁つた下生を音をさせないやうに踏んで行つたが、その目的物に、ひどく熱中してゐたので、たとひそれが毒蛇の森であつたとしても、恐らく少しも尻込みはしなかつたであらふ。

しつゝ彼女が立ち止つて耳を澄した時に、小鳥は闇にきらきら光るスパージット夫人の兩眼に魅せられて、その時から轉げ落ちたかも知れなかつた。

手近に低い人聲がある。彼と彼女の聲だ。あの約束は弟を遠ざける策略だつたのだ！二人は彼方の倒れ木の處にゐたのだ。露重い草の間に低く屈みつゝ、スパージット夫人は次第に彼等の傍に近寄つて行つた。彼女は身を挺して、或る樹蔭に立つた。その様子は、丁度野蠻人を待ち伏せしたロビンソン・クルーソーによく似てゐた。ほんの一躍で彼等二人を捉へることが出来るほど近かつた。男はこ

つそりとこゝへ来てみて、家の方には姿を現はさなかつたのである。彼は馬で歸つて来たのだ。それも附近の野原を越えて来たに違ひなかつた。彼の馬が二三歩彼方の牧場に向つた圍ひに繋いであつたから。

「ねえ、ルイザ。」と彼はゐつた。「私にはどうすることも出来なかつたのです。あなたがこゝに一人きりでゐらつしやると知りながら、私が平氣で遠くに居られませうか？」

「お前さんはね、もつと女振りをよくしたかつたら首をもう少し下げる方がゐんだよ、お前さんが首を上げて威張つてた日には、世間の他人様は何と見るか、分るものぢやない。」とスパージット夫人はかふ思つた。「だが、ねえ、お前さん、お前さんは誰の眼がお前さん方を窺つてるか、思ひも及ばないだらう！」

彼女が首垂れたことは慥かだつた。彼女は彼に行つてくれとせがんだ、行つてくれと命令した。だが彼女はその顔を彼に向けもしなければ、上げもしなかつた、とはゐへ、彼女が、この後ろに隠れて窺つてゐる御深切な女性に、今まで種々な折に坐つてゐるのを見られたやうに、相變らず靜かに坐つてゐるのは注意す可きことだつた。彼女は両手を立像のやうに、互ひに載せ合はして、その豊音さへ決して慌てゝゐなかつた。

「ねえ、ルイザ。」とハートハウスはゐつた——スパージット夫人は、彼の腕が彼女を抱くのを見て喜んだ。——「あなた

—五八三—

は一寸でも私と話をなさるのがお厭なんですか？」

「こゝでは厭です。」

「では何處で、ルイザ？」

「こゝでは厭です。」

「でも私達には全く時間がないのだから、そんなことは言つてゐられない、それに私はあんな遠くからやつて来たのです、それほど、身も心も投げ出して、夢中になつてゐるのです。これほど身命を投げ出したのに、意中の女王からこれほど冷遇された奴隷などは、今まで一人もなかつたでせう。手厚く迎へられて、生き返るほど暖く慰められると思つたのに、まるで凍り切つたやうにあなたから扱はれるなんて、實に胸も心も張り裂けるばかりです。」

「こゝでは、わたしに構つて下すつてはいけなないと、最前も申したちやありませんか？」

「でもルイザ、私はあなたにお會ひしなければなりません。何處で會つてくれますか？」

二人ははつと飛び立つた。後ろの聴手もぎくりと飛び上つた。彼女は樹蔭に自分以外にもう一人窺ふ者があると思つたからだ。だが、それは今降り出した大粒の雨だつた。

「二三分してからお宅へ乗りつけませうか、御主人が御在宅で、心からお迎へ下さると思つたといふやうに、知らぬ顔して？」

「いけません！」

「あなたの言ひつけは實に殘酷で否應も言はせぬ見幕ですな、そりや私は世界中で一番不仕合せな男で、外の女の誰をも對手にしなかつた揚句、お終ひに一番美しい、一番心を惹きつける、その上に一番こゝろの足許に平伏してしまつただけだ。ルイザ、私はあなたを離れもしません、又あなたを離しもしません、こんな風に餘り冷酷な仕打ちをなさるのでは。」

スパージット夫人は、彼が彼女の體に腕を捲いて抱き止めるのを見た、又その時、スパージット夫人の何處までも物好きな耳は、彼がどんなに自分が彼女を愛してゐるか、又彼女こそ、どんなに自分

が一生に得たすべてを犠牲にしてまでも熱心に勝ち得ようとしてゐる獲物であるかといふことを、彼女に語つてゐるのを聞いたのであつた。彼が最近熱心に追ひ求めた目的物など、彼女の傍にあつては何の値打もないものになつてしまつた、今一步で自分の手の中のものとなる成功も、彼女に較べると塵芥に過ぎぬものゝやうに、彼は投げ捨てゝしまつた。とはゐへ、その成功を求めることが彼を彼女の身近に居らしめるなら、それを求めるもよし、またそれが彼を彼女より引き離すならば、それを投げ捨てるもよし、彼女がその氣なら駈落ちもよし、又彼女が命ずるなら、一切を祕密のまゝにして置くのもよし、

一五八四

そのほかどんな運命、あらゆる運命に出會ふとも、彼女が彼に眞實である限りは、何事も、彼には驚き恐れるには當らない——つまり彼女が如何に皆に見捨てられてるかといふことを見て居り、彼女に初めて會つた時から、自分には適はしくないと思つたほどの歎稱と感動に打たれたが、それでもどうか彼女の信頼を受けることも出来、彼女に全身を捧げて、彼女を崇拜するに到つたこの男に、彼女が眞實である限りは云々。かふしたことや、更にそのほかの細々したことをスパージット夫人は——彼もルイザも取急いでゐる最中に、夫人自身の邪念が満足のあまり雀躍して逆捲く最中に、人に見られはしないかと恐るゝ最中に、樹の葉に濯ぐ大雨と轟き渡る雷鳴との喧囂が迅速に増してゆく最中に、——彼女の心の中に見て取つた。だがかふいふ混乱した朦朧の凌ぎ難い暈がかゝつてゐた爲めに、たうたう彼が柵を乗り越え、馬を曳き去つた時には、夫人は二人が何處でまた何時會ふ手筈にしたのか、唯二人がこの晩にするといつたことより外には、聞き洩らしてしまつた。だが彼等の一人はまだ闇の中に彼女の鼻の先に残つてゐたのだ。

だから彼女がこの一人をつけて行けば、彼女の狙ひは外れはしない。「え、お前さん。」とスパージット夫人はかふ思つた。「お前さんは御自分がどんなにつけ廻されてるか、まる
で御存じないのだね。」

スパージット夫人は彼女が森を出て、家に入つて行くのを見た。では今度はどうしよう？今は豪雨である。スパージット夫人の白い靴下は緑が勝つた雑然とした色になつてゐた。その鞆の中にはちくちくする刺立つたものが澤山入つてゐた。彼女の衣服のところどころには毛蟲がめいめい自製の吊床にくるまつてぶら下つてゐた。雨水が帽子からも羅馬型の鼻からも流れた。こんな有様で、次にどうしようかと考へながら、スパージット夫人は灌木の繁みに匿れたまゝ暫く立つてゐた。

おゝ、ルイザが家から出て来る！手早く外套を羽織つて、顔をかくして、こつそりと出て行く。彼女は駈落ちをするのだ！いよいよ彼女はどんだの階段から轉げ落ちて、深淵に呑み込まれるのだ！雨をもかまはず、早いしつかりした足を運んで、彼女は車道に沿つた歩道へまぎれ込んだ。スパージット夫人はほんの少し間隔を置いたまゝで、樹蔭をたどつて跟けていつた。といふのも、早足に樹下の闇に急ぐ人影を見失ふまいとするのは、なかなか樂でなかつたからであつた。彼女が音も立てずに潜り門を開けに立ち止つた時に、スパージット夫人も立ち止つた。彼女が歩き出すと、スパージット夫人も歩き出した。彼女はスパージット夫人がやつて来た道を辿つた、そして緑の小徑から飛び出して、石ころ道を横切つて、木造の段々を昇つて鐵道線路

一五八五

の傍に行つた。コークタウン行きの列車が直ぐに来る筈なのをスパージット夫人は知つてゐた。それ

で彼女はコークタウンが第一の目的地だと察した。スパージット夫人は濡鼠の有様なので、この上姿を變へる必要は少しもなかった。でも彼女は停車場の壁の風下のところに足を止め、肩掛を、今迄とは違つた恰好にひつくり返して、帽子の上から冠つた。かふ姿を變へると彼女はまるきり認められる恐れもなく、例の木造の段々を昇つて、小さな出札所で金を拂つた。ルイザは片隅に坐つて待つてゐた。スパージット夫人はもう一方の片隅に坐つて待つた。二人とも激しい雷鳴にちつと耳を傾けた、また屋根を洗つて、迫持の欄干をざあざあ打つ大雨の音に聞き入つた。洋燈が二つ三つ雨に打たれ風に吹かれて消えてしまつた。で二人は稻妻が軌條の上に閃めき、うねるのを卻つて嬉しい位に思つた。

停車場が發作的に震へ出し、次第に中心が軋むほど震動が高まつたのは、いふまでもなく列車の到着である。火と蒸氣と煙と赧の光。しゆふといふ響き、がたがたといふ轟き、ベルの音、叫聲。ルイザは一つの客車に乗り込んだ、スパージット夫人は別の客車に乗り込んだ。(この小さな停車場は今や雷雨の中の人氣のない只一點となつた。)

彼女は濡鼠と寒さとの爲めに、齒ががたがた震へてゐたが、恐しくよろこんでゐた。いよいよあの階段の人影は斷崖から身を投げたので、彼女はあはは、檢死に立ち會つてゐるやうな感じであつた。このやうに敏活にお葬式の用意をととのへた彼女は、得煮満面にならずにはゐなかつた。

「女の方が男よりも餘程早くコークタウンに着くのだね。」とスパージット夫人は考へた。「何しろあの男の馬はそんなによくないんだから。あの女は何處で男を待ち合はすかしら？そして何處へ二人は一緒に行くだらう？お待ち、お待ち、今に分るから。」

列車が目的地に止つた時には、丁度豪雨が、際限のないやうな混雑を來たした。溝も樋も水がはけ切れず、下水は溢れて、街の通りは水に浸つた。スパージット夫人は下車すると同時に、夢中に見張つた眼を客待馬車の方に向けたが、馬車は客が争つて乗り込むので、大變な騒ぎであつた。

「あの女もどれかに乗るに違ひない。」と彼女は考へた。「だからきつとわたしは別な車で追ひかけるうちには行つてしまふだらう。逃げられるかも知れないが、わたしはよく番號を見て置いて、何處へといふか行く先をよく聞いて置かなくちやいけない。」

だがスパージット夫人の思惑は違つた。ルイザほどの馬車にも乗らないで、もう出かけてしまつたのだ。あの黒い眼が彼女の乗つて來た客車に向けられた時には、もう遅かつた。扉は五六分しても開かれなかつたので、スパージット

—五八六—

夫人はその傍を幾度か通り過したが、何も出て來なかつた。覗い見ると、もう空であつた。彼女はびつしより濡鼠になつてしまつて、足は動く度に鞆の中でびちやびちやしてゐる。この古典的な顔も雨の点滴がかゝつてゐる。帽子は熟れ過ぎた無花果のやうになつてしまふ。衣服はみんな臺なした。彼女の身につけた釦とあぶ釦、糸といふ糸、鉤にいふ鉤は、いかにもお歴々らしひ彼女の背中にきつちりと型をつけてゐる。彼女の身装總體のどんより緑ばんであるところは、まるで昔の生えた小徑に見る古い庭園ひの柵のお化のやうである。スパージット夫人は口惜し涙を流して、「あゝ、たうとう逃げられちまつた！」といふほかはなかつた。

十二、轉落

國家の掃除人(議員)達は仲間同志で恐ろしく煩さる唾み合ひを幾度も演じた後、暫くの間閉會と

いふことになつて、各々四散した。でグラッドグラインドも閉會の間は家に歸つてゐた。彼は今、例の恐ろしく几帳面な時計がかゝつてゐる部屋で何か頻りにペンを動かしてゐる。屹度得意の統計で何かを證明して――多分は、あの善きサマリヤ人（新約、*可傳*十章三十一―三十五）は拙劣な經濟家だといふやうなことでも證據立てゝゐたものであらう。雨の音は大して彼の邪魔をしなかつたが、折々彼の注意を呼んで、まるで彼が天地の四大原素（地水火風）に文句をゐつてゝもゐるやうにその頭を擡げさせるには十分だつた、非常に激しく雷鳴がすると、彼は何處かの高い煙突が電光に打たれたなと思つて、コークタウンの方へちらりと視線を向けるのだつた。雷鳴が遠のいて、雨が大洪水のやうに降り注いだとき、部屋の扉が開いた。彼は卓上の洋燈のまはりへ眼を移すと、驚いたことに、彼の長女がそこに佇んでゐるのを見た。

「レイザぢやないか！」

「お父さま、わたし申し上げたいことがありますの。」

「どうしたのぢや？何時にない顔付をして！やれやれ。」とグラッドグラインドは、ますますいぶかしさうにあつた。

「お前はこの暴風雨に馬車にも乗らずに來たのか？」

彼女はまるで何も氣がつかなくなつたやうに衣服に纏つて見た。「えゝ。」彼女は帽子をとつて、外套や頭巾を手當り次第のところへ抛り出し、彼を見つめながら立つてゐた、――その様子は、まるで色も何もない顔で、髪は亂れ、挑戦的で、自棄氣味なところ見えるので、父は彼女に恐れを抱いた程であつた。

「どうしたのぢや？レイザ、さあ、どうしたのか話して御覽。」

彼女は彼の前の椅子にぐつたりと腰を下して、その冷た

―五八七―

ゐ手を彼の腕に置いた。

「お父さま、お父さまは、わたしを小さい時から教育して下さいましたのね。」

「さうぢやよ、レイザ。」

「わたしはこんな廻り合せに生れて來たその時が怨めしうございますわ。」

彼は疑惑と恐れに包まれて、彼女をみつめたまゝ、取り止めもなく、たゞ「その時が怨めしい？その時が怨めしいとは？」と繰り返してゐつた。

「どうしてお父さまはわたしに生命を與へて置きながら、わたしをこんな生ける屍のやうな有様から救ひ上げてくれるいろいろな、それこそ口に言へない貴重な物々、みんな取り上げてしまつたのでせう？わたしの魂の美しさといふものは何處にあります？わたしの心の情けといふものは、何處にあります？あゝお父さま、廣い荒野のやうなこの胸に、何時か一度は咲き誇つたに違ひない花園を、一體どうしてをしまひなすつたの、どうしてをしまひなすつたの！」

彼女はかふいつて兩手で自分の胸を打つた。

「二度でもその花園が咲き揃つたのなら、たとへその枯躡だけでも、せめてもの慰めとなつて、わたしの一生が今現に沈んでゐるこの空虚の淵から、わたしを救ひ出してくれるでせうに……。

ゐゝえ、わたしはそんなことを言ふつもりぢやなかつたのです、でもお父さま、お父さまは一番お終ひに、わたしとお父さまとこのお部屋でお話ししたことを覚えてゐらつしやゐますか？」

彼はこんなことを聞かされるとは少しも豫期してゐなかつたので、やつとかふ答へた。「あゝ、覺えとるよ、レイザ。」

「今わたしの口を上つたやうなことを、お父さまへ一寸わたしに言はせて下さつたなら、あの時にきつとこの口から申し上げたに違ひなかつたのでございますわ。わたしお父さまを責めるのではございません。お父さま、お父さまがわたしのうちに育て上げて下さらなかつたらのは、お父さまだつて御自分のうちに守り立てはなさらなかつたのです。けれど、あゝお父さま、ぶゝと昔にそれを育て、置いて下すつたなら、でなければ、お父さまがわたしを構はずに、抛つて置いて下すつたなら、わたしは今頃はもつとよい、ぶゝと仕合せな女になれたに違ひなかつたためです！」

あれほどに心を勞した揚句、眞正面からかふ聞かされたので、彼は片手に頭をもたせて聲高く叫びたのであつた。

「お父さま、わたしは小さい時から自分の心のうちに自然に湧いて来るやうなものを抑へやう抑へようとするのを仕事にさせられて來ましたけれど——わたしがさうして努めながらも内々恐れてさへゐたものが心の奥にあつた事を、

—五八八—

お父さまが一番しまひに、わたしとこゝでお話ししました時に御存じでしたら、——また人間が小賢しくいろいろと思ひ廻らして見たところで、丁度造物主のことが不可解であるのと同じやうに、人間の計算には一寸も分つてゐない感受性とか、愛情とか、そのほか弱點と言はれてゐるものゝ芽が、わたしの胸に残つてゐて、育てれば大きな力になるといふことを御存じでしたら——、それでもお父さまは、わたしが今慥かに憎んでゐるあの夫のところ、わたしを嫁がせたでございませうか？」

彼は言った。「やらん、やらん。娘や。」

「お父さまはわたしを硬張らせ、臺なしにしてしまつたあの霜や害蟲に、何時でも、わたしを押しつけるおつもりでございませうか？わたしは物質的でない部分の生活、わたしの信仰の春と夏に當るもの、わたしが周囲の現實生活の下劣で惡むものから逃げ込む隠れ家、わたしがもつと謙遜になり、もつと現實生活と信じ合つて、自分の狭い身のまはりだけでもそんなものをもつとよくしようと願ふやうに學ぶ學校を、お父さまは、（それが誰の爲めにもならず、たゞこの世を一層荒れさせてしまふだけなのに）わたしから奪ひ取つておしまひになるお積りだつたのでございませうか？」

「おゝ、ゐゝや、決して決して。そんなことはないのぢや、ルイザ。」

「でもお父さま、よしわたしは、まるきりの盲目で、たゞ手觸りだけで自分の行手を探つて行かなくてはならなくても、物の形や表面を知つてゐる上に、いくらかでもそれに自分の想像力を自由に働かすことを許されてさへゐたら、わたしは現在自分の持つてゐるこの眼があるより、何百萬倍も惻口で、仕合せで、情けぶかくつて、不足もなければ、邪氣もなく、いろいろな點でもつと人間らしくなつてゐたに違ひなかつたのです。さあ、お父さま、どうぞ今わたしの申し上げることをお聞き下さい。」

彼は自分の腕で彼女を支へてやらうと身を起した。彼がさうすると彼女も立ち上つたので、二人はびつたり身を寄せ合つた。——彼女は片手を彼の肩にのせ、彼の顔をおつと見つめてゐた。

「お父さま、わたしは一分間も靜まつたことのない心の飢ゑと渴きを覺えながら、また規則とか教訓とか定義とかいふものが、絶對的な力をもつてはゐない或る世界に強く憧がれながら一寸々々自分の道を戦ひ開いて大きくなつて來たのですわ。」

「わたしは、お前が不仕合せなどゝは一度も思つたことがなかつた。」

「お父さま、わたしは何時もそれは知つてゐました。かふ

—五八九—

して戦ひながら、わたしは自分の天使を撥ねつけて抑へ潰して悪魔にしてみました。わたしは自分の習つたものゝお蔭で、習はなかつたものを疑つたり、信じ損なつたり、輕蔑したり、口惜しく思つたりしました。それでわたしは、人の一生は直ぐに過ぎていく、その中には苦しんだり、悩んだりして争ふがほどのものは何もないのだと考へて、それを寂しい慰めにしてゐたのでございました。」

「お前の若さ・・・でか、ルイザ！」と父はさも憐れむやうにゐつた。

「えゝ、こんなに若くてございます。今申し上げたやうな破目になつてゐたときに——わたしは今お父さまに、恐れも喜びも持たずに、自分の知つてるまゝに平生の死んだやうな心理状態を申し上げますけれど——お父さまは、わたしにあの人を夫に持てと仰しやつたのでございました。わたしはそれをお受けしました。わたしは夫を愛してゐる風などは、夫にもお父さまにも、氣振りにも見せたことがございません。わたしが夫を愛してゐないのは、わたしも知つてゐますし、お父さま、お父さまも御存じでございました。またあの人も知つてゐました。わたしは決してまるきりどうでもゐると思つた譯ではないのでございます。トムは身に取つて愉快な、役立つ姉になつてやりたいとかねがね望んでゐたのでございますから。わたしは果敢ない幻に似たものに氣狂ひのやうに逃げ込まうとしたのでござぬます、するとだんだんその事がいかに氣狂ひぢみてゐるか分つて來ました。でもトムは、わたしの一生の微弱な愛情の目的だつたのでございました。多分トムがさうなつたのは、わたしがトムをどんなに可哀さうに思はねばならぬかよく知つてゐたからだらうと思ひます。でもそんな事は今はさう大事なことでなくなりました。たゞお父さまさへ、あれの失敗をもう少し大目に見てやつて下さいませぬ。」

父が彼女を兩腕に抱へると、彼女はもう一つの手を父のもう一方の肩に載せ、やはり父の顔をちつとみつめたまゝ、話を續けるのであつた。

「わたしが結婚してしまつて、もう取り返しがつかなくなつてから、昔の煩悶がその結婚に逆らつて頭を擡げて來たのでございました。それも、わたし達二人の個性から起つて來ただけに、どんな廣み法則でも、わたしの爲めに鎮めも宥めも出來ないやうな不和のいろいろな原因があつて、その煩悶は一層激しくなつてしまつたのでございました。お父さま、お終ひには、そんな原因が、眼早い解剖者に、わたしの心の何處にその小刃をさせば、一番祕密の場所を突き通すかといふことを教へるに違ひありません。」

「ルイザ。」と彼は言つた。しかも懇願するやうに言つた。といふのも彼はこの前彼等と會つた時二人の間にどんな事

—五九〇—

が起つたか、それをよく憶えてゐたからである。

「わたしはお父さまをお責めするのではありません。わたしは、何も愚癡をいつてゐるのでもないのですわ。わたしの此處へ參りましたのは、他の目的があつたのでございます。」

「娘や、何かはしに出来ることがあるか？——何なりゝからいつてみてくれ。」

「わたし、それを申し上げようと思つてゐました。お父さま、この頃偶然な事から、わたしの行手に一人の新しい知り人が現はれたのでございます。その人は、わたしが今まで見たこともないやうな人でございました。世馴れて、氣輕で、垢抜けがしてゐて、付き合ひ易い人で、少しも氣取るところもなく、どんなものに對してもわたしが内々で考へるのさへ半分恐いやうな氣がするほど輕蔑しきつたことをいふのでございます。そして直ぐに、わたしにはどうしてだか分りませんが、わたしといふ

ものが分つてゐるとか、わたしの考へを讀み抜いたとか、と言ふのでございます。わたしには、その人がわたしより悪人だとは、どうしても思へなかつたのでござぬます。するとわたしとその人との間には、何かしら近しい氣持があるやうに思はれたのでございます。一體、何の甲斐があると思つたのか不思議でなりませんけれど、外の何にも心遣ひなぞしたことのないその人が、わたしにだけ大へん心遣ひをなさるやうになつたのでございます。」

「お前にか、ルイザ！」

父は彼女の體から、力がぬけて行くのを感じなかつたなら、そして彼をちつと見つめるその眼に氣違ひぢみた火の擴がつて行くのを見なかつたなら、本能的に抱きかゝへてゐる腕を弛めたに違ひなかつた。

「わたしの心を掴んだそのきつかけのことは、申し上げませんわ。その人が、どんな風にしてわたしの心を掴んだか、そんな事はどうでもゐるのでございます。お父さま、その

人はたうたうわたしの心を掴みました。わたしの結婚の話も、お父さまが御存じなだけは、その人は直ぐに知つてしまつたのでございます。」

父は顔を灰のやうに白くして、兩腕に娘を支へてゐた。

「わたしは、何も間違つたこととは致しません。お父さまのお顔に泥を塗るやうなことは致しません。けれども、お父さまがその人を愛したのか、または愛してゐるのかとお訊ねなさいますなら、お父さま、わたしは隠さずに申しますけれど、さうかも知れないのでございます。わたしにはよく分りません！」

彼女は両手を突然に父の肩から外して、それをしつかり自分の體に抱きしめた。と同時に、いつもと似もつかない

—五九一—

彼女の顔に——また今一息で、自分の言はなければならないことに、きつぱりと最後のきまりをつけてしまふと、ぐつと伸ばしたその姿に——長い間抑へつけられてゐた感情がさつと漲つた。

「今夜、夫が留守なのに、その人はわたしのところに来て、わたしに対する愛情を打ち明けたのでござぬました。今頃あの人は、わたしを待ち兼ねてゐるのでござぬませう。でもわたしは外の方法ではあの人にわたしの傍を離れさせることが出来なかつたものですから。わたしには自分の可哀さうなのが分りません。わたしには自分の恥かしひの分りません。わたしには自分で自分の見下げ果てたところが分りません。たゞわたしの知つてゐるといふのは、お父さまの哲學やお教へでは、とてもわたしを救ふことが出来ないといふことだけでございます。えゝお父さま、お父さまがわたしをこんな破目にお落しなすつたのでございます。何か他の方法でわたしを助け出して下さいまし！」

彼は彼女が牀の上に崩折れて行くのを支へようとして、腕に力を籠めた、だが彼女は恐ろしい聲を揚げて泣いた。

「お父さま、わたしをお支へになると、わたしは死んでしまひます！わたしを下に倒れさして下さいまし！」父は、彼女を其處に横たへた。そして彼の心の誇りであり、彼の教育組織の勝利であつたものが、今、人心地のない一塊りとなつて、自分の足もとに倒れ伏してゐるのを彼は見たのであつた。

—五九二—

第三編 收穫

一、必要な今一つのもの

ルイザは失神状態から醒めた。そして生家の、昔馴染の自分の部屋の寢床の上で、力なくその兩眼を見開いた。最初のうち暫くは、彼女にとつて、まだこれ等のものが親しかつたあの日から、今迄に起つた出来事のすべてが、さながら夢の中の影法師のやうに思はれるのであつた。が、やがて彼女の眼に、それがだんだんと眞實のものとなつて来て、今までの出来事も彼女の心にだんだんはつきりと思ひ浮んで来るのであつた。彼女は頭が痛く、重くて、殆ど動かすことが出来なかつた。強ひて兩眼を開いてはゐたものゝ、まだ痛かつた。そして一體にひどく弱つてゐた。彼女は一種奇妙な放心状態にとらはれてゐて、暫くの間は、小さな妹がそこにゐるのさへ氣付かなかつた。二人の眼が合つたので、妹がルイザの寢床に近寄つて来た時さへも、彼女はたゞ黙つて、暫くは妹をぢつと見詰めたまゝであつた。そして、妹がおづおづと自分の手を取るに任せてゐたが、やがてかふ訊ねた――

「わたしは何時この部屋に聯れて來られたの？」

「昨夜よ、お姉さま。」

「誰が此處へわたしを聯れて來たの？」

「シッシイですわ、きつと。」

「どうしてお前はさう思ふの？」

「でもねえ、シッシイが今朝此處にゐたのをわたしが見つけたのよ。いつものやうにわたしを寢床の傍まで起しに来てくれなかつたものですから、わたし探しに行つたのよ。するとね、シッシイは自分の部屋にも何處にもゐないものですから、わたし家中を探し廻つたところ、やつとこの部屋でシッシイがお姉さまのお頭を冷しながら看病してゐるところを見付け出しましたの。お父さまにお會ひになりますか？お姉さまがお目覺めになつたら、お父さまにさう申し上げるやうにと、シッシイが言ひましたわ。」

「ジェーン！お前は何といふ活々した顔をしてゐるのだらうね。」若い妹が、――そつと――跪ついて接吻しようとした時に、ルイザはかふゐつた。

「あらさう？お姉さまにさう見えたらわたし嬉しいわ。屹度シッシイのお蔭に相違ないわ。」

ルイザは妹の頸に捲かうとした腕を、その儘にして「なんなら、お父さまにさういつておくれ。」とひつたが、また一寸妹を引き止めて、「わたしの部屋をこんなに綺麗に居心地よくしてくれたのはお前だつたのね。」とひつた。

―五九三―

「あゝえ、さうぢやありませんわ、お姉さま。わたしが此處へ來ない前から、こんなに綺麗になつてゐましたの。屹度、あの……」

ルイザは枕の向きを變へて、それ以上聞かうとしなかつた。妹が部屋を去つてしまふと、彼女は再び頭を元通りに向け直し、戸の方へ顔を向けて横になつてゐた。やがて戸が開いて父が入つて來た。彼は弱り、疲れて、心配さうな顔付をしてゐた。平生は頑強な手が、ルイザの兩手に握られて、ぶるぶる震へてゐた。彼は寢床の側近く腰を下して、娘に氣分はどうかと優しく訊ねた。そして、昨夜あんなに昂奮したり、雨に打たれたりした後だから、どこまでも安靜にしてゐる必要があるといふことを、細々説くのであつた。彼は聲を落して、當惑したやうな様子で、話した。その調子は平生のあの横柄な態度とは非常に違つてゐた、そして時々どういつていゝか言葉にさへ困ることが屢々であつた。

「ねえ、ルイザ、可哀想に……」と其處まで言ふと困惑してしまつて、言葉を途切らした。が、またゐひ直した。

「不仕合せな……」問題が問題だけにいひ出すのが大變むつかしくて、またゐひ直して見た。

「ルイザ、わしは、昨夜、このわしの身に起つたことで、どれほど打ちのめされたか（今でもさうだが）、とてもこのわしにはうまく話し切れないのぢや。わしの立つてゐるこの大地が足下に溶けて崩れ出したのぢや。わしが今まで絶対に大丈夫だと思つて凭れかゝつてゐた唯一の支柱、今まで力と頼み、今も尚ほ力と頼んでゐるものが、一瞬間になくなつてしまつたのぢや。わしはこのことに思ひつゝゐて気が遠くなつてしまつた。わしは何も自分勝手な意味からかふいつとるのではないよ。たゞ昨夜受けたあの打撃といふのは、實際ひどいものだつた。」

彼女はそこで、父をどう慰めてゐるかその術を知らなかつた。彼女も同じ打撃から全生涯を暗礁に乗り上げて難破してゐたのであつたから。

「わしはぢや、ルイザ、何時かもつと以前に、お前がうまくわしの迷ひを覺ましてくれたらよかつたのに、さうしたら、お前の平和の爲めにも、わしの爲めにも、お互ひによかつたのに、などゝは今更いふまひ。といふのは、さういふ種類の諒解を持つことが、わしの主義の中には多分なかつたのを、知つてゐるからぢや。わしは自分の主義を實行したのぢや、——わしの主義を自分で實行したのぢや、嚴格に實行したのぢや。ぢやからその失敗についての責任は、わしが持たねばならん。たゞわしはぢや、お前、お前達の爲めによかれと思つてしたのぢやといふことを、お前に信じて貰ひたひのぢやが。」

—五九四—

彼は熱誠をこめてさういつた、公平にいへば彼は本音をはいてゐたのだ。彼は自分の、小さな、つまらない、短い竿で、底も知れぬ海の深さを測り、また自分の鏽ついて脚の固くなつた兩脚規で宇宙の大きさを測量してゐながら、偉大な事業でもしてゐる積りだつたのである。彼は仲間のお喋り聯中よりは遙かに一心に脇眼もふらず、人生の花を踏みにじりつゝ、自分の狭い眼界内で藻掻き廻つてゐたのであつた。

「お父さま、わたしはお父さまの仰しやるのが、よく分りますわ、わたしはお父さまのお氣に入らだつたのですもの。お父さまがこのわたしを幸福にして下さらうとなすつたことは、よく存じて居ります。わたしは一度だつてお父さまを批難したことはございませんでした。またこれからだつて決してございませぬわ。」

彼は娘が伸ばした手を取つて、自分の手の中に握りつけてゐた。

「ねえお前、わしは昨夜は終夜、机に向つたまゝ、お互ひの間に起つたこの辛い出來事に就いて、幾度も幾度も考へてみたのぢや。わしはお前の性分を考へ——わしがこの幾時間に知つたものを、お前は幾年もわしに隠してゐたこと——それが、辛抱にも辛抱が出來なくなつて、たうたうこの擧に出たことを考へて見ると——このわしが自分を疑はざるを得んといふ結論に達したのぢや。」

彼は、娘がぢつと彼の顔を見つめてゐるのを見て、もつと何もかもいつてしまはふとした。彼が娘の額に亂れかゝつてゐる髪の毛を、搔き上げてやつたのは、その意味からであつた。かふした小さな仕草、ほかの者ならほんの瑣細な仕草も、彼にとつてはいかにも稀有のことであつた。それで、娘はさうした僅かのゐたはりの動作も、悔悟を語るものだと思つた。

「だがな、」とグラッドグライントは、如何にも頼りなゐ、みじめな様子をして、そろそろとためらひ勝ちにあつた。

「若しわしが過去の點で、自分を疑ふ理由が分るなら、現在だつてまた將來だつて、矢張り疑はざ

るを得ないに決つてゐるよ、ルイザ。わしは率直にお前にかふいふのぢや。昨日の今頃なら、まるで違つた感じを持つてゐたかも知れんが、今はとてもわしには、お前がわしを信じてくれるその信頼に酬いる資格があるとは確信がもてない。折角、お前がかふして家に歸つて来て、わしに訴へてくれたが、わしはそれに何と答へていゝか分らない。——わしはどうしてお前を助け、又どうして正しい道に引き直してゐゝかといふことに就いて、正しい本能——何かしら正しいものと、今の場合假定していふのぢやが——を自分が持つてゐるとは、どうも信じられなくなつてゐるのぢや。」

—五九五—

彼女は枕のまゝ向き直つて、腕に顔を埋めたので、彼はそれを見ることが出来なかつた。彼女の狂亂や激情がすっかり静まつた、然し氣持が柔らみだとはゐへ、泣いてはゐなかつたのである。この點では父親の方がひどく變つた氣持になつてゐた、彼は娘が泣いてくれた方が嬉しかつたに違ひない。

「或る人達は、」と彼は、尙もためらひ勝ちに續けた。「頭腦の智慧といふものと、心の智慧といふものがある、といつてゐる。わしはさうは思はんかつた。ぢやが今もゐつた通り、わしは今自分を疑つてゐる。わしは頭腦といふものは全能だと今までは思つてゐた。ところが頭腦は全能でない場合もあるらしい。今朝になつてわしはそれが全能ぢやなどゝどうして力説することが出来るよ！若し、その今一つの智慧がわしが無視してゐたものであつたなら、またそれこそ必要な本能であつたならぢや、ルイザ——」

彼は、今でも矢張り、半分はこのことを認めるのを好まぬものゝやうに、ひどく疑はしげに遠廻しにかふゐつた。彼女は父の言葉には答へずに、昨夜父の部屋の牀の上に倒れてゐた時のまゝ、まだ半分衣服を脱いだばかりで、父の前にある寢床の上に横たはつてゐた。

「ルイザ。」と彼は再び娘の髪に手をやつていつた。「なあを前、わしはこの頃隨分家を留守にしてゐたのぢや。しかも、お前の妹の教育も——わしの方針通りに實行されてゐたのぢやが、——彼は方針といふ言葉まで来るたびに落膽の態であつた——「毎日交際が忙しかつたので、妹の教育は、早くから當然加減されてゐたものにちがひなかつた。わしは訊ねる。——わしは知らんのぢやから折入つて訊ねたい、どうぢや、それがゐゝ結果になつたのぢやらうか？」

「お父さま。」と彼女は何の感動もなきやうに答へた。「若しもそれで妹の初々しい胸の中に少しでも調和が目覺めたのでしたら、結構なことすわ、わたしの場合ではそんな調和が目覺めるといふやうなことがありますでした、さうと分つたときにはもう遅くて、たゞ不調和があるばかりでしたから。妹は神様にお禮をゐつて自分の途を進んだらゐゝと思ひますわ。わたしの通つて来たやうな道を歩かなかつたのを、この上もないお恵みだと思つて——」

「おゝ娘、娘！」と彼はいかにも淋しさうにゐつた。「お前のその様子を見るこのわしは、何といふ不幸者だらう！お前がわしを批難しないからとてそれが何にならう、わしは自分で自分をこんなに酷く責めてゐるのぢや！」彼は頭を垂れて、鬢を落して彼女にゐつた。「いや、ルイザ、先頃から愛と感謝といふ一事から、何よりもこの家の、このわしのまはりに、少しづゝ何かの變化が起つてゐるらしい、

—五九六—

頭腦だけの力が仕残してゐたもので、また頭腦だけの力では出来ないものを、心から薄く愛の力が、やりとげて来たやうな氣がするのぢや。さういふことが、あり得るぢやらうか？」

彼女は何の答へもしなかつた。

「わしはそれが信じられんほど、傲慢な人間ではないんぢや、ルイザ。どうしてわしは威張つてなごゐられるものか。お前を前に置いて！どうだらう、さういふことがあり得るかね、さうぢやらうかね？娘。」

彼は、すっかり打ち棄てられたやうに横たはつてゐる彼女を、もう一度眺めて、これ以上は一言もいはずに部屋を出て行つた。彼が出て行つて間もなく彼女は、扉の近くに輕い聲音がするのを聞いた。そして、誰か彼女の傍に立つてゐるのを知つた。彼女は頭を上げなかつた。見られたくもないこの態を見られたといふ鈍い怒り、しかもあれ程彼女を苛立たせたあの時のわざとらしくない憐憫の眼に、その豫想通り、この態を今見られるといふかすかな憤りが、彼女の胸に毒炎をあげて燃つてゐた。秘められてゐた感情はすべて爆發し破壊するものである。大地にとつて生命の元となるべき空氣、地を富ますべき水、地を成熟せしめる熱は、その閉ぢこめられた時に、卻つて大地を裂き破るのである。今の彼女の胸の中も、それと同じであつた。彼女の持つてゐる最も強い性質は、長い間、それ自身の制抑にのみ向けられてゐたので、今は一塊りの片意地となつて、心からの友（シッシイ）に反抗したのである。彼女の頸に軽く觸れるものがあつた。彼女は自分が熟睡してゐるのだと思はれてゐることを知つた、これはゐゝことであつた。彼女に觸れた優しい手は彼女を怒らせはしなかつた。そのまゝにさせて置かう、そのまゝに。その手が彼女の頸に觸れたまゝであるうちに、いろいろな温かな優しい思ひ出が湧いて來た。彼女の心は安まつた、あたりの静けさと、かふ見守られてゐるといふ自覺とから、彼女の感性がやはらげられると、眼にはをのつと涙が浮んで來た。見守つてゐる顔は、彼女の顔に觸れた。そして彼女は、その顔にもまた、涙の浮んでゐることを、自分がその涙の原因であることも知つたのである。ルイザは、努めて起き上る氣勢をみせて坐り直したので、シッシイは身を退いた、そして靜かに寢床の傍に立つてゐた。

「お休みのお邪魔ではございませんでしたかしら。あの、わたしお傍にお附添ひさせてゐたゞきたくて、お許しを伺ひに參つたのですけれど。」

「どうしてわたしの傍にゐたいの？妹がお前を探すでせうに。お前は妹にとつては無くてならぬものですよ。」

「まあこのわたしが？」とシッシイは頭を振つて答へた。

—五九七—

「いへ、わたしはあなたのお役に立ちたいのでございます、お間に合ひますならば。」

「何ですつて？」とルイザは少し嚴しむ口調であつた。

「あなたが一番お望みのことで、そして、わたしに出來ますことでしたら、どんなことでも致します。どんなことでも、出來るだけあなたのお望みに添ふやうにいたしたいと存じます。どんな面倒な御用でも、使つてさへ下さいますなら、わたしきつと力を落さずにやつてお目にかけますわ。お許し下さいますして。」

「お前は、お父さまのお言ひついで來たのでせう。」

「あゝえ、あゝえ。」とシッシイは答へた。「あなたのお父さまは、わたしがこゝへ來てもあゝとは仰しやりました。でも今朝はわたし、お父さまからこの部屋にゐるお許しがゐたゞけませんでしたの——はつきりさうとは仰しやらないにしても、あの、わたしだけで——」とシッシイはあひ淀んで口をつぐんだ。

「わたしだけでどうしたといふのですの？」とルイザは探るやうな眼付をシッシイに投げかけてゐ

つた。

「わたしだけでは、あちらへ参つた方が一番の、とかふ思つたのです。といひますのは、わたしが此處へ参りますのが、お氣に入るかどうか、何だか大へん不安に思ひましたので。」

「わたし、平生からそんなにお前を嫌つてゐて？」

「若しさうでございませんでしたら、と思ひますけれど、わたしは、いつでもあなたをお慕ひ申して居りましたし、わたしの心が、どうかあなたにも通じますやうにと、いつでも願つて居りましたから。でも、あなたがお嬢においで少し前から、わたしに對するあなたのお仕打ちが少し變つて参りました。けれどもわたし、別に不思議にも思ひませんでした。だつてあなたは何事に就いてもよく御存知ですし、わたしはまた何一つ知らない馬鹿ものですもの。いろいろのことにしても、あなたがわたしなどにはお構ひなく他のお友達の方へあつしやるのは、ほんとに當り前のことでして、わたしも、何の不服の申し上げやうありませんでした、また氣持を悪くするやうなこともありませんでした。」

シッシイは、穩かに、それでも早口にかふつた時に、顔がほてつてゐるのを覺えた。ルイザはこのシッシイの優しいかこつけを理解した、そして彼女の心は彼女を責めた。

「では、わたしをあなたのお役に立てさせて下さいませすかしら？」とシッシイはいつて、思ひ切つてルイザの頸のところへ手をあげた。ルイザの頸は我れ知らずシッシイの方へ垂れて行くのであつた。ルイザは、今自分の頸を抱かうとしてゐるシッシイの手を取つて下へおろし、それを自分の手

—五九八—

に握つてかふ答へた—

「ねえシッシイ、お前はこのわたしがどういふ人間だかを知つてゐて？わたしは本當に高慢で頑固な人間で、それに、いま頭が滅茶々々になつてゐて困り切つてゐるから、誰に對しても、自分自身にさへも、ひどく怒りつぼくて不公平なのよ、まるですべてのものが、わたしにとつて、荒れ狂つてゐて、眞暗で、意地悪で、もあるやうに。それでも、お前はわたしが厭ではないの？」

「えゝゝ！」

「わたしはひどく不合せよ、それにわたしを幸福にする筈だつたすべてのものは、皆荒しつくされてしまつたのだから、今といふ今まで何の分別もなく、それはお前が思つてくれてゐるやうな物識どころではなくて、今から極く簡単な眞理を學び始めなくてはならないとしたら、情ないことだけれど、平和とか、満足とか、名譽とか、そのほかわたしが全く持つてゐない善いものに導いてくれる案内者が今のわたしほど要る人はない位なの。それでもお前は厭ではないの？」

「えゝゝ！」

彼女のけなげな愛情の清淨さ、またかつて捧げてゐたその眞心を燃え立たしたことによつて、この一度見棄てられた少女は、今や途方に暮れてゐるルイザの暗い心の上に、美しい光のやうに輝いたのである。ルイザは自分の頸を捲かうとしたシッシイの手を取り上げて、跪つきながらこの浮浪人の娘にすがりつき、殆ど拜みたいやうな心で彼女を見上げた。

「許しておくれ、わたしを可哀さうに思つておくれ、わたしを助けておくれ！わたしのこの大きな不合せに同情しておくれ、このわたしの頭を、お前のその愛情のこもつた心の上に載せておくれ！」

「おゝゝゝゝへお載せ下さいまし！」とシッシイは叫んだ。「さあ、どうぞこゝへお載せ下さいまし。」

二、飛んだ笑ひ草

ジェームズ・ハートハウスは、一日一夜を非常な焦躁のうちに過した。この氣狂ひぢみた間では、世間の人がどんなるゝ眼鏡をかけて見たとしても、彼をあの道化者の國會議員の弟のジムとしては認め難かつたらう。彼はすつかりのぼせきつてゐた。紳士ともあらふ彼が、野鄙に近い大聲を發したことも二度でなかつた。何の目的も持たない者のやうに、ホテルの門口を出たり入つたりしてゐた様子は、何と解釋してゐゝか分らない、さうかと思へばまた追剝のやうに馬を駈けさせるし、——手短かにいへば、身のまはりのすべてに倦き倦きして終つたので、お上品な儀禮の大

—五九九—

家達に規定された仕方、その退屈さを示すことなど、忘れてしまつたのであつた。嵐の中を、さながら一跳びのやうに、コークタウンまで馬を乗りつけてから、彼は一晚ちう起きて待つてゐた。恐ろしい勢ひで時々ベルを鳴らしては、不寢番の門衛に——何處からか自分宛の手紙が來てゐなくてはならない筈なのに、未だに渡さないのは不届千鳥だ、即座にそれを寄越せ、と叱りつけるのであつた。やがて東の窓が白んで朝になり、晝になつた、しかも手紙も何も來なかつたので、彼は別荘へ出掛けへ行つた。が、バウンダアビイは留守で、夫人は町へ行つてゐる。昨夜突然出掛けたといふのである。おまけに今のところ夫人は何時歸つて來るか、その通知が來るまでは分らない、また出かけたことさへ家人達に知れなかつたとのことであつた。かふいふ譯で、彼は夫人の後を追つて町へ行くほかは無かつた。町の家に行つてみても、バウンダアビイ夫人はゐなかつた。銀行へ立ち寄つてみた。バウンダアビイは不在、スパージット夫人も同じく不在。スパージット夫人が留守？あの『怪物』のお對手を仰せつかるやうな破目に押し詰められたのは一體何處の何者だらう。

「さうですね、僕には一向ありませんが。」とトムはゐつた。彼はこの事件について自分だけの不安があつたのである。「スパージット夫人は今朝夜明けに何處かに出掛けて行きましたよ。あの人のすることは、何時でも分らないことだらけですからね。僕は大嫌ひさ。それからあの生つ白い奴も大嫌ひさ。いやに、ばちばちした眼で、人を見る奴でね。」

「トム君、君は昨晚は一體どこにゐたのかねえ？」

「僕が昨晚何處にゐたのかですつて？」とトムはゐつた。

「じよ、じやうだんぢやありません。僕はあなたをお待ちしてゐたのですよ。ハートハウスさん。あなたの汽車が來るまで待つて待つて待ちくたびれてゐたのですよ。だのに僕が何處にゐたのかですつて？冗談ぢやありません。あなたが何處にゐたのかつてのゝ間違ひでせう。」

「來られなかつたんだよ、君——手間どらされてね。」

「手間どらされてゝすつて？」とトムがひつた。「ぢや二人とも手間どらされたといふ譯ですね。僕だつて、あなたを探するのに手間どらされて、お蔭で列車にみんな乗り遅れて、郵便列車しかなくなつちまつたつて次第です。あんなひどい晩に郵便列車なんかにゆられて、揚句が水溜りを徒歩で家に歸るといふのも、時にとつて一興だつたかも知れませんがね。結局僕は町で一晩とまるよりほかに仕方がなかつたんです。」

「何處で？」

「何處でゝすつて？無論バウンダアビイの家の自分の部

—六〇〇—

屋でござすよ。」

「で、君は姉さんに會つたかね？」

「どうして、どうして、」とトムは眼を見張つてゐひ返した。「十五哩も遠くにゐる姉にどうして會へるもんですか。」

ハートハウスは、彼の親友として信頼してゐるこの青年から、かうして早速の逆振りを喰つたのに忌々しい氣を出して、甚だ不作法な態度でこの會見を切り上げた。そして一體今度のことはどうした譯かと、幾度も幾度も自分に問うてみた。だが、結局彼にはつきりと分つたのは、たゞ一つのことであつた。それは果して彼女が町にゐるのか、又は田舎の方でゐるのか、そしてまた彼女を理解することが非常に困難だつたのに、彼はそれを早合點し過ぎてゐたものか、又は彼女の方に勇氣が途中で挫折したのか、或はまた二人が話してゐるところを、誰かに見付かつたのか、今のところ何が何だか分らないが、何か間違ひでも起つたのか、——何れにしても、かふなつた上は、自分はどんな運命になるにせよ、このまゝ踏み止つてこの運命と戦はねばならぬといふことであつたり、彼がこの眞黒の土地に滞在中、起き伏してゐることを誰もよく知つてゐるホテルこそ、實に彼が結びつけられてゐる火刑柱であつた。彼は今はそこに止つてゐるより仕方がなかつた。その他のことに就いては——成るがまゝに任せてゐた。

「決闘狀か、それともうまくゐつて密會の場所でも知らせて寄越すか、否、後悔して諫め文句でも並べ立てゝ來るかな、或は友人のバウンダアビーとランカシャー流に早速摺み合ふことにでもなるか——現在の様子では、これはありさうなことだが——何を待つてゐるとしても、兎に角腹拵へだけはして置くことにしよう。」とジェームズ・ハートハウスがひつた。「バウンダアビーはおれよりも重い。だからブリトン流の何か二人の間で起るとすれば、支度をして置く方がよからう。」

そこで彼はベルを鳴らして、安樂椅子にだらしなく身を投げ出したまゝ、「六時になったら晚餐にしてもらはふ——ビフテキをつけてな。」と命令した。そしてそれまでの時間を出來るだけよく過した。だがそれは大して好くもなかつた。といふのは、彼は實際は當惑しきつてゐたからである。時間ははずんずん経つて行つたが何のゑも考へも浮ばず、たゞ困惑の度が複利的に増すばかりであつた。然しながら彼はこの事件に對して人間の心に取れるだけの冷靜な態度をとつた。そして幾度もこの決闘の支度を冗談事に考へて、自分の氣休めにしてゐるのであつた。或る時は欠伸まじりに「給仕に五シリングもやつて奴を抛り出さしても惡いことでもないな。」とつぶやいて見たり、「さもなければ十三ストーンか十四ストーン位ゐる（一ストーンは十四封度）も目方のある男を

一六〇一

その時まで一人雇つて來て置くのもよからう。」と思つてみたりした。だが午後になると、かふいふ冗談も氣休めにはならなくなつて、例の何ともあへない不安が出て來た、それで實際のところ、彼にとつては時間がひどくのろのろ経つやうな氣がした。晚餐前から彼はもう辛抱が出来なくなつて、度々絨毯の花模様の上を歩き廻つてみたり、窓から外を眺めたり、聲音でも聞えて來はしないかと扉の傍で耳を澄ましたりした。そして度々部屋の近くに來る聲音を聞いては、若しやそれかと思つて、かつとなるのであつた。しかしながら夕喰本終つて、日が傾いて夕方になり、夕方が夜になつたけれども、何の消息もなかつた。それは彼にゐはせると、まるで『宗教裁判所に呼び出されて、ぢりぢり攻められる』やうなものであつた。然しながら彼は冷靜に考へこむことは、立派な高尚な教養であるといふ確信をもつてゐた（それは彼の有する唯一の確信だつたが）、で、彼はこの大事な危機をその教養を増す好機會として蠟燭と新聞とを持つて來ると命じた。

彼は半時間ばかりこの新聞を讀まうとしたが徒であつた。その時いよいよ給仕がやつて来て、何やらいぶかしさうに、又氣の毒さうにかふるつた――

「御免下さい。あの一寸旦那様に御用がありますさうで。」

まるで巡査が暴徒を取り押へる時に使ふ言葉のやうに思はれたので、ハートハウスはかつと憤慨して、髪を逆立てんばかりにおれに『用がある』といふのは一體何處の奴だ、と給仕に聞き返した。

「御免下さいまし旦那様。若い御婦人の方が、旦那様にお目にかゝりたいとあつて外にみませんが。」

「外にだつて？何處だ？」

「この扉の外にございませうが。」

ハートハウスは貴様のやうな馬鹿者は惡魔にでもさらはれてしまへ、それが貴様の分相應だとのしりながら、急いで廊下の方に出てみた。すると、まだ一度も見たことのない一人の若い婦人がそこに立つてゐた。身装は粗末だつたが、いかにも靜かに、いかにも美しい婦人であつた。彼はその婦人を部屋の中に案内して椅子をすゝめた、そして蠟燭の光で眺めてみると、最初一見した時よりも一層美しいのが分つた。彼女の顔は如何にも無邪氣で、若々しく、その表情はすばらしく愉快さうであつた。彼女は彼に對して少しも臆する色がなかつた。また少しも取り亂したところがなかつた。彼女はこの訪問の目的にすつかり心を取られてゐたらしく、その考への爲めに自分を忘れてゐるやうに思はれた。

「失禮ですが、あなたはハートハウスさんであらつしやあますか？」彼女は一人きりになるとかふるつた。

一六〇二

「いかにも私はハートハウスです。」彼は又、心の中であひ添へた。「しかもお前は今まで見た事もないほどの強い確信でこのおれに話しかけてゐるのだ（靜かでこそあれ）、今までおれが聞いたことのないほど熱心な聲で。」

「わたし」とシッシイがひつた。「外のことでしたら、あなたが紳士としての御名譽にかけてお守り下さるかどうか存じないにしても……また本當に存じないのでございませうけれど（彼女がかふるつたときに彼の顔にはありありと血がのぼつた）、屹度、わたしがかふしてお訪ねしたことを、わたしがこれから申し上げることはあなたの御名譽にかけて祕密にして下さいますでせうね。大丈夫とお約束下さいますなら、わたしあなたをお信じ申して……」

「お約束いたします。」

「御覽の通りわたしは若い娘でございませう。またたつた一人でございませう。こゝに参りますに就いては、わたし決して自分の意志のほかに、誰からも諭されたり、勧められたりしたのではございませう。」

彼は一寸彼女の眼を見上げて、「すると、實に強い女だなあ。」と思つた。そして更に、「これはまた、とても奇妙な序幕だが、一體、おれに何を話し出す積りだらうか。」と思つた。

「わたしが唯今、何處から参りましたか、あなたはもう御推察のことゝ存じますが。」とシッシイはゐつた。

「私はこの二十四時間といふもの、或る婦人の件に就いて實にひどく悩まされてゐるのです。私にとつてはこの二十四時間が数年間のやうに思はれます。」と彼は答へた。

「察するところ、あなたはどうもその婦人の處からおいでになつたやうな氣がしますが、屹度さうでせう。」

「わたしその方のお宅から出て参りまして、まだ一時間と経たないのでございます。」

「お宅といふと——」

「その方のお父さまの處でございます。」

ハートハウスは冷静に構へてゐたが、流石に驚きを顔に現はして、ひどく心配になつて來た。「うむ、これは、どうなるか知れないぞ。」と彼は思つた。

「あの方は、昨晚大急ぎでお父さまの處へいらしたのでございます。お着きになつた時は、大へん興奮なすつて、一晩中氣が遠くなつておいでございました。わたしはあの方のお父さまのお宅に住んでゐるものでございます。そして以前はづゝとあの方と一緒にゐたことがございました。申し上げるまでもなく、あなたはもう一生涯あの方とお會ひになることが出来ないのでございます。」

ハートハウスは、ほつと長い息をついた。若し誰か、何といつていゝか全く言葉に窮した人間があつたとすれば、

一六〇三

この自分こそ正しくそれだ、と考へた、子供のやうに無邪氣なシツシイの言葉、溫和しくて、しかも物に恐れぬ態度、どんな技巧をも打ちまかしてしまふその眞實さ、自分がこゝを訪ねて來た目的をしっかりと果すために全くわが身を忘れ切つた、その熱心な沈着さ、すべてかふいふものが、彼がたやすく與へた約束に對する信頼と一緒に——この信頼だけでも、すでに彼は恥かしく思つたのであるが——彼が今までに全然経験したことのない、日頃使ひなれた如何なる武器をも、全く無力に終らしめるにちがひない或るものを示したので、彼は自分の立場を救ふための、たゞ一言の辯護の言葉をも發することが出来なかつた。やがて彼はあつた。

「こんなに驚くべき通知を、そんなにきつぱりと、そのお口から仰しやられては、實際、私も當惑します。あなたは、あの御婦人からかふいふ思ひ切つた通知を私に傳へると頼まれておいでになつたのですか、それをお聞かせ下さい。」

「あゝえ、あの方から頼まれたはけではないでございます。」

「溺れる者は藁をもつかむ、といひます。あなたの判断を尊敬しないわけでも、あなたの信實を疑ふわけでもありませんが、私がかふいふのをどうぞ許して下さい。私が永久にあの人に會はれなくなつたといふやうなことはないかと私は信じてゐる。私はまだ一縷の希望があると信じてゐるのです。」

「あゝえ、少しもそんな望みはございません。わたしが此處へ参りました第一の目的と申しますのは、あなたにはもうあの方とお話しをする望みが絶対にないといふことを信じてゐたゞかねばならぬといふ、はつきり申し上げる爲めでございます。どうぞあの方が昨晚お父さまのお家へお歸りになつた時に、途中で死んでおしまひなすつたものとお考へ下さいやうに。」

「どうあつても私は會ふ望みが無いと思はねばならないのですか？だが私が若しさう信じられなかつたなら——私の未練から、この考へに執着して——どうしても……」

「それでも矢張り同じでございます。望みはございません。」
ジェームズ・ハートハウスは疑はしさうな微笑を唇に漂はして彼女を眺めた。だが、彼女の思ひつめた心には、彼癒など眼中になかつた。彼の微笑も徒らに消えた、彼は唇を噛んで、暫く何か考へてゐた。

「よろしい、受くべき當然の苦痛をうけ、義務を守つたのに、なほもかふして嬮けられて寂しい目に會ふのは辛く思はれますが、止むを得ません、私はこの上あの人を苦しめたくはありません。だがあなたは、あの人から頼まれた譯ではないといひましたね？」

一六〇四

「やうでございませぬ、わたしはたゞ、あの方に對するわたしの愛と、わたしに對するあの方の愛に動かされて、參つただけでございませぬ。あの方がお實家へお歸りになつてからわたしはあの方にお附添ひ申してをりまして、あの方がわたしに皆うちあけて話して下さつた、といふ唯この一事を力に此處に參つたのでございませぬ。このわたしはあの方のお氣質や結婚についてはある點まで存じてゐる、といふ一事だけを頼りに、あなたにお目に掛りに參りましたのです。おゝハートハウスさま、あなたも、この信賴はお持ちになつてゐること上存じますか。」

彼は痛烈な詰責の一語に、嘗ては心臓があつた筈の急所を突かれた。——そこは腐敗した卵の巢になつてゐた、若し口笛で追ひ立てられなかつたなら、天の小鳥達が住んでゐたことであつたらう。

「私は決して道徳的な男ぢやありません。」と彼はあつた。

「私は決して自分が道徳的な男だなど、見せかけたことがありません。私は、場合によつては實に不道徳な人間になります。同時にまた、今話してゐるあの婦人を困らせたり、不幸にも何かのことであの婦人に迷惑をかけたか、あの婦人に向つて家庭生活を破壊するやうな——實際——自分の本心を告白したり、あの婦人のお父さんが機械のやうな人間であり、また、あの婦人の夫が熊のやうな野蠻人であるのにつけ込むやうに思はれたにしても、これだけは慥かにいつて置きますが、私は決して、特別に惡の意志があつたものではありません。たゞつい一足づゝずると何處までも惡魔的の早さではまり込んでしまふのです。何時だつて自分で真をめぐつてみるまでは、その目次の半分も長からうなど考へたことがないのです。ところがいよいよ真をめぐると、「ジエームズ・ハートハウスはかういつて言葉をむすんだ。「何冊かの續きものだといつていゝ位長いことが分るのです。」

彼はこれだけのことを、すらすらといつてのけたものではあつたが、このみひ方はたゞ醜い表面をさらけ出さないやうに上塗りをかけてゐるだけやうに見えた。彼は暫く黙つてゐたが、今度は一層目信のある態度でかふるひ續けた。が、明らかに上塗りをかぶせきれない不機嫌と失望のあとが見えた。

「いまお話し下さつたので、しかも、疑ふことの出来ないほどに眞面目にお話し下さつたので——あなた以外の口から聽いたのでは、これほど早くこの話を信じることは出来まひと思ひますが、——私は是非かふるはなくてはならないやうに感じます。つまり今いはれた信賴が置かれてゐるそのあなたに對して、最早や私が奥さんにお目にかゝる機會がないものと（どんな偶然にでもです）信ずることを拒

一六〇五

むわけにはいくまいと思つてゐるといふことです。事件がこんなになつて來た責任は私一人にありません——しかも——しかもですね。」と彼は締めくくりの交句に窮してかふる附け加へた。「私は自分が道徳的な人間になる時があらふなど、有望な期待をもつたり、またいかなる道徳的な人間に對して少しでも信賴をもつたりするとかいつことは、斷固出来ませぬ。」

シツシイの顔はハートハウスに對して彼女の訴へがまだ終つてゐないのだといふことを明らかに示した。

「あなたはあなたの第一の目的を話されましたね。」と彼はシツシイが再び眼を上げて彼を見た時にかふるあつた。「それで、今度は第二の目的が多分あるのでせうか？」

「ええ。」

「どうかそれを打ち明けて下さい。」

「ハートハウスさま。」と彼女は答へたが、その調子には全く彼を打ち負かしてまふ優しさと嚴めしさが交つてゐた上に、彼女の要求する事柄がどれ程彼には不利益であつても、當然彼が履行しなければならぬのだといふ單純な確信がこもつてゐた。「あなたがなさらなければならぬ唯一の償ひは、あなたが只今すぐに、そして永久に、こゝをお立退きになることです。あなたのなすつた間違ひと不幸とは、これより外の方法では宥めることが出来ないと思ひます。わたしは、これがあなたのお力で出来る唯一の償ひだと思ひます。これだけで結構だとも十分の償ひになるのだとも申しません。でも、いくらかの償ひにはなりませんし、またそれが必要なのです。ですからわたしには、先程も申し上げたやうな資格よりないのでございますけれど、何もいはれなくても、又わたしとあなたと二人の外には知つてゐる人もないのでございますけれど、どうぞあなたは決して歸つて来ないといふ約束で、今晚この土地をお立ちなすつて下さいまし。」

若しシッシイが、自分のいつたことを、眞實で正しいとひたすらに信じてゐる以上に、彼に對して何等かの働きを及ぼさうとしたなら——シッシイがみさゝかたりとも疑念か躊躇を隠してゐるか、或はどんなよい意味からにしても、遠慮や虚色を宿してゐたなら——また、彼の笑止な情態、恐懼、或は彼が持ち出せば出し得る抗議に對し、いさゝかでも動かされた形蹟を示すか感ずるかしたなら、彼は忽ちそれを利用して、シッシイを攻撃する武器としたであらふ。だが、彼は、晴れた空をたゞぼんやりと眺めてゐるだけでは曇らせることが出来ないと同様に、シッシイの心を動かすことは到底出来なかつた。

「だがあなたはあなたの要求の範圍がどんなに大變なものか御存じですか。」と彼は全く困惑したらしくかふゐつた。

一六〇六一

「あなたは多分御存じないでせうが、私は一種の公務でこの地方に来てゐるのです。その公務といふのは、それ自身としては随分遠方もないやうなものです。私はそれに加はつて、誓約までして、全く懸命に『やり出して』ゐると想像されてゐるのです。あなたは多分それを御存じないでせう、然しそれは事實なのです。」

事實であらうがなからうが、シッシイに何の影響も與へなかつた。

「それにまた、」とハートハウスは部屋の中を二、三度行つたり來たりしながらゐつた。「そんなことをするのは實に馬鹿げてゐる。この聯中の仲間に入つて、働いた後で、そんな譯の分らない方法で身を退くなんて飛んだお笑ひ草にされるといふものです。」

「でも、あなたのお力で出来ることで、あなたの罪を償ふ方法は、それより外にはないとわたしは信じます。」シッシイは繰り返した。「でなかつたら、わたしはこゝへ參りなどしなかつたでございませう。」

彼はシッシイの顔をちらつと見やつてからまた部屋の中を歩きまはつた。

「何といつたつて、他に私のいふべきことはない。そんなひどい馬鹿げたことがありますん！」

彼は今どうしても一切を祕密にする條件を持ち出さなければならなくなつた。

「若し私がそんな馬鹿げた笑ふべき眞似をするとなればです。」と彼は又歩みを止め、爐棚によのかゝりながらゐつた。「たゞ、絶對に祕密を犯さんやうにしなければならぬと思ひますが。」

「わたしはあなたをお信じいたします。」とシッシイは答へた。「あなたもわたしをお信じ下さいまし。」

彼は爐棚にもたれかゝつてゐながら、やぐさ青年と一緒に話した夜のことを思ひ出した。それもやはりこれと同じ爐棚で、何だか今夜は自分があのやぐさ青年のやうな氣がするのであつた。彼は全くどうしてあゝか分らなかつた。

「假りにも堂々たる男子がこれほど小ひどく馬鹿な目を見せられたことがあらうか。」と彼は下を向いたり、上を向いたり、笑つてみたり、怒つてみたり、行きつ戻りつ歩き廻つたあとで、かふゑつた。「だが、どうも外に切り抜ける方法もない、まあゑゝ、成るやうに任せよう。やはりこれより外に方法がないのかな。ではどうでも立ち去らなければなるまい——結局やはりお約束することにするか。」シツシイは立ち上つた。彼女はこの結末には驚かなかつた。それどころか彼女は嬉しさの餘り明るい顔になつた。

「いや私にこれだけは言はして下さい。」ジエームズ・ハートハウスは續けた。「どんな偉い大使が來ようが、女大使が

一六〇七

來ようが、私に對してこれと同じ成功を贏ち得ることは覺束ないのです。私は自分が甚だ笑ふべき破目に陥ちたのだと認めるばかりではなく、完全に征服されたことも認めなければならぬ。ところで私の強敵のお名前を承はる光榮に浴されんものでせうか？」

「わたしの名前ですか？」とこの女大使がひつた。

「今晚、私の是非承はりたい唯一の名前です。」

「シツシイ・ジュープと申します。」

「お別れ間際にこんなお訊ねをして失禮ですが、あなたはあの家の御親戚の方ですか？」

「わたしはたゞの貧乏な娘といふだけでございます。」とシツシイは答へた。「父とは引き離されて

——父は浮浪人の仲間でした——グラッドグラインド様のお情けで引きとられました。わたしは、それからづゝとあのお宅で暮してゐるのでございます。」

彼女は出て行つてしまつた。

「これであうたう敗北したわひ。」とハートハウスがいつて暫くちつと立ち竦んでゐたが、諦めたやうな様子でソーフアの上に腰を下した。

「これで一敗地にまみれたといつていゝ。たゞの貧乏な小娘——一介の浮浪人——このジエームズ・ハートハウスともあらふものが、どうする事も出来なかつたぢやないか、ジエームズ・ハートハウスもかふなれば失敗のピラミッドか。」

このピラミッドの話から、彼は埃及へ行つてナイルの岸を辿つてみることを思ひついた。そこで彼は直ぐさま筆をとつて、兄にあてゝ左の手紙を適當な象形文字で書き送つた。

『親愛なるジャック兄——コークタウンでの萬事は終つた。もう此地にもうんざりしたので亞弗利加へ行つて駱駝對手に何かやることにする——早々。ジムより』

彼はベルを鳴らした。「おい私の召使ひを呼んでくれ。」

「先程お休みになりましたが、旦那様。」

「起きて荷拵へをするやうにゐつてくれ。」

彼は更に二通の手紙を書いた。一通はバウンダアビイにあてゝ、自分はこの地を去るが二週間以内に居所を知らせる旨を告げ、他の一通はグラッドグラインドにあてゝそれと同様のことを告げた。宛名

を書いた墨汁が乾くや否や、彼はコークタウンの高い煙突を後に見て、汽車に乗つて眞暗な野原を光り物のやうに全速力で駆け去つたのである。

例の道徳家達はかゝる想像したかも知れない、ジエームズ・ハートハウスは、即刻この土地を立ちのいたので、それが何かの罪滅しになつた彼の珍らしい行動の一つとして、又大きな悪行の頂點を逃れたといふ自分自身への證據として、後になつて、いさゝか慰むるところがあつたであらふと。だがそれは全く間違つてゐた。失敗して馬鹿を見た

一六〇八

いふ心ひそかな感じ——同じ種類のことを好んでやるところの他の聯中が若し知つたなら、彼を何といつて笑ふであらうか、といふ恐れ——これが彼の心を苦しめた。その爲めに彼の生涯中で一番美しい一幕となりかけたものが、何としてもそれを自分の仕草として認めたくない他の芝居的一幕となつたのみか、彼をして自分自身が恥かしいと思はしめた唯一的一幕となり終つたのである。

三、斷然たる決心

強情我慢のスパージット夫人は、ひどい感冒を引きこんで聲はすっかり嘎れ果てた上、引つ切りなしの嚏に苦しめられたので、さすがに堂々たる彼女の體も、手足がばらばら抜け落ちさうになりながら、彼女の庇護者の蹟を追つて、たうとう倫敦で彼を見つけたのである。セント・ジエームズ街の彼の旅館で、威儀をつくつて彼の前に出ると、今まで口許までいつぱりに填められるだけ填めて來たものを一度に爆發させてしまつた。自らその一語々々を味ひ樂しみながら使命を果してしまふと、流石氣高い彼女も、バウンダアビイの上衣の袖に取り纏つたまゝ、すつかり失神してしまつた。

バウンダアビイの第一の仕草は、スパージット夫人を袖から振り離して、牀の上に倒れさせたまゝ、彼女が苦しみ腕ゐても成行きに任せて置くことであつた。やがて彼は病人の拇指を捻ぢ曲げたり、両手を打ちたゞいたり、彼女の顔に水を浴せたり、口中に喰鹽を押し込んだり、いろいろ有效な氣付け法をとつた。これらの手當での爲めに彼女が意識を回復した時（かふした處置は觀面にその効果を見せた）彼は、彼女の元氣をつけるやうな飲食物を何一つ與へずに、いきなり一番最初に間に合ふ汽車に彼女を押し込んで、生きてゐるといふよりは、寧ろ死んでゐるやうな彼女をコークタウンへ聯れ戻つたのである。一種の古蹟としてこれを眺めれば、スパージット夫人が、コークタウンへ歸りつゝ来た様子は、實に興ある觀物であつた。だが一方から考へると、その時まで彼女が續けざまに受けて來た損害は、あまりに大きくて、貴婦人として賞讃される彼女の資格をすっかり減じてしまつた。彼女の衣服の破れや、體の疲れなどには全くお構ひなく、また彼女の哀れな嚏も頓着なしに、バウンダアビイは直ぐに彼女を馬車に押し込んで、攫ふやうにしてストーン・ロッヂへ聯れて行つた。夜の遅いのも構はずいきなり舅の部屋へ飛び込んだバウンダアビイは、「さあ、トム・グラッドグラインド。こゝにほひでのこの御婦人ぢやが、——スパージット夫人ぢや——君はスパージット夫人を知つとる筈ですな——何か君に話すことがあると仰しやるんぢや、魂消てしまふやうな話が……」とひつた。

一六〇九

「君はわしの手紙を見なかつたのぢやな！」とこの突然の出現に驚いたグラッドグラインドは、かふ叫んだ。

「見なかつたですとも！」とバウンダアビイは怒鳴つた。

「この際だ、手紙なんぞに構つてゐられるものか。慣りながらこのコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイがかふ大決心をしてゐるんぢや。手紙の事なんぞ聞く耳は持たん。」

「いやバウンダアビイ。」とグラッドグラインドは穩かに諫めるやうに、「わしはルイザのことで君に宛てゝ書いた、非常に重大な手紙のことをいつてゐるんぢや。」

「トム・グラッドグラインド。」とバウンダアビイは筆で卓子をどしんどしんと幾度も打ちながら答へた。「わしは、ルイザのことでわしのところへやつて来た、非常に特別な使者のことをいつてゐるのぢや。さあ、スパージット夫人、前に出なさい！」

そこでこの不幸な婦人は、陳述しようと試みたが、聲が全く出ず、咽喉に炎症を起してゐる證據に身振りがいかにも苦しきうで、いかにも忌々しきうに、顰め面ばかり見せてゐたので、バウンダアビイはたうたう我慢が出来なくなつて、彼女の腕を引つ捕へて體を揺ぶつた。

「あなたが言つてのけられんといふなら、」とバウンダアビイはゐつた。「わしが言つてのけるのを見てゐなさい。どんなに偉い血統の方にしろ、貴婦人ともある方が、この際、人の耳にまるで聞えんやうな聲を出したり、おほじき玉を鵜呑みにするやうな顔をしとる場合ではないのぢや。トム・グラッドグラインド、スパージット夫人は近頃ふとしたことで君の娘と君の立派な友人の紳士ジェームズ・ハートハウスとが、戸外で話をしてゐるのを立ち聞きした譯ぢや。」

「本嘗か？」とグラッドグラインドはゐつた。

「本當だとも！」とバウンダアビイは叫んだ。「そしてその會話の中に――」

「いやバウンダアビイ、その話は繰り返して貰ふ必要はない。わしはどういふ話だつたかを知つてゐるのぢや。」

「知つてゐる？」とバウンダアビイは、この餘りに落ちつき切つた確信のある眞の言葉を聞いて、すつかり吃驚した。

「ぢや恐らく君は、娘が今何處にゐるかそれも知つてゐるぢやらうな。」

「無論ぢや、娘はこの家にゐる。」

「この家にぢやと？」

「さうぢやよ、バウンダアビイ、頼むからさう大聲でわめき立てんで貰ひたひ。ルイザは此處にゐるのぢや。娘は、君が今ゐつた男との會見から逃れるや否や、どうか保護してくれとわしの處へやつて来たのぢや。あの男を君に紹介したことを、わしは深く悔いてゐるよ。娘がこゝへ――この部屋へやつて来たときには、わしが帰宅して幾時間も経

一六一〇一

たん時ぢやつた。娘は急いで、汽車で町へやつて来たのぢや。それから大暴風雨の中を、町からこの家まで走つて来たのぢや。まるで氣狂ひのやうな有様でわしの前に現はれたのぢや。勿論、それ以來づつとこゝにゐる譯ぢやがね、どうかお願いだから、君自身の爲めにも、娘の爲めにも、もつと靜かにして貰ひたひ。」

バウンダアビイは暫くの間、無言のまま、自分の周圍を眺めまはした。スパージット夫人の方だけは見ずに、あらゆる方面を眺めまはした。が、やがて急に、レデイ・スカッチャアズの姪の方に向き直つて、この慘めな夫人にゐつた。

「さあ、奥さん、ありもしない出鱈目の話をふりまはしてこんなに大急ぎで田舎を駆けつりまはつて、此處にやつて来た」と對して、少しでも正當ないひ譯があるなら、喜んで承はりたいものぢや！」

「あなた。」とスパージット夫人はさゝやいた。「あなたの御用で、神経が、今はすっかり亂れきつて居りますし、體も今はすっかり損み切つて居りますから、わたしはたゞ泣くより外に道がございませぬ。」と言つて、彼女は泣きくづれた。

「よろしい。」とバウンダアビイはあつた。「あなたのやうな良家の婦人に對して、禮儀を缺くやうなことはおはんで置くが、たゞ一言かふ言ひ添へた方がおゝやうぢや。つまり、あなたは泣いたりなんぞするよりも、もつと外に道があることぢや。といふのは馬車に乗ることです。それも、わたしちがたつた今乗つて來たあの馬車でな、丁度戸口のところにありますよ。お氣の毒ぢやが、わたしはあなたがあの馬車に乗つて、さつさと銀行の方へお歸りになつてもらひたひんぢや。銀行に歸つてから、あなたの取るべき最善の處置はぢや、あなたが我慢出來る限りの熱い湯の中に足を浸けて、それから寢床に入つたら、焼傷するやうなラム酒にバタを入れたやつをぐつと一杯引つかけることですぢや。」とバウンダアビイはかふおひながら、右手を泣いてゐる貴婦人の方へ突き出して、頻りに哀れな嘯を聯發する彼女を馬車へと送り込んだ。そして直ぐに彼は一人部屋に戻つて來た。

「さて、トム・グラッドグラインド、君の顔付で分つたが、君は何かはしに話があるんぢやらう。」と彼はあつた。「何なりと言ひたまへ。ぢやがはつきり言つとくが、わたしは今決して愉快な氣持ではないんぢや。この事件は、君が話した通りかも知れんが、わしの氣にくはん。今度に限らず、何時だとして、わしは君の娘から貞節に淑かに扱はれたことがあるとは考へて居らん。コークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイがその妻から當然扱はれなければならないやうに扱はれたことがないんぢや。君はきつと、君だけの意見

—六一—

があるぢやらう。わしにも亦無論、わしの意見がある。君は今晩わしに何か言ひたひつもりでも、若しそれがこの腹の底を割つたはしの氣持と反對することなら、言ふのはお止めになつた方がおゝぢやらうと思ふよ。」

一目見て分るやうに、グラッドグラインドはひどく折れてゐたので、バウンダアビイはすべての點で氣を引き緊めて行くのに特別な苦心をした。それは彼の愛嬌のある性質からであつた。

「いや親愛なバウンダアビイ——」とグラッドグラインドは答へかけた。

「いや、ちよつと待ち給へ。」とバウンダアビイがひつた。「わたしはそんなに『親愛』にされたくはないんぢや。先づ第一にです。誰かゝわしに親しくし出すのは、その人間が自分を征服することを目標んでゐるからぢやと、いつもかふ考へるんぢや。わたしは君にやさしく物をあつては居らん。御承知の通りわたしは怒つとるのぢや。君は優しくして貰ひたひのぢやつたら、何處へ行つたらいか御存知ぢやらう。君には、立派な紳士の友人達があるんぢや。あの聯中なら君の御注文通りにあしらつてくれるぢやらう。このわたしは眞平ぢや。」

「バウンダアビイ。」とグラッドグラインドがひつた。「わたし達は、得て間違ひに陥りやすいものぢやから——」

「わしは、君など間違ひをすることがあるまいと思つとつた。」とバウンダアビイは口を挟むんだ。「多分、わしもさう考へつたかも知れん。ぢやが今もいふやうに、わし達は皆間違ひに陥りやすいものぢや。それで若し君がハートハウスも矢張りその通りなぢやと思つてくれたら、わたしは君の思ひやりを心から有難いと思ふのぢや。わし達の話の中で、わたしは君が、ハートハウスと親密にしたり鼻屑にしたりしたことは言はんことにしよう。どうか君も、わたしと彼のことを一緒に言はんでくれ給へ。」

「わしは彼の名前を出しはせんかつたよ！」とバウンダアビーがひつた。

「うむ、さうか！」とグラッドグラインドはちつと忍んで、甘んじて彼に服してゐるときへ見える風でかふ答へた。そして暫くの間、考へに沈んで腰かけてゐたが、「バウンダアビー、わしはわれはれが一度でもルイザの氣持を十分理解したことがあつたかどうか疑はしいと思ふよ。」

「君は、今われはれといつたね。一體そのわれはれといふのは誰のことぢや。」

「われはれといつて悪ければこのわしがとひつてもあるのぢや。」と彼はこの亂暴な質問に答へた。「わしはルイザを理解してゐたかどうか、疑はしいのぢや。わしは娘に對する教育法が、果して正しかつたかどうか、疑はしいと思ふ。」

一六二一

のぢや。」

「そこぢや。」とバウンダアビーは答へた。「その點はわしも君と同意見ぢや。君には今になつてたうたうそれが分つたのぢやね。さうぢやないか？その教育ぢや。教育とは何か、よろしい、教へてあげませう——わしのやうに生れると直ぐ戸外へ眞逆様におつぱり出され、たゞ殴り倒されるといふだけで、あとは何の斟酌もされないことぢや。これがわしのいふ教育なんぢや。」

「ぢやが、君も常識で分ることぢやらうが。」とグラッドグラインドは何處までも謙遜な態度で言葉を返した。「君のいふ方法にはこれほど價值があつても、それを世の中の娘達に廣く應用することは難かしいことぢやらう。」

「何アにちつとも難かしいと思はんね。」とバウンダアビーは頑固に答辯した。

「さうか！」とグラッドグラインドは歎息した。「もうこの問題には觸れんことにしよう。きつぱりといつて置くが、わしは別に論争はしたくないのぢやから。わしの求めてゐるのは、出来るなら今迄の間違ひを償ひたひといふことぢや。ぢやから君も喜んでわしを助けてくれ、バウンダアビー。わしはひどく惱んでゐるのぢやから。」

「わしはまだ君のいふことが分らん。」とバウンダアビーはますます頑固になつた。「ぢやから、そんな約束なんか出来やせん。」

「ぢやが、バウンダアビー、たつた數時間でぢや。」とグラッドグラインドはやつぱり沈んだ和解を求めらうな調子であつた。「わしは過去十數年間にも増して、ルイザの性質がよく分つたやうに思ふのぢや。わしは否でも應でも眼を醒まさねばならぬやうな場合に立ち到つたのぢや。それはわしの發見ではない。わしの考へでは——バウンダアビー、わしがこんなことをいふと君は驚くぢやらうが——ルイザには立派な素質があるとわしは思ふ。それが——それが今迄はひどく無視されてゐたのぢや。」

「その爲めに少しひねくれて生長したのぢや。それでぢや——それでわしは君にいつて置きたいが——君が若しこれを機會にどうかはしのいふ通りにしてくれて、暫くの間、努めて娘のぬゝ性質の思ひ通りにさせてやつてくれるなら——そして優しく注意深くしてやつて、そのぬゝ性質を伸ばすやうに元氣づけてやつてくれるなら、——それこそ——わし達皆の幸福のために實にゝのぢやが。ルイザはな、……」とグラッドグラインドは手で顔を掩つてゐた。「いつでもわしの氣に入りの娘ぢやつたんぢや。」

バウンダアビーはこの言葉を聞くと眞根になつてふくれ上り、今にも痼癩を破裂させさうに見えた。或は實際させたのかも知れない。彼は兩方の耳を紅味の交つた紫色に染

一六二二

めたが、とにかくその忿怒を抑へた、そしてゐつた。

「君は、暫くあれをここに置きたいといふのぢやね？」

「わしは——わしはぢや、バウンダアビイ、君にお願ひして、ルイザが實家歸りをしたことにして暫くここに置いて、あのシッシイ（勿論セシリヤ・ジュープのことぢや）に看護させることを許してもらはふと思つたのぢや。シッシイはあれをよく理解しとるし、あれもシッシイを理解しとるからね。」

「すべての事柄を綜合すると、嬰するにぢや、トム・グラッドグラインド。」とバウンダアビイは兩手をポケットに突つ込んだまゝ立ち上つて、ゐつた。「君のお説ではわしと妻との間には、世間ではよくいふ性の合はない處があるといふのぢやね。」

「困つたことぢやが、今のところでは、ルイザと、その——えゝゝゝその、あれの周圍すべてのものとの間に、性の合はんところがあるのぢやらう、と思ふんぢや。」と彼は悲しげに答へた。

「うむ、さうか。そんならぢや、グラッドグラインド。」とバウンダアビイは眞赧に怒つて、兩脚を廣く開き、兩手を一層深くポケットに突つ込んでゐつた、——髪の毛は忿怒が疾風の如く荒れ狂ふてゐる枯草畑のやうに亂れ立つた。「君は君のゐひ分をゐつた。これからわしはわしのゐひ分をゐはぶ。わしはコークタウンの人間だ。わしはコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイだ。わしはこの町の家を一々知つてゐる。この町の商賣も皆知つてゐる。この町の煙突も残らず知つてゐる。この町の煙も知つてゐる。この町の労働者達も知つてゐるのぢや。わしはそれ等をすつかりよく知つてゐるのぢや。それは皆事實なのぢや。このわしに空想ちみたことをいふものがあれば、よし誰であらうともわしはいつでもその人間に、彼が何をいつてゐるのか知つてゐるといつてやる。その人間の意味してゐることは、海龜のスープや鹿の肉を金の匙で喰つたり、六頭立ての馬車を備へつたりすることなんぢや。君の娘の望んでゐるのもそれぢや。一體君は娘が欲しいと思へば、どんなものでも必ず與へるといふお考へぢやから、娘のためにそれを備へつけてやつたらどうぢや、わしは忠告する。何故かといへば、トム・グラッドグラインド、君の娘はこのわしにそんなものを備へてもらはふと思つたとて、わしは決して君の娘の思ひ通りにしてやりはせんのだやから。」

「バウンダアビイ。」とグラッドグラインドがひつた。「先程もお願ひしたことぢやから、もう少し穩かな物のゐひ方をしてくれてもよからうと思ふが……」

「いや、先づ待ちたまへ。」とバウンダアビイはゐひ返した。「君は自分のいふことはもうゐつてしまつた筈ぢや。わしはすつかり聴ゐてしまつた。どうか今度はわしのいふ……」

一六一四

とを聞いてくれたまへ。自分で自分自身を不公平の手下にするのは止してくれ給へ。といふのは、わしぢやとて、トム・グラッドグラインドともあらふ人が、只今のやうな立場に立たされたところを拜見するのはお氣の毒に思ふが、君がこんなものゝ手本になり下つたところを見ると、二重にお氣の毒に思ふからぢや。ところで君の娘とわしとの間に、何か性の合はんところがあるといふことは、今君から分らせて貰つた、で今度はその代りに、わしの方からかふいふことを分らせて上げよう。最も重大な不調和が歴然とあるんぢや、と——それをかいつまんでいへば——つまり君の娘は夫の價値を正當に知つてゐないといふことぢや。従つて驚いたことにはその夫と結婚したことを名譽に思ふといふ觀念がちつとも無いことぢや。明らさまにいふとかふいふわけぢや。」

「バウンダアビイ。」とグラッドグラインドはゐつた。「それは無理といふものぢやらう。」

「無理ぢやと、」バウンダアビイはゐつた。「いや、君にさういはれるとわしは嬉しい。何故ならぢ

や、トム・グラッドグラインドはその新しいお説でわしのいふことが無理ぢやといふ以上は、わしは自分で直ぐ、これは恐ろしく道理に適つたことに違ひないと確信が出来るからぢや。君のお許しを願つてわしは言葉を進めよう。君はわしの生ひ立ちを御存知ぢや。またこれも御存じの通り、わしは随分長い間といふもの、靴籠一つ必要がなかつたのぢや、何故なら鞆一足持つてはをらんかつたからね。ところでぢや。信じやうと信じなからうと、君の御勝手であゝのぢやが、それでも世間にはわしの歩いてゐる地面を拜まんばかりにしとる貴婦人が——生れながらの貴婦人ぢや——家柄のよい——生れながらの貴婦人があるんぢや。」

彼はこの言葉をさながら火箭のやうに眞の頭上に浴せかへた。

「ところが君の娘は、生れながらの貴婦人などゝはどうしてもいはれん。」とバウンダアビイは續けた。「そのことは君も知つてゐる筈ぢや。ぢやが、さういつたからとて、何もわしがそんなものを嗅煙草の一つまみほども大事に思つとるのではない。わしがそんなものを意になかつたことは君も知つてゐる筈ぢや。ぢやが事實はこの通りぢや。トム・グラッドグラインド、君はこの事實をどう曲げることも出来はせん。が何故こんなことをいふのか分るかな？」

「わしの手間を省いてくれるといふわけぢやあるまいかね。」とグラッドグラインドは低い聲であつた。

「お終ひまで聞きたまへ。」とバウンダアビイがひつた。「そして君の順番が来るまで、口を挟むのは止してくれたまへ。何故わしがこんなことをいふかといへば、良家の貴婦

一六二五

人達が君の娘の平生の振舞ひを見て、その無頓着には驚いてゐるからぢや。その人達は、何故わしがそんな目に會つてゐるかと思議に思つてゐた。そしてわしも今こそ自分で不思議に思ふ、ぢやからわしは今ほもう決してそんな目にあつて黙つてはをらんことに決めたのぢや。」

「バウンダアビイ。」とグラッドグラインドは立ち上りながらあつた。「今夜のところは、わし達はなるだけ何も言はん方があゝとわしは思ふが。」

「反對ぢや、トム・グラッドグラインド、今晚は思つたことのあるだけ吐き出して終つた方があゝと思ふ。つまり——」といつて一寸考へて、「わしが自分のあはふとした事をあつてしまふまではぢや。それさへ濟めばもういくら早く話を止めやうがわしは構はん、では話を手つ取り早くする爲めに一つ伺はう。一體、君の今出した註文はどういふ意味かね？」

「わしの註文がどういふ意味かといふんぢやね、バウンダアビイ？」

「君の實家歸りの提案さ。」とバウンダアビイは例の枯草畑をふるはしながらあつた。「わしのいふのはぢや、どうか君が心よく暫くの間ルイザにこの家で休息させ、反省させることを許してやつて欲しいといふことぢや。さうすればいろいろな點で少しづゝあゝ結果が出て来るぢやらうからね。」

「君のあはゆる性の合はんといふ考へを、消す爲めにかね？」とバウンダアビイがひつた。

「君がそんな言葉であひたひならそれでもあゝ。」

「君は何處から今の提案を考へたのぢやね。」とバウンダアビイがひつた。

「わしが前にもあつた通りルイザは恐らく理解されてはあなかつたのぢや。バウンダアビイ。君はルイザより年も上のことぢやし、あれを正しい方へ導き直してやるのに力を添へてくれてもあゝと思ふが、こんなことを君に頼むのはひひ過ぎぢやらうか？君はあれの身をすつかり引き受けてくれたのぢやからね。——善きにつけ悪きにつけ——」

バウンダアビイはいつかステイヴン・ブラックプールに自分で言ひ聞かしてやつたこの言葉を鸚鵡

返しに聞かされるのは困つたことであつたかも知れない。そこでむつとして簡単にかふ言ひきつて、この引用文句を打ち切つた。

「まあ、宜しい。」彼はあつた。「わしはそんな言葉は聞きたくはない。わしがあれを何と考へてゐたか自分で知つてゐる。君だつてさうぢや。わしがあれを何と考へてゐようと、君の知つたことぢやないんぢや。わしの意見はこれぢや。」

「バウンダアビイ、わしはたゞ、われはれば多少の間違ひ

一六一六

をしでゐない者はないといふ事を言はふとしたゞけぢや。無論、さういふ君だつてその例に含めてな。君が受けてゐる信頼のことを考へて、君の方でいくらか譲歩をしてくれたなら、それは單に眞實の深切な行爲といふだけでなく、またルイザがそれだけ負ひ目を受けることにならうといふのを話さうとしたゞけなのぢや。」

「わしの考へはそれとは違ふ。」とバウンダアビイは怒鳴つた。「わしはこの事件を自分の意見通りに解決しようと思ふ。わしはそれに就いて別に君と喧嘩をしようとは思はん、トム。グラッドグラインド。正直にいへばこんなことで喧嘩をするのは、わしの名譽に對しても恥かしひことなんぢや。君のあの紳士の友人は何處へでも自分の好きな處へ勝手に行くがひゞ。たゞ若しもわしの眼前に現はれるなら、わしはわしの考へを彼にいつてやる。若しわしの眼前に現はれないなら、敢へて追求はすまひ。わしにはそんな徒な暇はないからね。君の娘については、折角自分の妻にした者ではあるが、また實家を離れてからは随分よくしてやつた積りではあるが、とにかく、明日の正午まで歸宅しないやうぢやつたら、わしはもう歸つて來る意志のないものと認める。それでわしは、あれの衣類その他をこゝへ送り戻さう。きうして、將來ほ君が永久にあれを保護してやるとゝ。妻との間の不和が、遂にわしに離婚の手續きを取らしめるに至つた成り行きについては、わしは世間一般の人々に向つてかういふ。わしはジョサイヤ・バウンダアビイぢや。そしてわしにはわしの育ちがある。あれはトム・グラッドグラインドの娘で、あれにはあれの育ちがある。二頭の馬は一緒に具合よく御せなかつた。わしはどちらかといへば變人として知られてゐると信じてゐる。ぢやから、長いうちに、わしの性に合ふやうになる女は、矢張りわし同様何れかといふと、並外れの女でなければならん、と。世間も直ぐ承知することぢやらう。」

「そこをもう一度、慎重に考へなほしてはくれまいかね。」とグラッドグラインドはあつた。「君がさう決心をする前にな。」

「わしは何時でも決心が出來てゐるのぢや。」とバウンダアビイは急いで帽子をかぶりながらあつた。「そして、わしは何事をするのにも、即座に實行するのぢや。餘人ならば兎も角、そんなことは最もよく知つてゐる筈のトム・グラッドグラインドが、このコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイに向つて、そんなことをいふとは驚くのはかはない。——わしがトム・グラッドグラインドの行爲に對して、何か驚くことがあるとするならぢや——しかも女々しい世迷言に與してな。わしはもう自分の決心を君に示した。ではこの上もう何もいふべきことではない。左様なら——」

一六一七

かふぬひ捨て、バウンダアビイは町の家に戻つて、寢牀についた、翌口の正午五分過ぎ、彼は妻の荷物を入念に荷造りさせて、トム・グラッドグラインドの許に送り返させた。彼はあの田舎の別荘を

相互契約で賣卻するといふ廣告を出した。そして再び獨身生活に入つたのである。

四、失踪

この間にも、例の銀行盜難事件は、消えてしまつたのではなく、この建物の主も第一にこれに對する注意を怠つてはゐなかつた。バウンダアビイは非凡の人物、腕一本で仕上げた人物として、また海ならぬ泥の中から出世した點にかけてはヴィナスの神よりも讚嘆すべき奇蹟的商才として、その決斷の迅速と活動を誇り顔に證據だてるともに、家庭問題の如きはほんの一些事であつて、彼の事務に對する熱心を少しも減ずるに足りないものだといふことを人々に示したがつた。それ故に獨身生活に歸つた最初の數週間は、彼はわざと平素通りの多忙振りを見せつけて、毎日々々盜難事件に對する調査を新たに始めるので、係りの役人達迄が殆ど皆、こんな忌はしひ事件など起つてくれなければよかつたにと願ふ程であつた。

役人達の方でもまたすつかり見當がつかず手掛りを嗅ぎ出すことも出来なかつた。彼等は事件突發以來、大抵の人には最早犯人搜索も絶望でそのまゝ打ち捨てられてゐるやうに思はれた程、鳴りを鎮めてゐただけれど、矢張りその後何一つ新しい出來事も起らなかつた。男にせよ女にせよ、本事件の犯人で、もうよからうと大膽に、自らその犯蹟を曝露するやうなものは一人もまだ出なかつた。更に注目すべきことは、かのステイヴン・ブラックプールの消息が尙ほ依然として不明であり、例の不思議な老婆は依然として不思議として残つてゐることであつた。

事態はこの通りで、それ以上に進展すべき何等の兆候も見出されなかつたから、バウンダアビイは調査の結果として、この上は最後の手段で一舉に事件の解決を敢行しようとした。彼はコークタウン銀行盜難事件嫌疑者たるステイヴン・ブラックプールを逮捕したものには、二十ポンドの賞金を與へるといふ貼札を造つた。彼は前記ステイヴン・ブラックプールの服裝、容貌、身長、平素の舉動などを、出来るだけ精密に記し、又如何にして彼は町を逃亡したか、彼の姿が最後に見られたのはどの方面だつたかなど、いふことを列擧して、人眼につくやうな大型の紙に大きい黒文字で印刷して、眞夜中に方々の壁に貼りつけさせた。かふして翌朝起きぬけにすべての人の視聽をこれに集中しようとしたのである。

その翌朝、工場の汽笛は、最大級の高音で鳴つて、夜明

一六一

けの遅い街々に一團となつて立つてゐた労働者の群を追ひ散らさなければならなかつた。彼等は例の印刷物の周圍に集つて、熱心にむさぼり讀んで動かなかつたからである。此處に集つたほどの者は、文字の讀めない聯中でも熱心に眺めてゐた。彼等は、友達が大聲で讀み上げてくれるのをぢつと聞きながら、——かふゐつた世話好きが何時もあるので——漠然とした畏怖と尊敬とで、こんなにも多くの意味を含んでゐる廣告の文字を見つめてゐた。かふいふ畏怖や尊敬は、若しそこに見られる公衆の無智といふ光景が何時も脅威と禍ひに満ちてゐさへしなかつたら、半分は滑稽に思はれるといつてもあつた。その後の幾時間かは、彼等は或は廻轉する紡錘、或は喧ましむ音をたて、動いてゐる動力機械、或は旋轉してゐる機械の車輪等のあひだに耳を働かしながらも、この廣告に書かれた事柄が眼にちらつて仕方がなかつた。そしてその日の仕事を終へて再び、工場から解放せられたとき、この廣告を讀む人々が尙ほ大勢あつた。

労働組合の代表員スラックブリッチもまたその夜、人々に向つて、一場の演説をしなければならな

かつた。彼は印刷屋から汚れてゐない新しい貼札を一枚貰つて・ポケットに入れて持つて来てゐた。おゝわが友よ、同國人よ、コークタウンの蹂躪せられたるわが職工諸君よ、わが同胞達よ、同じ職工達よ、わが市民達よ、同志達よ、我々のしなければならぬことは何であるか、とひつてスラックブリッジは、例の印刷物をひろげて、『この汚らはしき文書』といつて聴衆の労働者によく見えるやうに、そして聴衆に罵倒させるやうに高く差し上げて見せた。「おゝわが同志達よ、偉大なる精神を有するわが陣營、正義と結合との神聖なる名簿に登録せられてゐるわが團體の叛逆者が如何にもやりさう事ではないか、これ見たまへ！おゝわが平伏せる友人諸君よ、諸君の首には暴君の慘虐なる軀木が掛けられ、専制主義の鐵脚は、諸君の打ち倒された體を、大地の塵埃の中に踏みつけ、諸君の壓制者達は、諸君が庭園の中の蛇のやうに一生涯腹這ひ廻つてゐるのを見て喜んでゐるではないか。——おゝわが兄弟達よ、また姉妹達よ（男子であるわしはかふ言ひ添へるべきではなからうか）このいまはしく且つ嫌悪すべき文書、この屈辱的の辻ビラ、この醜惡なる貼り札、この憎むべき廣告に掲示されてゐる通り、猫背で、身長が五フイート七インチといふこのステイヴン・ブラックプールの事について、諸君が何といふか、諸君はこの毒蛇にも等しき奴を如何なる權威ある批難をもつて粉碎するつもりであるか、幸ひにして諸君ほ彼を永久に放逐したが、でなかつたら彼は神の如き人種の上に穢れと恥辱とを蒙らすのであつたらう！然り、わが周國人諸君、幸ひに

一六一九

して諸君は彼を誹斥し放逐したのだ！諸君は如何に彼が、諸君の面前に於いて、この壇上に立つたか、又如何に面と面と向き合はせ、足と足を接して、このわしがあらゆる方法をもつて、彼の入組んだ尻窟を追求したかを、記憶してゐるであらう。諸君は如何に彼が、こそこそと身を躲して逃げ廻つたりつまらぬ揚足とりをやつたりしたかを記憶してゐるであらう。遂に彼には縋りつくべき一インチの土地もなくなつたときに、如何にわしがわれはれの間から彼を投げ出してやつたかを、記憶してゐるであらう、——かふして彼は永久の輕侮の指を向けらるゝ對象、また、すべての自由な思想を持つものが極度に復讐の火炎で焼き枯らさうとする對象物となつたのである！さて、わが友達よ、——否、わが労働者の僚友達よ、わしはその労働者といふ名を喜び且つ誇るものだからだ——わが友達よ、堅くはあつても疚しいところの無い寢牀を努力によつてつくり、また乏しくはあるが獨立した竈を苦心の中に炊いてゐる諸君よ、わしはあはふ、諸君、あの臆病な卑怯者が、假面をひんむかれて、我々の前にその眞裸な不具者の姿をさらけ出して立つ時に、何といふ名をつけられてゐるか——何といふ名であるか？泥棒だ！掠奪者だ！首に賞金を掛けられた逃亡犯人だ！コークタウンのム全職工の高尙な人格にとつての膿瘡だ、大傷だ！それ故神聖に結束せるわが兄弟の一團よ、諸君の子供は素より、まだ生れない諸君の子供に到るまで、その幼ない手を堅く握り、互ひに結合して、味方する神聖な一團よ、わしは諸君の安寧幸福のために、常に監視を怠らず、常に諸君の利益を熱心に擁護してゐる聯合總評議會を代表して諸君にかふ提議する。本會は次のやうな決議をして頂きたい。即ちこの貼り札に書き出されてゐる職工、ステイヴン・ブラックプールは、既に完全にコークタウンの労働者團體から拒否されてしまつた人物であるから、コークタウンの労働者團體は、今や彼の犯罪に關して、その恥辱を分擔する必要は全く無い。そして又團體全體としても、彼の不正直な行動に就いて、少しも批難されることは無いと！

辯じ終つたスラックブリッジは、大袈裟な身振りで大汗をかき、しきりに齒ぎしりをした。すると、二三の聲が鋭く「否！」と叫んだ。だが三四十の聲が拍手喝采して大聲に「ヒヤ、ヒヤ！」と叫んだ。或る一人の男は「スラックブリッジ、貴様は熱狂しすぎてゐるぞ、貴様はあまり先走りしすぎると！」

と警告した。だがそれは大軍に向ふ侏儒の群のやうなものに過ぎなかつた。總會はスラックブリッジの提議を承認した。そして彼が聴衆に向つて、これ見よがしに喘ぎながら着席したときに、一同は彼の爲め萬歳を三唱したのである。

—六二〇—

この會衆の男女がまだ街上に靜かに彼等の家路をさして歩みつゝあつた頃のこと、——折柄數分前に、ルイザの前から呼ばれて出て行つたシッシイが部屋に戻つて來た。

「誰なの？」とルイザが訊ねた。

「バウンダアビイさんとそれから。」とシッシイはおづおづと名前をいつて、「弟さんのトムさんと、あなたが御存知のレイチェルとかいふ若い女の人です。」

「それでどういふ用があるといふの、シッシイ？」

「あなたにお會ひしたいのですつて。レイチェルさんは、泣いてゐました。そして何だか怒つてゐるやうでもありますわ。」

「お父さま。」とルイザは一度そこにある父親にゐつた。「わたしはあの人達と會はない譯には參りません、會はないと、何の用だか分かりませんから。あの人達を、こゝに呼んでもゐるのでございませるか？」

父親が承諾したのでシッシイは彼等を聯れて來るために出て行つた。彼女は直ぐに三人を聯れて來た。トムは何故か一番隅の、戸口近くの、部屋でも一番暗い場所に突つ立つてゐた。

「ミセス・バウンダアビイ。」と彼女の夫は部屋の中に一足入りながら冷たく一つ點頭ゐてかゝつた。「今頃やつて來て、さぞお邪魔ぢやらうが、わしがかゝつて訪ねて來なければならぬ理由は、この若い婦人から説明するぢやらう。トム・グラッドグラインド、君の息子のトムは、この婦人の言葉に就いてはどういふわけぢやか、善いにも惡いにも、何一言いふのを拒んでゐるんぢや。ぢやからわしとしては、君の娘と直接、對談しなければならなくなつたのぢや。」

「お嬢さま、あなたには一度お目にかゝつたことがございましてねえ。」とレイチェルはルイザの前に立つたまゝゐつた。トムは咳拂ひをした。

「あなたには、一度お目にかゝつたことがございましたねえ。」とレイチェルは、ルイザが答へないので再びかゝ繰り返していつた。「以前に一度。」

トムは再び、咳拂ひをした。

「えゝ製（えいせい）ございましたわ。」

レイチェルは誇らしげにバウンダアビイの方に向つて視線を投げてゐつた。「どこでお目にかゝつたのか、またその時は誰々がそこにゐたのでしたか、お嬢さま、どうぞ仰しやつて下さいまし！」

「それはあのステイヴン・ブラックプールさんの下宿してゐる家でした。丁度あの人が解雇された晩でした。その時にわたしはあなたに會つたのです。あの人もその場にゐました。そして一人のお婆さんらしい方もゐましたが、その方は何一言もいはず、部屋の隅の暗いところに立つてあま

—六二一—

方は何一言もいはず、部屋の隅の暗いところに立つてゐましたので、わたしは殆ど見えない位ででした。弟もわたしと一緒にでした。」

「をひトム。君は何故これこれだつたと言はなかつたんぢや？」とバウンダアビイは叱りつけた。

「僕は言はないと姉さんに約束したからなんです。」ルイザは急いでこの言葉を裡書きした。やくぎ青年は苦しうに言ひ放つた。「それに姉さんは自分の事情をあんなによく——そして詳しく——話すことが出来るんですから、僕が姉さんの口真似をする必要がないと思ひましたから。」

「どうぞお嬢さま、よろしかつたら、あの晩あの間の悪かつた時刻に、どうしてステイヴンの家などへゐらつたのでございますか、お話しなすつて下さいまし。」

「わたしはあの人が可哀想に思つたからです。」とルイザは顔を赧らめながらあつた。「わたしはあの人が、それからどうする積りだか知りたかつたからです。また出来るならわたしが助けて上げたいと思つたからです。」

「いや、有難う、奥さん。」とバウンダビイがひつた。「どうも深切なことぢや、いや有難う。」

「お嬢さまは、あの人にお紙幣をおやりなさいましたか？」とレイチェルは訊ねた。

「え、でも受け取つてくれませんでした。そして金貨で二ポンドだけなら頂いて置きますと云ひました。」

レイチェルは再びバウンダビイの方に眼を注いだ。

「さうぢや、いかにもその通りぢやー」とバウンダビイがひつた。「お前の馬鹿々々しひありさうにもない話が眞實かどうかといふ問題だけなら、成るほど、それは立派に確證されたとゐはんけりやならん。」

「お嬢さま。」とレイチェルはあつた。「ステイヴン・ブラックプールは、今この町中は愚か、到る處で、廣告まで貼られて、泥棒にされてゐるのでございます！今晩もその忌はしひ事件をかれこれ言ひ立てるために組合の集會があつたのでございますよ。お、ステイヴン！あの人はほんとに何よりも正直な、律儀ないゝ人なんですのに！」義憤の念に打ち勝たれて、もう言葉がつかなくなつたので、彼女はすゝり上げて泣いた。

「ほんたうに、ほんたうに、お氣の毒ですわ。」とルイザはあつた。

「お嬢さま、お嬢さま。」とレイチェルがひつた。「ほんとにあなたはさうを思ひになるでせう。ですがわたしには分りません。あなたはあの時どうなさるお積りだつたか、わたしには申せません！あなたのやうなお方達はわたし共のことを御存知がありません、わたし共などに御用がございませぬ、わたし共には關係がございませぬ。あなたは何の

一六二一

ためにあの晩あそこへいらしたのかわたしには分りませぬ。たゞあなたには何か目的があつて、あそこへいらした事だけは分ります、そして、あんな可哀想な人にはどんな迷惑がかゝらうが、少しもお構ひなしたつたのでせう。わたしはあの時に、ようこそお出で下さいましたといひました。わたしは眞心から申したのでした。——あなたは本當にあの人を可哀想に、お思ひのやうにわたしには見えませんでした。ですが考へると、さうであつたかどうか、わたしには分りませぬ、分りませぬ！」ルイザはレイチェルのひがんだ邪推を責めることが出来なかつた。彼女はそれほどあの男に對する信頼に忠實であり、またそれだけ強く苦しんでゐるのであつた。

「そして、わたしがあの時に」とレイチェルは嚙り泣きながらあつた。「あの可哀想な人が、あなたが深切にくれられたと思つて、あんなに感謝したことを考へますと、——又、あの人があなたの御深切の爲めに出て來た涙を隠さうと、あの激しい苦勞に荒れた手で顔を掩したことを思ひますと——え、それはあなたとつて氣の毒にはなるでございませう。ほんたうに心からさう思つて下さいますんでせう。でも、わたしには分りませぬ、分りませぬ！」

「そんな馬鹿文句を並べ立てに此處まで足を運んだのか、お前は見上げた代物だよ！」とやくざ青年は暗い隅で不安さうに身動きしながら唸った。「場所柄をもわきまへない位なら、さつきと此處からつまみ出されても仕方がないんだ。それが當然だから。」

彼女はそれには答へなかつた。たゞ忍び泣きの聲が聞えるばかりだつた。やがてバウンダアビーが口をきつた。

「さあ。」と彼はあつた。「お前は何をしにこゝへ來たのか知つてゐる筈ぢや。それを早く言ふがよい。泣いてなんぞあないで。」

「おや、ほんたうにわたしは」とレイチェルは眼を拭きながら答へた。「こゝにゐらつしやる皆さまにこんなところをお目にかけるなんてどうしたことせう。いへ、もうこんなところはお日にかけてはしません。お嬢さま、わたしはステイヴンのことを廣告で讀みました時、——それに並べ立てゝある事が眞實なら、お嬢さま、あの廣告は、あなたのことを書き立てゝゐるのだとゐつても眞實のことになりませうよ、——わたしは直ぐに、自分はステイヴンの在處を知つてゐる、あの人は二日以内に屹度此處に來させますからといふ慥かな約束をするつもりで銀行へ駆け付けました。すると、生憎バウンダアビーさまにお會ひすることが出来ませんで、あなたの弟さんに追ひ立てられました。それからわたしは、あなたにお目にかゝらうとお探ししましたが、あなたもゐらつしやゐませんでした。で、わたしは止むな

一六二二

く工場に戻つたのでござゐます。今晚工場を出ると直ぐにわたしはステイヴンがどんな評判を立てられてゐるか聞かうと思つてゐ急ぎました——といひますのは、あの人は屹度恥を雪ぐ爲めに歸つて來ることを、わたしはよく知つてゐますから——そこでわたしはまたバウンダアビーさんを探しに參りました。やつと探し當てましたので、わたしは自分の存じてゐることだけは残らずあの方に申し上げました。でもバウンダアビーさんは、わたしのいふことを一つも信じて下さいませんでした。そしてわたしをこゝへ聯れておいでになつたのでござゐます。」

「その點は、全く今の話の通りぢや。」とバウンダアビーは両手をポケットに突き込み、帽子をかぶつたまゝあつた。

「ぢやが、わしはお前達の聯中のこと位ゐは、前からよく知つてゐたのぢや。お前にもそれは分るぢやらう。お前達は死んでもお喋りの種をたやしたことのないのも知つとる。ぢやが、わしはお前に忠告するが、そんなお喋りばかりしてゐないで仕事をする方がゐゝのぢや。お前はいま何かするつもりぢやつたとひつたな。ぢや、その點でわしはたゞかゝるはう、早くそれをやるがひゝとな。」

「ですからわたしはステイヴンへ手紙を出しました。今日の午後でござゐます。あの人がゐなくなつてから一度手紙を出したことがありますから。」とレイチェルがひつた。「それであの人は、いくら遅くても二日のうちには此處へ歸つて來るでせう。」

「ぢやわしが一寸いつて聞かせてやらう。多分お前は氣がつかんのぢやらうが。」とバウンダアビーがゐひ返した。「お前も時々見張りをつけられてゐたのぢや。この事件の嫌疑がまるでないとは考へられんかつたのでな。人間は大抵そのつきあふ友達で判斷されるものだからぢや。郵便局のことぢやとて遺漏はあるものか。わしはお前にいふが、そのステイヴン・ブラックプール宛の手紙とかは一通だつて郵便局に到達してはをらんのぢや。だからお前が出した手紙がどうなつたかといふことはお前の想像にまかすとしよう。多分お前は思ひ違ひをしてゐるのぢやらう。あの男に宛てた手紙とかは、一通だつて書きはしなかつたのぢやらう。」

「お嬢さま、あの人が此處を立つてからまた一週間しか経ちません。」とレイチエルは訴へるやろにルイザの方に向いてゐつた。「その間にわたしの受け取つたたつた一通の手紙には、仕方がないから變名をして仕事を見付けるほかはない、と書いてありました。」

「ほう、ほんたうか！」とバウンダアビイは口笛を吹いて頭を振つて叫んだ。「あいつが名前を變へると！お前のいふやうな潔白な男が名前を變へるなんて、氣の毒な事ぢやよ。それでは法廷へ出てもしは疑はれるのが當り前ぢや。」

一六二四

罪も犯さないものが名前を變へたりなどするとな。」

「まあ、」とレイチエルはまた眼に涙を浮べていつた。「まあ、お嬢さま、お慈悲でございます。あの可哀さうな人が外にどう出來ましたらう！一方では雇主達があの人に反對しますし、又一方では仲間の労働者が反對しますでせう。あの人はたゞ平和に一生懸命働きたがつてゐるだけですのに、そしてあの人が自分で正しいと思ふことをしたがつてゐるだけですのに、人間は誰でも自分の魂をもつてはいけないのでせうか？自分の心を持つてはいけないのでせうか？此方へ行つても駄目、あつちへ行つても駄目、どちらへ行つても、兎のやうに狩り立てられなければならぬとは、一體どうしろといふのでございませう。」

「ほんたうにね、ほんたうにね、わたしはあの人を心から可哀さうに思ひます。」とルイザは答へた。

「そして、早くあの方が自分で身の證しを立てるやうにと祈つてゐますわ。」

「そのことなら、お嬢さま。あなたの御心配には及びませんわ。あの人は大丈夫、身の證しを立てますから！」

大方、お前はあいつの在所を白状しないから、それだけ大丈夫ぢやといふのぢやらう。え？」

「わたしがどんなことをしようが、あの人は聯れ戻されるといふ不名譽な目を見て戻つては來ないでせうよ。あの人は自分の身の證しを立てる爲めに、自分で戻つて來るでございませう。そしてあの人は、あの人の汚れない名前に——しかも、それを護らうにも現在此處にゐないあの人に、泥をなすつた人達皆に卻つて恥をかゝせてやるでございませう。わたしはあの人に、あの方がどんな仕打をされてゐるかといふことを知らせてやりました。」といつてレイチエルは岩が波を撥ね返すやうに、すべての不信を撥ね返してかふゐつた。「ですからあの方はいくら遅くとも二日のうちにはこゝへ歸つて來るでございませう。」

「それはさうぢやが、」と、バウンダアビイは附け加へた。「早く捉まれば、早く捉まるだけ身の證しも早く立つわけぢやらう。お前のことについては何もわしいふことがない。お前がわしのところへ來て話したことが眞實だと分つた。わしはお前の話の眞實かどうかを證據たてる方法を教へてやつたのぢや。これでお終ひぢや。いや諸君、わしはこの事件についても少し潔く調べる爲めに歸らなくちやならんから。」

バウンダアビイが身を動かした時に、トムも隅の方から出て來て、バウンダアビイにびつたりと喰つゝゐて、彼と一緒に出て行つた。彼は出て行きがけの挨拶として、「お父さん、お休みなさい！」とたつた一言、無愛想にゐつたゞけ、また姉には簡單な言葉と、苦々しい澁面を一寸

一六二五

見せたゞけで家を出た。

グラッドグラインドはあの頼みの大綱も切れ果て、以来、あまり物を言はなかつた。彼は彼等が出て行つても尚ほ沈黙を續けてゐた。そこでルイザは優しくあつた――

「レイチェルさん、お前さんが、このわたしをもつとよく知つたなら、いつかはわたしを疑はないで信じてくれる日が來ませう。」

「わたしはふだんどんなお方をでも疑つたりなど致しません。」とレイチェルは一層優しく答へた。「けれど、自分がこんな嫌疑を受けますと、――誰でもさうでせうが、――いくらわたしでも人を疑はずにはゐられなくなるのでございます。失禮ばかり申し上げて御免下さいまし。只今申し上げたやうなことを心から思つてゐるのではございませんが、でもあの可哀さうな人が、あんなに嫌疑を受けてゐるのを考へますと、さう思はずにはゐられませんので。」

「あなたはお手紙で、あの人があの晩銀行の近所をうろついてゐるのを人に見られた爲めに、あゝした嫌疑を受けてゐるらしいと、書いておやりになつたのですか？」とシツシイが訊ねた。「さうでしたら、あの人には歸つてからどうゐひ譯をしたらゐゝかつてことが分りませう。歸つて來る前に、何か考へがつくことでございませう。」

「えゝ書いてはやりました。」と彼女は答へた。「ですが、一體まあとどうしてあの人は銀行の近所へなど行つたのだか、それがわたしには想像がつきません。あの人は決して今まで、あの邊へ行つたこととはありませんでした。彼處はあの人が通ふ道筋では決してなかつたのですもの、あの人が工場へ通ふ道筋はわたしと同じなのです。銀行の近くを通るのではございません。」

シツシイは、この時はもうレイチェルの傍に行つて、レイチェルに何處に住んでゐるのか、またブラックプールから何か知らせがあるかどうか。明晩自分が聞き合せに行つてもゐゝか、どうかと訊ねてゐた。

「明日までに、あの人が此處へ來られるかどうか、それは分りません。」とレイチェルがひつた。

「でも矢張り明晩、わたしお訪ねしますわ。」とシツシイがひつた。

レイチェルはそれに同意して歸つて行つたときに、グラッドグラインドは頭を上げて娘にあつた――「ルイザ、わしはたしかその男を一度も見ることがないのぢやが。お前はその男がこの犯罪に關係があると信じてゐるかね？」

「随分信じ難いとは思ひましたが、その時はさうだつたと思ひますわ、お父さま。でも今はさうではありません。」

「では、お前はその男が嫌疑者だと聞いてから、お前自身でも信じようとしたといふのぢやね。その男の様子だの學

―六二〇―

動だの――はそんなに正直なかね。」

「大へん正直ですわ。」

「それにあのレイチェルの自信といつたら、全く強いものぢやからね！」とグラッドグラインドは考へ込みながらあつた。「眞の犯人はかふした批難を知つてゐるのぢやらうか？一體、眞の犯人は何處にゐるのぢやらう。眞の犯人といふのは誰ぢやらう？」

彼の髪の毛は近ごろ色が變り始めてゐた。彼が再び手で頭を支へたときに、それが如何にも灰色で老け込んだものに見えたので、ルイザは心配と憐憫を顔に現はして、急いで父の方へ行つて、その傍にびつたりと寄りそつて坐つた。彼女の眼はその瞬間、ふとシツシイの眼と合つた。シツシイは赧くなつてはつと驚いたので、ルイザは指を自分の唇に押し當てた。

翌晩シッシイは家に歸ると、ルイザにブラックプールがまだ歸つて来ないと告げるときに、彼女はそつと小聲でそれを囁いたのであつた。その翌晩もまた、前の晩と同じことで、シッシイが歸つて来て、何處に彼がゐるのか誰にも知れてゐないことを告げたが、この時にも彼女は前晚同様に、低いおぼおぼした聲であつた。かふして彼女達が眼を見合せたあの瞬間から、二人は決して、彼の名前を口に出さず、また彼のことについては、何事も大きな聲でゐないことにした。更にまたグラッドグラインドがあの盗難事件のことを口に出しても、決して深入りをしないのであつた。

約束の二日は過ぎた。二日目の晝も過ぎ夜も過ぎ去つた。それでもステイヴン・ブラックプールは戻つて来なかつた。そして矢張り何處にゐるやら知れなかつた。第四日目になつてレイチェルは、彼女の自信は少しも衰へなかつたけれども、大方、郵便が届かなかつたものであらうと考へて、銀行へ行つて、彼から来た手紙を見せた。その手紙には彼の住所が書かれて居り、それによると彼は目下六十哩も遠方の、國道を脇に入つた或る處に出稼ぎしてゐる労働者部落——かふいふものは澤山あつた——にゐるといふことであつた。そこで、その地へ飛脚を立て、全町内を探して、翌日中にステイヴンを引つ捕へて聯れ戻すことにした。

その間も例のやくざ青年は影の形に添ふ如くに、バウンダアビイに喰つゝゐて歩き廻りながら、あらゆる仕事の手傳ひをしてゐた。彼はひどく昂奮して、かんかに熱くなり、すつかりぢれ切つて爪を肉に喰ひ込むほど噛んで、乾いたがらがらした聲でものをゐつた、しかもその唇は眞黒にこげてゐた。嫌疑者を捜索に人々をやつたその時間には、やくざ青年は丁度、停車場にゐた。そして捜索隊がその町に到着しない前に、きつと彼は逐電してしまつて、見つかりはしないだらうといつて、賭をしてゐた。やくざ青年

一六二七！

のいつたことは當つた。捜索に行つた聯中は、空手で歸つて来た。レイチェルの手紙は彼に出されてゐた。レイチェルの手紙は彼に渡されてゐた。しかもステイヴン・ブラックプールはそれと同時に逐電したのであつた！そこでコークタウンの人々の唯一の疑問は、レイチェルが果して彼が歸つて来るやうにと眞心から書いたものか、或は又、彼に逃亡せよと書いたものか、といふ點であつた。この點については議論が二つに分れた。

六日、七日、更に一週間が経ちかけた。妙にこそそしてゐたやくざ青年は、今は物凄い勇氣を出して大膽になり始めた。「矢張りあの嫌疑者が本當に盗人だつたのかつて？そりやなかなか問題だよ。若しさうでないなら、一體その盗人は何處にゐるんだい。また何故出て来ないんだい？」

果して犯人は何處にゐたのであるか。そして何故出て来なかつたのであらふ。草木も眠る眞夜中に、彼が書間いつたこの言葉の反響——晝間には遠い遠いところまで響いて行つたこの反響が、今は彼の耳に歸つて来て、朝まで彼の眠りを妨げたのであつた。

五、發覺

明けては暮れ、又明けては暮れたが、ステイヴン・ブラックプールの消息は依然として不明であつた。一體何處へ行つたのであらふ。何故出て来ないのであらふ？

シッシイは毎晩、レイチェルの下宿へ訪ねて行つて、彼女の狭い小ざつぱりとした部屋に彼女と一緒に坐つてゐた。

レイチェルは終日働いた。どんな心配事があつても、彼女達は働かなければならないのである。『煤

煙の蛇』は相變らず、誰が失踪しようが誰が発見されようが、又誰がよくならうが悪くならうが、そんなことには全く無頓着で、空に立ち昇つてゐる。『憂鬱の蟲にとつゝかれた象』も例の如く、さながら頑固な事實偏重者達のやうに、たとひどんな事が起らうとも、お定りの運轉を休止することがなかつた。かふして、晝が夜となり、更にまた晝が夜になつた。だが何の變つた事も起らなかつた。ステイヴン・ブラックプールの逃亡さへも、一般の單なる話題となり下つて、コークタウンの機械と同様に、何の不思議もないものとなつて來た。

「この町中に、またあの可哀さうな人をいくらか信用してゐる人は、二十人もあるかしら。」とレイチエルがひつた。

彼女はこの言葉を、街角の街燈から僅かに光が射し込むばかりの自分の下宿で、シッシイと二人坐つてゐる時にあつたのである。シッシイが下宿に訪ねて來た時には、もう暗くなつてからのことで、彼女はそこでレイチエルが仕事から歸つて來るのを待つてゐたのであつた。レイチエルが歸つて來た時には、シッシイは窓際に腰かけてゐたので、それから二

一六二八

人はづゝとそこに坐りつゞけてゐた。二人が取り交はす悲しい話の爲めにはこの街燈より明るい光を欲しなかつたのである。

「かふして有難いことにはあなたといふお話對手が來て下さるやうになつたから……あなたでも來て下さらなかつたら、わたし。」とレイチエルはひつゞけた。「自分が氣狂ひにならずにゐられるかしら、と思ふことが度々ありますわ。でもわたしあなたのお蔭でどんなにか望みも持つて、力も出せることでせう！あなたはたとひ、外見があの人に不利益であつても、あの人はきつと明るいい身になれるとを信じ下さいますわね。」

「えゝ、信じますわ。」とシッシイは答へた。「心からさう信じますわ、レイチエルさん、わたしね、あなたが皆に反抗して心に持ちつゞけてゐらつしやるその確信は、きつと誤つてはゐないと固く信じてゐますのよ。ですからあなたの長年の經驗で、あの人を信じてゐると同じやうに、わたしも、もうあの人をちつとも疑ひはしませんわ。」

「それにわたし、」とレイチエルは聲をふるはしていつた。「あの人の物靜かな舉動から察してみても、何事にかけても、あの人は正直でゝ人なことは、長い間の交際で知つてゐますもの。あの人がこのまゝ行方が知れなくなつて、わたしが百まで生きなくてはならなくても、わたしは自分の最後の呼吸の止まるときに——神様はよくこのわたしの心を御存じですつて、いふことが出來ますわ。わたしはたゞの一度だつて、ステイヴン・ブラックプールを信じなかつたことはありませんでした。」

「わたしども、あのお邸の人たちは、誰だつて、あの人がそのうち嬢疑が晴れて、明るい身になるだらうと信じてゐますのよ、レイチエルさん。」

「お邸の方々がさう信じてゐて下さることは嬉しいのね。」とレイチエルはゐつた。「そしてあなたがわがざはざわたしを慰めて下さる爲めに、またかうして一緒に話對手になつて下さる爲めに、お邸から來て下さることを本當に、御深切だと思ひますよ、おまけにわたしはいま、自分でもすつかり嫌疑が晴れてゐない身ですので、かうして一緒にゐて下さるなんてねえ。それにつけてもわたしはお嬢さまにいろいろと失禮な言葉をかけたのが情けないと思ひますわ。それに——」

「でもレイチエルさん、もうお嬢さまをお疑ひぢやないでせうね？」

「えゝ今ではあなたのお蔭で、わたしとお嬢さまとはすつかり仲良しになりました。——でもわたしは始終かふ……何か疑はずにはゐられませんの——」

彼女の聲は獨言をいつてゐるやうに低く、遅くなったの

一六二九

で、シッシイは彼女の傍近くに腰かけて、ちつと注意して聞かなければならなかつた。

「わたしは始終自分の心の中で、どうしても或る人を疑はずにはゐられません。それが誰だか、わたしには考へがつきません。どうしてそんなことをしたのか、又どうしてそんなことになったのか、わたしには考へがつきません。でも、誰かゞステイヴンが邪魔になるのでかふしたのだと思はれます。あの人が自分の意志で歸つて来て、皆の前で身の證しを立てるとなれば、誰かの悪事が露はれるでせう——その誰かゞそれを恐れて、あの人を引き止めて片づけてしまつたのですわ。」

「まあ、恐ろしい考へですわ。」とシッシイは蒼白になつた。

「考へても恐ろしいことですから、あの人を殺されてゐるかも知りませんわ。」

シッシイは身震ひして一層蒼くなつた。

「わたしはこんな考へが浮ぶ時は、」とレイチェルはゐつた。

「そして何時の間にかきつと浮んでくるのですけれど、そんな考へを何とかして拂ひのけようと、仕事をしながら敷定してみたり、子供のときに覺えた唄を幾度も歌つてみたりいろいろやつてみるんですわ。——それでもわたしひどく腹が立つやうな、かつとした粗暴の氣持になつて、どんなに疲れてゐても、大急ぎで幾哩も幾哩も歩きたくなるのですわ。わたしは寝るまでにこの氣持を直して置かなくてはなりませんから、あなたのお家まで一緒に歩きますわ。」

「あの人は歸る途中で病氣になつたのかも知れませんよ。」とシッシイはゝすり切れて役に立ちさうにもない一つの希望をそつと述べながらゐつた。「そんな時は途中に、いくらでも宿があるでせうから、何處かに泊つてゐるのかも分りませんわ。」

「でもそんな宿の何處にもゐませんもの。何處もかしこもすつかり探し廻つたのに、ゐないのですもの。」

「ほんたうにねえ！」とシッシイは氣落ちしながらゐつた。

「あの人は二日で歩いて来る筈なのです。足を痛めて歩けなくなつてはと思つて、わたしはあの人の出した手紙の中へ乗車賃を封じて送つて置きましたの。あの人の持つてゐるお金も使はないやうにね。」

「明日にでもなつたら何かゝ知らせがあるかも知れませんわ、レイチェルさん。さあ戸外へ出ませう。」

彼女は優しい手で、レイチェルがその艶々した黒髪の上にかけてゐる肩掛をいつもかけてゐる通りに直してやつた。そして二人は外に出た。おく晴れたひゞ夜であつた。手を取り合つた幾組かの男女が、其處此處と街上の隅々をちらほら徘徊してはゐたが、大抵の人達は夜喰をとつてゐるら

一六三〇

しく、通りは人影が少なかつた。

「さあ、もうそんなに急めぢやいけませんわ、レイチェルさん。それにあなたの手は随分つめたくてよ。」

「大丈夫ですよ、わたしは歩いて少し新しい空氣を吸ひさへすれば氣分がよくなるのです。それが出來ない時には、體が弱つて頭がすつかり狂つてしまひますのよ。」

「でも無理をしてはいけませんよ、レイチェルさん。あなたはいざといふ時には、いつでもステイヴンさんのところへ飛んで行って、味方をして役立つて上げなければならぬ體でせう。明日は土曜日ですわね、若し明日何の便りもなかつたなら、わたし達は日曜日に田舎を散歩させよう。そしてあなたに來週分の元氣をつけて上げなくてはね、ゐらつしやるでせう？」

「え、行きますわ。」

二人は何時の間にかバウダアビイの邸宅のある場所に来てゐた。シッシイの行く先きは、二人にバウダアビイの家の前を通らせるやうになつてゐた。それで、二人はその方へ眞直ぐに歩いて行つた。列車が、今コークタウンへ到着したばかりで、下車した客を乗せた馬車が、可なり喧ましの書をたてゝ街の四方へ走つて行つた。バウダアビイの邸に近づいたとき、藪臺の四輪馬車が、彼女達の前後に音を立てながら走つてゐた。だが二人が邸の前を通るとき、その一臺が急に後から迫つて來たので、二人はわれ知らず振り返つた。バウダアビイの邸の前を照らしてゐる明るい瓦斯燈の光で、馬車の中にスパージット夫人が極度に昂奮して、しきりに馬車の扉をこぞ開けようとしてゐるのが、眼にうつつた。同時にスパージット夫人も二人を認めて呼びとめた。

「あら、ゐゝ處で會ひましたね。」とスパージット夫人は駈者に戸を開けて貰ひながら叫んで、「神様のお引き合せでせう。さあ、お前さん早く出ておいでつたら。」とスパージット夫人は馬車の中にある誰かに向つてゐつた。「さあ、出ておいでつたら、でないと皆でお前さんを引きずり出しちまひますよ。」すると、紛れもないあの不思議な老女が馬車から降りて來た。スパージット夫人は、とても我慢が出来ないやうに、老女の襟頸をひつ捉まへた。

「皆さん、うつちやらかしといて下さい。」とスパージット夫人は精一杯の聲で叫んだ。「誰でもこの女に一寸でも手をつけてはいけませんよ。この女はわたしのものなんですからね。さあお前さん、此方へおいでつたら！」とスパージット夫人は元の命令口調に返つて、「さあ此方へおいでといつたら、でないと皆してお前さんを引きずり込みますよ。」

例の古典的な貴婦人が老女の咽喉をひつとらへて、手荒く家の中に引つ張り込んで行く様子は、何といつても、運

—六三—

よくそれを目にするこの出來た通行人達にとつて、面白い觀物であつたに違ひない。そこで彼等は、この事件がどうなつて行くかを見届けようと、無理に家の中へ押しこんできた。だがこの出來事がこの時までには町全體に傳はつてゐたあの大評判で不思議千萬な銀行盜難事件に關係があると分ると、事態は大袈裟になつて、人々は自分達の頭の上に屋根くらゐ落ちて來ても驚かないといふほどに、非常な好奇心をそゝられたのである。それでその場に居合せた目撃者達は、近所隣りのおせつかひ達約二十五人もあつたが、シッシイとレイチェルが、スパージット夫人とその捕虜の後からついて入ると、その後から皆がぞろぞろとついて入つて來た。そして彼等は一團となつて、バウダアビイ家の喰堂にどやどやと雪崩を打つて闖入して來た。後の方に立つてゐる聯中は椅子の上に乗つたりなどして、前にゐる聯中に負けまいとした。

「バウダアビイさんを聯れて來ておくれ！」とスパージット夫人は叫んだ。「レイチェルさん、お前さんはこの人が誰だか知つてるでせう。」

「ベグラア夫人でございます。」とレイチェルはあつた。

「てつさり、さうだと思ひましたよ。」とスパージット夫人は夢中に勝ち誇つて叫んだ。「さあバウダアビイさんを聯れて來ておくれ、皆さん、どいて下さい！」

老ペグラア夫人はこの言葉に、顔を隠して人眼につかないやうに身を縮めながら一言、囁くやうに歎願の聲を出した。するとスパージット夫人は聲高にゐつた。「知りませんよ、わたしは此處に来る途中で二十遍もいつて聞かしたぢやありませんか。このわたしが自分でお前さんを、バウンダアビイさんのお手に渡すまではお前さんを離すことではないと。」

そこにバウンダアビイはやくざ青年とグラッドグラインドとを聯れて現はれた。バウンダアビイはこの二人と二階で何か相談をしてゐたのであつた。バウンダアビイは自分の喰堂に招きもしないこの大勢の人々が來てゐるのを見て、歡待どころか吃驚してしまつた。

「おや、一體これはどうしたといふのぢやね、スパージット夫人。」と彼はゐつた。

「あなた、」といつてこの偉い婦人が説明した。「あなたが探し出さう探し出さうとしてゐた人を聯れて參りましたよ。わたしの幸運でございませう、わたしは何とかしてあなたを安心させてあげたいと思ふと、自分でゐても立つてもゐられなくなりましたので、隨分當てにならぬ手懸りではありましたが、このレイチエルさんといふ人に教はつた通りにこの女が住んでゐるらしく思はれる田舎へ、出掛けて行きました。そして運よく探し當てましたので、かうして此處

一六三二

へ引つ張つて來たのでございます。——え、もちろんこの女の方でいろいろ、厭だと申しましてね。でも、こゝまで漕ぎつけるのは相當に面倒な仕事でございましたよ。けれどもあなたのお爲めに面倒な仕事をしますのは、わたしには嬉しいことでございますから。あなたのお爲めなら、飢も渴きもまた寒さも、本當の満足になるのでございます。」

こゝでスパージット夫人は言葉を切つた。といふのは、老ペグラア夫人の姿を見たバウンダアビイの顔色が、何とも言へない複雑な色に變つて、さも當惑した表情をあらはしたからであつた。

「何ぢやと、一體、どうしたといふのぢや。」と彼は眞赧に怒つて、不意に高飛車に叱りつけた。「スパージット夫人、もう一度いふが、それが一體どうしたといふのぢや。」

「まあ、あなた！」とスパージット夫人は絶え入りさうに叫んだ。

「これはあなたの知つたことぢやないんぢや。あなたは自分だけのことをして居れば澤山ぢや。」とバウンダアビイは唸つた。「どうして、あんたはわしの内々の事までおせつかひの鼻を突き出すんぢや。餘計なお世話ぢや。」

飛んだゝことをしたと思つてゐたスパージット夫人は、この見幕にすつかり壓されてしまつた。彼女は凍りついたやうに固くなつて椅子に、腰を下した。そして例の眼を見張つてバウンダアビイをみつめながら、そつと兩方の手袋を、これもまた凍りついたやうに互ひに擦り合せた。

「ジョサイヤや！」とペグラア夫人はふるへながらゐつた。「倅や！わたしが悪あのかぢやないよ。わたしの罪ではないのだよ。ジョサイヤ、わたしはこの方に幾度も幾度もさうゐつたのですよ。この方のなすつてゐることは決してお前の喜ぶことではないのだと、さういつたのですよ。だのにこの方がどうしてもお聞きにならないものだから。」

「どうしてまたあんたは、この女にこゝへ聯れて來られるやうにしたのです。この女の帽子を叩き落してやるなり、この女の齒を引つこ抜いてやるなり、この女を引つ搔いてやるなり、何とかこの女にしてやれなかつたのですか？」とバウンダアビイは訊ねた。

「倅や！この方は若しわたしが抵抗したりなどすればお巡りさんに引き渡すといつてわたしを嚇しましたから。」——とひつてペグラア夫人はおつおつながらも誇らしげにあたりを見廻して——「こんな立派な家で、さういふ人騒がせをして世間に恥をさらすよりも、こつそり聯れて來て貰つた方が、

ぶとよからうからね。ほんたうに、わたしが悪めのではないんだよ！可愛い、可愛い、立派な倅や！わたしは何時でもそつと隠れて生きてゐたのだよ。わたしは只の一度、たつてお前の母親だと、口を迂らしたこ

―六三三―

とがなかつたのだよ。わたしは遠くの方でお前を尊敬してゐたのだよ。そして滅多に町へは出て來なかつたが、若しどうかして町へ出て來ることがあつても、心の中では自慢で――お前をよそながら――それも誰にも知れないやうにして――見ては、また直ぐに行つてしまふやうにしてゐたのだよ。」

バウンダアビイは兩手をポケットの中に突つ込んで、堪へきれぬ屈辱を感じながら、長い喰卓の側を行きつ戻りつしてゐた。またこの有様を見てゐる人々はペグラア夫人の訴へを一語も聞き落すまいと耳をそばだてゝゐたが、一語一語を聞くに従つて、益々眼を見張るばかりであつた。ペグラア夫人は語り終つたが、バウンダアビイはなほ喰卓の側を行きつ戻りつしてゐたので、グラッドグラインドはこの氣の毒な目をみた老婦人に向つてゐつた――

「どうも驚きましたね、奥さん。」と彼は鹿爪らしくゐつた。

「あなたはバウンダアビイさんの小さい時にさんざん非道な虐待をして置きながら、年をとつた今になつてから、バウンダアビイさんを自分の子供だと仰しやるとは、ちと厚顏しいとは思ひなさらんか。」

「このわたしが非道なことをしたのですつて？」と哀れな老ペグラア夫人が叫んだ。「このわたしが虐待したのですつて？わたしの可愛い子供を？」

「可愛いと仰しやるか！」とグッドグラインドは繰り返した。「さうぢや、今では腕一本で立派な人間になつたから可愛いのおやらう、な奥さん。ぢやがね、小さい時にうちやらかして置き去りをくはし、あの呑んだくれの祖母さんに押し付け放しにしたころは、大して可愛くもなかつた筈ぢや。」

「このわたしがジョサイヤをうちやらかして置き去りを喰はしたんですつて？」とペグラア夫人はしつかり兩手を握つて叫んだ。「あなたは何といふ悪ふことをお考へなさる方です、それに、ジョサイヤがまだ生れもせぬ前にこのわたしの腕に抱かれて死んだあの可哀さうな母親のことを、そんなに悪口を仰しやるなんて、神様の罰が當りますよ。あなたも少しは後悔して、もつと氣をつけて物を仰しやめまし。」

彼女は熱誠をこめて心の不満をかき口説いたので、グラッドグラインドも追々さうであつたかと悟つたので、大きに氣の毒になつた。それで今度はづゝと優しい調子であつた。

「では、あなたは息子さんを置き去りにして、――溝の中で育つやうにしてなぞ、置かれなかつたといはれるのぢやね？」

「ジョサイヤを溝の中に？」ペグラア夫人は叫んだ、「そんなことがありますものか、決して！あなたは何といふ！」

―六三四―

とを仰しやるのです。倅が知つてゐます。倅があなたに教へてあげませう。たゞ倅は賤しむ兩親をもつてゐませうとも、その兩親からは、世間の一番ゝ兩親に出来るだけ、深く愛されたのですよ、そして兩親は立派に讀み書きの出来るやうにと倅を教育するためには、如何なる苦勞も決して厭ひはしませんでした。わたしは家に倅の本を持つてゐます。お見せしてもよろしいのです。えゝ持つてゐ

ますとも。」とペグラア夫人は腹立たしげな誇りを見せてゐた。

「そして、倅の大切な父親は、倅が八歳の時に死んでしまひ、この母親の手で、教育して参りました。倅が世の中に立つて行けるやうに助けてやり、年期奉公に出してやるのは、母としての義務でもあり、喜びでもあり、また誇りでもありました。倅はしつかりした若者で、また雇はれた先きの主人といふのが深切な人でしたから、倅も今に立派なお金持にならふと、一生懸命によく働きました。わたしはもう何もかも、あなたに教へてあげませう。——倅がゐひたくなさうですから——で、母親は村で小店を出してゐましたが、倅は決して母親のことは忘れずに、毎年三十ポンドづゝ仕送りしてくれました。——わたしはそんなに澤山はいりませんでしたから、そのうちから、いくらか別にとつて置きました。——それについてたつた一つの約束は、たゞわたしが田舎に落ちついてゐて、倅のことを吹聴して廻つたり、倅に迷惑を掛けないやうにするといふことでした。でわたしは、一年にたつた一度だけ、倅にも見つかからないやうな時を見計らつて、他處ながら倅の顔を見るほかは、決して倅との約束を破つたことはありませんでした。」といつて哀れな老ペグラア夫人は愛情をこめて辯護するやうにかふゐつた。

「わたしは、自分の田舎に落ちついてゐるのが當り前です。若しわたしが、こゝへ來れば、いろいろと倅に相應しくないやうなことをするに違ひありません。わたしはわたしの心の中で倅のジョサイヤを誇りにし、愛することが出來ますから、それでわたしは十分満足して居ります。だにあなたは、今のやうな悪口や邪推を仰しやつて恥かしいとは、思ひになりませんか？」とペグラア夫人はいつて、最後に、「わたしは今まで一度だつて、こゝへ來たことはありません。可愛い倅が來るなといふ間は、來たひと思つたことさへ一度だつてありません。今だつてさうです。わたしは引つ張つてさへ來られませんでしたら、決して來る筈ではありませんでした。おゝ、あなた恥をお知りなさい、恥を。このわたしが倅に對して、惡む母親だなんて、現在倅の前に置いて倅もまた倅です、——あなたにその出鱈目なことを言つて聞かすなんて……」

喰堂の椅子に乗つかつてゐた人々も、また離れえゐた人

一六三五

人も、その場に居合せたほどの人々は、口々にペグラア夫人に對する同情の咳きを洩らした。グラッドグラインドは知らず識らず、自分が非常な苦境に立つことになつたのを感じた。バウンダアビイは最前から少しも止めずに、あちこち歩き廻つて、一瞬毎に刻々大きくふくれ上つて、ますます顔を眞赧にしてゐたが、やがて母親の言葉を短くさへぎつた。

「一體頼みもせんのに、どうして皆さんが、かうして此處にほひで下さつたのか、わしにははつきり分らん。」とバウンダアビイはゐつた。「が、それはどうでもあゝです、だがあれだけ聞けば皆さんも満足でせうから、もうお引き取りが願ひたひもんです。満足なさらふがなさるまいが、お引き取りになる方がよろしいでせうて、わしは何もわしの一家の内情について演説をしなければならんといふ義務はないのぢや。そんなことをするつもりもなかつたし、また、しようとするのでもないのです。ぢやから只今の問題について、何かわしの辯解を豫期してゐらつしやる方々については、お氣の毒ぢやが失望なさるかも知れん——トム・グラッドグラインドがさうぢやらう。ぢやが君はわしがそれを申し上げんことをとうに知つてゐゝはずぢや。あの銀行盜難事件については、わしの母が誤解を受けてゐたわけぢや。餘計なほせつかひがなかつたら、こんなことも起らんかつたのぢやらう。わしはどんな場合でも餘計なほせつかひは大嫌ひぢや。これでもう左様ならぢや。」

バウンダアビイは一同に出て行けとゐはんばかりに押し開けた戸を手で支へながら、かふ怒鳴つて

一六三七

のであらうか。

六、星光

約束の日曜日はよく晴れ渡つた秋の一日で、空は澄み、風は爽やかであつた、早朝シッシイとレイチエルとは田舎を散歩するために落ち合つた。

コークタウンの町は自分の頭に灰を被つてゐるばかりでなく、またその界限にも一圓に灰を降らせたい―それは擬り固りの信心屋が、自分の罪を悔い改めるのに（懺悔するには麻服を着て灰をかぶる）他人まで懺悔服を着せるのと趣きを一つにしてゐた―それで、清浄な空気が（空なものでもこれだけは絶対にこの世の最も邪悪な浮華虚榮の中に入つてゐない）に飢ゑてゐるこの町の人々は、時に、汽車で町から數哩離れた田舎へ出掛けてゐつて、野や畑をぶらぶら歩き廻るのが習慣のやうになつてゐた。シッシイとレイチエルの二人も皆のする通り汽車で町の煙から逃げ出して、町とバウンダアビイの別荘の丁度中途の或る停車場に下車したのである。

緑の風景は、處々に石炭の小丘が點々と散在してはゐたが、何處へ行つても青々としてゐて、眼を樂しませる樹木も多く、雲雀の歌も（日曜だといふのに）聞えるし、空気が芳ばしく、萬物はすべて輝かしい碧空のアーチの下にあつた。遙かに一方を望めば、コークタウンの町は宛ら黒い霧のやうに霞んで見え、他方を望むと小山が遠く起伏してゐる。更に第三の方角では、地平の光がほのかに變つて見える、それは遙か遠くに海が光つてゐるのである。二人の足許の草は清々しく、樹の枝の美しい影がその上に搖ぎ模様をつけてゐた。生籬の列もそこゝに多かつた。すべてのものは如何にも平和であつた。炭坑の入口にある機械も、毎日々々同じ目に酷き使はれて瘦せさらばつた馬も、今日ばかりは靜止してゐた。車輪も今日だけは廻轉を止めてゐた。たゞ地球の大車輪ばかりは、震動もせず、音響も立てずに廻轉してゐるやうに見えた。

二人は野原を横切り、日蔭になつた細道を降りて、ずんずん歩いて行つた。時々、一寸足がさはると直ぐ崩れてしまふ程に朽ちた柵を越えたり、また時々草の生ひかぶさつた古の煉瓦や横梁の破片が散らばつてゐる傍を通つた。それは昔こゝに工場があつた名残である。彼女達はどんな細道でも、どんなにかすかな足蹟のついてゐる處でも、それについて行つてみた。草が一きは丈高く繁つてゐたり、木莓や醋摸やそのほかの物がごちやごちやと盛り上るやうに生えてゐる土饅頭めいた場所も其處此處にあつたが、二人はいつもさういふ場所を通ることを避けた。といふのは、さうした草の繁みに隠されたところには、古い坑口があつて、いろいろ恐ろしい話がこの地方に傳はつてゐたからで

一六三八

あつた。

二人が草の上に腰を下して休んだころには、日はもう高くのぼつてゐた。長い間彼女等のあたりに、近くにも遠くにも、誰一人の人影らしいものも見えず森閑として靜寂を破るものは何もなかつた。

「レイチエルさん。随分此處は靜かね。誰一人通つた足蹟もなく。この夏にこゝへ來たのはわたし達が最初らしいわ。」

シッシイがかふゐつたとき、彼方に一つ腐れた垣根の破片のあるのが、眼にとまつた。彼女はそれを見に行かうと立ち上つた。「どうもわたしには分らないことがあるわ。あの垣根が壊れてからまださ

う古くなきうだし、それに、あの木の折れ口はまだ眞新しいでせう。あらこゝに人の足蹟があるわ。――まあ、レイチェルさん。」

彼女は走り戻つて来た。そして、レイチェルがもうもたげかけてゐた頸にしがみついた。

「まあ、どうしたの？」

「どうしたのかわたしにも分らない。あすこの草の中に帽子が一つ轉がつてゐるのよ。」

二人は一緒に前へ進んでみた。レイチェルは帽子を拾ひ上げると總身がふるぶるとふるへた。涙が込み上げて来て、胸が一つばゐになつた。帽子の裡には『ステイブン・ブラックプール』といふ名が自署されてゐたのである。

「まあ可哀さうに、可哀さうに、あの人は殺されたのだ。きつと此處で殺されたのだ。」

「帽子に――血でもついてゐて？」シッシイは口籠つた。

彼女等はそれを調べてみるのさへ恐ろしかつた。が兎に角、調べてみると、帽子の外側にも内側にも、別に暴力を加へられた證蹟は無かつた。帽子は雨露に打たれて、汚れてをり、その落ちてゐた草には帽子の型がついてゐたところから見ると、二三日間そこに轉がつたまゝでゐたものに違ひない。二人は身動きもせず恐る恐る四邊を見廻したが、外には何も見なかつた。「レイチェルさん。」とシッシイは囁いた。「わたし一人でもう少し先へ行つてみますわ。」

彼女は握つてゐた手を離して、前の方に歩かうとしたとき、レイチェルは廣野原中に響き渡るほどの悲鳴をあげて両手でシッシイの身をしっかりと抱へた。二人の前のすぐ足許のところに、生え茂つた草で隠されて黒くぎざぎざになつた豎坑の縁があつたのである。二人はハツと飛び退つて跪つき、相抱いて互ひの頸にその顔を埋め含つた。

「おゝ神様！あの人はこの坑に落ちてゐる。あの下に！」暫くの間レイチェルの口を發するものはこの言葉と恐ろしい叫聲ばかりであつた――涙を流しても、祈つても、どんな動作をしてもまたどういふ手段を取つても甲斐が無かつた。彼女を慰めることは到底出来なかつた。彼女をしつか

一六三九一

りと捉まへてゐることはあくまでも必要であつた。さもないと彼女はその豎坑に身を投げたであらうから。

「レイチェルさん、おゝレイチェルさん。おゝレイチェルさん、お願いですからそんな恐ろしい聲を立てないで！ステイヴンさんのことを思つて、思つて、思つて、思つて――」

かふいふ瞬間に覺える苦痛といふ苦痛を忍んで、心の底から絞り出されたこの歎願が、熱心に繰り返されたので、レイチェルもたうたう聲を収めたが、石のやうに固くなつた表情に涙も浮べず、シッシイの顔をちつと眺めてゐた。

「レイチェルさん、ステイヴンさんは生きてゐるかも知れませんよ。この恐ろしい穴の底に一時でもステイヴンさんを、怪我したまゝでうつちやらかして置いてはなりません。誰か助けを呼んで來なくては――」

「さう、さう、さうねえ――」

「此處を動いちやいけませんよ。あの人の爲めに！わたしが行つて様子をみませう。」

シッシイは豎坑に近づくと身慄ひがした。彼女はそれでも両手と兩膝で腹這ひながら近づいてゐつて、あらん限りの大聲でステイヴンの名を呼んだ。そしてちつと耳を澄まして聞き入つたが何の答へもなかつた。彼女は再び名を呼んで耳を澄ましたのが、矢張り何の答へもなかつた。かふして彼女は、二三十度もやつてみた。ステイヴンが足を踏み外した場所に、土塊が壞れてゐたので、彼女は小さな

土塊を一つ拾つて、穴の中に投げ込んだが、それが底へ落ちる音を聞くことが出来なかつた。彼女には今は助ける術も分らなくなつて、身を起してあたりを見廻した。流石に氣丈夫な彼女の心にも、つひ二三分前までは、あんなに美しく静かだつた野原の景色が、今は殆ど絶望を起させるばかりであつた。「レイチエルさん、わたし達は一刻も徒をしてはゐられませんが、わたし達は別々の方へ向つて、助けを求めに行きませう。あなたはわたし達がさつき来た道を通つてゐらつしやゐ。わたしはこの道を進んでみませう。誰でもあゝから人に會ひさへしたら、會ふ人毎にこの出来事を知らせて下さい、ステイヴンさんのことを思つて、ステイヴンさんのことを思つて。」

シツシイはもうレイチエルを信賴してもあゝことを彼女の顔色で知つた。そして、レイチエルが両手を高く擧げながら走つて行くのを一寸立ち止つたまゝ見てゐたが、直ぐさま向きを變へると、自分の進む方へと、救ひを求めに走つた。彼女はあの生籬のところまで立ち止つて場所の目印にと肩掛を結びつけ、帽子もそこに抛り出して置いて、今まで走つたこともない早さで走つて行つた。シツシイよ、走れ走れ、後生だ！一息つく間も足を止めるな。走れ走れ！かふして彼女は自分の心で自分を勵まして野原から野原

一六四〇一

へ、小徑から小徑へ、一つの場所から次の場所へと今まで走つたことがない程、走つた。彼女はたうとう或る機械場の物置小屋まで走つてくると、小屋蔭の麥稈の上に男が二人ぐつすり眠りこんでゐた。先づ第一に彼等を起し次に彼女が走つてきた譯を話したのだが、彼女はまるで狂氣のやうに息も絶え絶えになつてゐるので、なかなか困難であつた。だが一旦さうと分るや否や、彼等の精神もまたシツシイと同じやうに、火のやうにいきり立つた。一人の方の男は酔拂つてぐつすり眠り込んでゐたのだつたが、相棒の男があゝ『地獄坑』に落ちこんだ人間があるんだと怒鳴つて聞かせると、いきなり飛び起きて、汚ない水溜りの處へ行くと、頭を水に突つ込んで酔を醒ましてもどつてきた。

彼女はこの二人の男と一緒に、更に半哩も走つて、又今一人の男のところへ駈けつけた、それから皆で一緒に、更にもう一人の男のところにと走つてゐつた。馬が一頭見つかつた。彼女は自分で手紙を書いて、もう一人の男をその馬で死物狂ひに鐵道まで駈けさせ、ルイザのところへ使ひをたてた。この時までには村中の人間が騒ぎ立つてゐた。そして捲揚機や繩や丸太棒や蠟燭や提燈や、そのほかすべての必要な道具が『地獄坑』まで運ばれるやうに急いで、寄せ集められた。

彼女にとつては行方不明になつたステイヴンを、彼が生き埋めになつてゐるあの豎坑の中に残したまゝ走つて來たので、もう何時間も何時間も経つたやうに思はれた。この上もう一分間でも長くその坑から離れてゐられないやうな氣がした——それはステイヴンを置き去りにしてゐるやうなものだつた。そこで彼女は六人の労働者達を聯れて、急いで坑のところへ戻つて來た。その六人の中には、この變事を聞いて酔をさました例の男もまじつてゐたが、彼はこの中で一番の腕利きであつた。一同が『地獄坑』のところへ來てみると、ひつそりとしてゐて、シツシイが走り出した時と同じやうに寂しかった。男達は、シツシイのやつたやうに名を呼んで聴き耳をたてた、そして坑の縁を調べて、どんなにして此處から落ちたものかといふことを探つた。彼等は引き上げに要る道具が來るまで、腰を下して待つことにした。シツシイは空中を飛んでゐる昆蟲の羽音にも、草の葉のそよぎにも、男達の囁きにも、一つ一つ、それが坑の底から出る聲ではないかと疑はれて身をふるはした。だが坑の口には風が空しく吹き過ぎるばかりで、何の音も聞えて來なかつた。男達は草の上に坐つて待ちに待つた。暫らく待つてゐるうちに、この出来事を聞き知つた散歩してゐる聯中が、がやがやと來はじめ、それから救護用の諸道具が到着しはじめた。この混亂の最中にレイチエルも戻つて來た。彼女の聯れて來

た聯中のうちには外科醫も一人ゐて、葡萄

一六四一

酒と藥品類をたづさへてきた。だが人々の間にはステイヴンが生きてゐるといふ望みが事實極めて僅かであつた。そのうちにもう引上げ仕事の邪魔になるほど多くの人が集つた。例の酔の醒めた男は進んで引上げ仕事の先頭に立つた。否、衆人一致して彼をさうさせたのであつた。彼は『地獄坑』の周圍に大きな輪を造り、人々に無暗にその輪から中に入らないやうにと言ひつけた。進んで仕事の手傳ひすることを承知した有志者達の外に、その輪の中に入るのを許されたのはシッシイとレイチエルだけであつた。だがその日の午後になつて、シッシイの手紙により、コークタウンから臨時列車が到着したので、グラッドグラインドとレイザとバウンダアビイとやくざ青年たちもその輪の中に入った。

シッシイとレイチエルとがこゝへ来て、初めて腰を下ろした時からもう四時間もたつたところ、漸く丸大棒や繩などを使つて、二人の男が安全に坑の中へ下りて行けるだけの支度が出来上つた。捲揚機を組み立てるのは、いかにも簡單なものでありながら、いろいろな困難が起つた。二三の品がまだ不足してゐることが發見されたので、それをとりに使をやらねばならず、そしてその使が歸つて来るまでは組み立てが出来ないといふ騒ぎである。晴れ残つた秋の日も、午後の五時になつた。やがて點火された蠟燭が一本、穴の中の空氣を試験するために下ろされた。四五人の荒くれ男の顔が互ひに寄り集まつて、光りを注視しながら立つてゐた。捲揚機を動かしてゐる人達は、言はれるまゝに蠟燭をつり下げて行つた。やがて蠟燭を再び釣り上げてみると、まだ灰かに燃えてゐた。次に水を幾杯か投げ入れた。それから桶を鎖に付けて例の酔から醒めた男と、もう一人ほかの男との二人が燈を持つて、その中に入り、「もつと下げろ」と命令しながら下りて行つた。索はびんと張り切つて坑の下へと伸びてゐつた。捲揚機はぎるぎると軋つた。そらといふと飛び出して来る聯中が、百人か二百人集まつてゐたが、何れも息を殺してゐた。坑の中から合圖があつたので、捲揚機はまだ餘分の索を残したまゝ止つた。それから随分長い間、捲揚機を動かしてゐた男達は爲すこともなくぼんやりと突つ立つてゐたので、二三人の女は、また何か底の方で變事が起つたのではないかと叫んだ。だが先刻から懷中時計を手にして時間を計つてゐた外科醫は、まだ五分間とはたつてゐないことを告げて、彼等に黙つてゐるやうにと厳しくいましめた。彼が十分言葉をきらないうちに、捲揚機はまた逆に動きはじめた。慣れた人達は、この様子を見て、二人の人間が上つて来るには機械の廻轉が軽すぎるから、てつきり一人だけが上つて来るのだといふことを知つた。索はびんと張り切つて、捲揚機の胴にくるくると一巻いづゝまきつけられて行つた。誰の眼もみな坑口

一六四二

に吸ひ寄せられてゐた。すると例の酔から醒めた男が上つて來た。そして素早く草の上に飛び上つた。「生きてるか、死んでるか？」と人々は始めて異口同音に叫んだが、やがて深いしんとした沈黙に代つた。醒めた男が「生きてゐるぞ！」と言ふと、わつと大きな叫び聲が上つて、多くの人々の眼には涙が浮んだ。

「重い怪我をしてるんだ。」と彼は自分の聲が聞えるやうになると、すぐかふ言ひたした。

「お醫者は何處にゐるだかね！とても重い怪我で、おれ達二人ぢやあ、どうにも引つ張りあげられねえ。」

人々は皆、寄り集つて相談した。そして外科醫が二三の質問をしては、その答へをきくとたゞ頸を

振つてゐるだけなので、皆は心配さうに彼の方をみつめてゐた。日はもう沈みかゝつてゐた、夕焼空の赧み光りが、どの人の顔にも映えて、その呼吸を殺して成行きを氣づかつてゐる表情を一つ一つくつきりと照らし出した。

相談が纏つて男達は捲揚機をまた動かし始めた。例の坑夫は葡萄酒と、一寸した必要な品物を二三持つて、再び坑の中へ下りて行つた。やがてもう一人の男が上つて來た。そのうちに外科醫の指圖に従つて、二三人は簀子垣を破つて持つて來た。ほかの人達はその簀子の上に衣物を厚く敷いて擔架を造り、その上に麥稈をかぶせた。その間に外科醫自身は肩掛とハンケチとで繃帯と吊腕帯とを工夫して拵へた。それがすつかり出來上ると、今坑の中から上つて來た坑夫の片方の腕にそれらの品物を引つけて、その使用法を教へてやつた、坑夫は自分の提げてゐる燈の光りに照されてそこに立つてゐた。空いてゐる方の力強い手で丸太に倚りかゝりながら、時々坑の中をのぞき込んだり、坑の周圍にゐる人達をづらりと眺め渡したりしてゐるところは、彼がこの場で最も大事な立役者であることを示してゐた。もうあたりが暗くなつたので、炬火が點された。この男が自分の周圍の人達に、一寸言つたことが忽ち群集全體の口々に傳へられた。それによるとステイヴンはぼろぼろに碎けた瓦落多の塊りの上へ落ちたのであつた。坑は瓦落多で半分塞がつてゐたうへ、更に彼が落ちたところの土がぎざぎざに崩れてゐたので、墜落の力が更に殺された。彼は仰向けになつて一方の腕を體の下へ敷いて横はつてゐた。そして彼自身の考へによると、墜落してからといふものは殆ど身動きしなかつたが、それでも一方の自由になる手を上衣のポケットへやる位は動かしたので、そのポケットの中に入つてゐたパンと肉のことを思ひ出してそれを喰つた(彼は實際、パン屑を口に吞みかけてゐた)。そして時に坑の中にある水を少し掬つてのんだ。彼はレイチエルの手紙を貰ふと、仕事が終ると、その足で直ぐやつて來た。そし

一六四二一

てすつかり歩き通してこゝまでやつて來たが、日が暮れて暗くなつたのに構はず、バウンダアビイの田舎の別荘に行く途中、こゝで墜落したのであつた。彼はさういふ危険な時刻に、この危険な荒蕪地を歩いてゐたのであつた。自分の行く手にさういふ危険な坑があらうとは夢にも知らずに、一番近い道をとつて進まうとはかり考へてゐたからであつた。『地獄坑』は、——この坑夫も呪ひの言葉と共に言つた通り——實にその名の示す如く、どこまでも縁起の悪む坑だつた。といふのは、今でこそステイヴンは物が言へるけれども、彼の生命もやがてこの坑のために取り返しつかないものになつてゐることが分るだらうと、この坑夫は信じてゐた。

すべての準備が出來上つたので、例の男は捲揚機が自分を釣り下げ出してからも、仲間の者や、外科醫の最後の注意を急がしく聞くと、坑の中に姿を隠してしまつた。索は前の通りだんだんのびて行き、信號も前の通りにあつて、捲揚機が止つた。今度は誰一人捲揚機から手を離さなかつた。誰も誰もしつかりと捲揚機を握つたまゝ、いざといへば、直ぐに機械を捲き戻さうと、體を曲げて待ち構へてゐると、下から信號があつた。輪の中に居合はした人達は皆、前にのり出した。何故なら、今度は索が極度までびんとかたく張り切つて、上にあがつて來たからである。男達は力をこめて機械を廻した。捲揚機はぎぬぎぬと軋つた。その索を見てゐて、それが今にも切れはしないかと考へるとたまらない氣持がした。機械の胴に索が幾巻きも幾巻きも無事に巻かれて行つた。索の先に結び付けられた鎖が現はれ始めた。たうたう、兩側に二人の人間が掴みついてゐる桶が現はれた、——たゞ見てゐても、眼まひのするやうな胸の抑へつけられるやうな有様であつた。——二人の間にゐたはるやうに支へられて、桶の中に釣るやうに縛られた哀れな打ち碎かれた人間の姿が現はれた。殆ど人間の形をし

てゐないまでに重傷を負うた體が、極めてそろそろと桶から移されて、麥稈の牀に寝かされたときに、低い憐れみの聲が群集全體の間に交はされた。女達は大聲で泣き出した。最初は外科醫のほか誰も近寄るものがなかつた。外科醫は牀の上で出来るだけの手當てを施したが、その體を何か布で被ふてやる位が彼の出来る精一杯であつた。彼は靜かにそれをなし終へると、レイチエルとシツシイとを彼の傍に呼び寄せた。その時、蒼さめた、やつれ切つた、辛抱づよい顔は、ぢつと空を見上げてゐた。折れた右手は、さながら誰かに抱いて貰ふのを待つてゐるかのやうに、覆ひ布の外に露き出されたまゝ、だらりと下がつてゐた。二人の女達は彼に飲物を與へ、顔を水で濕してやり、昂奮劑を葡萄酒に割つて少し飲ませた。彼は空を見上げたまゝ、身動

一六四四

きもせず寝てゐたが、僅かに微笑を洩らすと言つた。「レイチエルかひ。」

彼女は、彼の傍の草の上に身を屈めた。そして、彼の眼の上に顔がくつ付く迄に身を覆ひ被せた。彼は彼女を見るために眼を横に向けることさへ出来なかつたからである。

「うむ、レイチエル。」

彼女は彼の手を取つた。彼は再び淋しく微笑して言つた。

「そのまゝ離さないでおくれ。」

「苦しいだらうね、ステイヴン？」

「うむ苦しかつたよ。だが今はもう苦しくない。おいらは——恐ろしかつた、淋しかつた、そして何だか長い長い氣がした。——だけれど今はもうそれも濟んぢまつたんだ。なあレイチエル、皆、滅茶苦茶だ！始めからお終ひまでみんな滅茶苦茶だ！」

この言葉を言つた時に、彼のあの昔の顔が幻影のやうに現はれた氣がした。

「おいらは、この坑に落ちたのだが、この坑は今生き残つてゐる年寄り達の知つてゐるだけでも、何百人もの生命を取つた坑だ。生命をとられた聯中はどれも人の親達だ。子供達だ、兄弟達だ、皆何千人もの人々にとつてそれぞれ大切な人達だ。その何千人を困らせねえやうに、飢じくねえやうにするために、働いてゐた人達なんだ、おいらの落つこちたこの坑には戦争よりも酷い毒瓦斯が一杯たまつてゐるんだ。おいらは炭坑で働いてゐる坑夫達が、誰にでも讀めるやうにつて出した歎願書つてのを讀んで、毒瓦斯の恐ろしいことア知つてゐる。その歎願書にはどうか自分達の仕事をそんな人殺しにも等しいものでなくして貰ひてえ。立派な旦那方が女房子を可愛がると同じやうに、坑夫だつて可愛い女房子があるのだから、どうかそれらのために自分達の生命を危ねえ目に合はせねえやうにして貰ひてえと、お役人方にお慈悲を願つてゐる。毒瓦斯のある坑は、掘つてゐる中でも炭坑になつてからでも、必要もしないのに人を殺すんだ。かふしておいら達は死ななくともゝ生命をどれだけ取られてゐるんだか、何かにつけてよ——滅茶々々の事だ——毎日々々な——」

彼はかすかな聲でかふ言つた。その言葉は誰に對して怒つてゐるのでもない。たゞ事實として言つたのである。

「レイチエル、お前の小さな妹の事を忘れちやめえな、どんなときだつて忘れるやうなお前ぢやねえ。おいらも――うを前の妹のところへ行きさうだ。お前も知つてゐるだらう。——お前も可哀さうに、いろいろと苦勞をしたな——お前はあれのためにどんなに働いたことだらう。あの娘は一日中、お前の部屋の窓際のところ、あの小さな椅子に腰を掛けてゐたつけな。あの娘が、年の若いのに不具の體で、

一六四五

あゝして死んぢまつたのも、一つはあの悪め空氣（よくしようと思へばよく出来るんだけど）のせめと、一つは惨めな労働者の住居のせめなんだ。」

ルイザは彼に近寄つた。が彼はルイザを見ることが出来なかつた。彼は顔を夜の空に向けた儘仰向けに横つてゐた。

「若しおれ達に關りあつたものが何もかもこんなに滅茶苦茶でなかつたら、おいらは何もこんなところに来る必要はなかつたんだ。おれ達の間になんな滅茶苦茶がなかつたなら、朋輩の職工達や労働者達からこんな誤解されることがなかつたんだ。若し、バウンダアビさんがこのわしが少しでも正しいといふことを知つてゐたら——若しこの俺といふものを知つてゐたら——あの人は俺を犯人だなんて思ひはしなかつただらうよ。この俺を疑ひはしなかつただらうに。だがレイチエル、彼方を御覽！頭の上を御覽よ！」

彼女は彼の眼をやる方を眺めてみると、彼が煌々する星をちつとみつめてゐるのが分つた。

「あれが、おいらを照らしてゐる。」と彼は度ましく言つた。「こゝにかふして、苦しんだり惱んだりしてゐるおいらをな。星はおいらの心の中を照らしてゐるんだ。おいらはあの星をみて考へてゐたんだよ。レイチエル。するとおいらの心の滅茶苦茶がすっかり消えてしまつたんだ。誰かゞ若しこのおいらをもつと早く分つてゐてさへくれたなら、おいらもまた、皆がもつとよく分つたのに違へなかつたんだらうに。おれはお前の手紙を受け取つた時、ルイザさんの仕打も、ルイザさんの弟さんの仕打も同じものだ、この二人が悪計みをしてゐるんだつてことを、すぐ信じちまつたんだ。おれは坑の中に落ちた時にや、またルイザさんのことを思つてゐた。そして皆がをれを悪者と思つてゐるやうに、おれはルイザさんを悪者だと無暗に思ひ込んでゐた。だがおれ達は人を見る時も、おれ達のふだんの仕事と同じやうに我慢して辛抱してみなくちやならねえ、おいらは今こんなに苦しんで悶えてゐるけれど、あれを見上げて——あの星が上で輝いてゐるのを見ると——世界中の人々もつとお互ひに仲よくして、もつと理解し合つてゆくだらうつていふことが、おいらがこの弱い體で世の中に生きてゐた時よりも、今はつきりと分つたんだ。このお願ひをおいらの死に際のお所りにするんだ。」

ルイザは彼の言葉を聞いて、レイチエルと反對の側から彼の上に體を屈めたので、彼もルイザを見ることが出来た。

「お前さまも聞いて下さつたかね。」と彼は言つて、一寸口を噤んで、「わたしはお前さまを忘れちやみません。奥さん。」

「えゝ、ステイヴンさん。わたしはお前さんの言ふ事を聞きました。お前さんのお祈りは、わたしのお祈りですわ。」

「お前さまにはお父さまがおありだ。お父さまのところへ」

一六四六一

お使ひをやつて下せえまし。」

「お父さまはこゝに来てゐますよ。」とルイザは何だか恐ろしさうに言つた。「こゝへ聯れて來ませうか？」

「はいぞ。」

ルイザは父を聯れて來た。ルイザと父は手を取り合つて立ちながら、この嚴肅な顔を見下した。

「旦那、お前様は皆に、わしの身の證しを立て、わしの名前を清めて下せえ。これだけがお願ひで

「ごぜえます。」

グラッドグラインドは當惑して、それにはどうしたらあゝかと訊ねた。

「旦那。」と彼は答へた。「お前様の息子さんがその方法を知つてゐますよ。息子さんに訊ねて御覽なせえ。わつしは別に何も言ふまい。一言だつて言ふ必要はねえんです。わしは或る晩に息子さんと會つて話したことがありやしたよ、わしは只、お前様に、わしの身の證しを立てて、お貰ひ申してえだけのこと、外に何の頼みもねえのです。——そしてお前様はきつとさうしてくれるでござえませうね。」

人足達は今はもう彼を運んで行かうとしてゐた。外科醫は彼の體を動かすことを心配したが、炬火や提燈をもつた人達は、はや擔架の先きに立つて行く支度をしてゐた。擔架を持ち上げる前に人々はどうして運んで行くかを相談してゐたが、その時、彼は空の星を見上げながら、レイチェルにかふ言つた——

「おいらは坑の中で苦しみながら時々正氣づくつと、あの星がこの坑の中にあるおいらを照らしてゐるのを見付けたのだよ、その時おいらは救世主様のところへ、おいらを聯れて行つてくれるのは、あの星だと思つたんだよ。うむ、きつとあの星にちげえねえとな。」

人々は彼の身を持ち上げた。彼は星の導いてくれる方角へ彼を聯れて行つてくれることを知つて大いに喜んだ。

「レイチェル。可愛いもんだ！おいらの手を離してくれるな。今晚は二人で一緒に歩かうよ。ねえお前。」

「わたしは何處までもお前さんの手を握つてつて上げるよ。そしてお前さんの傍にずっとくつ付いてゎあげるよ。ステイヴンさん。」

「有難てえ！誰かおいらの顔に何か掛けてくれないか。」

人々は極くそつと鼻ぎ上げて、畑に沿ひ、小路を下り、廣ぬ、野原を越えて、彼を運んで行つた。レイチェルは始終、彼の手を握りつゞけてゐた。ほんの一聲一聲、悲しみの沈黙を破つて囁かれた。

これはやがて葬式の行列となつた星は貧しき者を神の在ます處へ導くために彼を照らした。そして彼は謙遜と、悲しみと、感謝のうちに救ひ主のみ許へ行つたのであつた。

—六四七—

七、不良兒狩り

『地獄坑』の周圍を取りかこんだ人の輪がまた崩れない前に、一つの影がその輪の中から消え失せた。バウンダアビイと彼の影法師とは、父親の腕をとつたレイザの傍に立つてはゐずに、いつの間にか彼等だけで皆から離れた處にゐた。グラッドグラインドが擔架の傍へ呼ばれたとき、先程からその場の様子を何一つ見逃さなかつたシッシイは、そつとあの邪惡な影法師の背後に廻つて行つて——彼の面に現はれてゐた恐怖の色は、外に群集の注意を惹くものがなかつたなら、必ずや彼に一同の視線を集中させたことであらふ——そつと彼の耳に何か囁いた。彼は首を振り向けもせずにシッシイとなにか話してゐるやうであつたが、そのまゝ消え失せた。かふしてやくざ青年は、群集がまだその場を動かない間にこの輪のうちから立ち去つてしまつたのであつた。

父親は家に歸ると、バウンダアビイの處へ、使を出して、息子に直ぐに來いと言つてやつた。するとその返事はバウンダアビイは先刻あの群集の中で彼を見失つて、それ以來彼の姿を見ないのであるが、多分ストーン・ロツヂの方にも居るのだらうと思つてゐたといふのであつた。

「お父さま、あの子は今晚きつと町へ歸つて來ないでせうと思ひますわ。」とルイザが言った。グラッドグラインドは顔をそむけて、それ以上、何も言はなかつた。翌朝、グラッドグラインドは、銀行が開くや否や、自分で銀行へ出掛けて行つて見ると、息子の椅子が空席になつてゐたので、(彼は最初はのぞいて見る勇氣がなかつた) 通りへ引返して來ると、丁度出勤の途中にあるバウンダアビイと出會つた。彼はバウンダアビイに、今は一寸問はれても答へ兼ねるから、あとで直ぐに説明するが、事情があつて倅をしばらく、遠方へ用事にやつたから、と言つた。そしてまた彼は、ステイヴン・ブラックプールの名譽の爲めに大いに辯護して、盜賊を捕へるのが義務だ、とも言つた。バウンダアビイはすつかり煙に巻かれて、彼の立ち去つた後でも、通りの真中に、そのまゝ棒立ちになつて、大きな石鱈玉のやうに膨れあがつてゐた。たゞこの石鱈玉には、美しさが缺けてゐた。グラッドグラインドは家に歸り、自分の部屋に閉ぢ籠つたまゝその日は終日部屋を出なかつた。シッシイとルイザとは、外から戸を叩いたときも、彼は戸を開けようともせず、中からそのまゝ返事をした。「お前達に氣の毒ぢやが、今は駄目ぢや。晩にしてもらはず。」と。夕方彼女達が歸つて來て再び戸を叩くと、「まだ駄目だよ——明日の朝にして貰はふ。」と言つた。その日一日彼は何も喰へず、日が暮れて暗くなつても燈火をつけなかつた。そして、その夜

—六四八—

遅くまで、グラッドグラインドが、部屋の中を行きつ戻りつ歩いてゐる聲音が聞えた。だが翌朝、彼は、いつもの時間に、朝食をたべに出て來て、例の通り喰卓に着いた。彼は一晩のうちに、見違へるやうに年をとつて、すつかり腰が曲つてしまつたやうに見えた。だが、思ひなしか、昔事實々々『事實』以外に何物をも求めなかつたころにくらべて、ぶゝと賢い善良な人になつたやうに見えた。彼は喰堂を去る前に、シッシイとルイザに後で彼の部屋に來るやうにと言ひつけて、めつきり白いものゝ増えた頭を垂れて喰堂を出て行つた。

二人が言ひつけられた時刻に彼の部屋へ行つた時、ルイザが言つた。「ねえお父さま、あなたにはまだ三人の子供が残つてゐます。三人が三人とも皆今とは違つた人間になりませう。わたしだつて屹度生れ變つたものになる心算ですわ、神様のお助けを願つて。」

彼女はシッシイにすがつた——神の助力と共に、シッシイの力添へをも求めてゐるかのやうに。

「お前の弟の不埒者めが、」と、グラッドグラインドは言つた。「あいつは、お前と一緒にあの男の下宿に行つた時、もう今度のことを計畫んでゐたとお前は思ふかね。」

「どうも、さうらしいのよ、お父さま。弟は大變お金を欲しがつてゐたことをわたしは知つてゐますもの。そして大變澤山お金を使つてゐましたわ。」

「あの不仕合せな男が丁度町を去らうとしてゐたので、あの男に嫌疑をかけてやらうとする考へが倅の頭に浮んでゐたのぢやな。」

「きつと、あの人の下宿にゐる間に、そんな考へが、ちらと浮んだに違ひないと思ひますわ、お父さま。何故かと申しますと、ステイヴンのところへ訪ねて行かうと言つたのはわたしから勧めたので、弟から言ひ出したのではないのですもの。」

「その時あいつはステイヴンと何か話をしたさうぢやが、脇へ聯れ出してゝも話したのかね?」

「弟はステイヴンを部屋の外へ聯れ出して行つたのです。何故そんなことをしたのかと、わたしがあとで訊ねましたら、何だか躊躇しながら尤もらしい言ひ譯をしてゐました。お父さま、昨晩からの、いろいろな事情を思ひ合せてみますと、わたしは弟とステイヴンとが何を話してゐたか、はつきり分るやうな氣がしますわ。」

「では」と父親は言った。「あいつについてのお前の考へといふのが、このわしの考へと同じやうに、暗いものかどうか、言つてみておくれ。」

「どうもねえ、お父さま。」とルイザは言ひ淀んで、「弟はステイヴン・ブラックプールに、何か言ひ出したに相違ありません。」

一六四九—

んわ——わたしの名前でしたのか、それとも弟が自分の名前でしたのか、それは存じませんけれど！そこでブラックプールは、何かやむを得ないことになつて、あの男としては心に何の疚しさも覺えずに、それ迄に一度もしたことのなかつたやうな事を——あの人が町を出て行く前に二晩か三晩銀行の傍で何かを待つやうなことをしたものでせう。」

「その通りぢやらう！その通りぢやらう！」父親は顔を覆ふて、暫く言葉もなかつたが、やがて氣を取り直してかふ言つた——「それでは、どうしたらあいつを見つけられるぢやらうか。どうしたら法律の制裁を免れられるぢやらうか。わしはこの事件の真相を世間に發表するのに、まだ數時間の餘裕はあるが、それまでにどうしてもわし達で、わし達だけで、あいつの居所を探さねばならんぢや。どうすれば探せるぢやらうか。一萬ポンド賭けたとて出来はせんぢやらう。」

「お父さま、シッシイには出来ますわ。」

彼は眼をあげて、シッシイの立つてゐる方を見た。彼女はまるでこの家の天使の顔に見えた。彼は感謝と親しさに溢れた調子で言つた。「シッシイ、いつもの事だが有難うよ。」

「わたしたちはこれに就いては昨日よりづゝと前から心配してをりました。」とシッシイはルイザを見つめながら言つた。「昨晚、あなたが擔架の傍へ近寄つておいでになつたとき、どんなお話だつたかを伺ひましたので（わたしは始終レイチエルさんの側にゐましたから）、わたしは誰にも見られないうちに、トムさんのところへ行つてかふ申しました。『トムさん、わたしの方を見ちやいけませんよ。お父さまのあらつしやる所を見て御覽なさい。さ、早くこの場をお逃げなさい、お父さまのお爲めに、またあなたのおために！』つて。トムさんはわたしがかふ囁やく前からもうふるへてゐました、わたしがかふ囁やくとはつと飛び上つて尙更ふるへ出しました。そしておろおろ聲でかふ言ひました。『逃げやうつたつて何處へ逃げられるだらう。金はほんの少しゝきやないし、それかと云つて、誰か僕を隠まつてくれさうな人も知らないし！』つて。わたしは父が以前入つてゐた曲馬團のことを考へ付きました。わたしは、親方のスリアリさんが今何處ゐらを打つて廻つてゐるのかを忘れてゐませんでした、つい先日新聞であの人のことを讀んだばかりでしたから。わたしはトムさんに、『急いでスリアリさんのところを頼つて行つて、わたしが行くまで隠まつて貰ふように頼みなさい。』と言ひました。するとトムさんも、『ちや僕は今晚ぢやうにそのスリアリさんのところへ行かう。』と言ひました。そして、人込みの中から、そつと逃げ出して行きました。」

「有難い！」と父親は叫んだ。「では、あいつもまた外國へ」

一六五〇—

逃げ延びられるかも知れん。」

更に都合のよかつたのは、シッシイが教へて逃がしてやつたその町からは、リヴァプールまで三時間以内に行けることであつた。リヴァプールまで行けば、そこからは直ぐに世界中の何處へでも行くことが出来るのであつた。だが、彼と聯絡をとるには十分な用心が必要なので、——といふのは、今

はもうトムに嫌疑がかけられるといふ危険が刻一刻に増大して來てゐる上に、パウ نداアビイ自身までもが、公益を尊ぶ熱誠を見せびらかしたさのあまり、あの羅馬人（マークス・ジュニアス・ブルータスを指す。己れを子の如くいつくしんでくれてゐたジュリアス・シーザーに對する陰謀に組して、彼がその刃をシーザーの頭上にかざした時、「ブルータス、汝までが」と叫んだシーザーの言葉は史上に有名である）に扮しはしなからうか」と誰しも心の中で確信をもつことが出来なかつたからである。それで、シッシイとルイザとだけで、トムのゐるその問題の場所へ、廻り道をして赴くこと、また不幸な父親は、それとは反對の方向をとり、更に大きな迂廻をして同じ目的の場所へ赴くこと、といふ相談が纏つた。更にまた、眞實の目的を誤解されてもいけないし、或は父親が來たと知つてトムが更に何處かへ逃げて終つてもいけないから、父親はスリアリに會はないやうにしなくてはいけないと言ふかと、聯絡をとるのはシッシイ及びルイザにまかして置かなくてはならないといふことなどを打ち合した。だがたゞ、父親が手近かにゐるといふこと、及び自分たちが來た目的だけはあの親不孝の不面目なやくざ者にも、十分知らせてやらなければ、ならないと云ふことになつた。三人の間で、かふいふ手筈について十分相談が纏まり、すつかり打ち合せを終つたので、さて、愈々實行する段取りになつた。その日の午後、直ちにグラッドグラインドは自宅を出發して、徒歩で田舎道を通り、豫定の旅行をするために汽車にのつた。残りの二人は、夜に入つてから、顔を知つた人には一人も會はなかつたのに力を得て、いよいよ別の方向へと出發したのである。二人は夜通し旅しつづけた、たゞ鐵道の分岐點で恐ろしく澤山の段々を上らされたり、井戸の底のやうなところを潛らされたりして數分間の時間を費したほかには少しも徒はしなかつた。——そしてその翌朝早く、目的の町から一二哩離れたある沼地へ下ろされた。二人は丁度通りかゝつた、無骨な老馱者のおかげで、この不氣味な場所から救はれた。彼は、折よく早起して、一頭引きの二輪馬車を駈けさせてゐたのであつた。彼等は豚の住んでゐる裡路を通つて、町へまぎれ込んだ。それは堂々たる芳ばしい乗込みではなかつたらうけれども、かふした場合には最も適當した通り道であつた。町へ入つて先づ目に觸れたのは、スリアリ曲馬團の小屋掛けの殘骸であつた。一座はもう、此處から二十哩も離れた別の町へ出發したあとで、昨晩既にその町で興行し出したといふのであ

—六五—

つた。その町へ行くには坂の多い關所道を通らなければならなかつた。この道中は随分のろくさいものであつた。彼女達は太急ぎで、朝飯を喰べたゞけで、少しも休息しなかつたのだが（かふした心配事を控へてゐては、ゆつくり休息したいと思つても出来なかつたであらう）、スリアリ曲馬團興行中といふ廣告ビラが、納屋だの壁だのに貼つてあるのが見え始めたのは、正午を過ぎてゐたし、町の市場のところを下りた時には、もう午後の一時になつてゐた。二人が市場通りの鋪石の上に足をとめた時は、丁度『午前の大興行』がこれから始まるといふので、木戸番がしきりに怒鳴つてゐるところであつた。町の人達に尋ねて變に思はれてはいけないから、卻つて木戸錢を拂つて中へ入つた方がゑゝとシッシイは勧めた。若しもスリアリさんが木戸にゐて木戸錢を受けとつてゐたなら、きつとシッシイを知つてゐるに相違ないから、必ずそつと計らつてくれるだらうし、又木戸にゐなかつたとしても、中に入りさへすれば會へるに相違がない。さうすれば自分が逃亡者を隠まつてゐるのだから、やはりそつと計らつてくれるであらう、とシッシイが言つた。そこで彼女達は胸をどきどきさせながら、よく見覚えのある小屋のところに行つて木戸錢を拂つた。小屋には『スリアリ曲馬團』と大書された旗が掲げられてゐた。例のゴシック式の札賣場もあつた。だがそこにはスリアリが入つてゐずにキッダアミンスターがゐた。キッダアミンスターは、今はもう成長して、一人前の曲馬師らしい風をしてゐ

たので、いくら鼻屑目にみても、もはやキューピッドといふ柄ではなく、境遇の必要（それから頬鬚）に負けて、また何でも屋といふ格で、この時は、會計係りを勤めてゐた——しかも用事の合間々々や餘裕のあつた時の暇潰しらしく、傍に太鼓が置いてあつた。キツダアミンスターは贗造貨幣を見わけるのに夢中になつて、錢の外には目もくれやうとはしなかつたので、シツシイは、彼に見つからずに本戸を通りすぎた、そして二人は小屋の中に入つたのであつた。黒い斑点を刷りつけられた逞ましゐる老白馬に跨つた『○○○』は一度に五つの手洗盥をぐるぐる廻してゐた。それはこの『○○○』が大好きな氣晴しだといふ觸れ込みであつた。シツシイはこの『○○○』の藝當のことはよく知つてゐたが、今現に手洗盥を廻してゐる『○○○』は誰なのだかわからなかつた。○○○○は静まりかへつた如何にも平和なものであつた。次に彼女には見知らない道化役の口上で舞臺に現はれたのは、ミス・ジョセフィン・スリアリであつた。彼女の演るのは、あの名前の優美な馬上演技『智露留一流花の舞』といふのであつた、(道化者はこれを『甘藍一流花の舞』と洒落れた)やがて彼女はスリアリに導かれて舞臺に出て來た。

一六五二

スリアリが、長い鞭で道化者をびしやりと一つ打つと、道化者は「貴殿が二度とさやうな眞似をなさるなら、拙者は貴殿にこの馬めを投げつけますぞ」など、言つて見物を笑はしてゐる内、忽ちシツシイの姿は、スリアリ父娘の眼についた。だが彼等は十分落ちついてこの演技をやり通した。スリアリは、最初一寸シツシイを見たゞけで、後はその見えない方の片眼と同様、見える方の眼にも決して何等の色も浮べなかつた。演技はシツシイとルイザにとつては少し長すぎた、道化者がスリアリにかふ話しかける機會を興へるため、一寸演技の手が止められた時には殊にさう思はれた。(スリアリはその片眼で、見物の方を見ながら、道化者が何を言はふと、いかにも落ちついた體で「うむ、成るほど」と言ふのであつた)——道化者の話といふのは、二本脚が三本脚の上に坐つて、一本脚をみてゐると、そこへ四本脚がやつて來て、その一本脚を擱んだので、二本脚が立ち上つて、三本脚をもつて、四本脚をめぐらして投げつけたので、四本脚は一本脚をもつて逃げたとき、といふ道化たものであつた。これは肉屋と、三脚椅子と、犬と、羊の片脚を面白い譬喩でのべたものであつたが、この説明に可成り時間をくつたので、二人はもうひどく不安なぢりぢりした氣持になつてゐた。だがたうたう小柄で髪の良いジョセフィンが見物の大喝采のうちに挨拶をすました、道化役は一人舞臺に取り残されてゐたが、自分のお尻をびしやりと打つて、「今度は拙者の番でござい」と言つた、とその時誰かシツシイの肩に觸つて手招きする者があつた。

彼女はルイザと一緒に聯れて行つた。スリアリはひどく狡苦しい自分の樂屋に二人を招き入れた。そこは、四方の壁が天幕の布片で、牀は草原で、天井は斜に竝んだ丸太棒で出來てゐたが、天井の上が特等席になつてゐるので、見物がやんやと喝采すると、天井を突きぬいて、この樂屋へ落ちて來さうであつた。

「セスイリヤか。」と水を割つたブランデーのコップを手にしたスリアリは、例の噺れた聲で言つた。「久しぶりだつたなあ。お前はいつも一座の聯中の人氣者だつたが、あの分れた時から立派にわし達の肩身をひろくさせてくれたのはうれしいよ。まづ肝心の話をする前に、お前一つ皆にあつてやつてくれ、——でなくちや、皆がきつとがつかりするよ、——殊に女の聯中がな。ジョセフィンもイー・ダブリュー・バイ・チルダアズと結婚してな、もう男の子供まで出來たよ。今年やつと三つだが、どんな馬の上にも乗つかるんだよ。やつこさんは『スコラ流馬術の神童』つて云はれてるんだよ。やつこさんのこたア、若しアストレレーのところぢや聞かなくても、パリスのところぢや聞いてゐるだらう

(アストレーもパリスも曲馬團の名)、それから、キツダアミンスタアを覚えてゐ

―六五三―

るだらう、そら、あのお前に一寸氣があると思はれてゐた若者さ。あのやつこさんも女房を持つたよ。一座の後家さんと一緒になつたんだが、まるで、やつこさんのお袋みたいなお婆さんだよ。後家さんは綱渡りの役だつたんだが、今ちや何も出来やしねえ、――すつかり肥つたからな。奴さん達には子供が二人あるので、わしの一座はお伽芝居が得意なのだよ。お前は、わしの一座のやる『森の子供』つてのを見たら吃驚しようよ、趣向はかふだ。子供等のお爺とお袋が死ぬんだ、二人とも馬の上でだよ――すると叔父貴がお情けで後見になつて子供を引き取るんだ、矢つ張り馬の上でね――二人の子供達は馬に乗つて苺取りに出掛ける――すると澤山駒鳥が飛んで来て二人の子供達を木の葉で埋める、これも馬の上でだよ。――何しろお前が今まで見たことも無えほど素晴らしいもんだよ……。それから、お前はあのエムマ・ゴードンを知つてゐるだらう、まるでお前のお袋みたいだつたね。もちろん、知つてるね、聞くまでもないや。さうさう、エムマ・ゴードンは亭主に死なれたんだよ。亭主は印度の王様になつて、象の背中の上をさまりかへつてゐた時、不意にずしんと後へ仰向けに投げ倒されちやつて、それつきり快くなかつたんだよ。それでエムマはまた亭主を持つたよ――乾酪屋と一緒になつたんだが、その乾酪屋といふのは、前々からエムマに首つたけだつた男でね、――そして彼奴は貧民救助税の取立人の一人でね、たんまり金儲けをしてゐるよ。」

前よりも大分息ぎれが激しくなつてゐたスリアリは、それでも、かふしたいろいろなその後の経緯を、始終ブランドイのコップを離さず、眼をどんよりさせてゐる老獪なお爺の口からこんな音が出るのかと思はれる程の、誠の籠つた、作り飾りの無い調子で物語つた。その後で、彼はジョセフィンと、イー・ダブリュー・ビー・チルダアズ(書間見ると額のところに深い皺があつた)と、例の『スコラ流馬術の神童』君と、そして――手短かに言へば彼の全家族を聯れて来た。ルイザの目から見ると、彼等は顔を眞白や桃色に塗つてゐたり、衣物が如何にも薄かつたり、脚を露出しにしてゐたりして、實に奇妙なものであつた。然しながら、彼等がシッシイの周圍に集つて彼女が涙を抑へかねてゐる所は他の目から見ても美しかった。

「さあ！セスイリヤはもう子供達に接吻したんだし、女共と承抱き合つたんだし、男共には一と廻り握手してしまつたんだ。さあ皆もうあつちへ行かねえ。そしてこの次の幕の樂隊をやらかせ！」

彼等が出で行つてしまふと、彼は小聲で言ひ續けた。「ところでセスイリヤ、わしは別に祕密を嗅ぎ出さうてんぢや無えが、多分このお嬢さんのことでやつて来たんだらう。」

―六五四―

「えゝさうよ。あの人のお姉さまですよ、この方は。」

「ぢやあ、あの旦那の娘さんに當るわけだね。わしもてつきりさうだと思つてゐたよ。お嬢さん、よくゐらつしやゐましたね。して旦那はお達者ですかい？」

「父もすぐ此處へ参りませう。」とルイザは肝心の問題から逸れるのを恐れて言つた。「あの、弟は無事でせうか。」

「えゝ、そりや御無事で大元氣ですよ！」と彼は答へた。

「お嬢さん、まあ一寸此處んところから舞臺を覗いて御覽なせえまし。セスイリヤ、お前は小屋をよく知つてるんだから、何處か自分で覗く穴を探し出しなや。」

彼女達はめいめい板壁の隙間から覗いてみた。

「そら、今やつてるのは『ジャックの巨人退治』——といふやつで、子供聯の喜劇だよ。」とスリアリは言った。「あそこジャックの隠れる小道眞の家が見えるだらう。それからあつちには鍋の蓋と炙申とを持つた道化があるだらう。あれはジャックの召使なんだ。小さなジャックが立派な鎧を着てるだらう。家の二倍もある程大きな、おどけた、黒人の召使が二人、家の傍に立つてゐて、その家を舞臺に持ち込んだり引込めたりしてゐるだらう。それから巨人は（こいつ卻々錢のかゝる柳枝細工なんだが）まだ出て来ないんだ。さあ、皆見えるかひ？」

「えゝ見えますわ。」と二人は言った。

「も一度よく見てみなせえよ。」とスリアリは言った。「よく見てみなせえ。みんな見えるかひ？ うん、よし、よし。さてお嬢さん——と言つて彼は腰掛けをすゝめて彼等を坐らせた——「わしはわしで意見があるし、旦那はまた旦那で意見もおありだらうが、あなたの弟さんが、何をしたんで此處へお出でになつたのか、わしとして別に知りたくも無えし、また知らない方があゝんです。わしの言ひたひのはたゞ、旦那がセイリヤをよくお世話下すつたから、今度はわしがお禮代りに旦那の味方をするのだ、といふことです。あなたの弟さんは、そら、あの黒奴の召使の一人になつてるんですよ。」

ルイザは、半ば困惑したやうな、半ばは安心したやうな叫びをあげた。

「本當にさうなんです。」とスリアリは言った。「でも、あなた方はさうと知つたからつて、今は弟さんに指一本さしてはいけませんよ、旦那の来るまでお待ちなせえ。舞臺が濟んだら、弟さんと呼んで此處へ引き止めて置きます。衣物もあのまゝで脱がさずに、顔の化粧も落さずに置きやせう。あの幕が終つたら旦那を此處へ呼んでをひでなせえ。またあなた方がお出で下さつてもようがす。さうすりや弟さんに會はせてあげるから、この部屋で弟さんと何なりと自由に話をなさい。弟さんが身を隠してゐる間は、身なり

一六五五

なんどに驚いちやいけませんぜ。」

ルイザはほつと重荷をおろして、スリアリに深い感謝の言葉を述べたが、この上スリアリを引き留めなかつた。彼女は涙のあふれる眼で、いとしげに弟の姿を眺めやり、名残惜しげにシッシイと共に夕方にならない内に此處を立ち去つた。

グラッドグラインドは、それから一時間後れて到着した。彼もまた、途中誰にも知り人に會はずに濟んだ。そして、スリアリの俠氣によつて、今夜の内に不面目な息子をリヴァプールへ逃れさすことが出来るといふので、その面にも幾らか血の氣がかへつてゐた。シッシイ、ルイザ、グラッドグラインド、この三人のうちの誰かゞ彼の附添となつていつた日にはどんなに變装してゐても、トムといふことを廣告するやうなものだつたから、彼は信頼出来る知人の一人に、手紙を一通書いて息子に持たせてやることにした。その文面には、どれ程の賃銀を支拂つてもあゝから、この手紙の持参者を北米なり、南米なり、或ひは如何なる世界の果てでもよろしい、本人が最も速かに、且つ祕かに出發の出来る船に乗せてやつて貰ひたひ、といふ依頼狀あつた。これが出来上つたので、三人は、曲馬團の立ちのくのを待ちながら、その邊を徘徊して時を過してゐた。それは單に、見物が立ち去るだけでは無く、曲馬團も馬も、すつかりこの地を立ち退くまで待たねばならないのであつた。彼等は長い間小屋を見つめてゐると、やがてスリアリは椅子を一脚持ち出して、入口の傍へ腰を下し、煙草を吸つてゐるのが見えた。それは彼等が小屋へ近づいてもあゝといふ合圖だと思はれた。

「旦那、御機嫌よろしう、」と彼等が小屋へ入つてゐたとき、スリアリは控へ目にかふ挨拶をした。「御用がおりなら、わしはいつでも此處に居りやすから。旦那、息子さんが道化の衣物を着てゐたつて吃驚なすつちやいけませんぜ。」

三人は小屋の中に入つた。グラッドグラインドは舞臺の真中にある、道化役が演技に使ふ椅子に茫然したやうに腰を下ろした。そのづゝと後め方、見物席の光もよくは届かない薄暗いところにある腰掛けの一つに、あの横着ものゝやくざ青年が、何處までも不機嫌さうに腰をかけてゐた。グラッドグラインドは彼を自分の息子と呼ぶのが情けなかつた。

昔の小役人でも着るやうな、途方もない常識はづれの上衣を着て、とてつもなくだゞつ廣め袖口をびらびらと大袈裟に垂れ、大きな胴衣に、半股引、縮金付きの鞆、突飛で氣違ひぢみた鶏冠帽子、と云ふ扮装は、何一つとして彼の身にびつたりと合ふものがなく、またどれもこれも安物で、

—六五六—

蟲が喰つて穴だらけであつた。眞黒な顔に幾筋か皺が見え顔ぢうに塗りつけた脂っぽい顔料も、それに現はれてゐる恐怖と激情を隠しおほせなかつた。どの點から見ても、かふした喜劇のお仕着を着せられたやくざ青年の姿は、實に不氣味で、忌はしく、又馬鹿々々しひ程不面目で、かゝるものゝ存在するとは——眼前の事實ではあつたが——グラッドグラインドにはどうしても信じてゐることが出来ないほどであつた。あゝ、あの模範兒童の一人が、これまでに成り下らうとは！

最初のろちは、やくざ青年も近寄らずに、剛情にもそこぢつと一人で腰掛けたまゝであつた。だがたうたう、シッシイの言葉を聴き入れて——こんな不承無精の態度でも他人の言葉を『聴き入れて』と言ひ得るなら、——たうたう彼は近くへ寄つて来た——ルイザの勧めには彼は頑くなに拒んだ、——彼は腰掛を一つづゝにじり寄つて、やつと舞臺の縁の鋸屑のいつばゐある處に突立つた。しかもそれは舞臺のうちとはゐへ、父親が腰かけてゐる場所からは出来るだけ遠い端の方であつた。

「どうしてあんなことをしたのぢや？」と父親は訊ねた。

「何をどうしてしたと仰しやるんです？」と息子は不機嫌らしく言つた。

「あの事件ぢや。」と父親はこの言葉に一段と聲を張り上げて言つた。

「僕は一晩中かゝつて金庫をこじ開けたんです。そして出て行く時に半開きにしておいたんです。合鍵はづゝと前につけて持つてゐました、僕はそれをあの朝、そこへ落して置きました。その鍵を使つたのだと思はせるやうにです。僕は一度に皆金を取り出したわけではないのです。僕は毎晩勘定の残りをしまつて置くやうな振りをしました、けれど、實はしまつて置きはしなかつたんです。えゝ、たつたそれだけです。これでお父さまは何もかも皆御存じになつたわけです。」

「いやたとひ雷が落ちかゝつて来たゝて、」と父親が言つた。「わしはこれ程驚きはしなかつたらう！」
「僕には譯がわかりません。」と息子は唸つた。「大勢の人間が信用の位置に雇はれてゐるんです、中には不正直な人間も出るの當り前ぢやありませんか。それは動かすことの出来ない原則だと、お父さまが百遍も言つたのを僕は聞きました。どうしてこの僕がそんな動かすことの出来ない原則などを左右することが出来ますか。お父さま、あなたはこんなことを言つて、他人を慰めてやりましたね。今度は御自分でお慰めなさい。」

父親は両手に顔を埋めた。息子は麥稗を噛みながら、その恥知らずな奇妙な様子をして突立つてゐた。両手の内側

—六五七—

の黒塗りが處々剥げ落ちて、まるで猿の手のやうであつた。夕闇がずんずん迫つて來た。そして時々、白眼を小止みなくいらだゝしさうに父親の方へ向けてゐた。顔に塗つた化粧が餘り厚いので、二つの眼は彼の顔の中で生氣なり表情なりを現はしてゐる唯一のものであつた。

「お前はリヴァプールへ行かなければならん。そして外國へ行くんぢや。」

「恐らく行かなくちやならないでせう。何處へ行つても、これ以上みじめな目にあふことはないでせう。」とやぐや青年は泣き聲を出した。「この國では、僕の物心がついて以來、いつもみじめな目ばかり見て來たんです、こんなことになつたのも、一つはそれだからなんです。」

グラッドグラインドは戸の處へ行つて、スリアリを聯れて戻つて來た。そして、この情けない奴をどうしてこゝから聯れ出したらあゝかと訊いてみた。

「旦那、わしはそれを考へてゐたのですよ。旦那が承知して下すつても、下さらなくても、もう時間がいくらもござえませぬ。汽車まで行くには二十哩の上ありますからね。此處から三十分も歩くと汽車道まで行く馬車があります。多分郵便列車には間に合ふでがせう。そいつへ乗りや若旦那を眞直ぐにリヴァプールまで聯れてゐつて呉れますよ。」

「だが、倅の風體を見てくれたまへ。」とグラッドグラインドはうめいた。「あんな風體をしてゐたら、いくら馬車でも――」

「なにも道化の仕着せを着て行くことは無いでさ。」とスリアリは言つた。「一寸お待ちなせえ。わしは衣裳棚から着物を出して來て、五分もたゝねえうちに若旦那を在郷者に仕立てませう。」

「わしには分らん。」とグラッドグラインドは言つた。

「在郷者でさ――馬方でさ。旦那、早く御決心なせえ。顔を洗ふビールがあるだらう。道化の黒ん坊をきれいに洗ひ落すには、ビールに限りませえ。」

グラッドグラインドは直ちに同意した。スリアリは箱の中から、百姓着物や羅紗帽子そのほかの必要な品々を取り出した。やくざ青年は羅紗の幕の背後で急いで着替へた。スリアリも大急ぎでビールを持つて來て、やくざ青年を元のやうに眞白に洗つてやつた。

「さあ。」とスリアリが言つた。「早く仕事に取り掛らなくちや。立ちなせえ。そこまでわしが一緒に行つて上げませえ。さうすりや皆がお前さんを一座の者だと思ふだらうから。お父さんや姉さんにお別れの挨拶をなせえよ。」かふ言つて彼は氣をきかして引きさがつた。

「そらこの手紙を持つて行け。」とグラッドグラインドが言つた。「お前の爲めに、萬事あゝやうに取り計らつてあるぞ。」

―六五八―

お前は自分のやつた汚らはしひ行ひと、その爲めに起つたあの恐ろしい結果に對して、十分悔い改めて、立派な事をして、罪を償ふのだぞ。可哀さうな奴め、どれ手を出せ。わしがお前を許してやつたやうに、どうか神様もお前をお許し下さるやうに――」

罪人は流石にこの言葉と、その哀れげな調子に動かされて、それでも殊勝げに涙を少しこぼした。だがルイザが彼を抱かうとして、兩腕を閉めたとき、彼は改めてそれを拒絶した。

「姉さんはいけない。僕は、姉さんに、何も言ひたくないんだ！」

「まあ、トム、トム、わたしはこれほどお前を愛してゐるのに、こんなにして別れなくてはならんぞ。――」

「姉さんが愛してくれたつて？」と彼は剛情に言ひ返した。「立派な愛だね！僕が一番危険な目に會

つてゐるときに、バウンダアビを置き去りにしたり、親友のハートハウスを追ひ返したり、へん、立派な愛だね！僕が捕まらうとしてゐるのを知りながら、僕等があすこへ行つたことを一々教へたりなんかしてさ。へん、立派な愛だね、それは！姉さんは僕を立派に見捨てゝくれたんだ。ちつとも僕に構つてくれはしなかつたんだ。」

「早くしなせよ！」とスリアリが戸口で促した。

一同は前後も無く出て行つた。——ルイザは弟に向つてその罪を許したことや、今でも愛してゐることや、こんな風にして姉を見棄てゝ行くと、いつかきつと、後悔するだらうといふことや、いまはそんなに怒つてゐても、遠くへ行つて——偶然誰かに情けない目に會はされたときには、姉のこの最後の言葉を思ひ出して喜ぶだらう、などゝ言つて泣きながら、弟に搔き口説いた。グラッドグラインドは、シッシイとルイザが尙ほも弟の肩にとりすがつてゐる間に、一歩前に出てゐたが、はつと立ち止つて身を引いた。

そこには、ビツアがゐたのである。息を切らして、薄い唇を開けて、肉薄の小鼻をふくらませて、白ちやけた睫毛をしばたゝゐて、色の無い顔を更に色の無いものにして、さながら外の人達の感情が赧く燃え立つてゐるのに、自分だけは白熱してゐるやうに見えた。彼は遠い昔、シッシイを追ひかけたあの夜からこのかた、一寸も休まなかつたものゝやうに、喘いで、せいせい息をきらしながら、そこに突立つてゐた。

「お氣の毒だが僕はあなた方の計畫通りにはさせることが出来ません。」とビツアは頭を振りながら言つた。「僕は曲馬團の聯中なんか一杯喰はされるやうなことはありません。トム君はこの僕が捕まへなくてはならない。トム君を曲馬團の聯中なんかの手で逃がさせてたまるもんですか。此

一六五九

處にゐる百姓服を着たのはトム君だ。僕はきつと捕まへなくちやならないんです！」

その上『襟首をつかんで』と言ひたさうに見えた。何故ならビツアはトムの襟首をしつかりつかんだからである。

八、談理的一幕

彼等は掛小屋の中に戻つて來た。スリアリは誰も他人が中へ入れないやうに戸を閉めきつた。ビツアは猶も、呆然とした罪人の襟首を捕へたまゝ、舞臺の眞中に突立ちながら、夕闇をすかして、自分が昔世話になつたグラッドグラインドの方を盗み見てゐた。

「ビツア。」とグラッドグラインドは彼に言つたが、その聲はすつかり愴氣かへつて、暗くも哀れなほど遜つてゐた。「お前には心といふものがあるか。」

ビツアは、奇妙なことを問ふものだと言はんばかりに、にやりと笑ひ乍ら答へた。「心臓がなくちや血液が循環出来ませぬよ。血液の循環に關してハーヴェイが證明した事實を知つてゐる人間は、一人だつて自分が心臓を持つてゐることを疑ひはしません。」

「そのお前の心には、物の情けといふものは感じないのか。」とグラッドグラインドは叫んだ。

「理性の作用だけは感じますが、」とこの摸範青年は答へた。「それ以外のものは何一つ感じません。」彼等は互ひに顔を見合せながら立つてゐた。グラッドグラインドの面上には、この追手と同じく色がなかつた。

「如何なる動機で——いや如何なる理性上の動機があつてぢや——一體お前はこの可哀さうな奴が逃

げるのを妨げて、この父親の心を掻きむしらうとするんぢやね。」とグラッドグラインドが言った。「見ろ、姉のルイザも此處にゐる。わし達を可哀さうだと思つてくれ！」

「あなた、」とビツアほひどぐ事務的な理論的な様子で言つた。「私がどんな理性上の動機から、トム君をコークタウンへ連れ戻すのかとお訊ねなさるなら、これだけのことをあなたにお教へするのによろしいでせう。私は最初からトム君が銀行泥棒だと疑つてゐたのです。私はトム君の平素のやり方を知つてゐましたので、その前からトム君を注意してゐたのです。私は他人にこそ洩らさなかつたが、自分一人で見張りを怠らなかつたのです。そして今、トム君が逃げ出したばかりでなく、又丁度今立ち聞きましたのですが、トム君が自分で告白したばかりでなく、私は十分證據を握つてゐるのです。私は昨日の朝お邸を見張つてゐたのです。そしてあなたが此處に来るまで蹟をつけて來たのです。私はこれからトム君をバウンダアビイさんに引渡すために、コークタウンへ連れ戻ります。バウンダアビイさ

一六六〇—

んは必ず私をトム君の位地へ昇進させてくれるに決つてゐます。私はトム君の位地を勝ち得たいのです。つまり、私にとつては出世すること、出世することはゝことですからね。」

「若しそれが全然お前一身上の利益といふだけのことなら・・・」とグラッドグラインドは言ひ出しました。

「いへ、お話を遮つて失禮ですが、」とビツアは一言ひ返した。「あなたも御承知の通りすべての社會組織は自己の利益といふ問題に歸着すると私は確信してゐます。吾人は常に個人の利己心に訴ふるべきものなりといふあなたの唯一の立脚點がこれでしたね。私共はそんな風に教はつて來ました。あなたも御承知の通り、私がまだ極く若い頃さうしたこと、百萬遍を聞いて教育されて來たのです。」

「では一體どれほど上げたらいぢやらう？」と、グラッドグラインドが言つた。「お前が豫期してゐる昇進を捨てる代りには。」

「お申出で下さつたのは有難いですが、」とビツアは言葉を返した。「私はその賠償金額を定めるわけには行かないのです。頭のゝあなたのことですから、二つの中の何れを選ぶかといふことを仰しやつて下さることゝ私は感知してゐましたので、實はもう頭の中でちやんと計算して調べて見ましたかね。何しろ重罪を内濟にしようといふのですから、餘程の高い條件でありまして、銀行に於ける將來の昇給の見込みと比べると、それは決して確實なものでも結構なものでもありませんからね。」

「ビツア。」とグラッドグラインドは言つた。このわしがどんな惨めな目にあつてゐるか見てくれ、と言はんばかりに両手を差し伸べて言つた——「ビツア、わしにはもうお前の心をなだめる機會がたゞ一つしかない。お前はもと幾年間もわしの學校で學んだ。そのころお前のためにあれ程骨を折つてやつたのぢやから、そのことを考へて、お前は現在の利益をすてゝわしの倅を見のがすことを納得出来ないものかね。わしから願ふから、そのことを考へて倅を見のがしてやつてくれないか。」

「私には實際、分りません。」と昔の生徒は理窟家らしく答へた。「あなたが、そんな取るにも足らぬことを根據になさるとは意外です、學校でお世話になつたのは、月謝を出してゐますよ。學校は契約ですから、卒業すれば契約が終つてゐるわけです。」

一體代價を拂つて償へないのは何一つ無い、といふのがグラッドグラインドの哲學の基礎原理であつた。何人にせよ、また如何なる場合に於いても、人に者を與へて代價を取らぬといふ法がない。代償さへすれば別に感謝する必要がないので、感謝から生ずるいろいろの徳とかいふもの

は、取るにも足りないものである。人類の生存は生れてから死ぬまで、その一インチ一インチが、勘定臺の上の取引であるべきだ。かふいふ方法では天國に行けないといふのだつたら、それは天國は金儲けの場所ではない。で、天國などわれはれに用のないところだ、といふのであつた。

「いかにも仰しやる通り、」ビツアは付け加へた。「私の學校生活は安あがりでしたよ。ですがそれは當り前のことです。私といふ人間はゝ最低價格の市場で造られたのでして、而も自分を最高價格に賣らなければならぬのですよ。」

彼はこゝでルイザとシッシイが泣いてゐるのを見て少し困つた。

「どうぞ泣かないで下さい。」と彼は言つた。「泣いたつて別に何の足しにもなりやしません、お互ひに迷惑するばかりです。あなた方は私がトム君に何か恨みがあるのだと思つてゐらつしやるらしいですが、私は恨みなんか少しも持つてゐないのです。私は唯先刻言つた通りの正當な理由のある立場から、トム君をヨークタウンへ連れ戻らうとしてゐるだけです。若し抵抗でもしようものなら、私は、泥棒だ！と大聲に怒鳴つてやりますよ。ですから、抵抗はしますまい。それは安心してゐて大丈夫でせう。」

スリアリは口をぽかんと開けて、丸い片眼を見張つたまゝ動かしもせず、深い注意を拂つて、この話を聞いてゐたが、靜かに前に進み出た。

「旦那、あなたもよく御存じだし、またあなたのお嬢さんもよく御存じだ（お嬢さんの方がよく御承知の筈だ、わしがお話し申したんだから。）わしはあなたの息子さんが、どんなことをなすつたのか知りませんでしたし、また知りたくもありませんでした。——その時にやわしは何だかほんの冗談事だとはかり思つてゐたから、そんな冗談事は知らねえ方がえゝぞと、考へてゐたものでさ。だがこの若えのから銀行泥棒だと聞いてみりやア重大事件でさあ。わしが仲に入つて内濟にするにやア事件が大き過ぎませう。——この若えのゝ口眞似で言へばね。だから、旦那、わしがこの若えのゝ味方をして、若えのゝいふ方が正しい、何とも仕様がありませんと言つたつて、怒つちやいけませんや、だがね、わしがこれからどんなことをするかつてことをお話し申しやせう。わしは息子さんとこの若えのとを鐵道の所まで送つていつて上げませう、こゝで曝露ねえやうに、それ以上の事は出来ねえが、それだけはやつて上げませう。」

かふ打ち棄てられるとルイザの胸には新しい悲みが、又グラッドグラインドの心には更に深い痛みが生じた。だがシッシイは異常な注意でスリアリを見つめてゐた。彼女は自分の胸の中では、彼を誤解してゐなかつたのである。

人々が再び、残らず外へ出て行つてしまつたとき、彼は片眼をきよろつかせて、彼女に後に残つてくれと合圖をした。彼は戸の錠前を掛けてから昂奮して言つた。

「セスイリヤ、旦那は今までお前を助けてくれたんだ。だから今度はわしが旦那を助けてあげるよ。そればかりぢやねえ、あいつは大した悪黨だよ。それに何時だか、一座の奴等が、あぶなく窓から抛り出すところだつたあの空威張り屋の乾分なんだ。今晚はきつと月が出ねえだらう。わしはこれといつて何一つ出来ねえことのねえ馬を持つてるんだ。またチルダアズの手にかげさせりや、一時間十五哩も走る小馬を持つてゐるんだ。二十四時間も人間を一所に喰ひ止めて置く犬も持つてゐる。若旦那に一言さう言つておくれ。わし等の馬が踊り始めたら、落つこちることなんか怖がらねえで、今言つ

た小馬の馬車がやつてくるのを注意して、見張つてゐるやうにとね。馬車が近づいたと見たら此方の馬車から飛び下りなさいとさう言つておくれ。さうすりや小馬の馬車が恐ろしい勢で若旦那をつれてつてくれるんだ。若しわしの犬があつての奴を一足でも歩かせるなら、それこそわしは彼奴を自由に歩かせてやるよ、また馬が朝になるまでに踊り始めた場所から動くやうなことがあれば、自由に若旦那の後を追駈けさせもしやうさ。——だがあの若造にや危ねえもんだ。——まあゐゝ、早くやらかさう！

成る程早かつた。十分間に、今までスリッパ穿きで市場をうろついてゐたチルダアズは出發の合圖をした。スリアリの支度はもう出來てゐた。あの物覺えのゝ犬が、その周圍を吠えまはつてゐるのは、全く見ものだつた。スリアリは片眼で犬に合圖をして、特に注意を向ける目的物はピツアだといふことを教へてゐた。日が落ちて暗くなると直ぐに、彼等は馬車に乗つて出掛けていつたこの物覺えのゝ犬（これは恐ろしい動物だつた）は、もうピツアをその眼できつと見當をつけて、馬車の車輪にびつたりと寄り添つて、彼が一寸でも馬車から降りやうとする素振りを見せでもすれば、直ちに飛びかゝつて行かうと用意してゐるやうであつた。

残つた三人は非常な不安にとらはれながら眠りもせず一晩中を宿屋で坐り明した。翌朝の八時にスリアリと犬とが再びやつて來た——何れも非常に元氣だつた。「上首尾でしたよ、旦那」とスリアリは言つた。「息子さんは今頃はもう船に乗つて外國へ行つちまつてるでせう。昨晩わし等が此處を出て一時間するとチルダアズが息子さんを聯れて行きましたよ。馬の奴、くたびれるまでポルカを踊りましてね（馬具をつけてゐなかつたらワルツを踊つたかも知れませんよ。それからわしが一言何とか言つてやつたら、氣持

一六六三

よさゝうに眠りましたつけ。あの若えのがかふしちや居られんから歩いて行くんだといふが早いか、犬は四つ足そろへてあいつの頸巻に飛びついて、奴を馬車から引きずり下して、おつぱり出しましたよ。だから、わしが馬の頭を立て直す迄、あの若えのはそこから身動きもせませんでしたよ。今朝の六時半でしたつけ。」

グラッドグラインドが感謝の念に溢れたのは勿論だつた。そして金でお禮を十分にしたいが、取つてくれるかといふ意を、それとなくほめかけた。

「わしは自分ぢやお金などいりませんよ。旦那。然しチルダアズは世帯持ちですから、お遣りになるなら、五ポンド紙幣の一枚もやつておくんなさぬ。受け取らねえなんてこたア言ひますまひ。またわしの犬に首環を一つ買つて下さるなり、馬に鈴の一組も買つてやつて下さるんでしたら、喜んで頂戴ませう。わしはブランドイなら何時でも戴きますんで。」と彼は先刻もう一杯注文して飲んだのだが、更にもう一杯注文した。「旦那、お言葉に甘え過ぎるやうですが、ルス（犬の名）めはゐゝですが、旦那ひとつ、一座の奴等に飯でも喰はしてやつてくれませんか。一人前三シリングもあればようがすから。さうすりや聯中もさぞ喜ぶでがせう。」

グラッドグラインドはスリアリの望み通りのものを禮の印しに、喜んで與へることにした。そしてこれ程の骨折りに對して、これ位の贈物は餘り少なすぎると思ふが、と言つた。

「なあに、ようがすよ、旦那。ぢやねえ、旦那、何時でもようござんすから、一度曲馬の慈善興行を打つて下さりさへすりやあ、それで十分禮を頂いたことになりませう。ところで旦那、お嬢さんにお許しを願つて、お別れ際に一寸、旦那にだけ申し上げたいことがあるんですが。」

ルイザとシッシイは、次の部屋に退いた。スリアリは上機嫌で立つたまゝ、水を割つたブランドイ

を振りませつゝ、言葉を續けた――

「ねえ旦那、言ふまでもねえことだが、犬つて奴は全くすばらしい獣でして……」

「犬の本能といふものは」とグラッドグラインドは言った。「實に驚くべきものぢやね。」

「全く、旦那が何とか仰しやるその――わたしには何ていふかよく分りませんが。」――とスリアリは言つた――「犬の何とかは素晴らしいもんです。犬が旦那でも誰でも探さうと思つたら、――どんな遠くからでもやつて來ますからね！」

「全く犬の嗅覺は鋭敏なものだね。」とグラッドグラインドが言つた。

――六六四――

「わたしはそれを何と云ふかよくは知らねえんですがね。」とスリアリは首を振り振り繰り返した。「かふいふことがありましたよ、旦那、犬がちゃんとわたしを探し出した話ですよ、旦那。その仕方といふものは、まるで犬が外の犬のところへ行つて、こんなに話し合ひでもするやうに思はれたんです。『おい、お前はスリアリといふ名の人間を知つてゐるかひ？曲馬師で、肥つちよで、片眼つむつてゐる男だよ。お前は知らないかひ？』とね、すると問はれた方の犬がかふ答へる、『さうかひ。おれは自分ぢやそんな人間を知らねえが、おれの友達がよく知つてると思ふが』とね。それからその犬はよく考へ直して見るかなんかしてかふ言ふんですよ、『スリアリ、スリアリ！あゝさうさう、慥かにスリアリと云つた！何時だつたか友達が俺にあれがスリアリといふ男だよ、と教へてくれたことがあつたつて。それだつたらすぐに居所を教へてやらう』とね。まあかふ云つた工合でさ。御承知の通りわたしは見物の前にも出るし、處々方々へも打つて歩くんですから、わしの方ぢや知らなくとも、わしの顔を知つてゐる犬が何匹かゐるに違へありませんよ、旦那。」

グラッドグラインドは、この論法には全く煙に巻かれたらしひやうに見えた。

「何れにしても、」とスリアリは唇をブランデイの杯のところに持つて行つて、「十四ヶ月前チェツサア（チェスタア）にゐた時の或る朝のこと、わたし達は丁度『森の子供等』をやつてゐると、小屋の戸をくゞつて、演藝場に一匹の犬がやつて來たのでさ、犬は長い道中をして來たと見えて、とても弱つて、跛でおまけに、盲目同様と來てゐるんでさあ、奴さん、まるで誰か知つてゐる者を尋ねるやうに、知つてゐる子供を探してゐるやうに、一人つゝその子供等のところを廻つて、ゐましたつてが、やがてわしのところへやつて來て、足を止めて、體が弱つちやゐましたけれど、二本の前足で立つて尾を振りました。と思ふとそのまゝ死んぢまつたんです。旦那、それがあの、メリレッグスだつたんですよ。」

「なに？シッシイの父の犬ぢやね。」

「えゝ、セスイリヤの親父の古い犬でさ、ところで旦那、わたしは誓つて申しやすが、あの様子から察すると、犬がわしのところに戻つて來た時よりも前に、きつとセスイリヤ親父は死んぢまつて、――埋められて――しまつたものに違へありませんよ。娘のジョセフィンとチルダアズとわしの三人で、手紙でセシリヤに知らせてやつたもんだらうか、やらねえもんだらうかと、何度も何度も相談し合つたのでしたつてが、『いやいや、知らせてやつても、別にゝゝことはあるめえ、卻つて彼女の心を亂して、彼女を不仕合せに――」

――六六五――

するだけぢやないか？』つてことに決めちまつたんです。よし親父の方で情も無く、セスイリヤを棄

てしまつたのであつたにしろ、或は又親父が自分と一緒に彼女まで墮落させてしまふよりもとゐふんで、自分一人辛い思ひをして出て行つたにしろ、どのみち、犬がわし達を探し出したいきさつがちやんとわかるまでは、知らせてやらない方がゐゝでせうね、旦那！」

「あれは父親に買ひにやらされた、あの九色油の瓶を今でも持つてゐるんぢや。あれは一生涯、今死ぬといふ際までも、父親の愛情を信じてゐるぢやらうて。」グラッドグラインドが言つた。

「そのことが、人間に二つのことを教へてゐるやうに思ひますがね、旦那！」とスリアリはブランドイの盃の底を覗きながら愉快さうに言つた。「一つはつまり、世の中には、欲氣を離れた、そんなものとは全く違つた人情といふものがあるといふことゝ、もう一つはその人情つて奴は、勘定が出来やうが出来まひが、自分の道があるもので、その道は丁度あの犬のやり方みたいに、何といつていゝか、一寸名前のつけられない道ですが、とにかく人情にはさうした道がある、といふこと、この二つですよ！」

グラッドグラインドは窓の外を見てゐた。そしてこれには、何の答へもしなかつた。スリアリはコップを飲みほして、女達を再び呼び入れた。

「セスイリヤ、わしにお別れの接吻をしておくれ、お嬢さん、あなたがセスイリヤを妹のやうにして下さつてゐることや、またあなたが心の底から、いやもつとそれ以上にも、セスイリヤを信用して尊敬してくれてゐるのは、このわしからは實際うれしいことに見えます。どうかあなたの弟さんも、立派にあなただのお情けに酬いるやうな行ひをして、もつとあなたの慰めになるやうにと、祈つて居ります。さあ、旦那、初めてのお終ひといふ握手をしませう。わし達のやうな貧乏な浮浪者でも、どうか嫌がらねえで下さい。人間といふものは、何か樂しみがなくちやならねえものです。始終勉強ばかりしめたり、始終働いてばかりゐられるものぢやありません。人間はそんな風によ出来ちやゐねえんです。だからさ、わし達のやうな商賣の者だつて、世の中によ入用なんですよ、旦那。どうぞ立派なことをなすつて、人には深切をお盡しなすつて下せえ、わし達に惡む目ばかり見せず、ゐゝ目も見せて下さるやうに！」

「いやこれや、ちつとも氣がつかなかつたんですが」とスリアリは頭を再び戸の處へ突き込んで言ひ添へた。

「わしはどうもとんだお喋りをしちまひました！」

九、結章

—六六六—

虚榮の強い空威張り家と世界を同じくして住まつてゐると、何事にせよ、その虚榮な空威張り家がまだそれを見ないうちに先立つて見るのは、危険なことである。バウンダアビイは、スパージット夫人が無遠慮にも彼の先手を打つて、彼よりも賢いと獨り極めにきめこんでゐるのだと思つた。彼は、彼女が大徳意になつて、ペグリア夫人を見付け出したことを極度に憤慨し、彼女が彼の厄介になつてゐる身分でありながら、この出しゃばつた振舞は何たることだと幾度も幾度も心の中で考へ廻はず度に、大きな雪の塊を轉がすやうに、その怒りはだんだんと積み重なるばかりであつた。たうたう彼は、この名門出の貴婦人を追ひ拂ふことに考へ到つた——さうさへすれば「あの女は名門の出であつて、わしのところから決して離れたがつてはゐないのぢやが、事情があつて置くわけにはいくわんから追ひ出してしまふのぢや」と自由に言ふことの出来る権利をもつことも出来る——それに、かうして彼女を追出すことは、今までの關係を斷つと共に、それを利用して能ふ限り多大な名聲をかち得る事で

あり、而も同時にスパージット夫人をその罪科に従つて罰することになるであらうと考へついたのである。

バウンダアビイは、この遠大な考へに胸をふくらましたまゝ晝喰にやつて来て、彼の肖像畫がかゝつてゐる昔のまゝの喰堂に腰を下ろした。スパージット夫人は爐の傍で、靈の燈に片足をいれて坐つてゐたが、自分が今どんな立場に置かれてゐるかといふことには殆ど考へ及ばなかつた。ペグラア事件以來、この淑女は例のバウンダアビイに對する『憐れみ』を靜かな憂鬱と後悔の情にかくしてゐた。それで、自然悲しきような顔付をしてゐる習慣がついてしまつたのである。彼女は今も亦、彼女の保護者たるバウンダアビイにその悲しげな顔付をしてみせた。

「どうなすつたんぢやね、奥さん」と、バウンダアビイはぶつきら棒に、少し亂暴にかふ言つた。

「どうか、あなた」とスパージット夫人は返辭をした、「わたしの鼻を喰ひきりでもなさるやうにさう大聲に仰しやらんで下さいまし。」

「なに、あなたの鼻を喰ひきるんぢやと！」バウンダアビイは繰返した、「あなたの鼻柱ぢやと！」といふ意味は、スパージット夫人も察した通り、それは喰ひきるにはあまりに大きすぎた鼻だといふことであつた。彼はこの無禮な諷刺を言ひ放つたあとで、硬いパンの皮を切つて、がちやりと音を立てナイフを抛り出した。

スパージット夫人は燈から足を抜き出して言つた、「まあバウンダアビイさん！」

「うゝ、何ぢやね奥さん、」バウンダアビイは答へた。「あん

一六六七

たは何を見つめてゐるんぢや。」

「あなう、」とスパージット夫人は言つた、「失禮ですけれど、今朝はあなた、お腹立ちのことがあ

るのですか。」

「さうぢやとも。」

「あなう、失禮ですけれど」と、彼女は可成り氣を悪くしてから問ひ返した、「わたしのせゐでお腹立ちなんでございませうかしら。――」

「うむ、いま言つて上げよう、」とバウンダアビイは言つた、「わたしは何も喧嘩しに喰堂へ出て來たのではないんぢや。いかに名門出の淑女でも、わしほどの地位にゐる人間に迷惑をかけたたり苦しめた

りすることは許されんことです。わしはもう容赦はせん。」(バウンダアビイは細々とした事を言ひた

てゐるでは、自分の方が負けてしまひさうだから、さつさと話を進めて行かなくてはならんと考へた。)

スパージット夫人は、初めの間は例のコリオレーナス型の眉毛を立てゝゐたが、やがてそれを八の

字に結んだ、そして仕事をバスケットの中にさつさと寄せ集めて、立ち上つた。

「あなた、」と彼女は威儀をつくらつて言つた、「わたしにはよく分つて居ります、今ではわたしといふものがあなたのお邪魔になるばかりですから、わたしはもう自分の部屋に引きとることに致しませう。」

「いや奥さん、いま戸を開けてさし上げよう。」

「有難うございます。それ位の事は自分にも出來ます。」

「いや、わしが開けてあげよう、」と、バウンダアビイは彼女を追ひ越して、把手に手をかけて言つた。「あゝ機會ぢやから、あなたが出ていかれる前に、一言ひはなくてはならんことがあるです。スパージット夫人、あなたは、どうもこの家においてになつたんでは、窮屈らしいと、わしは思ふんぢやが、如何ですか。貧しい待遇より出來んわしのところに居られたんでは、あなたほどの才能を、他人

の仕事にまで使ふ機會がなかなかあるまいと、わしには思はれるんぢやが。」

スパージット夫人はこの上もない深刻な輕蔑の一瞥を彼に興へたが、言葉だけはひどく丁寧に「おや、ほんどでございますか、」と言つた。

「わしは、今回の事件が突發したときから、そのことを何度も何度も、考へてゐたんぢやが、」とバウンダアビイが言つた、「わしの貧弱な判断では、矢張り、さう思ひますて——」

「おゝ！どうぞあなた、」とスパージット夫人はわざとらしい快闊な口調でかふ言つた、「御自分の判断をそんなに、お見くびりなさいませぬ。バウンダアビイさんの御判断と言へば、少しも間違つてゐないことは、誰でもよく知つて居りますよ、誰だつて皆、その證據をもつて居りますから、」

—六六八—

世間の人の結構な話題になつてゐるのも尤もでございますよ。あなたは御自分の何處を批難なさらふと、それは兎も角、あなたの御判断を、批難なさるのだけは、お止し遊はせ、」とスパージット夫人は笑ひながらかふ言つた。

バウンダアビイは眞赧になつてひどく不愉快さうに再びかふ言つた、「あんた程の才能ある淑女を生むやうなお家柄は、全く世間並みの家とは違つてゐると見えるですな。例へば、あんたの御親類のスカッジャアズ家のやうなお家柄でなくては出来んことぢや。あんたはそのお家あたりで、何かお世話をやかれるやうなお仕事が見つかりさうには思はれませんですか。」

「今まではそんなことを考へたこともございませんでしたけれど、」とスパージット夫人は答へた、「しかしさう仰しやられると、どうやら何かありさうに思はれます。」

「では、あゝですか、」とバウンダアビイは小切手の入つた封筒を彼女の小さなバスケットの中に入れてやつてかふ言つた。「さあ、もついつでも御隨意にお出かけ下さい。では多分、當分の間は、あなたのやうな才能をお持ちの淑女は、自分の喰事は他人に干渉されずに自分で喰べておいでの方がづゝと愉快に思はれることぢやらうて。一介のコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイに過ぎんわしみたいな人間が、長々あなたのお目障りになつてゐて、實際相濟まんかつたんです。」

「どうか、それは仰しやらないで下さい、」とスパージット夫人は答へた、「若しあの肖像畫に口がきけますなら——畫の方がいろいろな面倒を仕出來したり他人にいやな思ひをさせたりすることが出來ないところだけは御本人より優しだと思ひますけれどね——最初わたしが、あの畫を、お馬鹿さんの肖像だよと口癖のやうに呼んでからもう長いことになるといふことを證明するでございませうに。」

「お氣の毒ですけど、お馬鹿さんのなさることは人を驚かしたり怒らせたりすることは出来ません。お馬鹿さんの仕草は何だつたつたゝ輕蔑を起させるだけでございますから。」

スパージット夫人はかふ言ひ終ると、その羅馬人のやうな顔を、まるでバウンダアビイに對する輕蔑を紀念するためにつくつたメダルかと思はれるやうに擧めて、バウンダアビイの頭から足の先まで、ぢつと眼を据ゑて見渡し、さも彼を馬鹿にしたやうに、さつさと彼の傍を通つて二階へ上つて行つた。バウンダアビイは戸をぴつしやりと閉めて、やたらにむしやくしやした氣持で、爐の前に立つてゐた、——そして、例の今にも爆發するやうな態度で、自分の肖像畫を睨みながら——また未來を凝視めながら——ぢつと考へこんでゐた。

では、彼はどれ程のところまで未來のことを考へてゐた

—六六九—

のであらうか。彼はまづスパージット夫人の未來を心に描いてみた。夫人は、あの不平ばかり並べたてゝ怒りぼくて、氣むづかしやで、底意地のわるいレデイ・スカッチャアズを對手に——彼女は例の不思議な脚が直らないので寢床に寝たまゝだつたが——毎日々々女性にふさはしむ武器庫からありとあらゆる武器をとり出して刃先のつゞく限り戦つてゐる姿を、やがては汚ない、狭い、空氣も通はない下宿——一人であらば、それでも押入れ位の廣さはあるのだが、二人となると、犬猫の小舎みたいに狭苦しい——さういふ汚ない下宿に落ちこんで、スパージット夫人が稼ぎ上げる不足勝ちの一期分の収入を、半期もたゝないうちにがつがつ喰ひ潰してしまつてゐるところを見た。だがそれから先きのことは、彼に見ることが出来たであらうか。彼自身のことについて言ふと、彼はビツアを、これは主人のために大に忠勤を勵んだ有望な若者で、あのトムの後任としてその位地に昇進した男であり、あの大勢の曲馬團の惡黨共がひそかにトムを隠してしまはふとした時に、自分の手でトムを殆ど捕へかけたえらい奴であるといつて、皆の前でしきり賞めたてゝゐる姿を見ること出来たであらうか。さてはまた例の虚榮心が強いために白癡おどかしな遺言状をつくつてゐること、その遺言状のおかげで、年のころ五十五六で、めいめいコークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイと名のついてゐる二十五人ほどの贖物達が、いつまでもバウンダアビイ・ホールで喰事をしたり、いつまでもバウンダアビイ・ビルディングに住居したり、いつまでもバウンダアビイ教會に出席したり、いつまでもバウンダアビイ禮拜堂の地下に眠つたり、いつまでもバウンダアビイ家所有地の収益で生活したり、夥しいバウンダアビイそつくりの出鱈目や空威張りですべての人々の健全な胃腑にさへ嘔氣を催させたりするやうなことになるのを、見ることが出来たかどうか。また、五年後の或る日、コークタウンのジョサイヤ・バウンダアビイがコークタウンの町通りで、卒中のために頓死したので、この肝心な遺言状が、ぺてん、詐偽、虚名、卑劣の好標本となり、何の役にも立たないで、始終裁判沙汰となるに至るのを、少しでも豫見することが出来たであらうか。恐らく彼には出来なかつたであらう。だが、例の肖像がは最後までそれを見届けるべき筈になつてゐた。

*** **

同じ日、同じ時刻に、グラッドグラインドは感慨に耽りながら、自分の部屋に坐つてゐた。彼は自分の未來をどこまで見透すことが出来たであらうか。彼は頭髪が眞白になり老衰して腰も曲り、その上、事に臨んでは從來執つて来たあの不屈不撓な理論をすつかり變へてゐる自分を見たであらう。

一六七〇—

らうか。彼の擱んで来た例の事實や數字を、信仰と希望と慈善との爲めに役立てゝ、もはや塵埃まみれのあの小さい碾で、この天來の三徳を挽き碎くやうなことはしなくなつた自分自身の姿を見ることが出来たであらうか。そのために彼は昔の友達から大に卑しめられた自分の姿を見たであらうか。國家の掃除人夫たる政治家達はたゞお互に協力すれば澤山であつて、人民といふ抽象的なものに對しては何の義務も負うてゐるのではないといふことが全く定説となつたこの時代では、一週間のうち五晩といふものは朝になるまで何だかんだと兎や角言つては『名譽ある議員を嘲弄する』やうな事ばかりを仕事にしてゐる政治家達の姿を見たであらうか。恐らく彼は、自分の同僚達のことを知つてゐたから、それぐらゐの豫見は、もつことが出来たであらう。

*** **

同じ日の夜、ルイザは過ぎし日と同じやうに、ちつと爐の火を見まもつて坐つてゐた、たゞ昔よりもずつとやさしい謙遜な顔をしてゐた。彼女の幻想に描き出された未來はどんなものであつたか。街々に廣告が張られてゐる、それには彼女の父の名が記してあつて、横死した織工ステイヴン・ブラックプールが無實の嫌疑をうけてゐたことを證明し、そして自分の息子の罪状を公布してゐる。たゞしそれには息子がまだ年が若くて誘惑にかゝり易かつたといふ理由で罪の軽減を懇願する文句が附加されてゐる（さすがに彼の教育が悪かつたといふことを附加するだけの勇氣はなかつたが）。これは然し現在の事實であつた。彼女の父の筆になるステイヴン・ブラックプール横死の顛末を刻み込んだ墓碑を建てるといふことも、やがては現在の事實とならう、それは當然建てられるにちがひないといふことを、彼女は知つてゐたからである。以上のことを、彼女ははつきりと見ることが出来た。だがもつと未來のことはどうであつたらう。

レイチェルと呼ばれた女工は、長い間の病氣からなほつたあとで、再び工場に出てコークタウンの労働者達の中にまじつて規定の時間にせつせと工場に往復してゐた。彼女の顔は悲しかつたが何處となく憂ひを含んでゐた、いつも黒い衣物を着てゐたが、氣立てが女らしくて、朗かで、どこか快闊なところさへなくてはなかつた。この土地の人々のうちで、或る墜落した酔拂ひの女乞喰に對して同情を寄せてゐるらしいのは彼女一人であつたが、この女乞喰は時々そつと町へやつて來ては、彼女に物乞ひをしたり泣きついたりしてゐた。彼女は相變らずよく働き、年をとつて労働が出来なくなるまでは満足して働いた。さながら、労働を天職と心得てゐるものゝやうに、喜んで働いてゐた。ル

一六七一一

イザはこれを見たことであらうか。さういふことはあり得ることであらう。

何千哩も遠くにゐる孤獨の弟が、涙で紙をひたしながら姉に手紙を書いてゐる。それはルイザが別れ際に言つてやつた言葉が餘りに早く眞實となつたからで、なつかしい彼女の顔を一と目見る爲めには世界中の寶物全部とでも容易に交換するつもりだともいふのではなからうか。やがてこの弟は、彼女に逢ひたさに、家路近く歸つて來たが、病氣になつて途中に留まつた。暫時して見も知らぬ人の書いた次のやうな手紙がとゞゐた、『本日弟さんは熱病のために病院でなくなりました。貴女に對して前非を悔い、貴女に對する愛情にみたされつゝ瞑目されました。弟さんが最後に言はれた言葉は貴女のお名でした』と。ルイザは果してかふした事實を見たであらうか。かふいふこともまたあるべき筈になつてゐた。

彼女自身は再び人妻になつてゐる、——母親になつてゐる、——子供達を可愛がつて育てゝゐる、いつも子供達を大切に注意して、彼等に肉體の幼年時代と同じやうに精神の幼年時代をもたせるやうにする、何故なら彼女は、この二つの幼年時代のうちで、後者の方がより美しいものであり、その僅かな思ひ出も世上の最も賢い者にとつてさへ一つの祝福となり、一つの幸福となる眞の寶物だといふことを知つてゐたからである。ルイザは、これを見たであらうか、然しかふいふことは、決してあるべき筈にはなつてゐなかつた。

だが幸福なシッシイの幸福な子供たちは彼女を愛してゐる、どの子供たちも彼女を愛してゐる。彼女は子供のお伽噺も覺えるやうになり、前にはいやしめてゐた無邪氣な空想や美しい幻想も考へるやうになり、彼女の罪のないお友達を研究することにとつとめ、機械力と現實一點張りの生活を、想像から生れる優雅とよるこびで變化することにとつとめた。かふいふものがなくては、幼兒の心は枯れ凋むし、最も頑強な肉體をもつた大人も精神的に死んで硬化するだらうし、また統計表の數字の示すもつ

とも明白な國民の繁榮も、たゞ、壁の上の文字にすぎなくなるであらふからである。——ルイザは子供たちに對するかふいふ態度を、單に一時の氣紛れから、大袈裟に誓たの掟だのと騒ぎ立て、採つたのではない、何々協會とかを設けて之れを宣傳して廻つたのでもなく、神への願掛けといふわけでもない、又一時の假着や、小間物市に並べ立てられた飾り物にした譯では更々ないのである。たゞ單に爲されなければならぬ義務の一部分として執つたまでである。——ルイザは果してかふいふものを自分で見ることが出来たであらうか。かふいふものも、當然あるべき筈になつてゐた。

一六七二

親愛なる讀者よ！我々の行爲の二つの分野にこれと似たことを起すか起さぬかといふことは、諸君とこの著者の雙肩とにかゝつてゐる。ではそれを、われ等の雙肩に懸らしめよ！われ等はルイザよりもつと朗らかな心で爐邊に坐つて、われ等の火が燃えつくして灰になり、その灰が冷えて行くのを、ぢつと見てゐることにしやうではないか。

——